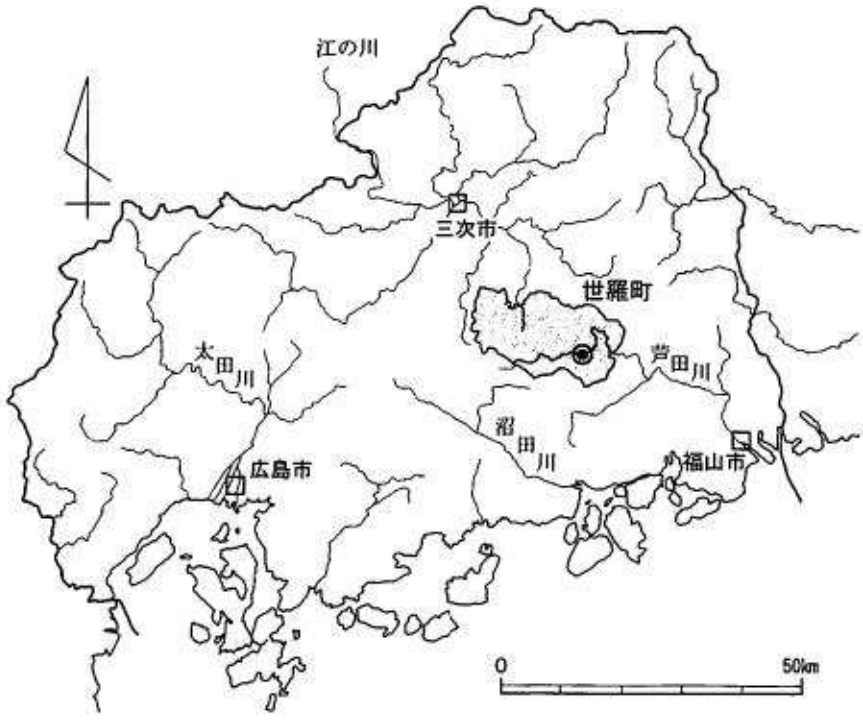
財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第28集

金井原遺跡
発掘調査報告書

2009

財団法人　広島県教育事業団

金井原遺跡
発掘調査報告書

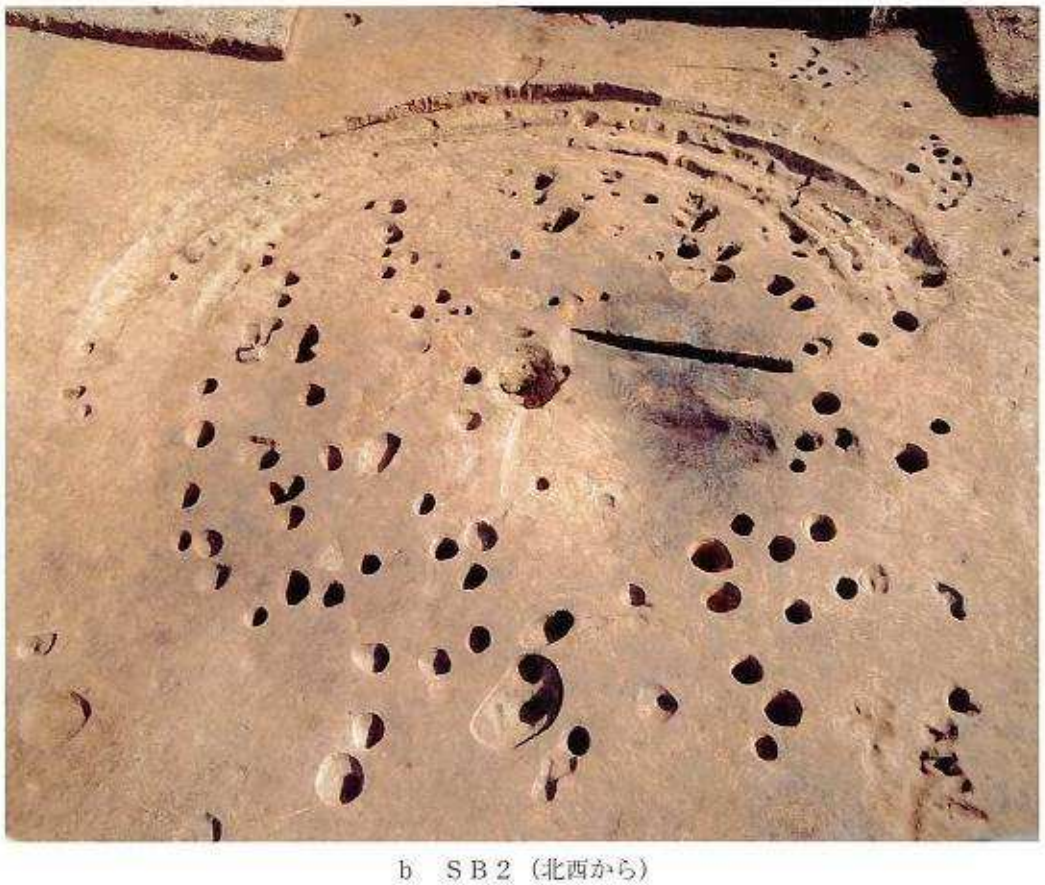


世羅町位置図（◉は遺跡を示す。）

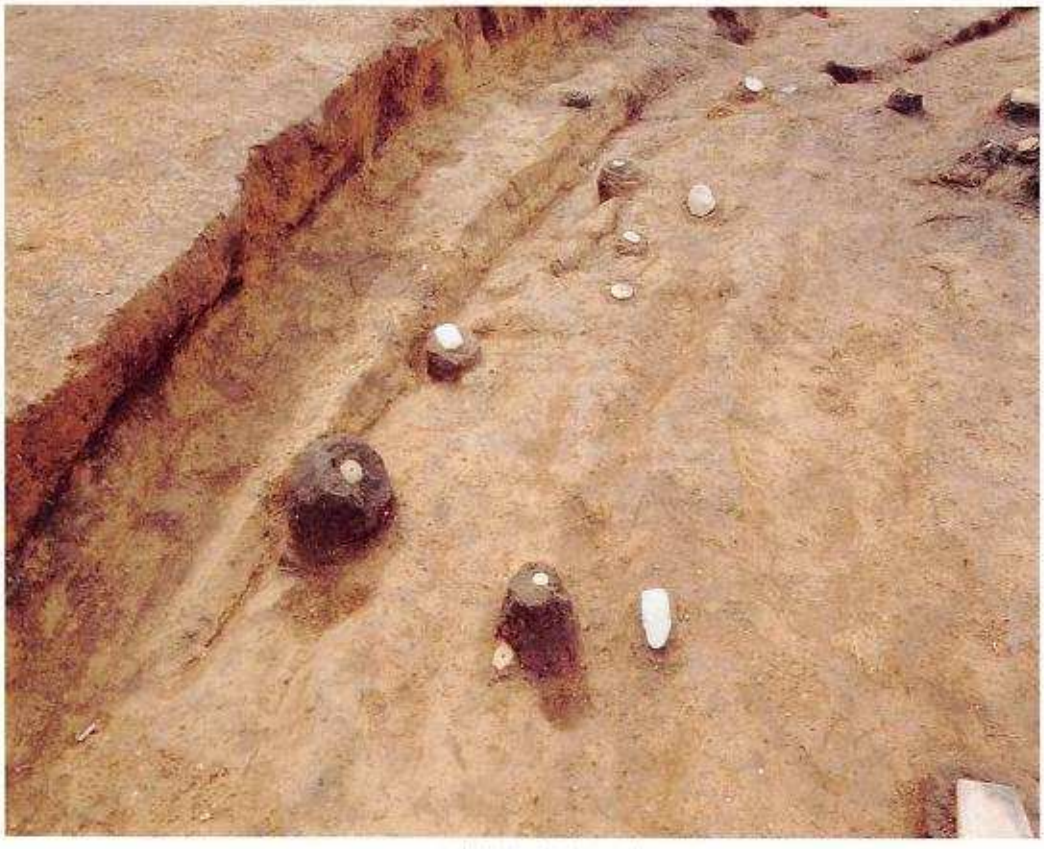
２００９

財団法人　広島県教育事業団

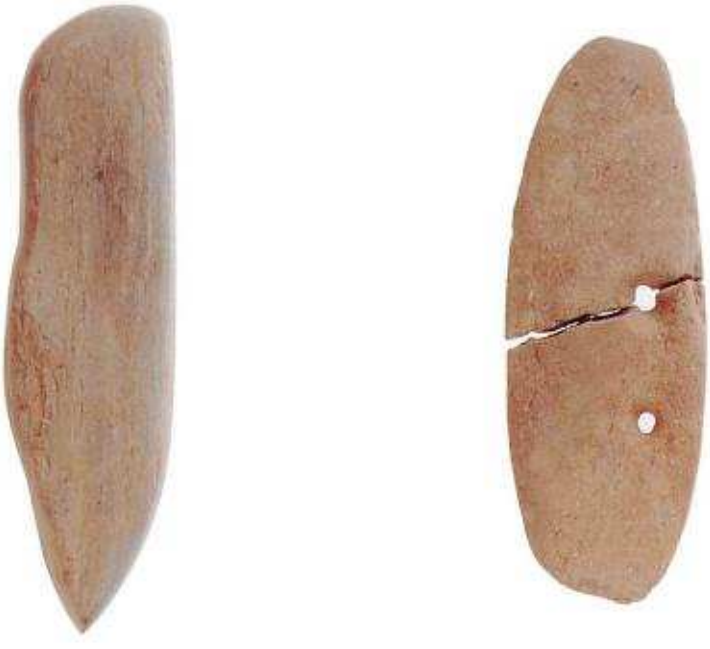
a　遺跡近景（空中写真，北西から）



b　ＳＢ２（北西から）



a　ＳＢ２遺物出土状況（北から）



b　ＳＢ２出土石器（抉入柱状片刃石斧131・磨製石包丁132）

例　言

1　本書は，平成17・18（2005・2006）年度に実施した一般国道４３２号道路改良工事に係る金井原遺跡（世羅郡世羅町大字川尻所在）の発掘調査報告である。

2　発掘調査は，広島県尾三地域事務所との委託契約により財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が実施した。

3　発掘調査は，梅本健治が担当し，有限会社山武考古学研究所（千葉県成田市）が支援業務を行った。有限会社山武考古学研究所の調査員は平成17年度が千葉孝之，大橋忠昭，平成18年度が松田政基，大橋忠昭である。

4　出土遺物の整理・復元は梅本，賃金職員の村田智子，木村和美，氏房晃子が，実測・図面の整理・写真撮影は梅本が中心となって行った。

5　本書は，梅本が執筆・編集した。

6　本書に使用した遺構の略号は次のとおりである。

ＳＢ；竪穴住居跡・住居跡状遺構・掘立柱建物跡，ＳＫ；墓坑・土坑，ＳＤ；溝状遺構，ＳＡ；柵跡，ＳＸ；性格不明の遺構，ＳＰ；単独柱穴，Ｐ；柱穴

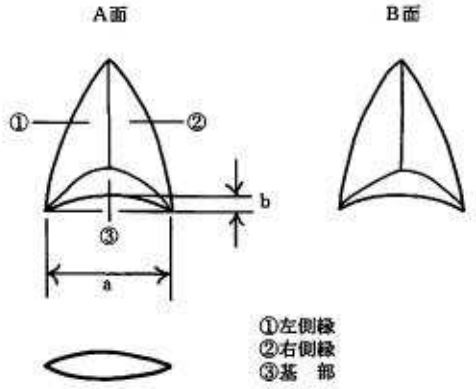
7　図版の遺物番号と挿図の遺物番号は同一である。

8　本書に使用した北方位はすべて平面直角座標第Ⅲ座標系北である。

9　第１図は国土交通省国土地理院発行の1：25,000の地形図（本郷・甲山）を使用した。

10　金井原遺跡出土の一部の石器の材質は，考古地質学研究所　柴田喜太郎氏の肉眼鑑定による。

11　石鏃の部位については，右の石鏃模式図のとおりである。



石鏃模式図

目　次

Ⅰ　はじめに …… (1)

Ⅱ　位置と環境 …… (2)

Ⅲ　調査の概要 …… (8)

Ⅳ　遺構と遺物 …… (10)

Ⅴ　ま　と　め …… (91)

巻頭図版目次

巻頭図版１　a　遺跡近景（空中写真，北西から）　b　ＳＢ２（北西から）

巻頭図版２　a　ＳＢ２遺物出土状況（北から）

b　ＳＢ２出土石器（抉入柱状片刃石斧131・磨製石包丁132）

挿図目次

第１図　金井原遺跡周辺遺跡分布図（1:25,000） …… (3)

第２図　周辺地形図（１）(1:10,000) …… (7)

第３図　周辺地形図（２）(1:2,000) …… (9)

第４図　遺構配置図（1:500） …… (11)

第５図　竪穴住居跡実測図（１）(1:60)　ＳＢ１ ……折込み

第６図　ＳＢ１出土遺物実測図（1:3，1:2，2:3） …… (15)

第７図　竪穴住居跡実測図（２）(1:60)　ＳＢ２ ……折込み

第８図　竪穴住居跡実測図（３）(1:60)　ＳＢ２ ……折込み

第９図　ＳＢ２出土遺物実測図（１）(1:3) 弥生土器① …… (23)

第10図　ＳＢ２出土遺物実測図（２）(1:3) 弥生土器② …… (24)

第11図　ＳＢ２出土遺物実測図（３）(1:2) 土器片紡錘車① …… (25)

第12図　ＳＢ２出土遺物実測図（４）(1:2) 土器片紡錘車② …… (26)

第13図　ＳＢ２出土遺物実測図（５）(2:3，1:2) 石器① …… (29)

第14図　ＳＢ２出土遺物実測図（６）（1:2）石器②　……（30）
第15図　ＳＢ２出土遺物実測図（７）（1:2）石器③　……（31）
第16図　竪穴住居跡実測図（４）（1:60）　ＳＢ３　……（32）
第17図　竪穴住居跡実測図（５）（1:60）　ＳＢ４　……（33）
第18図　竪穴住居跡実測図（６）（1:60）　ＳＢ５　……（34）
第19図　住居跡状遺構実測図（1:60）ＳＢ６・７　……折込み
第20図　掘立柱建物跡実測図（１）（1:60）ＳＢ８・９　……（39）
第21図　掘立柱建物跡実測図（２）（1:60）ＳＢ10・12，ＳＤ２　……（40）
第22図　掘立柱建物跡実測図（３）（1:60）ＳＢ11・ＳＤ１　……折込み
第23図　掘立柱建物跡実測図（４）（1:60）ＳＢ13・16　……（45）
第24図　掘立柱建物跡実測図（５）（1:60）ＳＢ14　……（46）
第25図　掘立柱建物跡実測図（６）（1:60）ＳＢ15　……（47）
第26図　ＳＢ４・５・７・13出土遺物実測図（1:3，1:2，2:3）　……（48）
第27図　墓坑実測図（１）（1:30）ＳＫ１～４　……（51）
第28図　墓坑実測図（２）（1:30）ＳＫ５・６・９・10　……（53）
第29図　ＳＫ５・６石鏃出土状況実測図（1:10）　……（54）
第30図　墓坑実測図（３）（1:30）ＳＫ７・８　……（59）
第31図　土坑実測図（1:20，1:40）ＳＫ11～14　……（61）
第32図　墓坑・土坑出土遺物実測図（1:3，1:2，2:3）　……（63）
第33図　土坑出土遺物実測図（1:3）縄文土器　……（64）
第34図　溝状遺構実測図（1:60）ＳＤ３　……（65）
第35図　柵跡実測図（1:60）ＳＡ１～７　……（67）
第36図　性格不明の遺構・単独柱穴実測図（1:30，1:60）ＳＸ１・２，ＳＰ１～５　……（70）
第37図　溝状遺構・性格不明の遺構・単独柱穴出土遺物実測図（1:3）弥生土器　……（73）
第38図　柵跡・溝状遺構・性格不明の遺構出土遺物実測図（1:2，2:3）土器片紡錘車・石器　…（74）
第39図　調査区内出土遺物実測図（１）（1:3）弥生土器①　……（75）
第40図　調査区内出土遺物実測図（２）（1:3）弥生土器②　……（76）
第41図　調査区内出土遺物実測図（３）（1:3，1:2）弥生土器③・土器片紡錘車・石器　…（77）
第42図　石鏃の折損状況（1：1）　……（95）

表目次

第１表　遺構別報告遺物一覧表 …… (79)
第２表　主要遺構一覧表（竪穴住居跡・掘立柱建物跡・墓坑・柵跡） …… (80)
第３表　出土遺物計測表（土器・土器片紡錘車・石器・玉類） …… (81)
第４表　石鏃一覧表 …… (88)
第５表　石鏃の調整剥離の順序 …… (90)

図版目次

図版１　a　遺跡遠景（空中写真，南西から）
b　遺跡近景（空中写真，北西から）
図版２　a　遺跡近景（空中写真，北東から）
b　遺跡全景（空中写真，北西から）
図版３　a　調査区東半（空中写真，北東から）
b　調査区中央（空中写真，北西から）
図版４　a　遺跡遠景（北東から）
b　遺跡全景（調査前，南西から）
c　ＳＢ１（北西から）
図版５　a　ＳＢ２（南西から）
b　ＳＢ２遺物出土状況（南西から）
c　ＳＢ３・ＳＢ６（北西から）
図版６　a　ＳＢ４（北西から）
b　ＳＢ５（西から）
c　ＳＢ７（北から）
図版７　a　ＳＢ11・ＳＤ１（北から）
b　ＳＢ13（東から）
c　ＳＢ14（北から）
図版８　a　ＳＫ１（北から）
b　ＳＫ２（北から）
c　ＳＫ３（北から）
図版９　a　ＳＫ４（北から）
b　ＳＫ５・ＳＫ６（北西から）
c　ＳＫ５・ＳＫ６（北東から）
図版10　a　ＳＫ５・ＳＫ６土層（北西から）
b　ＳＫ７（北から）
c　ＳＫ８（北から）
図版11　a　ＳＡ２（北西から）
b　ＳＡ３（南西から）
c　ＳＡ４（北西から）
図版12　a　ＳＡ５（北東から）
b　ＳＡ６（西から）
c　ＳＸ１（北西から）
図版13　a　ＳＢ１中央土坑（西から）
b　ＳＢ１中央土坑土層（南から）
c　ＳＢ１Ｐ８柱痕跡（北西から）

図版13　d　ＳＢ２土層（西から）
e　ＳＢ２土層（北から）
f　ＳＢ２中央土坑土層（北から）
g　ＳＢ２炉跡土層（北から）
h　ＳＢ２壁溝土層ｅ－ｅ′（西から）
図版14　a　ＳＢ２土器片紡錘車93・104（北から）
b　ＳＢ２石鏃121（北から）
c　ＳＢ２Ｐ12石斧128（北西から）
d　ＳＢ２石斧131（西から）
e　ＳＢ２石包丁132（北から）
f　ＳＢ２作業風景（北西から）
g　ＳＢ５土層（南西から）
h　ＳＫ４土層（西から）
図版15　a　ＳＫ７土層（西から）
b　ＳＫ９（北から）
c　ＳＫ10（北から）
d　ＳＫ13（北東から）
e　ＳＫ14縄文土器深鉢174（西から）
f　ＳＸ２石斧198（北から）
g　ＳＰ２根石（西から）
h　ＳＰ３根石（北西から）
図版16　出土遺物（１）ＳＢ１・ＳＢ２①
図版17　出土遺物（２）ＳＢ２②
図版18　出土遺物（３）墓坑ほか
図版19　出土遺物（４）溝状遺構ほか

Ⅰ　はじめに

金井原遺跡の発掘調査は一般国道４３２号道路改良工事に係るものである。本事業は，中国横断自動車道尾道松江線への重要なアクセスのひとつとして，山陰と山陽両地域を南北に結ぶ広域幹線道路である一般国道４３２号道路の狭い幅員や急カーブを解消して整備を図ろうとするものである。

広島県備北地域事務所（以下「備北事務所」という。）は，平成16（2004）年11月，当該事業地内の文化財等の有無及び取扱いについて，広島県教育委員会（以下「県教委」という。）と協議した。県教委はこれを受けて現地踏査を行い，平成17（2005）年１月事業地内に試掘調査が必要な箇所が存在する旨を回答した。その後，県教委は当該箇所の試掘調査を実施し，金井原遺跡（調査面積3,860㎡）の存在を確認した旨を同年２月１日付で備北事務所に回答した。この遺跡の取扱いについて県教委と備北事務所は協議を重ねたが，設計変更による現状保存は不可能との結論に達した。備北事務所は，同年２月10日付けで県教委あてに「埋蔵文化財発掘の通知（土木工事の通知）」を提出し，県教委は同年２月21日付で備北事務所あてに工事に先立って発掘調査が必要である旨を通知した。諸般の事情により，発掘調査は２年次にわたることとなり，備北事務所は同年３月３日付けで調査区西側（川側，1,300㎡）の調査依頼を財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室（以下「教育事業団」という。）に行った。そして，広島県尾三地域事務所（平成17年４月１日以降，当該事業地の担当が広島県備北地域事務所から移管された。以下「尾三事務所」という。）が，平成18（2006）年２月７日付けで調査区東側（山側，2,560㎡）の調査依頼を行った。尾三事務所と教育事業団は前者については平成17（2005）年７月25日付けで，後者については平成18年７月15日付けで委託契約を結び，教育事業団はそれぞれ平成17年11月21日から平成18年１月20日までの約２か月間と平成18年８月28日から11月10日までの約２か月半発掘調査を行った。なお，平成18年10月28日には世羅町教育委員会と共催で遺跡見学会を開催し，150名の参加があった。

本報告書は，以上のような経緯のもとに行った発掘調査の成果をまとめたものであり，今後の埋蔵文化財の資料として，またこの地域の歴史の一端を知る手がかりとして，少しでも寄与できれば幸いである。

なお，発掘調査にあたっては，広島県尾三地域事務所，世羅町教育委員会及び地元の方々に多大な御協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

Ⅱ　位置と環境

金井原遺跡は広島県中央部の世羅郡世羅町に所在する。世羅町は旧世羅町・甲山町・世羅西町の三町が合併した東西27km，南北15kmと東西に長い町で，遺跡はこの世羅町東部の旧甲山町中央部に所在する。世羅町は標高400～600mの世羅台地の中心で，周縁には鷹ノ巣山（標高922.1m）をはじめとする標高700～900m級の山々が連なり，台地内部の各所には黒川明神山などの円錐形の玄武岩鐘がみられる。世羅台地は東からやがて南に流れる芦田川をはじめ，江の川や沼田川など県内主要河川の水源域であり，これらの河川による争奪が諸所で行われている。旧世羅町や旧甲山町の大半では芦田川水系の河川が西から東に台地面を侵食しながら流れ，甲山盆地などの山間盆地を形成している。

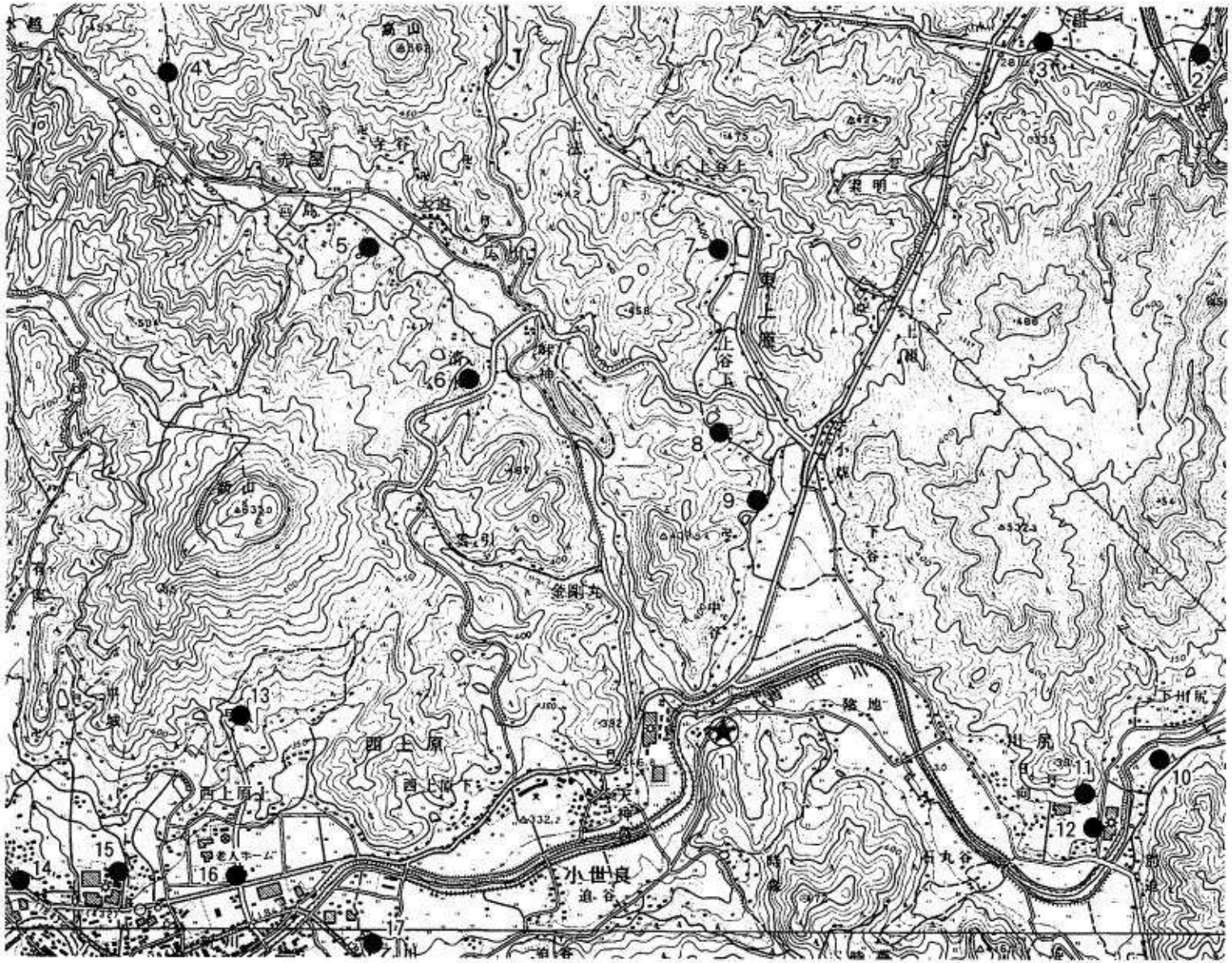
世羅町は中世荘園である高野山領大田荘の故地であり，町内には康徳寺古墳を始めとする多くの特徴的な古墳，石仏・石塔群や中世寺院跡など，古代・中世の文化財が多く残されている。ここでは，旧甲山町や旧世羅町域を中心に世羅町の歴史的環境についてみていきたい。

縄文時代　この時代の遺跡は単独で調査されたものはない。別迫の高山１号遺跡[1]では晩期後半の土器が出土しており，平底の精製土器（壺・浅鉢・深鉢）と丸底ないしは尖底に近い粗製土器（深鉢）がある。川尻の頓迫１～３号遺跡[2]は谷奥の南面する緩斜面に立地し，中期後半～晩期の土器片，石鏃・スクレイパーなどの石器や多量の安山岩製の剥片が採集されている。

弥生時代　前・中期の調査例は少ない。金井原遺跡の西1.6kmの芦田川南岸の沖積地にある乙川北遺跡[3]（小世良）では，前期の貯蔵穴や中期の竪穴住居跡，後期の竪穴住居跡や木棺墓を含む墓坑群などが検出されている。芦田川南岸の丘陵頂部に立地する近重山遺跡（東神崎）では中期後半の壺・甕が出土し，石列をもつ墳墓の可能性が指摘されている。

後期の遺跡としては田龍遺跡[4]（本郷），藤鞘遺跡[5]（本郷），矢ノ迫遺跡[6]（重永），近森遺跡[7]（伊尾）などがある。田龍遺跡・藤鞘遺跡は甲山盆地の中心部に近接して存在する集落跡で，田龍遺跡は芦田川北岸の新山山麓から延びた微高地に立地する。後期後半の比較的短期間に４軒の竪穴住居跡を建て替えており，２本柱のＳＢ１からはガラス製小玉が出土した。藤鞘遺跡では径７ｍの大型住居跡の炉跡から放射状に延びる間仕切りの溝を検出し，ガラス製小玉が出土している。矢ノ迫遺跡は芦田川南岸の丘陵鞍部に立地する弥生時代後期～古墳時代初頭頃の墳墓群で，箱式石棺・土坑墓が南北に並列した状態で検出された。近森遺跡は低丘陵上にある弥生時代後期～終末期の集落跡で，４軒が重複する住居からは山陰系の甑形土器や土製の勾玉・紡錘車が出土した。なお，土居丸遺跡[8]（西神崎）・龍王山２号遺跡[9]（伊尾）で分銅形土製品が出土している。特に後者は全面に刺突痕をもつ方形板状のもので，後期前半とみられる。

古墳時代　この時代の遺跡としては古墳，集落跡がある。



第１図　金井原遺跡周辺遺跡分布図（1:25,000）

前半期の遺跡では，集落跡の龍王山２号遺跡，土居丸遺跡，墳墓群の青山大迫遺跡[10]（青山）などが調査されている。龍王山２号遺跡は南北に延びる丘陵裾の緩斜面に立地する古墳時代初頭の集落跡で，竪穴住居跡１軒，土坑墓７基，貯蔵穴４基，祭祀関連土坑１基などを検出し，鼓形土器や甑形土器を始めとする山陰系の土器や土製カマドが出土した。土居丸遺跡では竪穴住居跡２軒を検出し，山陰系の甑形土器や土製支脚が出土した。青山大迫遺跡は芦田川南岸の谷奥の丘陵東斜面に立地し，箱式石棺４基を検出した。特にＳＫ１では，南側を頭位とする上下に重なった状態の男性人骨２体を出土している。

後半期の遺跡には，横穴式石室を埋葬施設とする古墳をはじめ，製鉄遺跡や祭祀遺跡があるが，集落跡は明確なものはない。古墳には，県史跡康徳寺古墳[11]（寺町），県史跡神田（じんでん）第２号古墳[12]（堀越），近成山第１号古墳[13]（西神崎），池ノ奥古墳[14]（宇津戸）などがあり，神田第２号古墳以外は発掘調査が行われている。県史跡康徳寺古墳（６世紀末築造）・県史跡神田第２号古墳（７世紀中葉頃）・近成山第１号古墳（７世紀後半築造）の３基は甲山盆地中心部の芦田川をはさんで１～２㎞の近距離にあり，６世紀末～７世紀代の比較的近接した時期に相次いで築造されている。康徳寺古墳は丘陵の突端に立地する径17m，高さ５mの円墳で，南に開口する玄室長5.9mの巨大石室をもつ。神田第２号古墳は芦田川北岸の丘陵端部に立地し，一辺９m程度の方墳の可能性が高いとされている。石室は横長の玄室に羨道を取り付けたＴ字形の特異なもので，玄室の各壁は花崗岩の一枚石を用い，玄門部には軸受けをもつ片開きの扉石を嵌め込む。近成山第１号古墳は芦田川南岸の丘陵東斜面に立地し，南側に開口する横穴式石室を埋葬施設とする径10～15mの円墳である。石室内には凝灰岩製の家形石棺が納められていたとみられる。池ノ奥古墳は芦田川支流宇津戸川北岸の丘陵裾部の緩斜面に立地する径10mの円墳で，南に開口する横穴式石室を埋葬施設とする。長さ6.6mの石室内から耳環などが出土し，７世紀前半に築造されたと考えられる。

古墳以外では，竪穴住居跡を検出した康徳寺廃寺[15]，カナクロ谷製鉄遺跡[16]（黒渕），祭祀遺跡の宇山（うやま）遺跡[17]（寺町）がある。康徳寺廃寺の寺域南東側でみつかった平面形方形の竪穴住居跡からは多量の土師器（甕・小型壺・小椀など）が出土し，５世紀中葉～後半のものとみられる。カナクロ谷製鉄遺跡は芦田川上流の谷頭に臨む丘陵南斜面に立地し，製鉄炉２基とその前面に鉄滓捨て場が存在する。製鉄炉は箱形炉の祖形的な位置付けがされ，６世紀末～７世紀はじめ頃に操業したと考えられる。宇山遺跡は芦田川北岸の井折谷の谷頭部にあり，多くの土製品（勾玉形・丸玉形・短甲形・棒状・鏡形・土馬など）や手づくね土器（鉢・坩など）が出土した。６世紀後半～７世紀前半頃のものと考えられ，遺跡の東方２㎞の新山山麓に鎮座する式内社和理比売神社との関連が考えられている。

古代　「和名抄」によれば，古代世羅郡には桑原郷・大田郷・津口郷・鞆張（とばり）郷の４郷があり，桑原郷が旧甲山町，大田郷以下の３郷がほぼ旧世羅町にあたるとされる。

古代の遺跡としては，康徳寺廃寺[18]，三郎丸瓦窯跡[19]（三郎丸）などがある。康徳寺廃寺は芦田川北岸の丘陵裾の南緩斜面に立地する。北に講堂跡，南に塔跡の基壇が並び，塔跡の西側に金堂跡が想定される法起寺式の伽藍配置をとると考えられる。白鳳末～奈良時代初期に備後北部の寺院

の影響下に創建され，やがて奈良時代中期から後期にかけて備後南部の寺院の影響を強く受けたとみられている。軒丸瓦・軒平瓦のほかに，鴟尾(しび)や塼仏，塑像の螺髪(らほつ)と推定される土製品などが出土した。康徳寺廃寺の南1.3kmの対岸，芦田川南岸の細長い谷奥の丘陵西斜面に立地する三郎丸瓦窯跡は地下式有段構造の登窯で，康徳寺廃寺に丸瓦・平瓦を供給したと考えられている。

中世　平安時代末期に立券された大田荘は，世羅町を中心に広大な荘域をもつ全国でも有数の中世荘園である。平家滅亡後高野山（金剛峯寺根本大塔）領となった大田荘は，鎌倉時代を通じて開発領主の系譜を引く下司橘氏や新たに地頭となる幕府御家人三善氏との間で荘務権の内実などをめぐる対立・抗争を繰り返す。そして，南北朝の動乱以後中世後期にかけて，備後国守護山名氏の勢力の浸透などにより高野山の大田荘支配は形骸化し，山内氏や杉原氏を始めとする周辺諸勢力の侵攻を許し，押領や違乱が繰り返されるようになる。やがて，応仁の乱を契機に周防大内氏，更には出雲尼子氏の備後国への侵攻がはじまり，世羅台地は抗争の坩堝と化す。そして，16世紀半ばに大内氏・尼子氏を相次いで滅ぼし，中国一円を手中におさめた安芸国人毛利氏の支配下に組み込まれてゆく。

中世の遺跡としては，山城跡・居館跡・墓などがある。山城跡としては，今高野山城跡（甲山），沼城跡（西上原）などがあるが，規模の大きなものはなく，城主や築城時期・経緯などは殆ど分かっていない。今高野山城跡は主郭の南北に各２段の小郭を配し，南側には堀切を設けている。主郭の北には出丸がある。沼城跡は変形五角形の居館跡で，北西側が一段高くなっている。発掘調査が実施された大通(おおどおり)土居屋敷跡[20]（伊尾）では，室町時代の掘立柱建物跡・溝・土坑などがみつかっている。宮ヶ森古墓群[21]（重永）は，谷を見下ろす小高い場所に立地する中世末～近世初頭の積石基壇をもつ５基の古墓からなる。

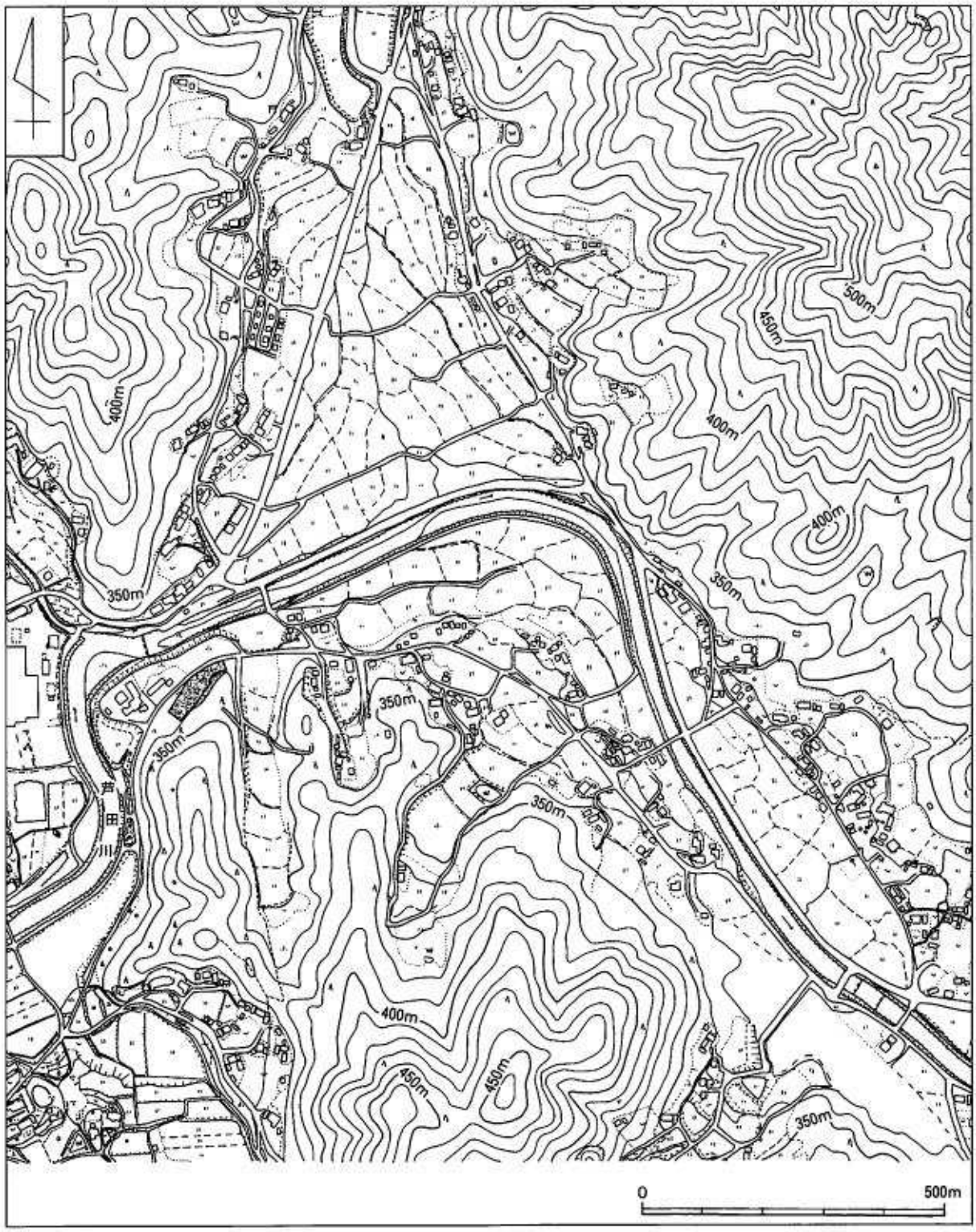
註

（1）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「高山１号遺跡」『高山１・２号遺跡』 1992年
（2）小都隆「世羅郡甲山町頓迫遺跡について」『芸備』第５集　芸備友の会　1977年
（3）世羅町教育委員会『乙川北遺跡』 2008年
（4）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『田龍遺跡』 1997年
（5）河瀬正利「藤鞘遺跡」『日本考古学年報』21・22・23　日本考古学協会　1981年
（6）世羅町教育委員会『矢ノ迫遺跡』 1997年
（7）財団法人広島県教育事業団『近森遺跡』 2008年
（8）世羅町教育委員会『土居丸遺跡Ⅰ』 1994年
　　世羅町教育委員会『土居丸遺跡Ⅲ』 1999年
（9）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『龍王山２号遺跡』 1997年
（10）世羅町教育委員会「青山大迫遺跡」『土居丸遺跡Ⅱ　青山大迫遺跡』 1996年
（11）世羅町教育委員会『康徳寺古墳』 1997年
（12）是光吉基「石扉を有す一古墳について」『広島県文化財ニュース』第60号　広島県文化財協会　1974年
　　脇坂光彦「神田２号古墳の測量調査」『芸備』第18集　芸備友の会　1987年
　　小都隆「神田第２号古墳」『広島県文化財ニュース』第116号　広島県文化財協会　1988年
（13）世羅町教育委員会『近成山第１号古墳調査概報』 1991年
（14）財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（３）2007年
（15）広島県世羅郡世羅町教育委員会『備後康徳寺廃寺－第２次発掘調査概報－』 1993年

(16) 潮見浩「カナクロ谷製鉄遺跡」『広島県文化財ニュース』第116号　広島県文化財協会　1988年
藤野次史・土佐雅彦「カナクロ谷製鉄遺跡」広島大学文学部考古学研究室編『中国地方製鉄遺跡の研究』溪水社　1993年
(17) 是光吉基「広島県世羅出土の祭祀遺物」『月刊考古学ジャーナル』№5　ニュー・サイエンス社　1967年
(18) 広島県世羅郡世羅町教育委員会『備後康徳寺廃寺－第1次発掘調査概報－』1992年
広島県世羅郡世羅町教育委員会『備後康徳寺廃寺－第2次発掘調査概報－』1993年
広島県世羅郡世羅町教育委員会『備後康徳寺廃寺－第3次発掘調査概報－』1994年
広島県世羅郡世羅町教育委員会『備後康徳寺廃寺－発掘調査報告書－』1995年
(19) 広島県世羅郡世羅町教育委員会「三郎丸瓦窯跡」『備後康徳寺廃寺－発掘調査報告書－』1995年
(20) 甲山町教育委員会『大通土居屋敷跡』1997年
(21) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『宮ヶ森第1～5号古墓』1998年

参考文献

・是光吉基「世羅郡内の遺跡」『広島県文化財ニュース』第77号　広島県文化財協会　1977年
・広島県『広島県史』考古編　1979年
・広島県『広島県史』中世　通史Ⅱ　1984年
・甲山町史編纂委員会編『甲山町史』資料編Ⅰ　甲山町　2003年



第2図　周辺地形図（1）（1:10,000）　アミ目は遺跡を示す。

Ⅲ　調査の概要

金井原遺跡は世羅郡世羅町の中央部に位置する弥生時代中期の集落跡である。三原市大和町北部を水源として世羅台地を東流してきた芦田川が南北に蛇行を始めるあたりの南岸，南から北に延びる低丘陵端部の北西側緩斜面に遺跡は立地する（標高340m，水田面からの比高10m）。遺跡のすぐ際を芦田川が流れており，この芦田川沿いに広がる世羅町中心部の平野部が南北から延びた丘陵によって扼される箇所に金井原遺跡は位置する。ここから東に再び平野部が広がり，その北側は中世久代宮氏（大田荘雑掌を輩出した在地土豪）の本拠地である久代谷に通じている。本遺跡はこのように芦田川沿いに広がる世羅台地の東西の平野部をつなぐ要所に位置している。南西－北東方向に長い調査区は南東から北西側にごく緩やかに傾斜しており，低所側の北西側を平成17（2005）年度に，高所側の南東側を平成18（2006）年度にそれぞれ調査した。調査面積は前者が1,300㎡，後者が2,560㎡の計3,860㎡である。遺跡の低所側では掘立柱建物跡や一部の墓坑を検出し，ＳＢ１・２など中心的な竪穴住居跡や墓坑群の大半は高所側に位置する。発掘調査は厚さ20～40cmの表土をバックホー（0.45㎥）で除去したあと，人力によって遺構検出作業及び遺構掘り下げを行った。

検出した遺構の内訳は，竪穴住居跡５軒，住居跡状遺構２軒，掘立柱建物跡９棟，墓坑10基，土坑４基，溝状遺構３条，柵跡７条，性格不明の遺構２基で，そのほか多数の小穴（ピット）があり，これらのなかで建物や柵を構成しないものの，根石や遺物の出土がみられたものを単独柱穴（６基）として報告する。

出土遺物は量的には多くない。土器は小破片が多く，完形に近く復元できるものはない。量的には，弥生土器以外では石器や土器片紡錘車が多い。報告遺物252点の内訳は，縄文土器１点，弥生土器116点，土器片紡錘車62点，管玉２点，石斧６点，磨製石包丁１点，石鏃（未成品を含む）53点，石錐３点，スクレイパー２点，磨石・敲石４点，砥石１点，楔形石器削片１点である。出土遺物の多くは竪穴住居跡（ＳＢ１・２）と墓坑から出土した。前者からは弥生土器のほかに土器片紡錘車及び石鏃などの石器，後者は主にＳＫ５・６などから集中的に石鏃が出土している。

第３図　周辺地形図（２）（1:2,000）　アミ目は調査区を示す。

Ⅳ　遺構と遺物

北東－南西方向に細長く延びる調査区（42m×120m）は南東側から北西方向に緩やかに下傾している（傾斜角度３～13°）。調査区の南西側2/3の範囲に竪穴住居跡・住居跡状遺構・掘立柱建物跡や柵跡などの大半が存在し，この北東－南西方向70mの範囲が集落の居住域と考えられる（調査区南西端の15mは明確な遺構は存在しない）。この居住域の中央には南東から北西方向にごく浅い谷筋が入り，谷筋の周辺には柵跡や竪穴住居跡ＳＢ３・４，住居跡状遺構ＳＢ６・７などが位置するが，中心的な竪穴住居跡ＳＢ１・２や多くの掘立柱建物跡は谷筋の南西側に集まる。そして，概ね高所側に竪穴住居跡が，低所側に掘立柱建物跡が立地する。集落域の北東端に位置する竪穴住居跡ＳＢ５や柵跡ＳＡ５の北８～19mには木棺墓を主体とする墓坑10基が等高線に沿って列状に並ぶ墓域がある。周辺には縄文土器片を被覆する土坑ＳＫ14や柵跡ＳＡ７，掘立柱建物跡ＳＢ16も存在するが，墓地としての色合いが濃い。

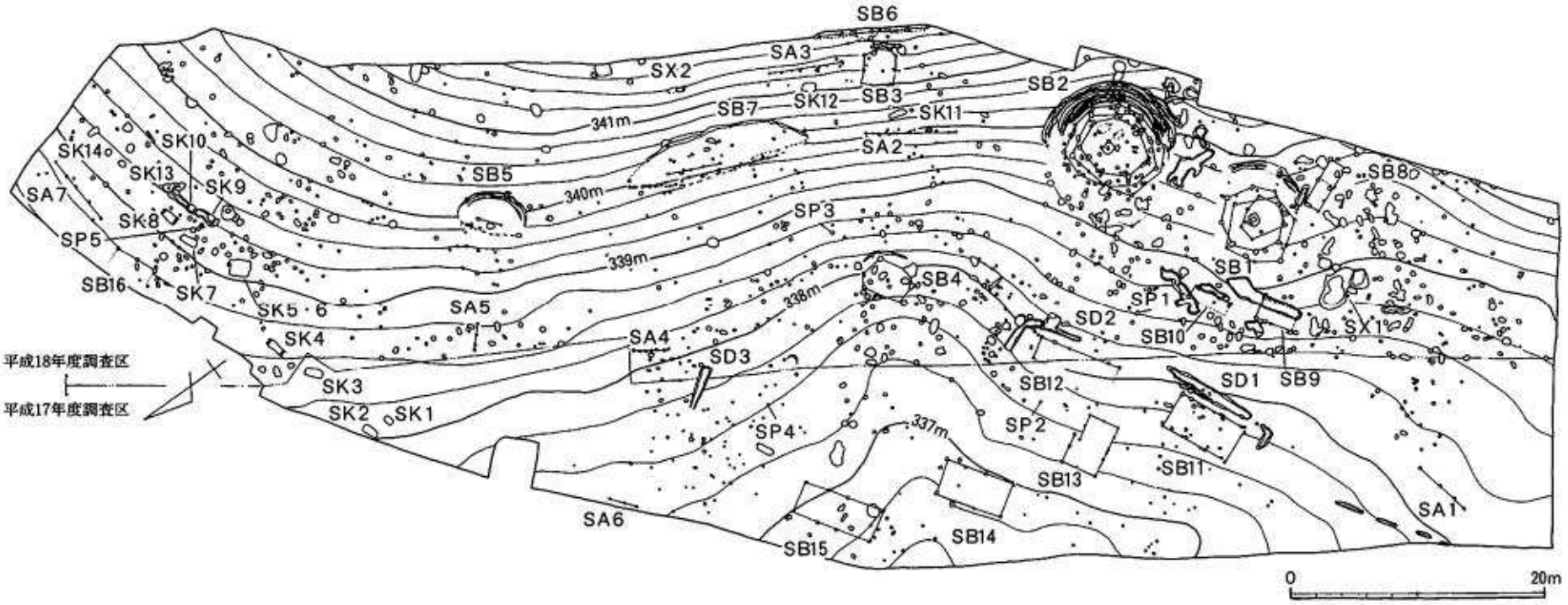
（１）竪穴住居跡　調査区中央から南西部にかけて５軒が存在する。谷筋上にあるＳＢ３・４など残りのよくないものもあるが，いずれも平面円形で，５本以上の柱を多角（円）形に配置する多柱穴の柱構造のものが大半を占める。ただ，最も北東側に立地する小型住居ＳＢ５は２本柱である。大型住居のＳＢ１・２は２～５回の建て替えを行っており，３～６軒の住居が同心円状に重複する。

①ＳＢ１（第５図，図版３ｂ・４ｃ・13ａ～ｃ）

立地　最も南西側に位置する竪穴住居跡で，調査区南西端から20m，中央谷筋の南25mにある（標高339.90m）。南東から北西方向にごく緩やかに下る斜面（傾斜角度６°）に立地し，南西側に接して掘立柱建物跡ＳＢ８が，西側４mには性格不明の遺構ＳＸ１，北側３mには掘立柱建物跡ＳＢ10が存在する。

規模　高所側（南側）に約1/4周分の壁溝３条とごく僅かな床面を残すが，北側にかけては削平を受けて緩やかに下傾する。３条の壁溝は同心円状に接しており，壁溝の残存部分から復元される住居跡の規模は最大規模のＳＢ１ａが直径8.34m（推定床面積49.49㎡），ＳＢ１ｂが直径7.74m（推定床面積43.45㎡），最も規模の小さいＳＢ１ｃが直径7.2m（推定床面積38.91㎡）と成る。住居の平面形は３軒とも円形であるが，新旧関係は明確にはできなかった。３軒の住居跡の壁高は，ＳＢ１ａが８～13cm，ＳＢ１ｂが13cm，最も内側のＳＢ１ｃは７cmで，最も床面が高いＳＢ１ａの上面から最も低いＳＢ１ｃの床面までの高低差は28～33cmほどである。

床面　最も内側にあるＳＢ１ｃの床面が壁溝際から１m程度残存するが，ＳＢ１ａ・１ｂの床面は壁溝際に幅20cm程度残るにすぎない。



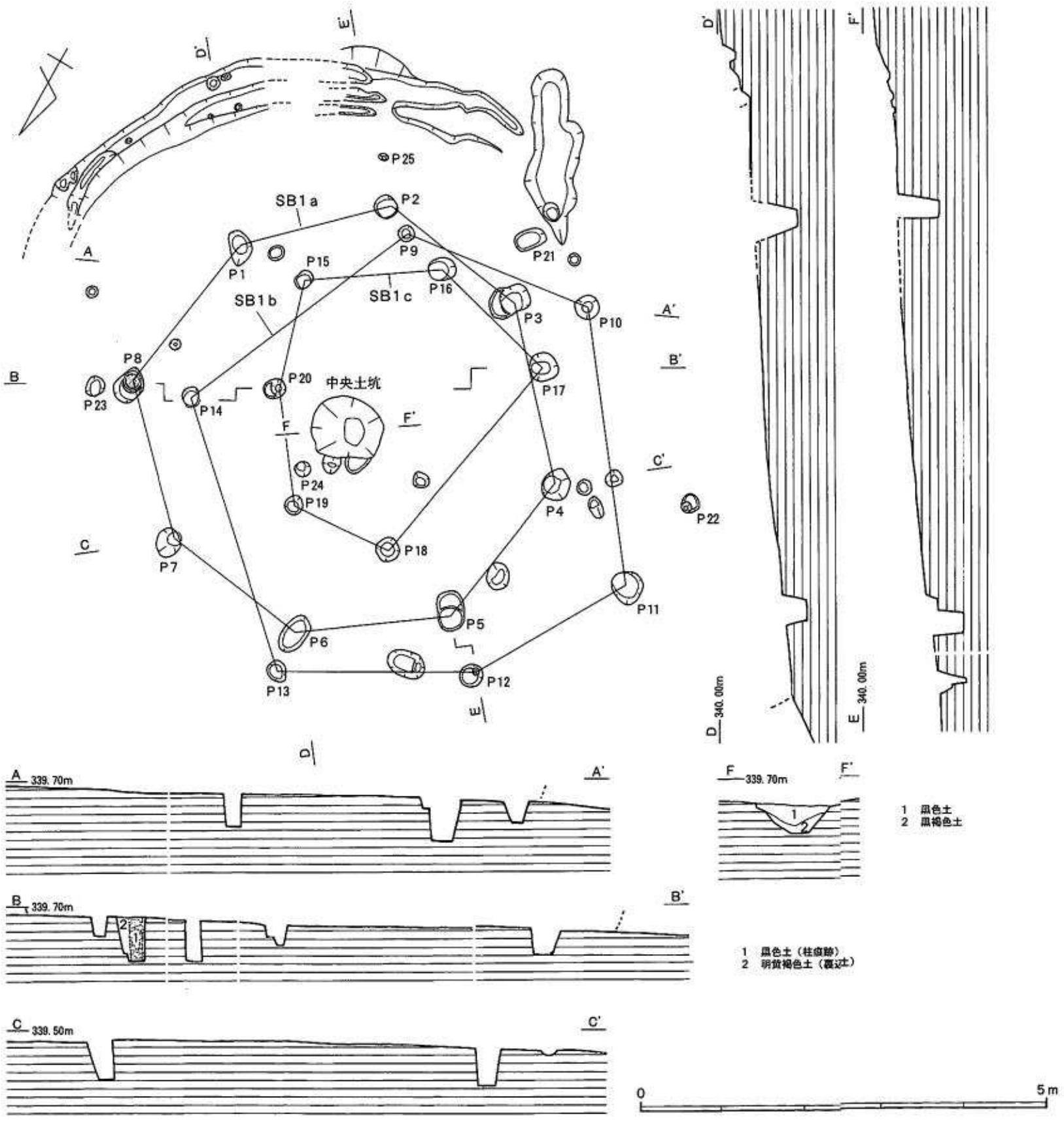
第4図　遺構配置図（1:500）

壁溝　３軒の住居の壁溝の上端幅と深さは，現状でＳＢ１ａが幅20cm，深さ８cm，ＳＢ１ｂが幅15cm，深さ３cm，ＳＢ１ｃが幅９cm，深さ３cmである。

主柱穴　ＳＢ１ａ～１ｃの床面に想定される範囲に柱穴の可能性のあるピットは計25基（Ｐ１～25）存在し，Ｐ１～Ｐ20の20基が住居の主柱穴と考えられる。最大規模のＳＢ１ａの主柱穴はＰ１－Ｐ２－Ｐ３－Ｐ４－Ｐ５－Ｐ６－Ｐ７－Ｐ８の８基で，直径5.25mのほぼ正円（八角）形に主柱穴が配されている。柱間距離は心々で1.8～2.2m（平均1.98m）とほぼ一定している（Ｐ１－Ｐ２間・Ｐ２－Ｐ３間＝1.9m，Ｐ３－Ｐ４間＝2.2m，Ｐ４－Ｐ５間＝2.0m，Ｐ５－Ｐ６間＝1.9m，Ｐ６－Ｐ７間＝1.8m，Ｐ７－Ｐ８間＝2.0m，Ｐ８－Ｐ１間＝2.1m）。南側の二辺（Ｐ１－Ｐ２間・Ｐ２－Ｐ３間）とこれに相対する北側の二辺（Ｐ５－Ｐ６間・Ｐ６－Ｐ７間）の柱間距離は1.8～1.9mとやや短く，西側の二辺（Ｐ３－Ｐ４間・Ｐ４－Ｐ５間）とこれに相対する東側の二辺（Ｐ７－Ｐ８間・Ｐ８－Ｐ１間）の柱間距離は2.0～2.2mとやや長く，柱間が広い。つまり，住居の南・北側の柱間が狭く，西・東側のそれは広いということになり，このことは住居の向きや入口の位置と何らかの関係があると考えられる。各柱穴の規模は長径26～48cm（平均37cm）×短径26～32cm（平均29cm），深さ13～52cm（平均37cm）である。径・深さともに30～40cmと比較的規模が小さくやや浅めの柱穴といえる。各主柱穴の規模は，Ｐ１＝長径36cm×短径27cm，深さ35cm，Ｐ２＝径26cm，深さ46cm，Ｐ３＝長径38cm×短径31cm，深さ46cm，Ｐ４＝長径39cm×短径32cm，深さ13cm，Ｐ５＝径30cm，深さ36cm，Ｐ６＝長径48cm×短径27cm，深さ25cm，Ｐ７＝長径36cm×短径30cm，深さ43cm，Ｐ８＝長径43cm×短径30cm，深さ52cmである。各柱穴底面の標高は338.80～339.32m（平均339.02m）である。Ｐ８には柱痕跡が認められ，径18cmの比較的太い柱材の使用がみられる。

ＳＢ１ａの主柱穴群から西側に0.7～１mほど並行移動した状態でほぼ同規模・同形態の柱構造を示しているのがＳＢ１ｂである。Ｐ９－Ｐ10－Ｐ11－Ｐ12－Ｐ13－Ｐ14の６基の主柱を径5.34～5.79mのほぼ円形（六角形）に配しているが，ＳＢ１ａの主柱の配置に較べるとやや歪な感じは否めない。柱間距離は2.1～3.5m（平均2.85m）とかなり幅がある（Ｐ９－Ｐ10間＝2.4m，Ｐ10－Ｐ11間＝3.4m，Ｐ11－Ｐ12間＝2.1m，Ｐ12－Ｐ13間＝2.4m，Ｐ13－Ｐ14間＝3.5m，Ｐ14－Ｐ９間＝3.3m）。南側のＰ９－Ｐ10間，北側の隣接するＰ11－Ｐ12間，Ｐ12－Ｐ13間の三辺が2.1～2.4mと柱間距離が短く，西側のＰ10－Ｐ11間，東側の隣接するＰ13－Ｐ14間，Ｐ14－Ｐ９間の三辺の柱間距離は3.3～3.5mと長い。すなわち，ＳＢ１ａと同じく住居の南側と北側は柱間が狭く，西側と東側の柱間はその1.5倍と広くなっている。各柱穴の規模は長径19～40cm（平均27cm）×短径19～36cm（平均26cm），深さ17～46cm（平均27cm）で，径・深さ20～30cmとＳＢ１ａよりも更に小さく浅くなっている。各柱穴の規模は，Ｐ９＝径19cm，深さ22cm，Ｐ10＝径28cm，深さ24cm，Ｐ11＝長径40cm×短径36cm，深さ22cm，Ｐ12＝径28cm，深さ31cm，Ｐ13＝長径27cm×短径23cm，深さ17cm，Ｐ14＝長径22cm×短径20cm，深さ46cmである。柱穴底面の標高は338.77～339.31m（平均339.04m）である。

最小規模のＳＢ１ｃの主柱穴群はやや東側に偏るがほぼＳＢ１ｂの主柱穴に囲まれた範囲に納



第５図　竪穴住居跡実測図（１）(1:60)　ＳＢ１

まる。P15－P16－P17－P18－P19－P20の６基の主柱穴を東西2.85m×南北3.36mのやや歪な六角形に配している。柱間距離は1.3～2.9m（平均1.72m）とかなり幅があるが，西側のP17－P18間の2.9mを除けば，1.3～1.7mと一定している（P15－P16間＝1.6m，P16－P17間＝1.7m，P17－P18間＝2.9m，P18－P19間＝1.3m，P19－P20間＝1.5m，P20－P15間＝1.3m）。柱の配置がＳＢ１a・１bと較べて歪であることから，柱間距離が他と比べて長いP17－P18間にもう１つ主柱穴の存在が考えられるが，検出できなかった。各柱穴の規模は長径24～34cm（平均28cm）×短径18～34cm（平均25cm），深さ４～37cm（平均22cm）で，径・深さ20～30cmとＳＢ１bとほぼ同規模の小さくやや浅めの柱穴といえる。各柱穴の規模は，P15＝長径24cm×短径18cm，深さ26cm，P16＝長径34cm×短径28cm，深さ37cm，P17＝径34cm，深さ28cm，P18＝径27cm，深さ４cm，P19＝長径24cm×短径21cm，深さ14cm，P20＝長径26cm×短径22cm，深さ22cmである。各柱穴底面の標高は339.08～339.25m（平均339.19m）である。ＳＢ１は床面の大半が削平・流出を受けており，柱穴の上端部は大きく失われている。よって，柱穴底面の標高で比較してみると，ＳＢ１a・１bの平均値が339.02～339.04mと殆ど同じであるのに対して，最も規模の小さいＳＢ１cの平均値は339.19mと20cm近くも高い。

中央土坑　床面中央にある東西88cm×南北70cm，深さ30cmの平面不整円形の土坑で，断面形は逆台形である。覆土（黒色土・黒褐色土）からは焼土や炭化物はまったく検出されず，壁面や周辺に火を使用した形跡は何ら認められない。また，覆土から350点と多量の剥片・チップや石鏃14点が出土する点や出土した石鏃のなかに未成品がやや多く含まれることなどから，この土坑は炉跡ではなく石鏃をはじめとする小型石器の製作に関わる機能をもつと考えられる。

出土遺物（第６図，図版16）　弥生土器・土製品・石器が出土した。報告遺物27点の大半を石器（石鏃）が占め，それらの多くは中央土坑内から出土した（18点＝弥生土器３・５，土器片紡錘車９・10，石器12～21・23・24・26・27）。そのほかの９点（弥生土器１・２・４・６・７，土器片紡錘車８・11，石器22・25）は覆土下層～床面で出土した。

①弥生土器（１～７）　甕・底部片がある。

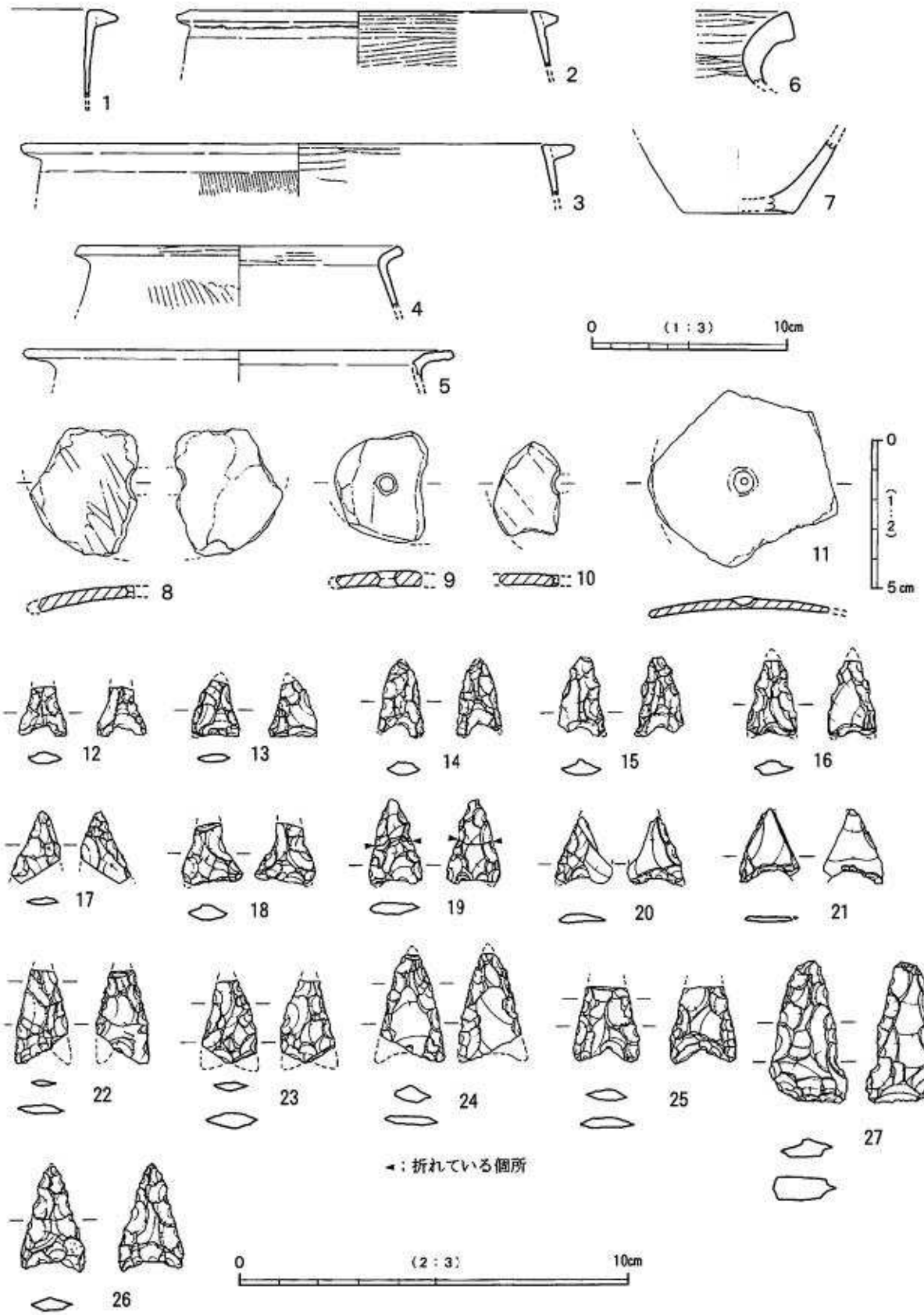
１～６はいずれも甕口縁部片で，１～３は逆Ｌ字状の貼付口縁のもので，１は直立するが，２・３はやや内傾気味に立ち上がる。調整は，内面が横方向のヘラミガキ，外面は口縁部が横方向の丁寧なナデあるいはヘラミガキ，体部はナデ（２）か縦方向の細かなハケ目（３）を施している。４・５はくの字に曲がる薄手の口縁で，５は水平気味に外方に延びる。調整は，４の内面はヘラミガキ，外面は口縁部～頸部が横方向のナデ，体部は縦方向のヘラミガキを行う。５は内外面とも横方向のナデである。６はくの字に外反する厚手の口縁の端部を若干外方に拡張し，端面は平坦である。調整は，口縁部内・外面に横方向のヘラミガキを施す。７は上げ底気味の平底の底部片である。

②土製品（８～11）　弥生土器片（大半が体部片）を円形に加工して，中央に円孔（軸孔）を穿って紡錘車としたもので４点が出土した（以下，実測図の左側に素材土器片の外面，右に内面を置

き，前者を「外面」，後者を「内面」として記述を進める)。完形品はなく，いずれも破損している。周縁が欠けた11は外面に未通の軸孔が残る未成品である。８が復元径8.4cm，未成品の11が復元径6.4cmと大型だが，９・10は復元径4.2～4.8cmと小型である。軸孔は円形で内径0.5～0.6cm，外径0.7～0.8cmとほぼ一定である。内・外面には素材土器片の調整痕が残る。外面はヘラミガキ，ナデ，ハケ目が，内面はナデが主体である。８・９の外面にはススが付着する。

③石器（12～27）　石鏃16点である。なお，以下の石鏃の記述において，実測図左側のものをＡ面，同右側のものをＢ面とする。可能性のあるものを含めて未成品が６点と比較的多い。未成品の21・27を除けばほぼ完形のものは26のみで，大半は先端や基部を欠失している。先端を失っているものは11点と多く，その大半はＡ・Ｂいずれかの面に力が加わったことによる単純な折れと考えられる。ただ，14の先端部にみられるＡ・Ｂ面各１枚の剥離痕は上方（先端）からの加撃によるもので，刺突時の衝撃による可能性がある。現存値では長さ1.25～2.7cm（完存値２資料1.85～2.65cmの平均値2.25cm，推定復元値1.75～３cmの平均2.25cm)，幅1.1～1.65cm（完存値10資料1.1～1.65cmの平均値1.38cm）で，ほぼ長さ2.2cm，幅1.4cmの大きさである。基部は凹基13点（抉り指数0.1～0.4，平均0.23)，平基２点，不明１点である。いずれもＡ・Ｂ両面に素材面を残す。側縁毎の剥離の進行状況では，ｂ（基部→先端へ剥離が進むもの）が９例とやや少なく，他のａ（先端→基部へ剥離が進むもの）14例，ｃ（剥離が側縁中央→上･下に進むもの）17例，ｄ（上･下→中央に剥離が進むもの）14例が多い。

12は先端を失っている。基部はやや深い凹基である。細身の鏃身に踏ん張る形態の脚が付く。13は先端と左脚端を欠失している。基部はごく浅い凹基で，平基の可能性もある。14・15はいずれもＡ・Ｂ両面からの１～２枚の大きな剥離によって形成された比較的抉りの深い凹基である。14は先端に丸みをもつ細身の鏃身に短く角ばった脚が付く。15はＡ面左側縁の調整が不十分であることから未成品ないしは失敗作の可能性が大きい。16は先端と両脚端を折損している。基部は浅く大きな１～２枚の剥離による抉りの浅い凹基である。大きく素材面を残すＢ面の左側縁は調整剥離が行われておらず，製作を断念した未成品である可能性がある。17は基部側を大きく欠失している。18は先端と左脚端を欠失している。基部下辺がやや傾き，側縁は強く内湾気味で，12に似た形状である。２～３枚のやや深い剥離によって形成された基部は抉りが殆どみられず，平基と考えられる。19は中央で折れてしまったものの，ほぼ原形を留めており，長さ2.2cm，重さ0.73ｇの比較的大型品である。基部はごく浅い凹基である。20は先端側を大きく折損している。Ａ面右側縁（Ｂ面左側縁）の調整剥離が行われていないことから，未成品とみられる。基部は１～３枚の剥離で形成された広く浅い抉りの凹基である。21はごく薄い素材剥片を折断して石鏃に加工しようとした未成品か，あるいは二次加工のある剥片（Ｒ．Ｆ．）の可能性もある。基部は小さく浅い剥離で形成された，やや深い抉りの凹基である。22は比較的細身の未成品で，先端と右脚部を欠失している。脚端が大きく鋭く尖る左脚部の状況から鋭く深い抉りの凹基と考えられる。Ｂ面下半に素材面を大きく残し，そのすぐ上の剥離痕も素材面の可能性が高い。Ａ面中央にもごく小さな素材面が残る。Ａ面は両側縁・基部ともに細長い剥離によって丁寧な調整がなされてい



第6図　ＳＢ１出土遺物実測図（1:3，1:2，2:3）

るが，Ｂ面の基部・左側縁への調整は明確でない。Ｂ面右側縁の調整剥離を行った時点で，石鏃の製作をやめたものと思われる。23は先端と両脚部を失っているが，Ａ・Ｂ両面に深い調整剥離を行っている。基部は両脚を失っているので明確でないが，恐らく比較的浅い複数の剥離によって形成された凹基と考えられる。24は先端と左脚を失っているものの，整美で比較的大型の石鏃である。基部はそれほど深くない抉りの凹基であると考えられる。25は先端側を大きく失っているが，比較的大型の石鏃である。基部はＡ・Ｂ各面３枚程度の剥離を加えて深く鋭い抉りの凹基を形成している。26は長さ2.65cm，幅1.6cm，重さ1.11ｇの完形品である。比較的整美な長三角形で，脚端は尖り気味である。Ａ面下半の右側縁に自然面を残しており，原石の表面近くで剥離された剥片を素材に用いている。基部は両面ともに４，５枚の剥離によって，やや抉りの深い凹基を形成している。27は長さ3.05cm，幅1.95cm，厚さ0.6cm，重さ3.70ｇの分厚い大型品で，基部に下方からの潰れ痕が顕著に認められることから，楔形石器からの再生を試みた未成品の可能性が高い。基部はＢ面左半に調整剥離がみられるが，何らかの理由によりこれ以上の調整は断念されたものと思われ，素材の楔形石器の剥離痕を残す。

②ＳＢ２（第７・８図，図版５$_{a\cdot b}$・13$_{d\sim h}$・14$_{a\sim e}$）

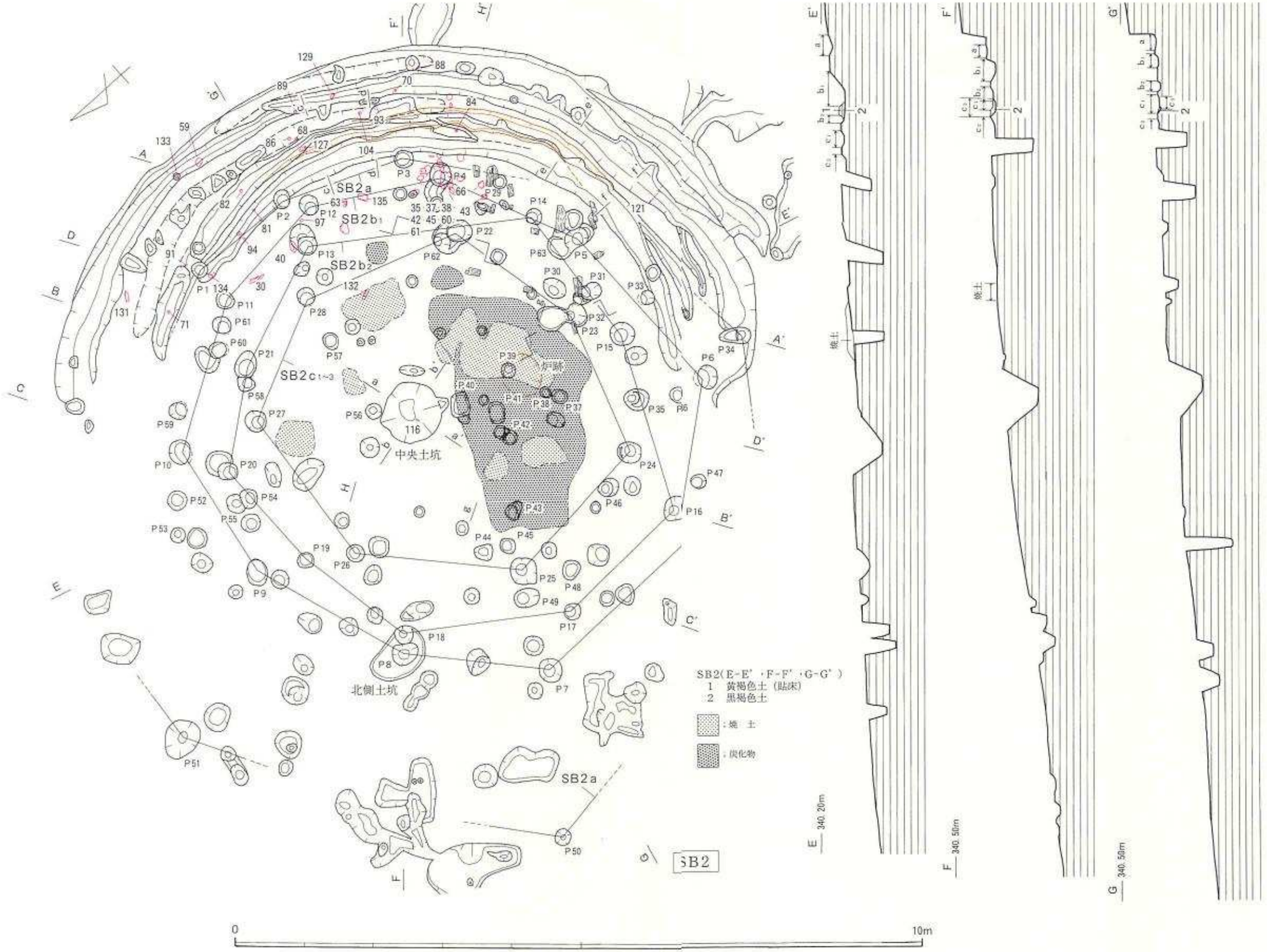
立地　ＳＢ１の東３ｍに位置する最大規模の竪穴住居跡で，調査区南東辺に接する。南東から北西方向に緩やかに下傾する斜面に立地し（標高340.4m），北東側６～12mに竪穴住居跡ＳＢ３や柵跡ＳＡ２，北側12mに竪穴住居跡ＳＢ４が存在する。

規模　東～南～南西の高所側に同心円状に円形住居跡６軒分の住居壁・壁溝が残存する。その残存状況はＳＢ２ｃ$_3$が1/4周程度であるが，ほかの５軒（ＳＢ２ａ・２ｂ$_1$・２ｂ$_2$・２ｃ$_1$・２ｃ$_2$）は1/3～1/2周弱である。残存する住居壁の高さはＳＢ２ａ・２ｂ$_1$を主体に10～30cm程度にすぎないが，壁溝は重複や削平が顕著で分かりにくい箇所も多いものの，ほぼ６軒の住居の壁溝を最大1/2周程度確認できる。その残存する住居壁や壁溝から各住居の規模を復元すると，最大規模のＳＢ２ａが直径11.68m，次いでＳＢ２ｂ$_1$が直径10.36m，ＳＢ２ｂ$_2$が直径9.08m，ＳＢ２ｃ$_1$・２ｃ$_3$が直径7.88m，最小のＳＢ２ｃ$_2$は直径7.5mである。重複する６軒の住居跡の新旧は必ずしも明確ではないが，ＳＢ２ａが最も先行し，次いでＳＢ２ｃ$_3$→２ｂ$_2$→２ｃ$_1$→２ｃ$_2$の順で建て替えられ，最後にＳＢ２ｂ$_1$が建てられたと考えられる。残存する住居壁・壁溝から復元される住居の中心は中央土坑付近のほぼ直径１ｍ程度の範囲に納まり，ほぼ同じ場所で住居の建て替えを繰り返したことになる。

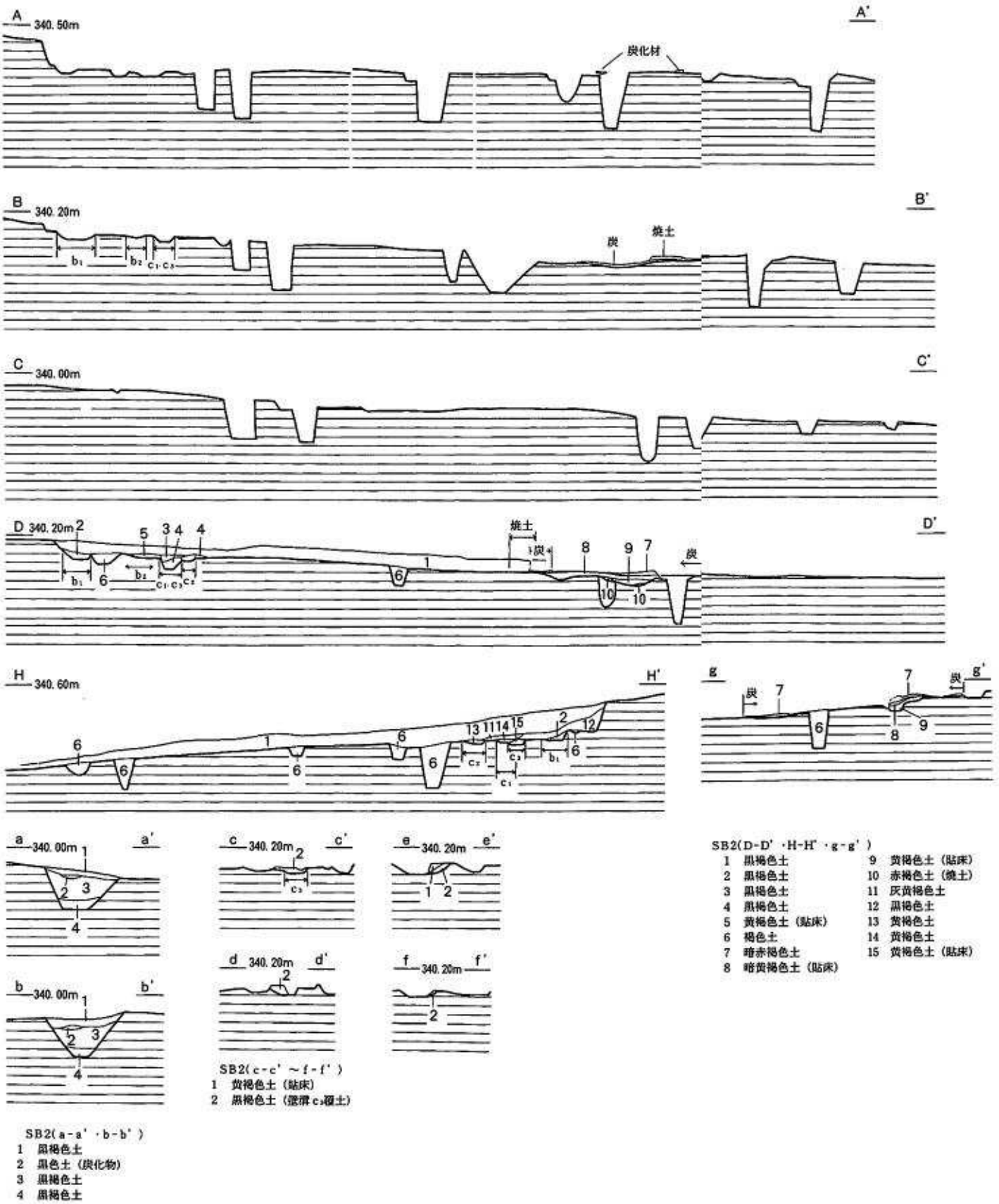
床面　床面は最大幅２ｍ程度残存するにすぎず，傾斜角度６°の緩やかに北側に下傾する。

壁溝　住居の南側に1/4～1/2周程度残存する壁溝（６軒分）は，重複の度合いが激しいので，各住居の壁溝の規模については必ずしも明確にはできない。ここでは現地における平面プランと６か所における土層断面の検討によって次のように考える（Ｅ－Ｅ′・Ｆ－Ｆ′・Ｇ－Ｇ′は第７図，他は第８図参照）。

・Ａ－Ａ′断面・・・壁溝ｂ$_1$・ｂ$_2$・ｃ$_1$・ｃ$_2$。いずれも重複はない。存在しない壁溝ａはｂ$_1$に，



第7図 竪穴住居跡実測図（2 (1:60) ＳＢ２



SB2(D-D'・H-H'・g-g')

1	黒褐色土	9	黄褐色土（貼床）
2	黒褐色土	10	赤褐色土（焼土）
3	黒褐色土	11	灰黄褐色土
4	黒褐色土	12	黒褐色土
5	黄褐色土（貼床）	13	黄褐色土
6	褐色土	14	黄褐色土
7	暗赤褐色土	15	黄褐色土（貼床）
8	暗黄褐色土（貼床）		

SB2(a-a'・b-b')

1 黒褐色土
2 黒色土（炭化物）
3 黒褐色土
4 黒褐色土

SB2(c-c'～f-f')

1 黄褐色土（貼床）
2 黒褐色土（壁溝c₃覆土）

第8図 竪穴住居跡実測図（3）(1:60) ＳＢ２

c_3はc_1・c_2に削平された可能性が高い。

・B－B′ 断面・・・壁溝b_1・b_2・c_1。いずれも重複はない。存在しない壁溝aはb_1に，c_3はc_1に削平された可能性が高い。c_2は不明。

・D－D′ 土層・・・壁溝b_1・b_2・c_1・c_3・c_2。b_2・c_1・c_3・c_2の間には切り合いがみられる。b_2・c_3（古）→c_1→c_2（新）。b_2は黄褐色土（貼床）で埋め戻されているが，c_3・c_1はいずれも覆土（黒褐色土）を切られている。

・E－E′ 土層・・・壁溝a・b_1・c_3・b_2・c_1・c_2。壁溝b_1・c_3・b_2の間には切り合いがみられ，c_3は埋め戻されたあと（覆土＝黒褐色土の上に貼床＝黄褐色土），壁溝b_1・b_2が掘り込まれている。ここで確認できる新旧関係は，壁溝c_3（古）→b_1・b_2（新）である。

・F－F′ 土層・・・壁溝a・b_1・b_2・c_1・c_3・c_2。壁溝b_2・c_1・c_3の間に切り合いがみられるが，b_2・c_1の新旧は不明で，c_3（古）→c_1（新）である。c_3は覆土（黒褐色土）を切られている。

・G－G′ 土層・・・壁溝a・b_1・b_2・c_1・c_2・c_3。壁溝c_1・c_3間に切り合いがみられ，c_3（古）→c_1（新）である。c_3は覆土（黒褐色土）を切られている。

これら新旧関係の検討から，上記のような6軒の先後関係が推定・確認された。各壁溝の規模は，壁溝aが上端幅12～52cm，深さ3cm，壁溝b_1は上端幅16～52cm，深さ6～8cm，壁溝b_2は上端幅10～20cm，深さ3～6cm，壁溝c_1は上端幅12～30cm，深さ3～5cm，壁溝c_2は上端幅20～36cm，深さ6～9cm，壁溝c_3は上端幅20～28cm，深さ6～12cmである。これらから，概ねSB2の壁溝の規模は，上端幅20～30cm，深さ数～10cm程度と考えられる。

SB2の6軒の住居の建て替えは拡張・縮小を繰り返しながら行われている。すなわち，最初にSB2a（床面積96.37㎡）→SB2c_3（床面積41.60㎡）の建て替えでは1/2以上に縮小されている。次いで，SB2c_3→SB2b_2（床面積56.45㎡）は1.36倍に拡張（14.85㎡増床），SB2b_2→SB2c_1（床面積41.60㎡）は3/4に縮小し，SB2c_1→SB2c_2（床面積37.37㎡）は更に4.23㎡床面積が狭くなり，最も小さな竪穴住居跡となった。そして最後のSB2c_2→SB2b_1（床面積74.78㎡）では床面積が倍増している。ただ，最大規模である最初のSB2aに較べると21.59㎡狭い。①縮小（1/2）→②拡張（1.36倍）→③縮小（73.7%）→④縮小（89.8%）→⑤拡張（2倍）と縮小と拡張を大きく2度繰り返している。最初の住居が最大規模で，④の住居が最小規模である。最大規模のSB2aは最小規模のSB2c_2の床面積の2.58倍である。

主柱穴 住居壁・壁溝の残存状況からは計6軒の住居の重複が確認できるが，主柱穴の組み合わせは4通り確認したに留まる。SB2a・2b_1・2b_2・とSB2$c_{1\sim3}$で，直径7.5～7.88mとほぼ同規模のSB2$c_{1\sim3}$は同一の柱構造を共用した可能性が高い。SB2の推定最大床面の範囲に存在する直径・深さや形状の点で柱穴と考えられるピットは計63基ある（P1～63）。これらのうち，P1～P28・34・50・51の31基が上記4通りの柱構造をもつSB2（6軒）の主柱穴と考えられる。最大規模のSB2aの主柱穴はP1－P2－P3と連なる南側の3基とあとのP34・P50・P51の3基の主柱穴は住居の南西側と北西側に点在する。その他の主柱穴の存在は不明で

あるが，ほぼ直径10m程度の円形に主柱を配置したとみられる。柱間距離はＰ１－Ｐ２間＝1.54m，Ｐ２－Ｐ３間＝1.86mである。主柱穴の規模は，長径22～60cm（平均31cm）×短径22～48cm（平均27cm），深さ28～62cm（平均43cm）で，径20～30cm，深さ40～50cmと平面規模は小さいが，その割りに深い。各主柱穴は，Ｐ１＝長径24cm×短径22cm，深さ32cm，Ｐ２＝長径26cm×短径22cm，深さ45cm，Ｐ３＝長径28cm×短径24cm，深さ62cm，Ｐ34＝径22cm，深さ56cm，Ｐ50＝径24cm，深さ32cm，Ｐ51＝長径60cm×短径48cm，深さ28cmである。各柱穴底面の標高は338.830～339.622m（平均339.246m）で，339.5～339.6mのＰ１・Ｐ２と338.8mのＰ50・Ｐ51の間の差が大きい。Ｐ２から弥生土器片，Ｐ３から弥生土器片と剥片４点が出土した。

ＳＢ２b_1は２番目の規模の住居であるが，その主柱穴はＰ４－Ｐ５－Ｐ６－○－Ｐ７－Ｐ８－Ｐ９－Ｐ10－Ｐ11－Ｐ12の10基（１基不明）で，東西7.14m，南北6.60mの扁平な多角形（十角形）に主柱を配している。柱間距離は1.80～2.79m（平均2.23m）と比較的幅がある（Ｐ４－Ｐ５間＝2.20m，Ｐ５－Ｐ６間＝2.79m，Ｐ６－○間・○－Ｐ７間＝2.4m，Ｐ７－Ｐ８間＝2.10m，Ｐ８－Ｐ９間＝2.42m，Ｐ９－Ｐ10間＝2.00m，Ｐ10－Ｐ11間＝2.28m，Ｐ11－Ｐ12間＝1.80m，Ｐ12－Ｐ４間＝1.95m）。ＳＢ２b_1の主柱の柱間距離は比較的疎らで，南辺東側のＰ４－Ｐ５間と東辺北側のＰ10－Ｐ11間は平均的であるが，東辺南側のＰ11－Ｐ12間・Ｐ12－Ｐ４間の二間と北辺東側のＰ９－Ｐ10間，北西側のＰ７－Ｐ８間は平均値よりも狭く，また南辺西側から西辺にかけて相接する三間（Ｐ５－Ｐ６間・Ｐ６－○間・○－Ｐ７間）と北辺中央のＰ８－Ｐ９間は平均値に較べて柱間が広い。主柱穴の規模は，長径28～40cm（平均34cm），短径26～33cm（平均29cm），深さ24～59cm（平均44cm）で，径30～40cm，深さ40～60cmと比較的大きさが揃っており，平面規模はあまり大きくないものの深い柱穴である。各柱穴の規模は，Ｐ４＝長径33cm×短径30cm，深さ49cm，Ｐ５＝長径34cm×短径26cm，深さ47cm，Ｐ６＝長径34cm×短径28cm，深さ56cm，Ｐ７＝長径36cm×短径33cm，深さ27cm，Ｐ８＝長径40cm×短径32cm，深さ24cm，Ｐ９＝長径36cm×短径30cm，深さ33cm，Ｐ10＝長径34cm×短径31cm，深さ48cm，Ｐ11＝長径28cm×短径26cm，深さ59cm，Ｐ12＝長径30cm×短径26cm，深さ54cmである。平面規模にそれほどの差はないものの，Ｐ７～Ｐ９の北西側の柱穴は浅く，ほかの主柱穴は深い。柱穴底面の標高は，339.097～339.467m（平均339.299m）で，南東側の３基（Ｐ４・Ｐ５・Ｐ12）の標高が高く（339.4m台），北西側の３基（Ｐ７～Ｐ９）は低い（339.1m前後）。そのほかの３基の柱穴底面の標高は平均的である。現存床面の標高が高い南東側の柱穴の底面は浅めに，これに相対する緩やかな斜面に位置している北西側の柱穴の底面は深めに掘り下げている。恐らく，この緩やかな斜面が削平や流出によるものでなく本来的なもので，住居構築時に盛土によって床面を造成したが，比較的脆弱な造成土であることを考えて，より深く柱穴を掘り込んだためではないかと考えられる。Ｐ５からは剥片８点，石錐１点（125），弥生土器片（底部54ほか）が，Ｐ９からは土器片紡錘車１点（109），Ｐ10からは剥片１点，土器片紡錘車１点（79），Ｐ11からは弥生土器片，Ｐ12からは剥片４点，石斧片１点（128），弥生土器片がそれぞれ出土している。これら剥片・石錐や石斧はＰ５・Ｐ12といった住居南東側の主柱穴から出土し，土器片紡錘車はＰ９・Ｐ10といった住居北辺東半の主柱穴か

ら出土しており，これら遺物が出土した柱穴はいずれも住居の東半に存在する。

ＳＢ２b_2は３番目に大きな住居であり，その主柱穴はＰ13－Ｐ14－Ｐ15－Ｐ16－Ｐ17－Ｐ18－Ｐ19－Ｐ20－Ｐ21の９基で，東西6.51m，南北5.85mのやや扁平で不整な多角形（九角形）に主柱を配置している。柱間距離は1.56～3.30m（平均2.15m）と幅がある（Ｐ13－Ｐ14間＝3.30m，Ｐ14－Ｐ15間＝2.10m，Ｐ15－Ｐ16間＝2.60m，Ｐ16－Ｐ17間＝2.10m，Ｐ17－Ｐ18間＝2.46m，Ｐ18－Ｐ19間＝1.74m，Ｐ19－Ｐ20間＝1.60m，Ｐ20－Ｐ21間＝1.56m，Ｐ21－Ｐ13間＝1.90m）。ＳＢ２b_2の主柱の柱間距離もばらつきがあり，南辺中央のＰ14－Ｐ15間，西辺のＰ16－Ｐ17間は平均的な柱間距離であるが，南東側のＰ13－Ｐ14間，南辺西半のＰ15－Ｐ16間，北西側のＰ17－Ｐ18間は平均値よりも広く，またＰ18－Ｐ19間・Ｐ19－Ｐ20間・Ｐ20－Ｐ21間・Ｐ21－Ｐ13間の北辺中央～東辺にかけての４柱間は平均値よりも狭い。南辺～西辺～北辺西半，つまり住居の西側の柱間距離は平均的か広めであるのに対して，北辺東半～東辺，つまり住居の東半分に位置する主柱穴間の距離は平均値に較べて狭いといえる。この傾向はＳＢ２b_1でも同様である。主柱穴の規模は，長径24～38cm（平均30cm），短径22～34cm（平均27cm），深さ27～56cm（平均42cm）で，径20～40cm，深さ40～60cmと平面規模は比較的大きさが揃っているが，深さは20～40cmと浅いものと40～60cmの深めのものとに分かれる。浅い柱穴（Ｐ16～Ｐ19）は床面が下傾して低くなっている住居西辺～北辺西辺に集まり，ほかはいずれも深い。柱穴底面の標高でみてみると，ＳＢ２b_2の主柱穴９基は339.162～339.457m（平均339.29m）と比較的揃っている。浅い主柱穴４基の底面は標高339.162～339.273mと低い。深い主柱穴の多くは高所側の床面に位置するが，これらの柱穴底面の標高に較べると30cm程度は低くなっており，やはりＳＢ２b_1同様床面低所側の造成との関わりで，より深く掘り下げる必要性があったためと考えられる。各主柱穴の規模は，Ｐ13＝長径28cm×短径26cm，深さ51cm，Ｐ14＝径24cm，深さ53cm，Ｐ15＝長径36cm×短径34cm，深さ56cm，Ｐ16＝長径38cm×短径34cm，深さ38cm，Ｐ17＝長径24cm×短径22cm，深さ29cm，Ｐ18＝径26cm，深さ27cm，Ｐ19＝長径24cm×短径22cm，深さ30cm，Ｐ20＝長径30cm×短径24cm，深さ43cm，Ｐ21＝長径38cm×短径30cm，深さ54cmである。これらの主柱穴からの遺物の出土はあまり多くないが，Ｐ13・Ｐ14からはそれぞれ剥片１点と弥生土器片が，Ｐ21からは剥片６点と弥生土器片が出土している。これら遺物が出土した主柱穴は東辺中央から南辺東半にかけて存在し，住居の東半に集中する点はＳＢ２b_1と同様である。

最も住居規模が小さいＳＢ２$c_{1\sim3}$の主柱穴は同一のものを共用したと考えるが，南辺中央のＰ23の周辺を中心に主柱穴に匹敵する平面規模と深さの柱穴がいくつか存在する（Ｐ30～Ｐ32・Ｐ46など）ことから，南辺を主に若干の主柱の移動を行っている可能性はある。現状で可能性の高いＳＢ２$c_{1\sim3}$の主柱穴はＰ22－Ｐ23－Ｐ24－Ｐ25－Ｐ26－Ｐ27－Ｐ28の７基で東西4.92m×南北4.65mの不整多角形（七角形）に主柱を配置している。柱間距離は1.90～2.40m（平均2.19m）と比較的揃っている（Ｐ22－Ｐ23間＝2.00m，Ｐ23－Ｐ24間＝2.10m，Ｐ24－Ｐ25間＝2.30m，Ｐ25－Ｐ26間＝2.40m，Ｐ26－Ｐ27間＝2.30m，Ｐ27－Ｐ28間＝1.90m，Ｐ28－Ｐ22間＝2.36m）。南辺西半のＰ23－Ｐ24間は平均値に近いが，南辺東半のＰ22－Ｐ23間，東辺北半のＰ27－Ｐ

28間は平均値よりも柱間は狭く，西辺～北辺のP24－P25間・P25－P26間・P26－P27間の三間と東辺南半のP28－P22間は平均値に較べると柱間が広くなっている。SB2b_1やSB2b_2に較べるとそれほど明確ではないが，やはり住居東半側の柱間が狭く，西半側の柱間が広い傾向は窺える。主柱穴の規模は，長径26～44cm（平均33cm），短径24～40cm（平均29cm），深さ27～56cm（平均45cm）で，径30～40cm，深さ40～60cmと平面規模は比較的小さめで揃っているが，深さは浅い柱穴と深い柱穴に分かれる。浅い柱穴（P25・P26）は床面が下傾して低くなっている住居北西側にあり，住居東半と南西側のそのほかの柱穴はいずれも深い。柱穴底面の標高は339.17～339.502m（平均339.323m）と比較的揃っている。深い主柱穴の多くは高所側の床面に存在し，柱穴底面は高い。低所側にある浅い主柱穴２基の底面は標高339.17～339.273mと深い柱穴に較べると20～30cm程度は低くなっている。各主柱穴の規模は，P22＝長径36cm×短径30cm，深さ55cm，P23＝長径30cm×短径28cm，深さ56cm，P24＝長径34cm×短径30cm，深さ46cm，P25＝長径44cm×短径40cm，深さ36cm，P26＝長径26cm×短径24cm，深さ27cm，P27＝長径32cm×短径29cm，深さ51cm，P28＝長径26cm×短径24cm，深さ43cmである。これら主柱穴からの遺物の出土は，P24で弥生土器片が出土しているのみである。

以上のように，SB2の主柱の配置は，不明確なSB2aを除いて，SB2b_1・SB2b_2・SB2$c_{1\sim3}$の３通りを検出することができた。いずれも東西方向に扁平な多角形に主柱を配している（主柱10本・９本・７本柱）。これらにはある程度の共通性が見られる。すなわち，

・主柱穴間の距離は平均値で2.15～2.23mと殆ど差がないが，細かく見ると柱間が広いところと狭いところがみられる。概して，住居の東側に当たる柱間は狭く，西側は広い傾向がある。

・主柱穴はSB2aのものを含めても，平面規模・深さ・底面の標高などそれほど差がなく，比較的揃っている。ただ，住居西側の床面が下傾する範囲の柱穴は深さが浅いが，底面の標高は床面高所側にある深い主柱穴に較べて20～30cm程度低く掘り下げられている。このことから，床面の下傾は削平・流出をそれほど受けていない本来的なもので，緩斜面に土を盛って作ったやや脆弱な床面を見越して，主柱を強固にするために柱穴をより深く掘り下げたためと考えられる。また，主柱穴のなかには剥片（１～８点，７基），弥生土器片（９基）や石錐（１基）・石斧（１基）・土器片紡錘車（２基）など内部から遺物が出土した例がいくつかみられる。これらはSB2b_1の主柱穴に多いが，その多くは住居の東側に集中する傾向がある。

なお，柱穴のなかにはいくつか明らかに埋め戻されたとみられるものがある。具体的には，SB2b_2のP15，SB2c１～３のP22・P23，そして対応する住居は不明だが，P31（深さ60cm）・P63（深さ20cm）の５基である。これらは住居の南側に集中している。また，後述する炉跡に近接してP37・P39があるが，P37（深さ51cm）は最も新しい住居であるSB2b_1の床に広がる炭層で覆われていることから，SB2b_1に先行する可能性がある。P39（深さ54cm）は炉跡に壊されており，SB2のなかでも比較的初期の住居に伴う可能性が高い。

中央土坑　住居跡中央に位置するほぼ円形の土坑で，径84～87cm，深さ50cmの規模で，断面形は逆台形である。覆土の上層（第２層）には炭化物層があるが，量的には多くはない。焼土は含ま

ず，また内部で火を使った形跡もない。坑内から土器片紡錘車２点（78・83），管玉１点（116），石鏃２点（117・119）と剥片27点が出土している。石鏃はいずれも未成品であり，ＳＢ１の中央土坑同様，本土坑も石鏃製作に伴う土坑である可能性が高い。

焼土・炭の広がり　中央土坑の南西側に北西－南東3.5m，北東－南西２mの大きな広がり（炭層ａ）をはじめ，その東側にも30～45cmほどの小さな炭の広がりが見られる（炭の堆積は薄く広い）。これらの南側には壁溝あたりまで10～40cm大の炭化材が散在している。中央土坑の周囲には炭層ａの上や住居東側の床面に27cm×40cm～80cm×140cmの大小７か所の焼土の広がりがみられる。炭層ａの上には最大規模の焼土の広がりをはじめ４か所の焼土の堆積がある。炭層の直上に焼土が乗っていることは明らかで，両者は同時性が強いと思われる。ただ，Ｄ－Ｄ′やｇ－ｇ′の土層断面には明示できていないが，焼土＋炭の下位には床面との間にごく薄く（５㎜程度）間層（褐色土）が介在していた。また，焼土や炭の広がりが大きい割には床面が焼けた形跡は殆どない。これらのことから，焼土や炭は最も新しい住居であるＳＢ２b_1に伴うものではなく，住居の廃絶直後に他の場所から何らかの理由によって投げ入れられたものである可能性が高い。

炉跡　中央土坑の南西約１mにある。焼土＋炭の広がりの直下にあり，ＳＢ２b_1の床面（貼床＝Ｄ－Ｄ′・ｇ－ｇ′の第８・９層）下にある。先行するＳＢ２ａ，２b_2，２$c_{1\sim3}$のいずれかに伴うものと思われる。径60cm，深さ10cmほどのほぼ円形の浅い土坑で，坑底に薄く焼土の堆積がみられる。

出土遺物（第９～15図，図版16・17）　弥生土器・土製品・玉類・石器が出土した。石鏃・石斧・石包丁などの石器や土器片紡錘車が多く出土している点が注目される。出土遺物の大半は住居の東側から南側にかけての壁寄り（最も外側のＳＢ２ａ・２b_1の住居壁から３m程度の範囲）の床面直上（～10cm以内）からの出土で，一部に覆土上層（床面から10cm以上上位）出土のものなどが含まれる。住居壁寄りから大半の遺物が出土することから，必然的に幅1.6mもある６軒分の壁溝の直上からの出土になるが，多くは最も新しいＳＢ２b_1の床面（及び壁溝・柱穴内）に伴い，より古い時期の壁溝や柱穴内などから出土しているものは少ない。ＳＢ２b_1の南東側の主柱穴であるＰ４を覆うように弥生土器片がまとまって出土した例がみられる。60cm×80cmの範囲に甕４点・壺１点・底部２点以上の破片（35・37・38・42・45・60・61）が集中するもので，何らかの住居内祭祀に関わる可能性がある。土器片紡錘車は大半がＤ－Ｄ′以南・Ｈ－Ｈ′以東の床面（「ＳＥ区」）から出土している。石器は，石鏃などの小型のものの多くがＤ－Ｄ′以南・Ｈ－Ｈ′以西の床面（「ＳＷ区」）から出土しているが，石斧や敲石・磨石などの大型石器は大半のものが「ＳＥ区」から出土しており，住居内における作業内容による住み分けの可能性がある。柱穴内出土遺物としては，弥生土器・底部片54（ＳＢ２b_1Ｐ５），土器片紡錘車77・98（ＳＢ２b_1Ｐ８あるいはＳＢ２b_2Ｐ18），79（ＳＢ２b_1Ｐ10），109（ＳＢ２b_1Ｐ９），石錐125（ＳＢ２b_1Ｐ５），石斧128（ＳＢ２b_1Ｐ12）がある。また，壁溝内出土遺物としては，弥生土器・底部片64（ＳＢ２c_2），土器片紡錘車102（ＳＢ２b_1），石鏃118・123（ＳＢ２c_3か），石斧129（ＳＢ２b_1），用途不明の石器133（ＳＢ２b_1），134（ＳＢ２c_2）がある。中央土坑からは土器片紡錘車78・83，

管玉116，石鏃117・119が出土している。

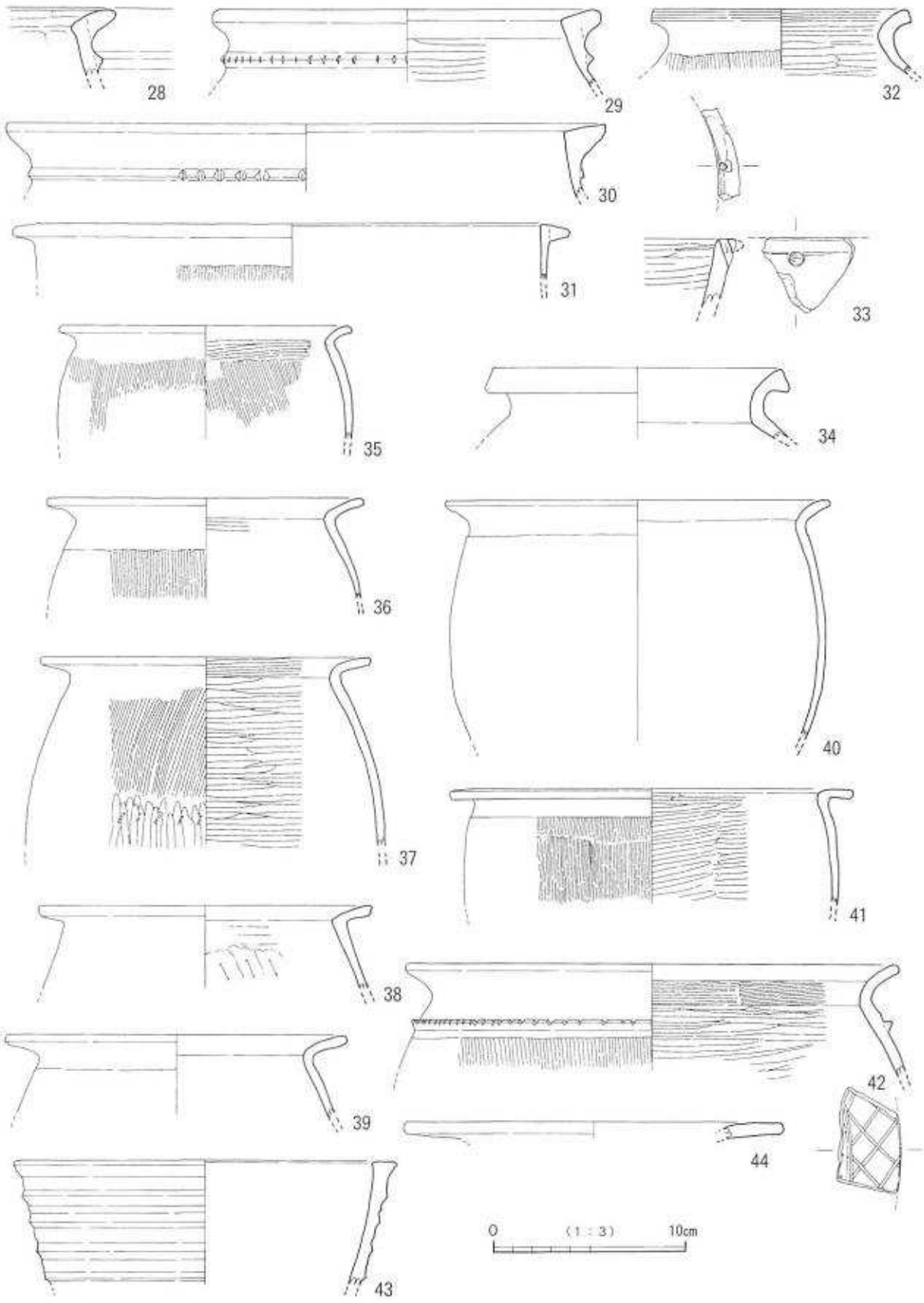
①弥生土器（28～67） 甕・広口壺・底部片がある。

甕（28～42）は口縁部が逆Ｌ字状に屈曲して短く水平に延びる分厚いものといくらか窄まった頸部でく字状に屈曲し外方にやや湾曲気味に延びる薄手の口縁部の端部を丸く納めるものとが主体である。前者（28～31）は体部が直立するかやや内傾するもので，口縁直下に凸帯を貼り付ける例が多い。29・30では凸帯上に刻目を入れている。調整は，28・29が内面ヘラミガキ，外面は横方向ナデ，31は外面の口縁直下に縦方向のハケ目を施している。32は頸部で強く外湾する短く分厚い口縁をもつもので，口縁端部は角張る。平坦な端面にはごく浅い凹線２条がみられる。調整は，内面が横方向ヘラミガキ，外面は口縁部が横方向のナデ，体部は縦方向のハケ目である。33は逆Ｌ字状に短く延びる口縁をもつもので，口縁上端面から斜め下方に円孔を穿つ。調整は，内面が横方向のヘラミガキ，外面は横方向のナデである。34は頸部から強く外上方に湾曲する口縁の端部を下方に拡張したもので，調整は内外面とも横方向のナデである。35～42は頸部で強くくの字状に曲がる薄手の口縁で，外上方に延びるもの（35・40）と水平に近いものとがある（36～39・41）。調整は，口縁の内外面が横方向のナデ，体部内面は横方向のヘラミガキ，外面は縦方向の浅く細かいハケ目が主体である。35・42の外面口縁部～頸部にはススの付着がみられる。37では内面口縁部が横方向のハケ目，外面体部は縦方向のハケ目の下位に縦方向のヘラミガキと刺突文を施す。42の口縁端面にはごく細い凹線２条を施し，外面の口縁直下には頂部に刻みを入れた凸帯を貼り付けている。口縁端部は丸く納めるものが多いが，36・38は平坦気味である。37の復元口径は16.8cm，40は19cmである。

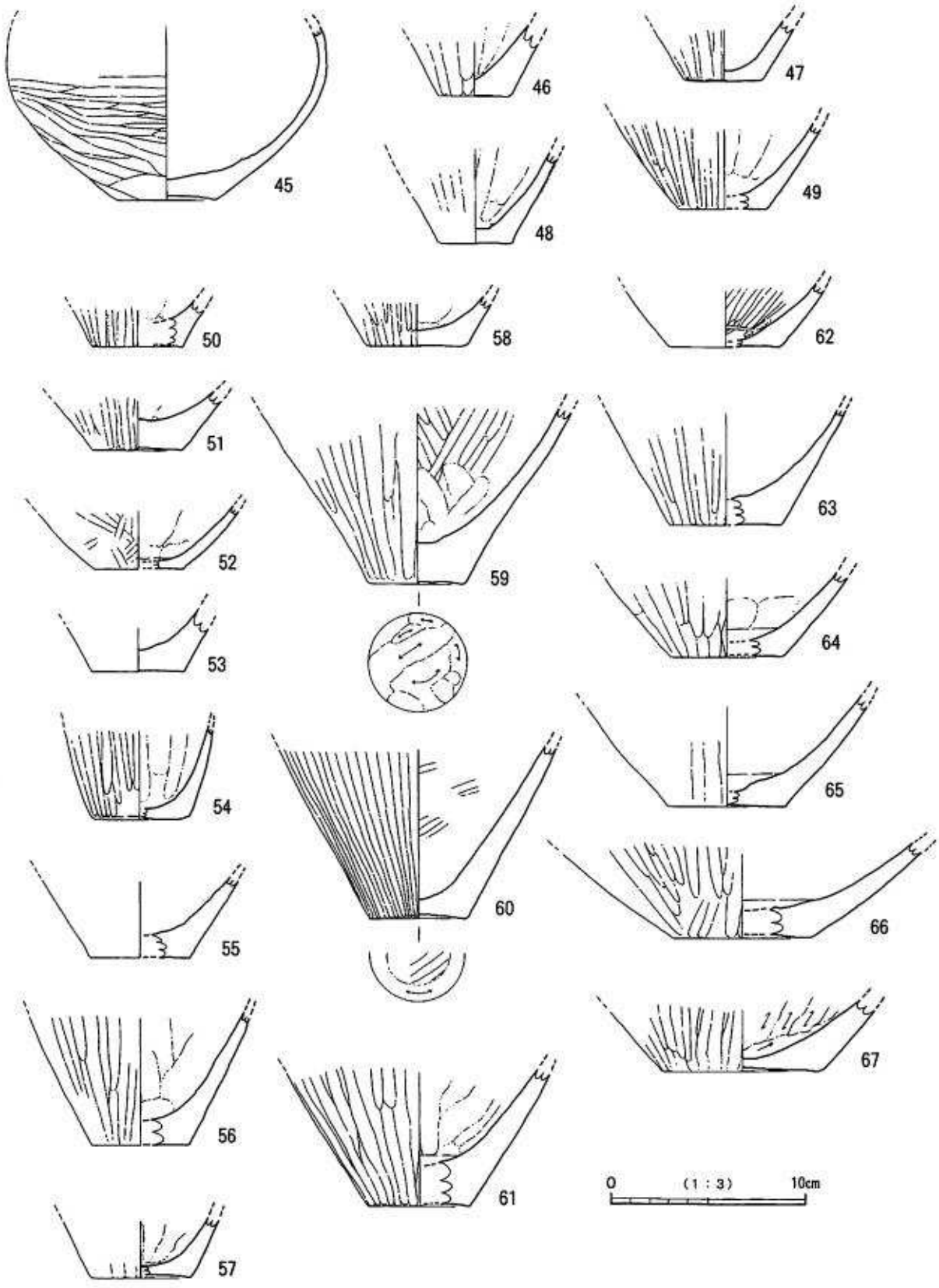
43・44は広口壺の口縁部片である。43は開き気味に延び，口縁端部を外方に僅かに拡張する。口縁端面は水平で，口縁直下に４条以上のごく低い凸帯が貼り付く。復元口径19.0cmである。調整は内面ヘラミガキ，外面は横方向のナデを施す。44は水平に延びた口縁部に櫛描斜格子文とその下位に刺突文を施している。45は扁球状の壺の体部～底部片で，復元体部最大径16.3cmである。底部は，上げ底気味の平底である。調整は，体部内面が指頭によるナデで，外面は横方向のヘラミガキ，外底面は一定方向のナデを施す。体部外面下半には黒斑が顕著に認められる。

46～67は平底あるいは上げ底気味の平底の底部片で，調整は，体部内面が縦方向主体のナデ，外面は縦方向のヘラミガキ，外底面は一定方向の丁寧なナデかヘラミガキを施す。底径は3.8～8.2cm（主体は４～６cm）である。その多くは分厚い底部だが，52は薄手の器壁の底部で，体部外面の調整は細いヘラミガキを乱雑に施している。54は薄手の底部から体部が直立気味に立ち上がる。66・67は大型の器形で，底径7.0cm，8.2cmの大きくかなり開き気味に立ち上がる体部をもつ。

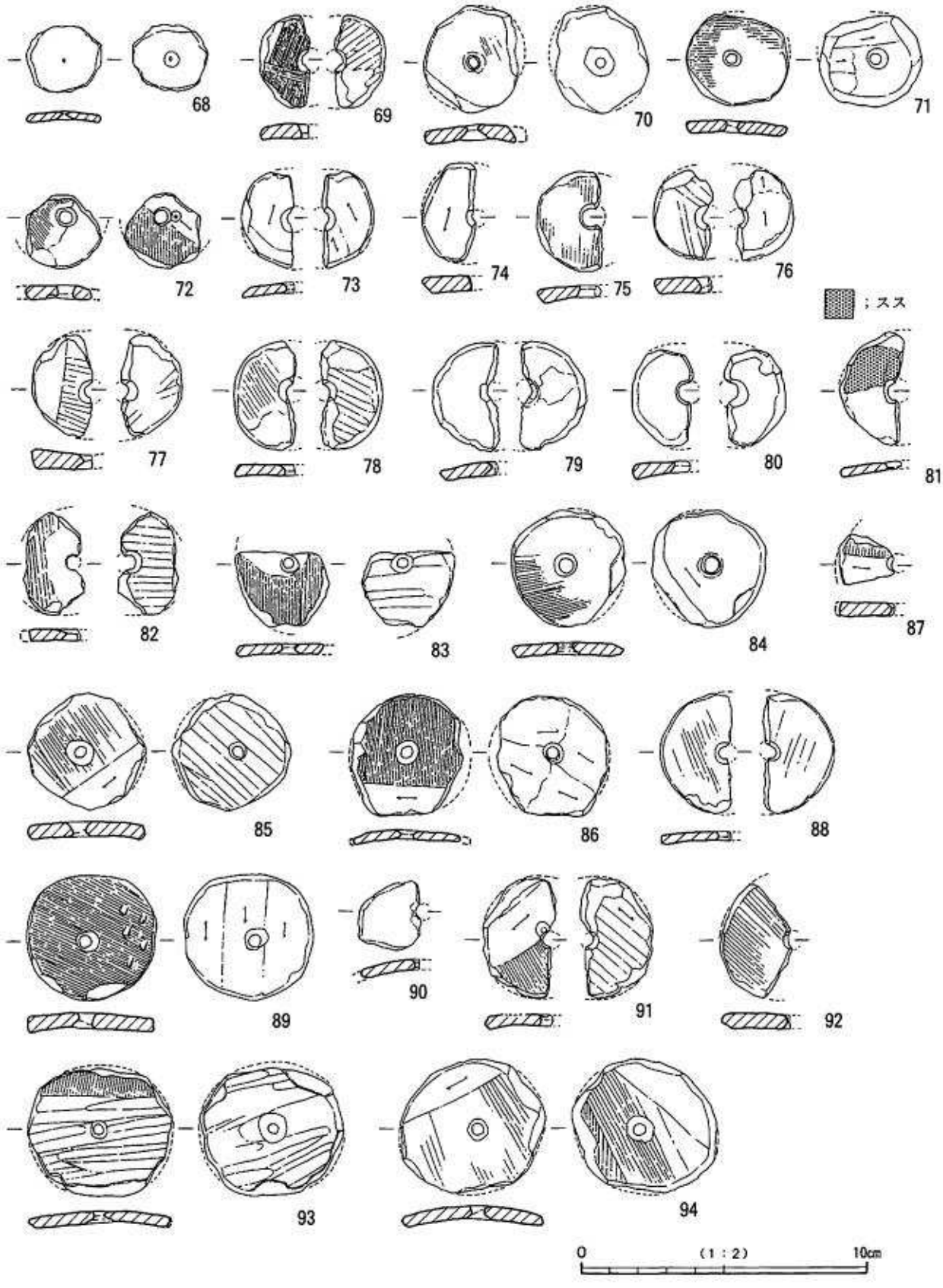
②土製品（68～115） 弥生土器片を打ち欠いて円盤形に仕上げ，中央に軸孔をあけた紡錘車（土器片紡錘車）で，計48点出土した。完形品あるいは周縁を一部欠いただけの完形に近いものが10点（70・71・84～86・89・93・94・98・104）で，ほかは半裁されたものや軸孔周辺の中心部のみの破片が目立つ。また，軸孔が未通か皆無のものや縁辺の整形が不充分で未成品とみられるものが11点で，その内訳は軸孔未通のもの９点（105～108・110～112・114・115），軸孔がないもの１



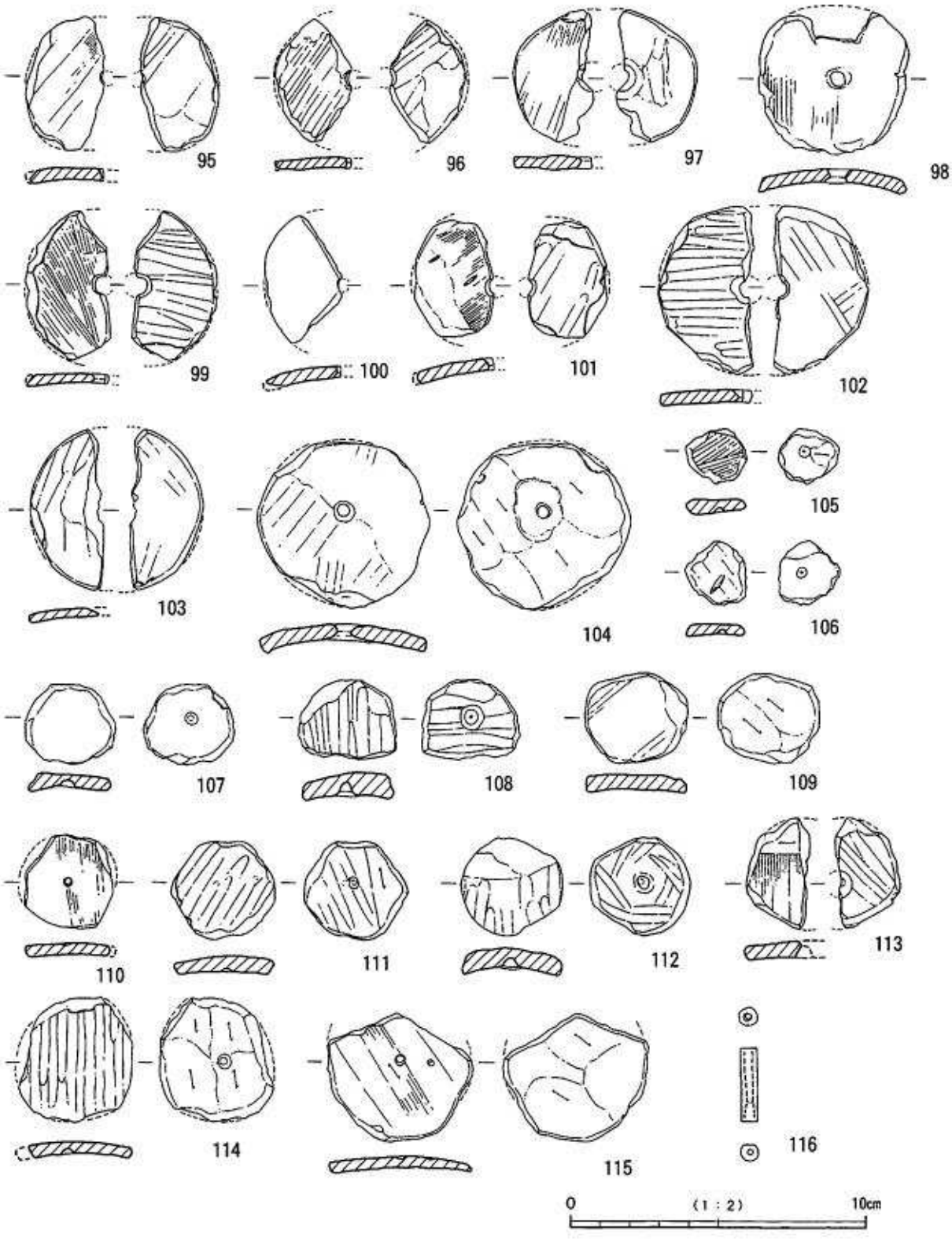
第９図　ＳＢ２出土遺物実測図（１）(1:3) 弥生土器①



第10図　ＳＢ２出土遺物実測図（２）（1:3）弥生土器②



第11図　ＳＢ２出土遺物実測図（３）（1:2）土器片紡錘車①



第12図　ＳＢ２出土遺物実測図（４）（1:2）土器片紡錘車②

点（109），そのほか１点（68）である。未成品を除く37点は直径3.2～5.8cm（平均4.4cm），重さは完形品及びほぼ完形品のもの10点では７～23ｇ(15～16ｇくらいが多い)とかなり幅がある。軸孔が貫通するものの大半は内・外両面から穿孔しているとみられるが，82・91・104の３点は外面からのみ穿孔している。軸孔の内径は0.1～0.6cm（平均0.4cm），外面の外径は0.1～1.0cm（平均0.7cm），内面の外径は0.3～1.1cm（平均0.7cm）である。軸孔以外に未通孔をもつ例が72・92・115と３例あり，紡錘車の中心に未通孔をもつものを含めて計12例ある。これらの未通孔は内面からあけられることが多く（10例），外面にあけられているのは92（軸孔以外の未通孔）・110（軸孔の未通孔）の２例だけである。未通孔の大きさは0.2～0.8cm（平均0.4cm）である。軸孔の縁辺に使用に伴うと考えられる摩滅がみられる例が70（外面），84（内面），97（外面），104（内面）の４例ある。素材に使用された土器片の具体的な部位は体部片が大半だが，91・94・113は肩部，112は底部である。土器片に残された調整は，外面ハケ目，内面はナデとヘラミガキが多い。

③玉類（116）　管玉で，高さ2.45cmである。灰緑色で，全体に光沢はなく，縁辺はかなり摩滅している。上下から穿孔されているが，上方からが主である。

④石器（117～135）　石鏃・石錐・楔形石器削片・石斧・磨製石包丁・性格不明の石器がある。

117～123は石鏃である。７点とそれほど多くないが，五角形の121をはじめ，先行するＳＢ２ｃ$_3$の壁溝から出土した118・123など形態的にやや特異な石鏃がみられる。117・122以外は完形品で，完存率は高い。122は先端のＡ・Ｂ両面に先端側からの加撃に伴う小剥離痕各１枚があり，刺突時の衝撃に伴う剥離痕である可能性がある。117・118・122・123の４点は未成品である。通常の形態のもの４点でみれば，法量の現存値は長さ1.5～2.5cm（完存値２資料2.4～2.5cmの平均値2.45cm，推定復元値1.7～2.7cmの平均値2.33cm），幅1.1～1.7cm（完存値４資料の平均値1.44cm），重さ0.36～1.46ｇ（完存値２資料0.84～0.95ｇの平均値0.90ｇ）で，ほぼ長さ2.3cm，幅1.5cm，重さ１ｇ程度である。基部は平基４点，凹基２点と平基が多い。Ａ・Ｂ両面に素材面が残る。側縁は比較的直線的なもの（117・122），先端側が丸みをもつもの（118～120），稜があるもの（121），左側縁が外湾・右側縁が内湾するもの（123）など多様である。側縁毎の剥離の進行状況では，ｃ（剥離が側縁中央→上・下へ剥離が進むもの）７例，ａ（先端→基部へ剥離が進むもの）６例，ｄ（上・下→中央へ剥離が進むもの）５例が比較的多く，ｂ（基部→先端へ剥離が進むもの）は３例と少ない。

117は小型の未成品で，先端と左脚端部を僅かに欠損している。基部は２～４枚の浅い剥離で形成された平基である。118は平面形が長撥宝珠形ともいうべき形状の石鏃である。Ａ面では明確な基部調整がみられず，未成品あるいは破損品の可能性がある。基部は，緩やかに窄まる凸基状である。119は長さ2.4cmのごく薄手の石鏃で，Ａ・Ｂ両面に大きく素材面を残す。基部調整は小さな連続剥離によって行われ，ごく僅かな抉りの凹基と考えられる。120は長さ2.5cmの丸みを帯びた細身の石鏃である。基部は，折損面を加撃した２～３枚ずつの剥離で形成された平基である。121は両側縁の中央に鋭く尖る稜をもつ，平面形が五角形のもので，長さ3.5cm，最大幅1.8cm，重さ2.1ｇである。稜～先端はやや幅広の三角形状，稜～基部は直線的にやや窄まる。基部は，

A・B面とも深く大きな剥離1枚を加えて形成された凹基で，脚は短く小さい。側縁は，いずれも深くやや大きな剥離を加えて形成されている。122はA・B両面中央に大きく素材面を残す未成品で，先端を折損している。折損に伴う剥離のうち，A面側のものは小剥離で，比較的大きなB面側の剥離はややステップをおこしている。基部はA面に4枚，B面に2枚のやや大きく深い剥離を加えて形成された，抉りがごく浅い凹基である。123はやや右側に湾曲する長三角形状の未成品と考えられる。基部はA・B両面に3枚ずつの剥離を加えて形成された，ごく僅かに内湾する平基である。A面左側縁下半とB面上半を中心に連続的に微細な剥離が残されている。

124・125は石錐である。124は無色透明の石英製で，長さ2.0cm，重さ0.48gである。素材の縦長剥片の打面側両側縁に微細な剥離が連続的にみられる。125は暗灰色の珪質凝灰岩製のもので，上半に横方向からの加撃によって剥離された素材面を残す。表裏面の両側縁に連続剥離を加え，断面不整菱形状に整形しているが，刃部側はA面側からの加圧により折損している。

126は楔形石器削片で，石材は暗灰色の珪質凝灰岩である。楔形石器の左端部に近い削片で，左側縁下半と表・裏面下端に両極技法による錯向剥離の潰れ痕が顕著に残り，左側縁上半と右側縁に上方から加撃された截断面がある。

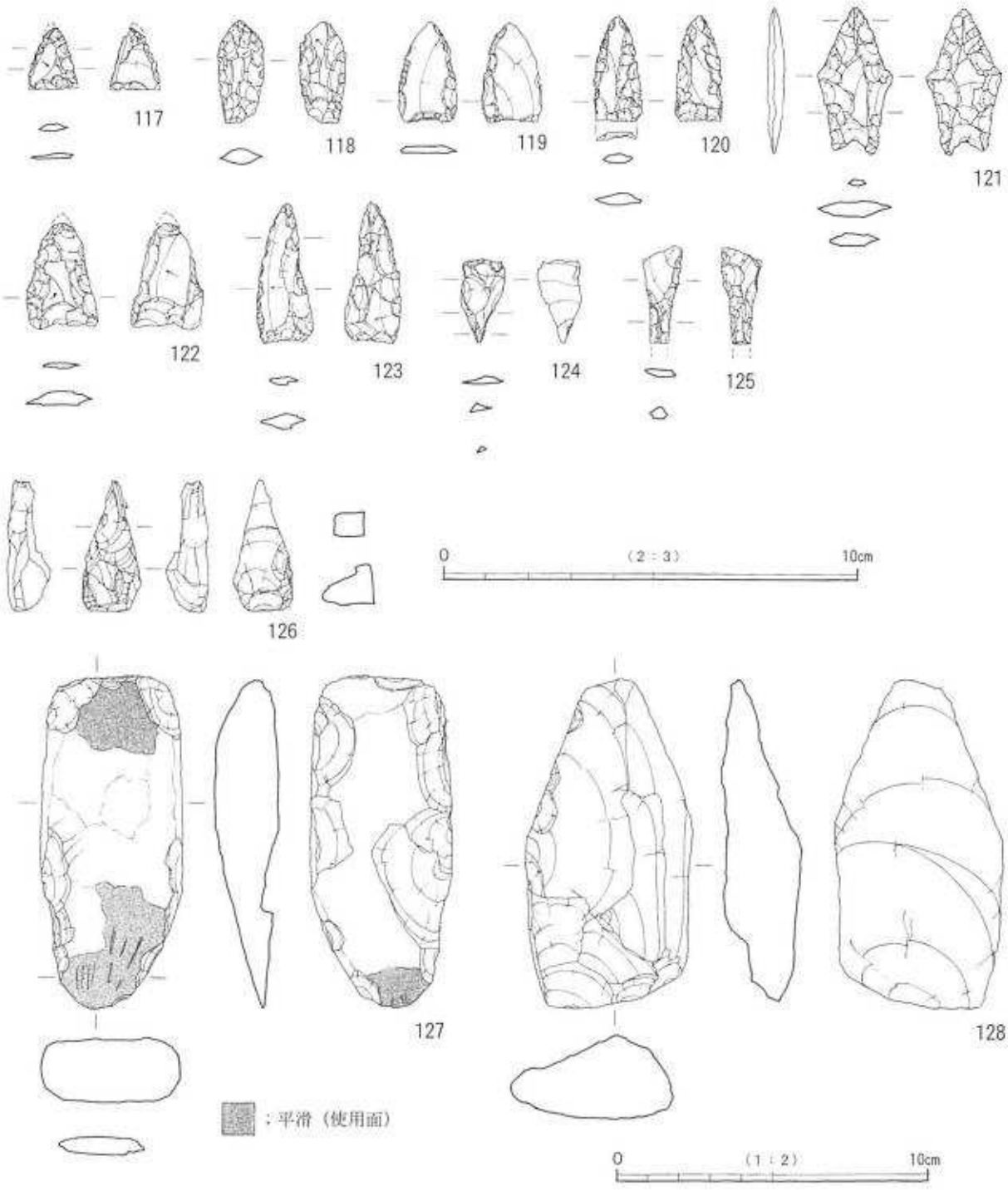
127～131は石斧である。127は長さ10.5cmの扁平な板状で，上下両端に刃部を形成している。下端の刃部はA・B両面に比較的広い平滑な使用面（刃面）が存在する。この刃面には縦方向の擦痕がみられる（特にA面に顕著）。刃縁は鋭利であるが丸く，かなり使い込まれている。上端の刃部はA面を主体に形成されており，直線的な刃縁には潰れ状の小剥離がみられる。両側の比較的大きな剥離はいずれも使用に伴う割れとみられる。擦痕は分からないが，やや平滑な面がA面側にのみ存在する。石材は淡灰緑色の輝緑凝灰岩である。128は長さ10.4cmの石斧の未成品の可能性のあるもので，淡灰緑色の凝灰岩製である。分厚い縦長剥片の打面側を叩いて刃部形成を図っている。緩やかな曲線を描く刃縁には3か所使用に伴うと考えられる細かい剥離痕がB面側でみられる。129は太型蛤刃石斧の基部側の破片で，刃部側を欠失している。幅×厚さの現存値は6.1cm×4.15cmで，石材は淡灰緑色の凝灰岩である。基端にはA面⇔B面方向に強く粗い引っ掻いたような擦痕が顕著にみられ，その周縁には比較的平滑な面が存在する。破損後に敲石等に転用された可能性が高い。130は太型蛤刃石斧の小片で，暗灰緑色の細粒閃緑岩を石材に用いている。

131は抉入柱状片刃石斧で，長さ15.6cm，幅2.6cm，厚さ4.2cmである。石材は淡灰緑色の珪質凝灰岩である。後主面基部側にごく弱い抉りが入る。刃面には斜めに擦痕がみられる。後主面と両側面との境の縁辺には敲打痕が認められる。基部の前主面・後主面には横方向の細かい擦痕が密にみられる。後主面の刃部にもごく細かい擦痕がみられるとともに，刃縁に沿って幅2㎜程度の稜がみられる。基端面の前主面寄りで強い擦痕と敲打痕状のものが顕著にみられる。断面長方形で基端面が抉り側に下傾する。

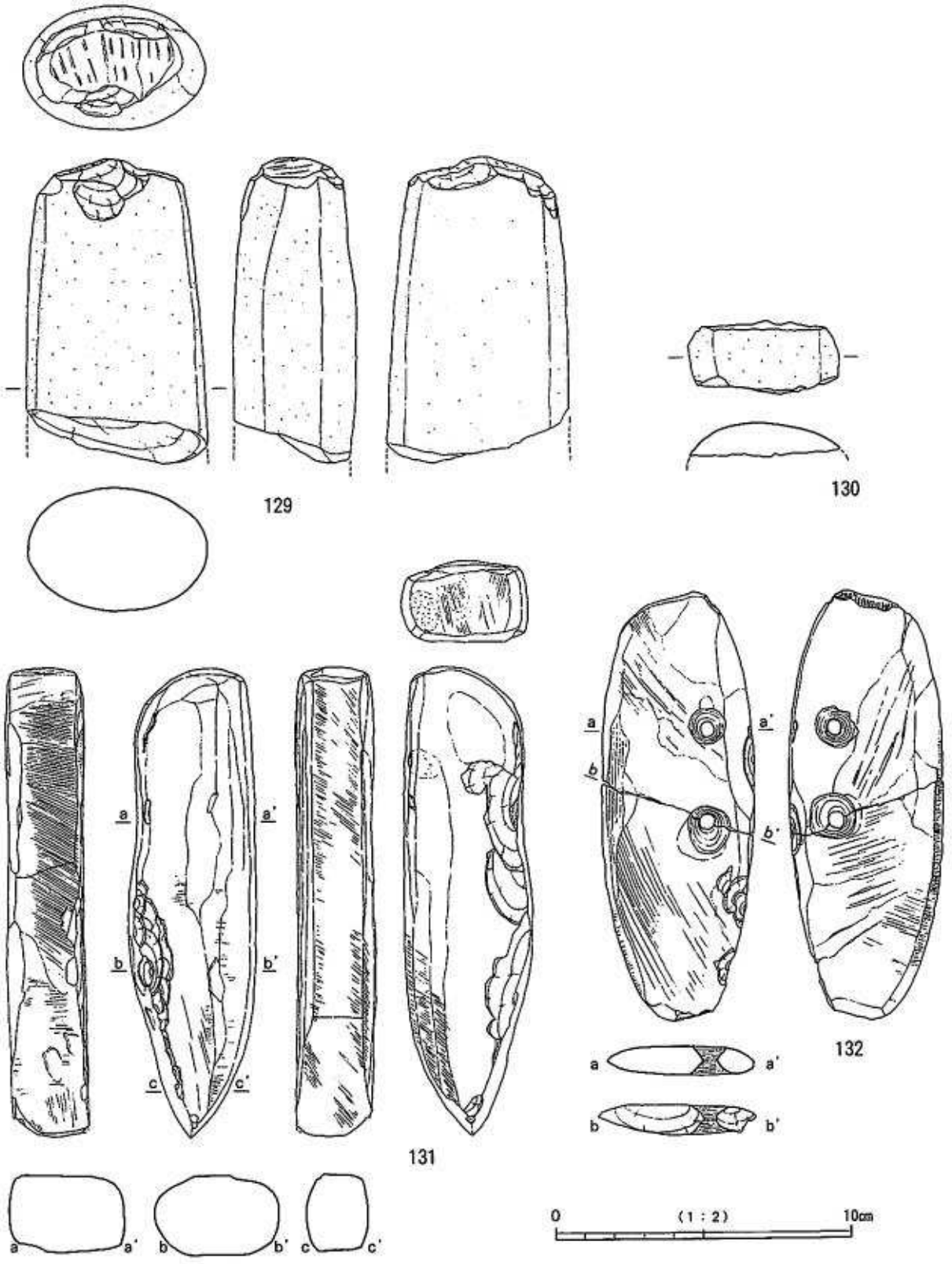
132は磨製石包丁で，長さ14.4cm，幅5.15cm，厚さ1.0cmである。石材は淡黄褐色～褐色の泥質砂岩を用いている。完形品だが，A面側からの加圧により中央で折れている。両端辺に向かって幾らか窄まりやや丸みをもつ長方形で，背部寄りほぼ中央に紐孔2がある。内径0.5cm，外径は上

方の紐孔が1.2～1.4cm，下方が1.4～1.6cmで，下方の紐孔の周縁にはA・B面とも紐擦れの痕が顕著に残る。A面側の刃部はよく研がれており，B面側の刃部には刃縁に直交する細かい擦痕が全面的に残る。A・B両面の紐孔周辺が特によく磨かれている。また，A面の上方紐孔周辺とB面の下方紐孔周辺には斜め方向の擦痕が顕著にみられる。

133～135は用途不明の石器だが，敲打痕・擦痕・平滑面などの存在から敲石や磨石・凹石など

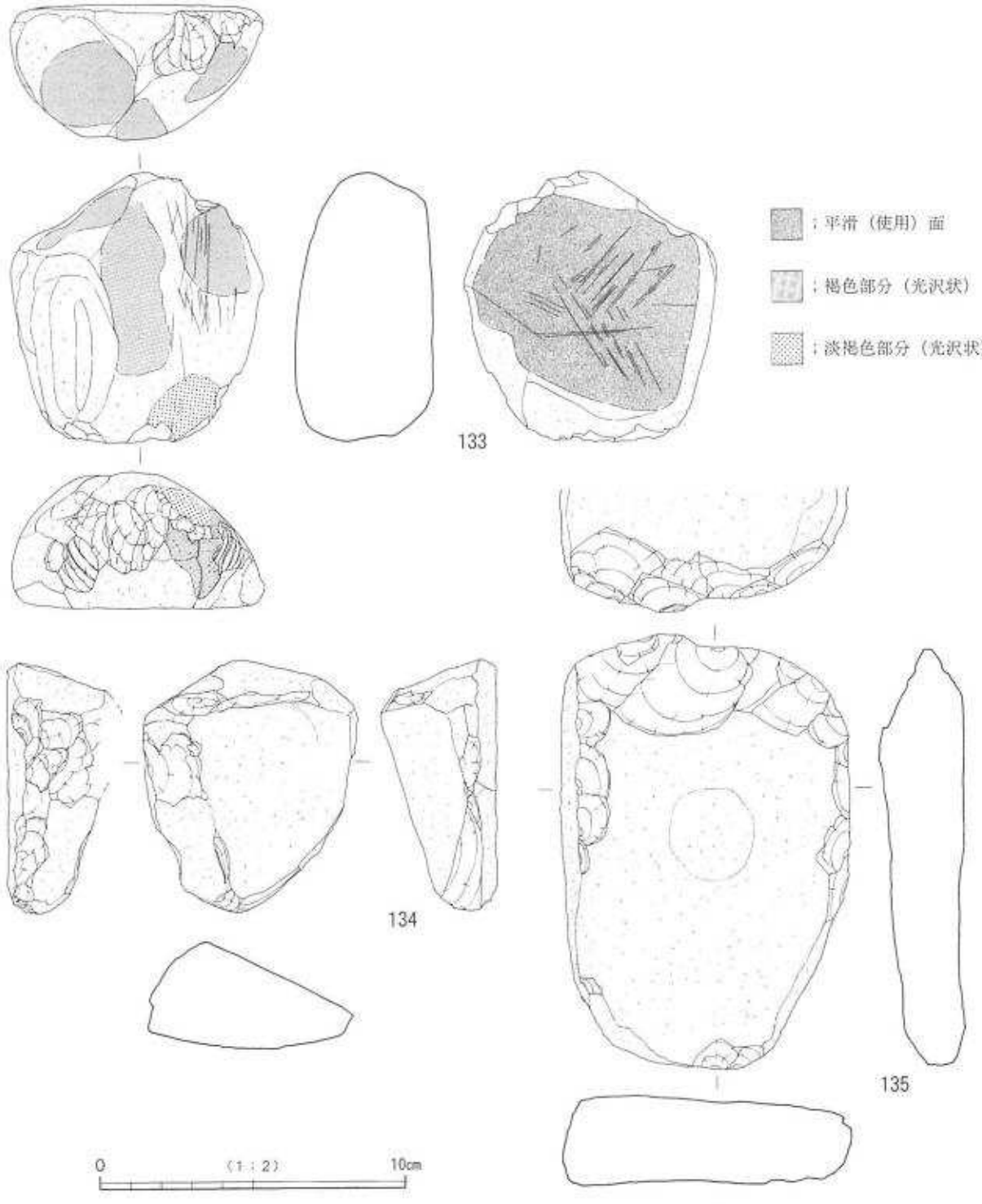


第13図　ＳＢ２出土遺物実測図（５）(2:3，1:2) 石器①



第14図　ＳＢ２出土遺物実測図（６）（1:2）石器②

の類とみられる。133は暗褐色の熱変質流紋岩を石材とするもので，A面は指で摘み易いような凹んだ山形で，B面はほぼ平らである。A面右半とB面には顕著に擦痕が残る。A面及び下側面には4か所のやや黒ずんだ部分があり，使用に伴う光沢の可能性がある。下側面と上側面には敲打痕と擦切ったような強い擦痕が残る。134は淡褐色～暗白色の石英製で，左側面を中心に主に



第15図　ＳＢ２出土遺物実測図（７）（1:2）石器③

B面側からの加撃による剥離痕が顕著にみられる。135は14.0cm×9.4cm，厚さ2.9cmの板状のもので，白褐色の細粒黒雲母花崗岩を石材としている。A面中央とB面上半・下半の計3か所が緩やかに凹み，上側縁には交互剥離による剥離痕が顕著に残る。石核の可能性もあるが，敲打や磨りなどの機能をもつものであろう。

③ＳＢ３（第16図，図版５ｃ）

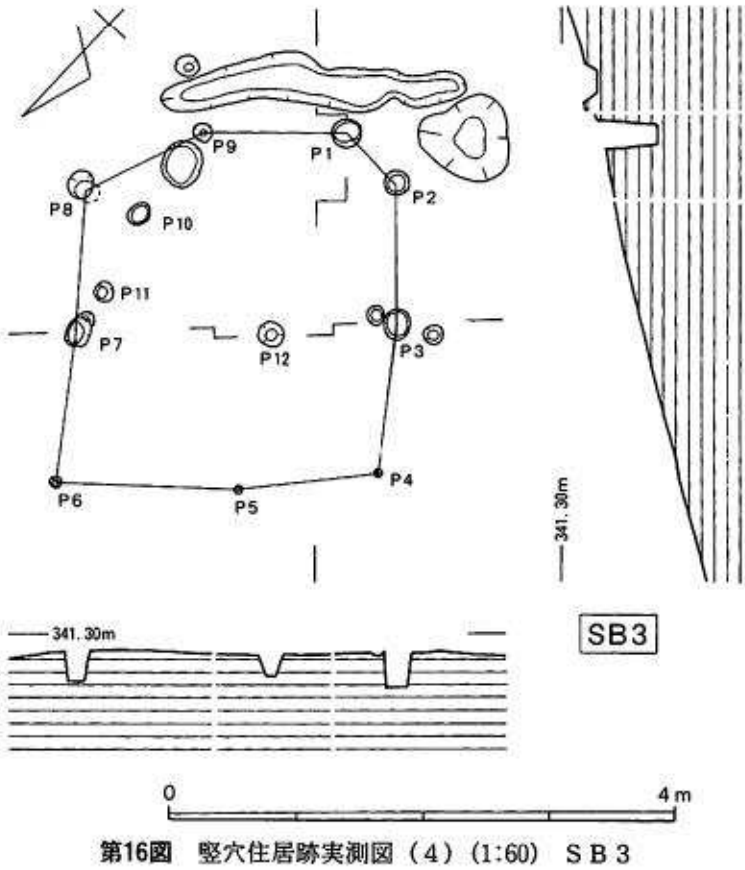
立地　ＳＢ３は調査区の南東辺際中央に位置する。中央谷筋からまっすぐ南東方向に上がった調査区のなかでも最高所に近い，南東から北西方向に下傾するやや傾斜の強い斜面に立地する（標高341.7m，傾斜角度13°）。ＳＢ２の北東12mに位置し，周辺には近接して住居跡状遺構ＳＢ６や柵跡ＳＡ２・３，土坑ＳＫ11・12が，また北６mには大型の住居跡状遺構ＳＢ７が存在する。

規模　高所側（南東側）に短い直線的な壁溝が，その前面の斜面には主柱穴が存在する。住居の平面形や規模は明確ではないが，柱穴の配置状況から径約４m（推定床面積10㎡）の平面円形の住居跡と考えられる。

床面　すでに完全に削平・流出しており，傾斜角度13°のやや急な斜面となっている。

壁溝　高所側に長さ2.4m，幅24～75cm，深さ10cmの直線的な壁溝が残存する。

主柱穴　斜面に存在するピット12基のうち，Ｐ１－Ｐ２－Ｐ３－Ｐ４－Ｐ５－Ｐ６－Ｐ７－Ｐ８－Ｐ９の９基がＳＢ３の主柱穴で，これらをやや歪な多角形（九角形）に配置した住居と考えられる。柱穴距離は0.57～1.44m（平均1.10m）とやや幅があるが，最も狭い南側のＰ１－Ｐ２間と最も広い北西側のＰ５－Ｐ６間を除けば，1.1～1.2mとほぼ一定している（Ｐ１－Ｐ２間＝0.57m，Ｐ２－Ｐ３間＝1.11m，Ｐ３－Ｐ４間＝1.17m，Ｐ４－Ｐ５間＝1.11m，Ｐ５－Ｐ６間＝1.44m，Ｐ６－Ｐ７間＝1.20m，Ｐ７－Ｐ８間＝1.14m，Ｐ８－Ｐ９間＝1.05m，Ｐ９－Ｐ１間＝1.11m）。各柱穴の規模は，長径５～24cm（平均16cm）×短径５～22cm（平均15cm），深さ３～47cm（平均22cm）で，径20cm台，深さ30～50cmといったところである。各柱穴底面の標高は340.783～341.412m（平均340.997m）で，高所側にあるＰ２やＰ９の



第16図　竪穴住居跡実測図（４）（1:60）　ＳＢ３

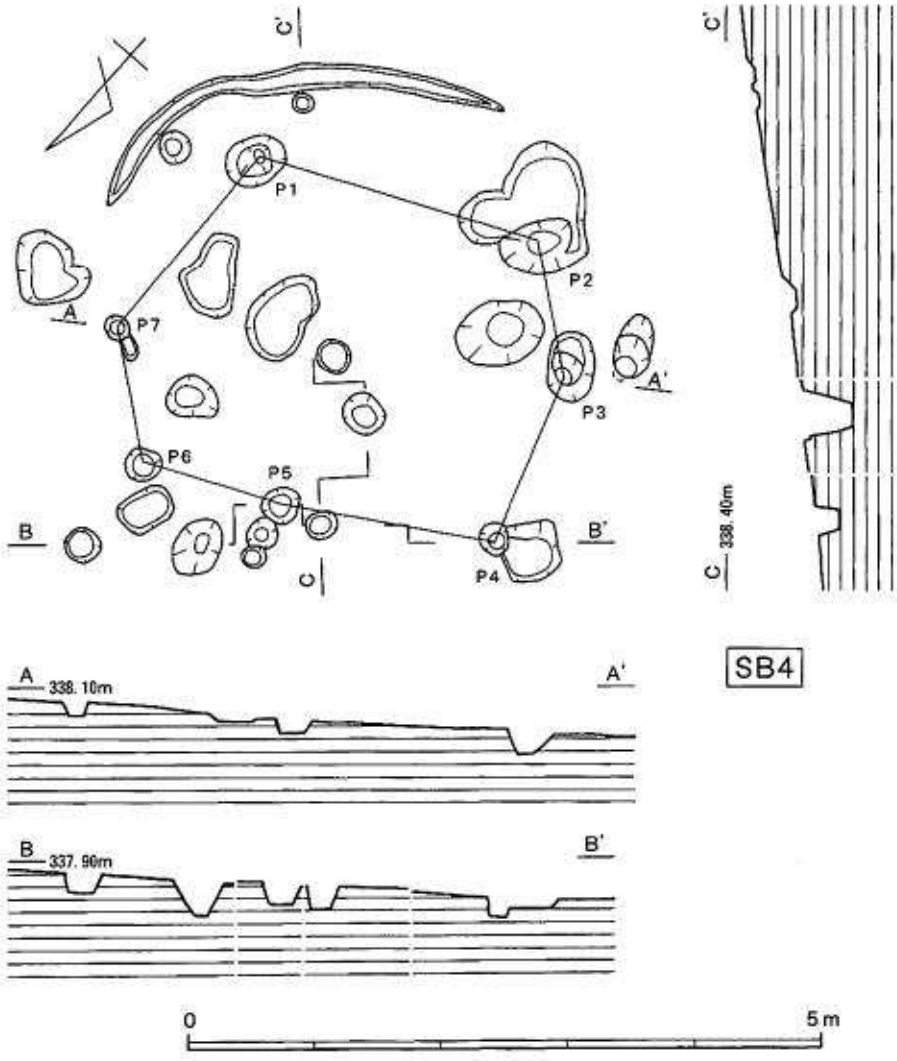
底面標高が高いが，ほかの主柱穴はほぼ一定である。各柱穴の規模は，Ｐ１＝径22cm，深さ47cm，Ｐ２＝径20cm，深さ24cm，Ｐ３＝長径24cm×短径20cm，深さ30cm，Ｐ４＝径５cm，深さ５cm，Ｐ５＝径６cm，深さ７cm，Ｐ６＝径８cm，深さ３cm，Ｐ７＝長径24cm×短径18cm，深さ27cm，Ｐ８＝長径22cm×短径19cm，深さ47cm，Ｐ９＝径14cm，深さ12cmである。

このＳＢ３からは炉跡や中央土坑は検出されず，また住居に伴う明確な遺物もない。

④ＳＢ４（第17図，図版６ａ）

立地　調査区中央の中央谷筋の谷頭部に位置し，南東から北西方向に緩やかに下傾する斜面に立地する（傾斜角度８°，標高338.20m）。ＳＢ３の北西12mにあり，周辺には明確な遺構はなく，孤立的である。

規模・床面　壁溝が南東高所側に部分的に残存し，北西斜面には20基程度のピットが存在する。壁溝と主柱穴の広がりから径４～５m程度（推定床面積10～17㎡）の平面円形あるいは丸みの強

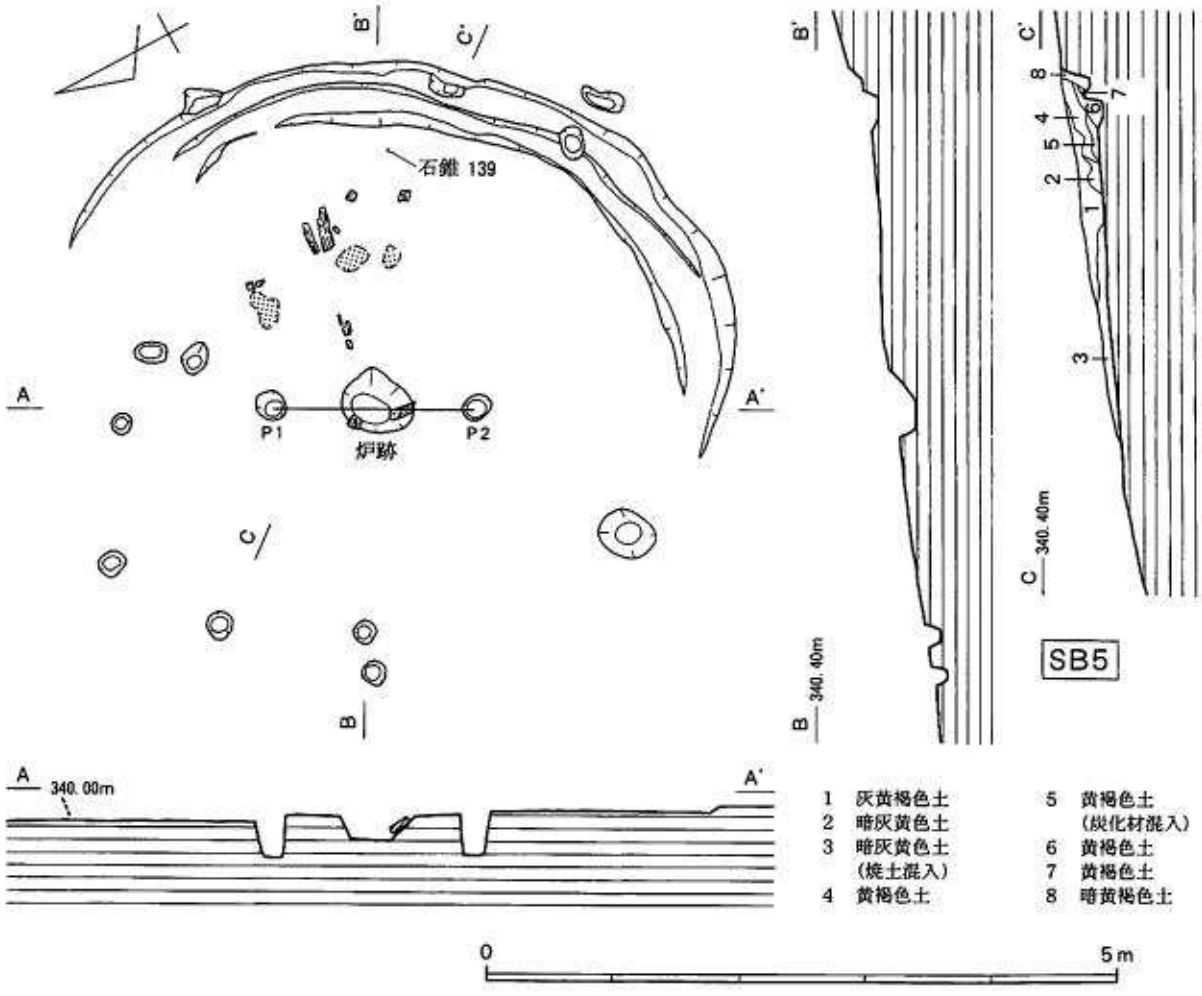


第17図　竪穴住居跡実測図（５）（1:60）　ＳＢ４

い隅丸方形の竪穴住居跡と考えられる。住居壁と床面は削平・流出によって完全に失われている。

壁溝　緩やかに円を描く壁溝（長さ3.24m，幅21cm，深さ６cm）が部分的に残存する。

主柱穴　Ｐ１－Ｐ２－Ｐ３－Ｐ４－Ｐ５－Ｐ６－Ｐ７の７基のピットが主柱穴で，これらが東西方向にやや扁平な多角形（七角形）に配されている。柱間距離は，1.11～2.31m（平均1.52m）とややばらつきが大きい（Ｐ１－Ｐ２間＝2.31m，Ｐ２－Ｐ３間＝1.14m，Ｐ３－Ｐ４間＝1.41m，Ｐ４－Ｐ５間＝1.77m，Ｐ５－Ｐ６間＝1.14m，Ｐ６－Ｐ７間＝1.11m，Ｐ７－Ｐ１間＝1.74m）。隣接する南辺のＰ１－Ｐ２間と東辺南半のＰ７－Ｐ１間，北辺西半のＰ４－Ｐ５間の３間が広く，残りの４間は1.1～1.4mとほぼ一定である。各柱穴規模は，Ｐ１＝長径48cm×短径38cm，深さ20cm，Ｐ２＝長径60cm×短径40cm，深さ24cm，Ｐ３＝長径56cm×短径37cm，深さ24cm，Ｐ４＝径27cm，深さ18cm，Ｐ５＝径30cm，深さ20cm，Ｐ６＝長径30cm×短径26cm，深さ34cm，Ｐ７＝長径20cm×短径18cm，深さ13cmである。長径20～60cm（平均39cm），短径18～40cm（平均31cm），深さ13～34cm（平均22cm）で，長径50～60cm×短径30～40cmとやや大型の柱穴（Ｐ１～Ｐ３）と径20～30cmの小型の柱穴（Ｐ４～Ｐ７）に分かれる。深さは20cm程度が主体である。柱穴底面の標高は337.450～337.990m（平均337.672m）で，ややばらつきがあるものの高所側のＰ１・Ｐ



第18図　竪穴住居跡実測図（６）（1:60）　ＳＢ５（アミ目は焼土を示す。）

２・Ｐ７は数10cm高い。

炉跡・中央土坑については明確でない。

出土遺物（第26図136，図版18）　Ｐ５の覆土から弥生土器・底部片が出土した。

136は底径7.2cmの大型の底部片で，やや上げ底気味の平底である。調整は，内面横方向のナデ，外面が縦方向のヘラミガキ，外底面は一定方向のナデである。

⑤ＳＢ５（第18図，図版６ｂ・14ｇ）

立地　ＳＢ５は調査区の北東側中央にあり，緩やかに南東から北西方向に下傾する斜面に立地する（傾斜角度９°，標高340.1m）。集落の北東端に位置しており，北～北東方向15～20mには墓坑群が展開する。北西低所側６mに柵跡ＳＡ５，南西８mに住居跡状遺構ＳＢ７が存在する。

規模　高所側（東側）に半周程度の住居壁と壁溝が残存しており，これらから復元される住居の大きさは，直径5.4m程度（推定床面積18.09㎡）と考えられる。平面形は円形で，壁高（最大）は20cm程度である。

床面　東から西にやや下傾するものの，比較的水平な床面が住居の東側に1/2程度残存する。住居の前面は床面が失われ，緩やかに下傾する。

壁溝　壁際から10cm程度離れて幅20～40cm，深さ（最大）12cmの壁溝が1/3周ほど残存する。

主柱穴　北西側の斜面に小ピットがいくつか存在するが，柱穴か否かは不明である。明確な主柱穴は，床面中央の炉跡を挟んで南北に位置するＰ１・Ｐ２の２基で，その柱間距離は1.65mである。２本柱構造の柱穴の規模は，Ｐ１が長径26cm×短径22cm，深さ28cm，Ｐ２が長径24cm×短径18cm，深さ29cmと，径20cm，深さ30cm程度で，底面の標高はいずれも339.5mである。なお，Ｐ１・Ｐ２ともに覆土に焼土・炭を含んでいた。

炉跡　床面中央にある不整楕円形の土坑で，規模は長径58cm×短径46cm，深さ20cmである。覆土に焼土・炭や炭化材を含み，東側の床面にも炭化材や焼土が散在する。

出土遺物（第26図137～139，図版18）　土製品・石器が出土した。弥生土器も出土したが，いずれも細片で図示できるものはない。土器片紡錘車137は壁溝内から，石鏃138は覆土から，そして石錐139は東壁中央壁溝際の床面直上で出土した。

137は径3.8～3.9cmの土器片紡錘車で，孔径（外径）0.6cmである。穿孔は内面側からのみ行われている。外面に細かいハケ目がみられる。

138は左脚部を欠失しているが，長さ1.9cmの比較的整美な小型石鏃である。基部は，Ａ面に４枚，Ｂ面に２枚のやや深い剥離を加えて，深く鋭い抉りの凹基を形成する。

139は直線的な錐部に横長の頭部が付いたＴ字形の石錐で，現状の長さ3.8cm，頭部幅2.0cmである。先端を折損している。錐部の基部から頭部にかけてのＡ・Ｂ両面に比較的大きく素材面を残す。頭部上縁への調整剥離はあまり顕著ではない。Ａ・Ｂ面とも錐部の基部にやや浅く広い剥離を加えて，Ｌ字状に抉りを入れている。頭部下縁から錐部の基部を経て錐部の先端まで，Ａ・Ｂ面の両側縁に深く厚い剥離を連続的に加えている。

（2）住居跡状遺構　ここでは，斜面を削平して平坦面を造成し，そこに一定の柱穴の配列はみられるものの，壁溝や住居としての明確な平面形や柱構造をもたないものを住居跡状遺構として扱う。ＳＢ６・７の２軒が存在する。

①ＳＢ６（第19図，図版５ｃ）

立地　調査区南東際中央の最高所に立地し，南東側が調査区外に延びているので，全容は分からない（標高341.9m）。北西側に近接して竪穴住居跡ＳＢ３や柵跡ＳＡ３，北西６ｍに土坑ＳＫ11や柵跡ＳＡ２，北９ｍに住居跡状遺構ＳＢ７が存在する。

規模　住居壁を含めた南東部分が調査区外にあるため，全体的な規模は分からない。北西側の床面を幅0.5～0.7m，長さ９ｍ検出した。

柱穴　調査区南東辺に沿って北東～南西方向に細長い床面と斜面の境界付近に，Ｐ１－Ｐ２－Ｐ３－Ｐ４－Ｐ５－Ｐ６－Ｐ７－Ｐ８柱穴８基がほぼ一直線に並ぶ。柱間距離は0.3～1.74m（平均1.23m）で，Ｐ５－Ｐ６間・Ｐ６－Ｐ７間が短いが，ほぼ1.5m程度である（Ｐ１－Ｐ２間＝1.74m，Ｐ２－Ｐ３間＝1.17m，Ｐ３－Ｐ４間＝1.35m，Ｐ４－Ｐ５間＝1.59m，Ｐ５－Ｐ６間＝0.3m，Ｐ６－Ｐ７間＝0.87m，Ｐ７－Ｐ８間＝1.62m）。各柱穴の規模は，Ｐ１が長径44cm×短径30cm，深さ21cm，Ｐ２が長径20cm×短径16cm，深さ29cm，Ｐ３が長径25cm×短径21cm，深さ51cm，Ｐ４が長径26cm×短径24cm，深さ30cm，Ｐ５が長径19cm×短径16cm，深さ24cm，Ｐ６が長径18cm×短径16cm，深さ25cm，Ｐ７が長径24cm×短径20cm，深さ32cm，Ｐ８が長径28cm×短径25cm，深さ30cmである。長径18～44cm（平均26cm），短径16～30cm（平均21cm），深さ21～51cm（平均30cm）で，ほぼ径・深さともに20～30cm程度である。柱穴底面の標高は341.27～341.578m（平均341.502m）で，341.5～341.6mが主体である。

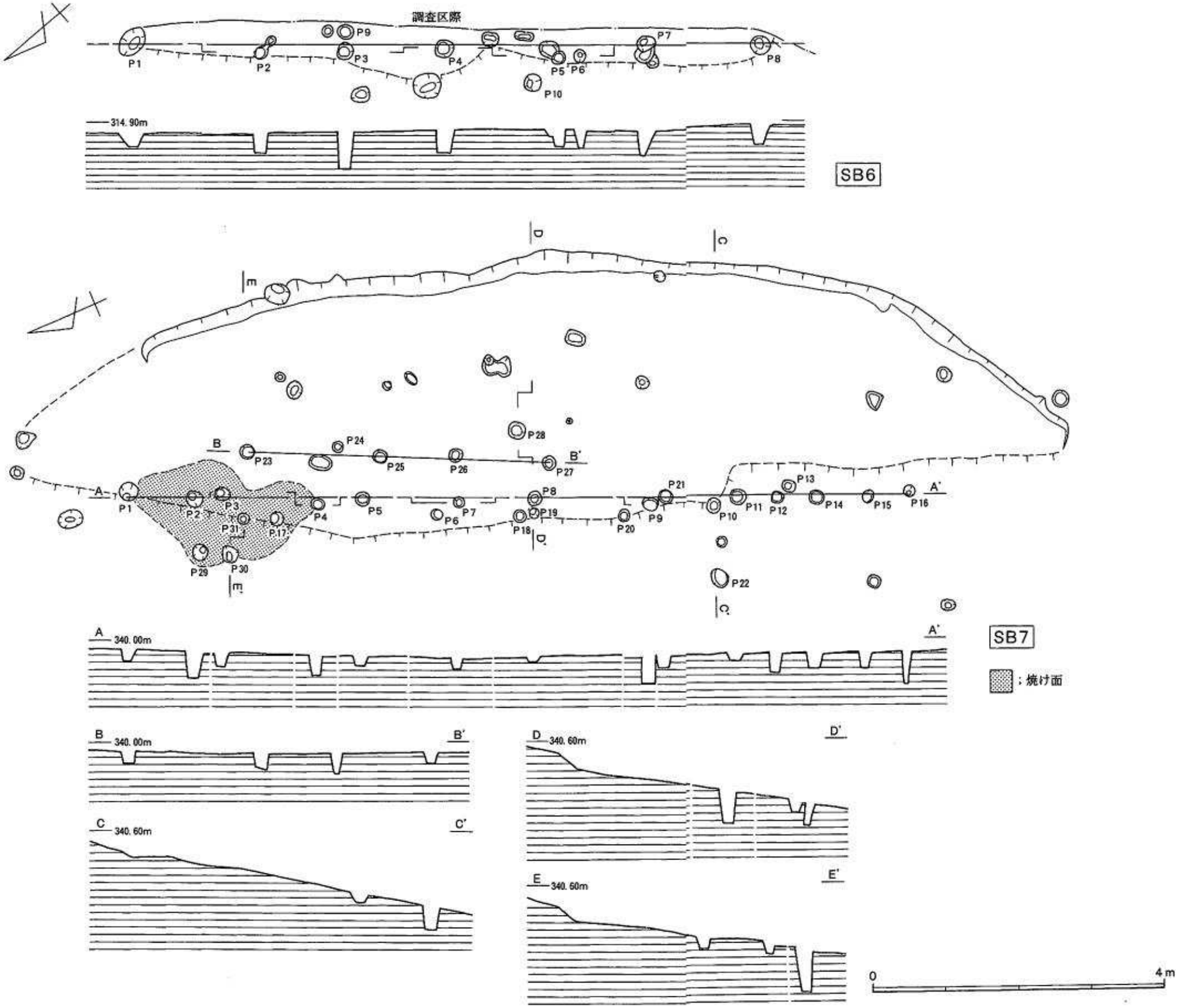
炉跡や出土遺物はない。

②ＳＢ７（第18図，図版６ｃ）

立地　調査区中央の斜面に立地する（標高340.5m）。南東から北西方向に下る斜面を削平して造られた長大な平坦面（床面）と２条の柱穴列をもつもので，背後（南東側）の斜面は傾斜がややきつく（傾斜角度14°），前面（北西側）の斜面はやや緩やかになっている（傾斜角度９°）。北東８ｍに竪穴住居跡ＳＢ５，南東側３ｍに土坑ＳＫ12や柵跡ＳＡ３，南６ｍには竪穴住居跡ＳＢ３や住居跡状遺構ＳＢ６，柵跡ＳＡ２が存在する。

規模　高所側（東側）に壁をもつ平坦面（床面）は，長さ（南北方向）14.4m，最大幅（東西方向）3.3mの緩やかな半円形である。壁高は最大23cmである。壁際には溝はなく，緩やかに下傾する床面の西側の斜面との変換点付近と床面内部には，北北東－南南西方向（Ｎ12°Ｅ）に直線的に並ぶ小柱穴の列が２条みられる。

床面　東から西に向けて緩やかに下傾する（傾斜角度７～10°）。西側の傾斜変換点を介して自然斜面に続く。床面の最高所である壁際と最も低い傾斜変換点付近との高低差は中央付近で40cmで



第19図　住居跡状遺構実測図（1:60）ＳＢ６・７

ある。

柱穴　傾斜変換点付近（柱穴列１）と床面内部（柱穴列２）に各１条の柱穴列が存在する。いずれも直線的に小柱穴が並ぶもので，両者は60cmの距離をおいてほぼ並行している。柱穴列１は長さ10.8mで，Ｐ１～Ｐ16と16基（＋α）の柱穴が並ぶが，柱間距離は一定ではない。柱穴が２～３基ずつまとまっている状況から，恐らく１～２回程度の建て替えを行ったものとみられる。柱間距離は明確ではないが，１～1.5m程度の近接したものであったと考えられる。Ｐ１－Ｐ２間（0.9m）・Ｐ５－Ｐ６間（1.05m）・Ｐ７－Ｐ８間（1.02m）・Ｐ９－Ｐ10間（0.9m）やＰ３－Ｐ４間（1.35m）・Ｐ８－Ｐ９間（1.59m）が本来的な柱の配置を示すものと考えられる。柱穴列２はＰ23－Ｐ24－Ｐ25－Ｐ26－Ｐ27の５基で，長さ4.14mである。柱間距離はＰ23－Ｐ24間＝1.26m，Ｐ24－Ｐ25間＝0.6m，Ｐ25－Ｐ26間＝1.05m，Ｐ26－Ｐ27間＝1.29mで，Ｐ24－Ｐ25間が短いが，ほぼ1.0～1.3m（平均1.05m）である。柱穴列１・２及びＰ17～Ｐ22・Ｐ28～31を含めた各柱穴の規模は長径14～28cm（平均19cm）×短径12～24cm（平均18cm），深さ10～60cm（平均24cmで，平面的には小規模であるが，そのわりに深い。なお，柱穴底面の標高は339.13～339.77m（平均339.569m）である。この住居跡状遺構の性格としては，その柱穴が小規模であることや柱穴が床面の前面に直線的に並ぶことなどから，片流れの仮設的な作業小屋的なものが想定される。

出土遺物（第26図140・141）　弥生土器が出土した。壺140は柱穴列２の南端の柱穴Ｐ27内部から，底部片141は覆土上層からの出土である。

壺は口縁部直下から体部上半にかけての破片で，最大径部から緩やかに窄まる。調整は，内面縦方向のナデ，外面は縦方向ハケ目ののち３～４条を単位とする櫛描波状文と６条を単位とする櫛描直線文を施す。一部刺突文がみられる。底部片は平底の底部からやや内湾気味に外上方に立ち上がるもので，内面横方向のヘラミガキを施す。外底面はナデとみられる。

（３）掘立柱建物跡　調査区南西側を中心に計９棟存在する（ＳＢ８～ＳＢ16）。このうち８棟は中央谷筋の南西側に位置するが，ＳＢ16のみは墓坑群内に位置している。ＳＢ８のように調査区の高所側にあるものもあるが，概ね調査区でも低所側（標高339mより低位）に位置している。主軸が等高線に沿うもの７棟（東北東－西南西方向を指す）と直交するもの２棟（北北西－南南東を指す）があり，前者が主体である。ＳＢ11・ＳＢ12は背後（高所側）にＬ字・逆Ｌ字状の溝状遺構（ＳＤ１・２）を伴う。各建物は桁行２～４間×梁行１～２間で，建物規模は桁行方向2.5～6.43m×梁行方向１～３m（建物面積３～17.25㎡）の小規模なものである。ＳＢ13では東側桁行中央が互い違いになっており，入口の可能性がある。

①ＳＢ８（第20図）

調査区南西半の南東から北西方向に緩かに下る斜面（傾斜角度３°）に立地する桁行２間，梁行１間の掘立柱建物跡で，竪穴住居跡ＳＢ１の南西側に接する（標高339.4～339.7m）。建物の主軸は北北西－南南東方向を指し（N18° W），等高線に斜交する。建物の規模は，桁行方向3.81m

（西辺）・3.84m（東辺），梁行方向1.29m（北辺）・1.53m（南辺），建物面積5.4㎡で，平面形は不整長方形である。桁行方向の長さを梁行方向の長さで除した「建物の長方形度」は2.71である。桁行東辺が若干斜行するので，梁行は南辺に較べて北辺がいくらか短い。各柱間距離は，桁行方向東辺のＰ１－Ｐ２間が1.95m，Ｐ２－Ｐ３間が1.89m，西辺はＰ６－Ｐ５間が2.19m，Ｐ５－Ｐ４間が1.62mと1.62～2.19m（平均1.91m）で，西辺でばらつきがみられる。梁行の1.29～1.53m（平均1.41m）に較べると，桁行の柱間距離の方が平均値で約0.5m長い。各柱穴の規模は，Ｐ１＝長径25cm×短径22cm，深さ26cm，Ｐ２＝長径28cm×短径23cm，深さ34cm，Ｐ３＝長径33cm×短径30cm，深さ28cm，Ｐ４＝長径50cm×短径42cm，深さ28cm，Ｐ５＝径22cm，深さ23cm，Ｐ６＝長径19cm×短径18cm，深さ10cmである。長径19～50cm（平均30cm），短径18～42cm（平均26cm），深さ10～34cm（平均25cm）で，ほぼ径・深さ20～30cmである。柱穴底面の標高は339.271～339.458m（平均339.328m）と比較的揃っている。

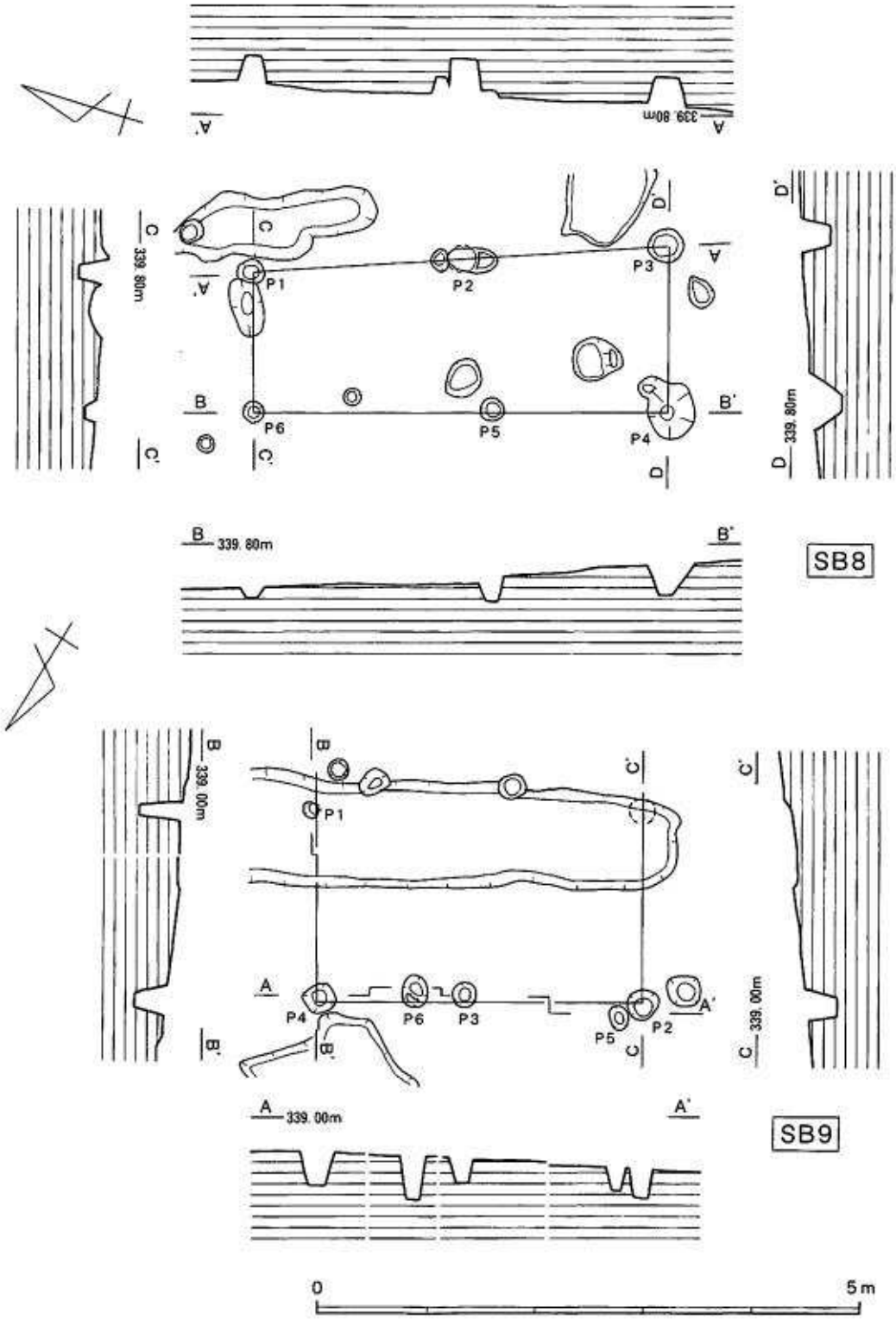
Ｐ３から弥生土器細片が出土したが，図示できなかった。

②ＳＢ９（第20図）

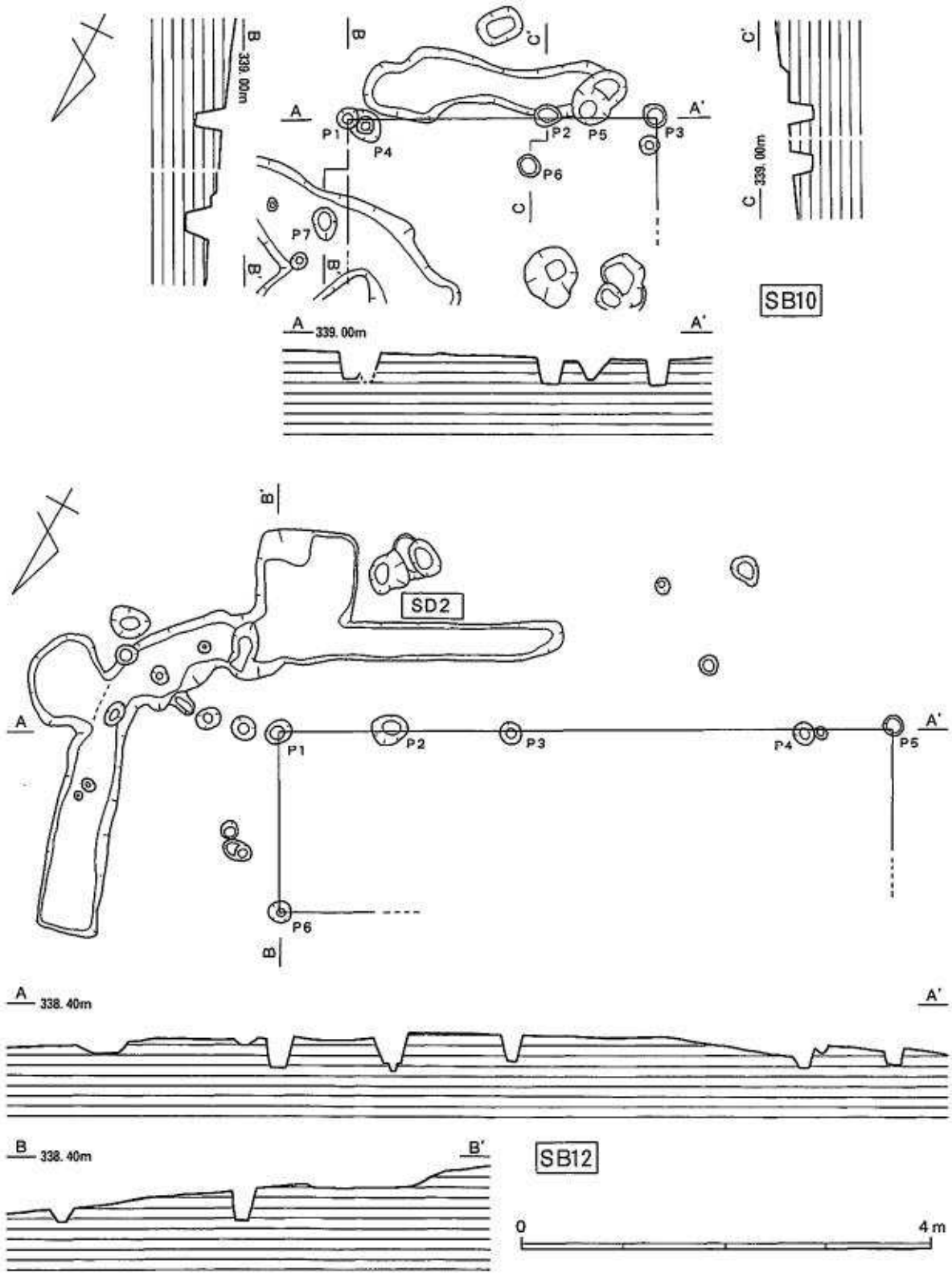
ＳＢ８の北７m，ＳＢ１の北西３mの南東から北西方向に緩かに下傾する斜面（傾斜角度７°）に立地する桁行２間，梁行１間以上の掘立柱建物跡で，桁行南辺・梁行西辺は浅い溝状の落ち込みに壊されており，柱穴の並びは不明確である（標高338.5～338.9m）。建物の主軸は東北東－西南西方向を指し（N57° E），等高線に並行する。建物の規模は，桁行方向３m（北辺），梁行方向1.71m（東辺），建物面積（現状）5.13㎡で，平面形長方形と考えられる。建物の長方形度は現状で1.75である。各柱間距離は，桁行方向北辺のＰ４－Ｐ３間が1.38m，Ｐ３－Ｐ２間が1.62mとばらつきがあるが，1.38～1.62m（平均1.5m）で梁行のＰ１－Ｐ４間に較べて短い。各柱穴の規模は，Ｐ１＝長径15cm×短径14cm，深さ40cm，Ｐ２＝長径30cm×短径26cm，深さ29cm，Ｐ３＝径22cm，深さ25cm，Ｐ４＝長径28cm×短径25cm，深さ31cmである。長径15～30cm（平均24cm），短径14～26cm（平均22cm），深さ25～40cm（平均31cm）で，ほぼ径20～30cm，深さ20～40cmの規模で，柱穴底面の標高は338.283～338.439m（平均338.378m）である。このほか，桁行北辺のＰ４－Ｐ３間にＰ６（長径29m×短径24cm，深さ42cm）とＰ３－Ｐ２間にＰ５（長径22m×短径17cm，深さ21cm）がある。出土遺物はない。

③ＳＢ10（第21図）

ＳＢ９の北東側に近接して存在する桁行南辺の２間のみの掘立柱建物跡で，緩斜面（傾斜角度７°）に立地する（標高338.6～338.8m）。斜面下方の桁行北辺と梁行両辺については不明である。桁行南辺は長さ2.6m，幅0.75mのごく浅い溝状の落ち込みに接する。建物の主軸は東北東－西南西方向を指し（N64° E），等高線に並行する。建物の規模は，桁行方向3.06m（南辺）で，梁行方向・建物面積・平面形などは不明である。各柱間距離は，Ｐ１－Ｐ２間が1.98m，Ｐ２－Ｐ３間が1.08mと一定ではない。各柱穴の規模は，Ｐ１＝長径21cm×短径20cm，深さ27cm，Ｐ２＝



第20図　掘立柱建物跡実測図（1）(1:60) ＳＢ８・９



第21図　掘立柱建物跡実測図（2）（1:60）ＳＢ10・12，ＳＤ２

長径26cm×短径21cm，深さ24cm，Ｐ３＝径25cm，深さ21cmである。長径21～26cm（平均24cm），短径20～21cm（平均21cm），深さ24～27cm（平均26cm）で，ほぼ径・深さ20～30cmの規模で，柱穴底面の標高は338.48～338.548m（平均338.5m）である。これら桁行南辺と思われる柱穴列の北側には平面規模・深さ・形状の点で柱穴の可能性のあるピットが３基ある。即ち，Ｐ４（長径24m×短径20cm，深さ21cm），Ｐ５（長径30cm以上×短径29cm，深さ30cm），Ｐ６（長径32m×短径23cm，深さ26cm）である。出土遺物はない。

④ＳＢ11・ＳＤ１（第22図，図版７ａ）

南側背後（高所側）に逆Ｌ字状の溝状遺構を伴う掘立柱建物跡で，調査区南西側に位置する（標高337.5～337.9m）。ＳＢ９・10の北側７～９mの低所側のほぼ平坦な場所に立地している。北東３mにＳＢ13，東９mにＳＢ12が位置する。３棟の建物が重複しており，桁行３間×梁行１間のほぼ同規模の建物の建て替えとみられるＳＢ11ａ・ＳＢ11ｂと１間×１間の小型建物のＳＢ11ｃがあるが，新旧関係は不明である。

ＳＢ11ａ（Ｐ１～Ｐ８）は，建物の主軸は東北東－西南西方向を指し（N69°Ｅ），等高線に並行する。建物の規模は，桁行方向（北辺）5.70m，同（南辺）5.64m，梁行方向（東辺）2.58m，同（西辺）2.72m，建物面積15.0㎡で，平面形不整長方形である。建物の長方形度は2.14である。各柱間距離は，桁行方向南辺のＰ１－Ｐ２間が1.95m，Ｐ２－Ｐ３間が1.80m，Ｐ３－Ｐ４間が1.92m，桁行方向北辺のＰ５－Ｐ６間・Ｐ６－Ｐ７間が1.80m，Ｐ７－Ｐ８間が2.10m，梁行方向西辺のＰ４－Ｐ５間，梁行方向東辺のＰ８－Ｐ９間が2.76mである。桁行方向が1.80～2.10m（平均1.90m）でＰ７－Ｐ８間がやや広いがほぼ1.8～1.9mに揃っている。東辺・西辺の柱間距離が等しい梁行方向は桁行方向の柱間距離の平均値の約1.5倍と広い。各柱穴の規模は，Ｐ１＝長径22cm×短径16cm，深さ27cm，Ｐ２＝長径22cm×短径19cm，深さ13cm，Ｐ３＝長径26cm×短径20cm，深さ13cm，Ｐ４＝長径20cm×短径16cm，深さ５cm，Ｐ５＝長径23cm×短径22cm，深さ19cm，Ｐ６＝径22cm，深さ21cm，Ｐ７＝長径23cm×短径22cm，深さ24cm，Ｐ８＝径18cm，深さ10cmである。長径18～26cm（平均22cm），短径16～22cm（平均19cm），深さ５～27cm（平均17cm）で，ほぼ径・深さ10～30cmの規模である。柱穴底面の標高は337.37～337.75m（平均337.56m）である。

ＳＢ11ｂ（Ｐ９～Ｐ16）はこのＳＢ11ａとほぼ重なる。梁行方向東辺・桁行方向北辺はほぼ同じ位置で，桁行方向南辺が20cm南に広がる一方，梁行方向西辺が36～45cm東に寄っている。建物の主軸は東北東－西南西方向を指し（N60°Ｅ），等高線に並行する。建物の規模は，桁行方向（北辺）5.28m，同（南辺）5.20m，梁行方向（東辺）2.96m，同（西辺）2.78mである。建物面積15.0㎡，平面形不整長方形で，建物の長方形度は1.82である。建物の面積はＳＢ11ａと同じだが，長方形度は低い。各柱間距離は，桁行方向南辺のＰ９－Ｐ10間が1.60m，Ｐ10－Ｐ11間・Ｐ11－Ｐ12間が1.80m，桁行方向北辺のＰ13－Ｐ14間が1.86m，Ｐ14－Ｐ15間が1.71m，Ｐ15－Ｐ16間が1.71m，梁行方向西辺のＰ12－Ｐ13間が2.78m，梁行方向東辺のＰ16－Ｐ９間が2.98mである。桁行方向の柱間距離は1.60～1.84m（平均1.73m）とほぼ揃っている。梁行方向は東辺

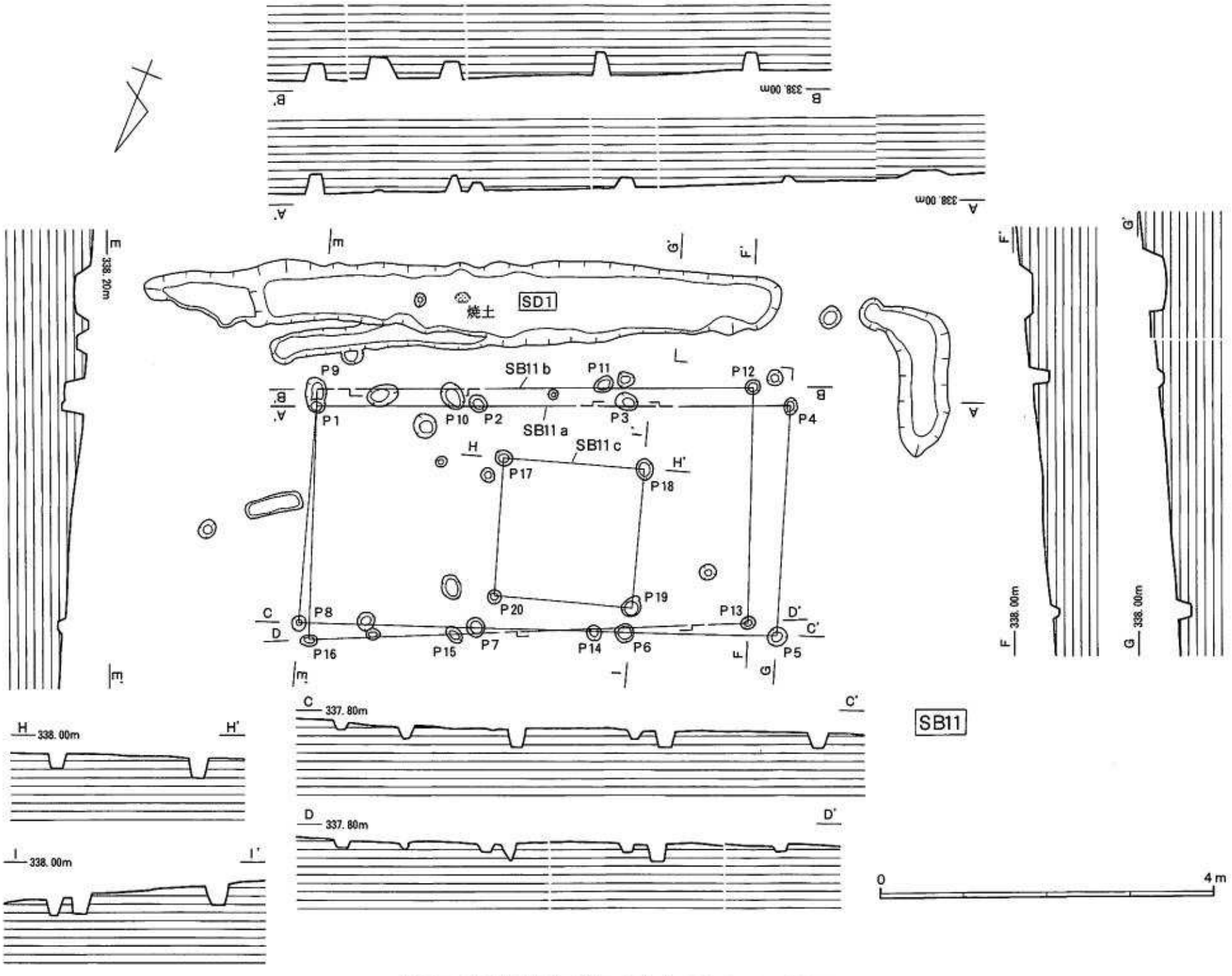
と西辺で差があるが，その平均値（2.88m）は桁行方向の柱間距離の約1.7倍と広い。各柱穴の規模は，Ｐ９＝長径25cm×短径24cm，深さ23cm，Ｐ10＝長径33cm×短径24cm，深さ21cm，Ｐ11＝長径25cm×短径17cm，深さ30cm，Ｐ12＝長径18cm×短径17cm，深さ22cm，Ｐ13＝長径17cm×短径15cm，深さ10cm，Ｐ14＝径18cm，深さ11cm，Ｐ15＝長径23cm×短径14cm，深さ11cm，Ｐ16＝長径20cm×短径13cm，深さ10cmである。長径17～33cm（平均22cm），短径13～24cm（平均18cm），深さ10～30cm（平均17cm）で，ほぼ径・深さ10～30cmの規模で，柱穴底面の標高は337.47～337.69m（平均337.56m）である。

ＳＢ11ｃはＳＢ11ａ・ＳＢ11ｂの内側のやや西寄りに位置する１間×１間のほぼ正方形の建物跡である。建物の主軸は東北東－西南西方向を指し（N70° E），等高線に並行する。建物の規模は，東西方向（北辺）1.68m，同（南辺）1.71m，南北方向（東辺）1.64m，同（西辺）1.66mとほぼ一定である。建物面積2.8㎡で，平面形は正方形である。建物の長方形度は1.01である。各柱穴の規模は，Ｐ17＝長径20cm×短径18cm，深さ19cm，Ｐ18＝長径24cm×短径22cm，深さ26cm，Ｐ19＝長径27cm×短径20cm，深さ23cm，Ｐ20＝径18cm，深さ14cmである。長径18～27cm（平均22cm），短径18～22cm（平均20cm），深さ14～26cm（平均21cm）で，ほぼ径・深さ20～30cmの規模である。柱穴底面の標高は337.39～337.61m（平均337.51m）である。柱穴規模の点ではＳＢ11ａ・ＳＢ11ｂとほぼ同じである。

これら３棟の建物の高所側にあって，南側と西側を画する逆Ｌ字状の溝状遺構ＳＤ１は，南辺の長い直線的な部分と間に小ピットを挟んで南西隅から西辺にかかる短い鉤状の部分からなるが，基本的には一体のものと考えられる。南辺の長さが9.6m，西辺の長さが1.65mで，南辺の直線的な部分（以下，「南溝」）の長さ7.6m，最大幅0.98m，最大深さ0.33m（底面標高337.63m），この南溝と0.96m離れて西側にある短い鉤形の部分（以下，「西溝」）の長さ1.96m，最大幅0.66m，最大深さ0.13mである。南溝と西溝の間には長径26cm×短径24cm，深さ８cmのごく浅いピットがある。この溝が途切れている箇所は建物への出入口の可能性がある。南溝は西端から２m余りのあたりが最も深い。中央付近の底面には小ピット（長径17cm×短径12cm，深さ７cm）があり，その西側には12cm×18cmの焼土の広がりがある。この南溝の北辺中央から東に細く浅い溝（以下，「北溝」）が分岐している。北溝は南溝に先行し，現状の長さ2.58m，最大幅0.32m，最大深さ0.14m（底面標高337.8m）である。北溝は南溝よりやや西に寄っており，ＳＢ11ｃに伴う可能性が高い。一方，南溝はＳＢ11ａ・ＳＢ11ｂに伴うと考えられることから，ＳＢ11ｃはＳＢ11ａ・ＳＢ11ｂに先行する可能性がある。

出土遺物（第37図175～182，第38図192・193，図版19）　ＳＤ１の南溝からは弥生土器片など比較的多くの遺物が出土したが，図示できたのは弥生土器８点（壺２・甕２・高杯脚部１・底部片３）と土器片紡錘車１点，石器（スクレイパー）１点の計10点である。

175～182は弥生土器である。175・176はいずれも壺の口縁部片で，175は復元口径7.2cmの細頸壺である。頸部から外上方に直線的に開いた口縁の端部を四角く納める。口縁下半から頸部にかけて低い断面三角形の凸帯３条を貼り付ける。調整は，内面の体部が縦方向の指頭によるナデつ



第22図　掘立柱建物跡実測図（3）(1:60) ＳＢ11・ＳＤ１

け，頸部が縦方向のハケ目ののち幅広で粗い横方向のヘラミガキ，口縁部中央～下半が横方向の細かいヘラミガキ，口縁上半から外面の口縁～頸部は横方向のナデ，頸部下半が粗い横方向のナデ，体部は縦方向の幅広で浅いハケ目である。口縁部上半の内外面には黒褐色のススが付着する。176は復元口径12.8cmの広口壺で，頸部から外上方に外湾気味に開いた口縁の端部を外方に大きく拡張し，頸部外面には断面三角形の凸帯を貼り付けている。内面から端面の調整は不明だが，外面は口縁部が縦方向のナデかあるいはヘラミガキ，頸部は横方向の強いナデを行っている。177・178は甕口縁部で，頸部で屈曲し外上方に外湾気味に延びた薄手の口縁の端部を丸く納める。177の調整は，体部内面が横方向のハケ目，口縁内外面は横方向のナデで，外面を中心に黒褐色のススが付着する。178は外面頸部付近に横方向のナデが認められる以外は調整不明である。179はやや太い基部から外湾気味に外下方に延びる脚の端部を弱く外反させて端部を四角く納める。径6㎜の円孔が外面側から穿たれている。調整は，内面はシボリ，外面は縦方向の幅広のハケ目を施すが残りはよくない。端部内外面は横方向のナデを行う。復元脚端径12.4cm。180～182は復元底径4～5.4cmの平底の底部片で，直線的に外上方に立ち上がる。調整は，内面がヘラミガキか丁寧なナデ（180），外面は縦方向のヘラミガキ，外底面は180・181の外縁は横方向のナデ，中央が一定方向のナデつけ，182は丁寧なナデあるいはヘラミガキを行っている。

192は復元径4.4～4.8cmの土器片紡錘車の破片で，1/2強の残存である。内外面に素材土器片の調整であるヘラミガキがみられる。軸孔は内径0.4cm，外径0.6～0.7cmで，内外両面から穿孔されている。

193はスクレイパー状の石器だが，上辺及び両側辺の剥離痕はいずれも折損状のもので，明確な調整痕とは言いがたい。A・B両面に広く素材面を残し，下半はB面側からの加圧によって折れている。石材は暗青色の粘板岩（熱変質泥質岩）である。

⑤SB12・SD2（第21図）

SB12はほぼ南から北に緩やかに傾斜する斜面（傾斜角度6°）に立地する掘立柱建物跡で，SB11の東9mに位置する（標高337.9～338.1m）。高所側（南東側）にL字形に曲がる溝状遺構SD2を伴い，現状で桁行4間（推定5～6間），梁行1間である。桁行方向北辺と梁行方向西辺については不明である。建物の主軸は東北東－西南西方向を指し（N61° E），等高線に並行する。建物の規模は，桁行方向南辺6.06m，梁行方向東辺1.77m，建物面積10.8㎡で，平面長方形である。建物の長方形度は3.44と細長い。各柱間距離は，桁行方向南辺のP1－P2間が1.14m，P2－P3間が1.17m，P4－P5間が0.87mである。P3とP4の間（2.88m）にもう1～2基の柱穴が存在したと想定され，0.96～1.44mの柱間距離が考えられる。このことから桁行方向南辺の柱間距離は0.87～1.44mで，平均値は1.01～1.21mと狭い。梁行方向の柱間距離（1.77m）は桁行方向のそれの1.46～1.75倍である。各柱穴の規模は，P1＝長径26cm×短径22cm，深さ31cm，P2＝長径35cm×短径29cm，深さ37cm，P3＝長径21cm×短径20cm，深さ24cm，P4＝長径22cm×短径20cm，深さ20cm，P5＝長径20cm×短径19cm，深さ17cm，P6＝径22cm，深さ15cmで

ある。長径20～35cm（平均24cm），短径19～29cm（平均22cm），深さ15～37cm（平均24cm）で，ほぼ径20～30cm，深さ10～40cmの規模である。柱穴底面の標高は337.75～337.89m（平均337.80m）である。柱穴規模はＳＢ11に較べてやや大きく，ＳＢ９・ＳＢ10に近い。

建物の高所側にあって，南側と東側を画するように位置するＬ字状の溝状遺構ＳＤ２は，長さは南辺が4.2m，東辺が３m，幅0.30～0.58m，深さ0.19mの規模で，南辺中央と東辺南半に張り出し部分がある。出土遺物はない。

⑥ＳＢ13（第23図，図版７ｂ）

ＳＢ13は調査区南西側，ＳＢ11の北東３m，ＳＢ12の北西３mに位置する桁行４間×梁行２間の掘立柱建物跡である（標高337.2～337.6m）。中央谷筋まで12mと近く，調査区の中でも最も低所側に近い，ほぼ南から北にごく緩やかに下る平坦地に立地する。建物の主軸は北北西－南南東方向を指し（N29° W），等高線に直交する。建物の規模は，桁行方向（西辺）4.14m，同（東辺北半）2.4m，同（東辺南半）2.04m，梁行方向（北辺）2.76m，同（南辺）2.37m，建物面積10.6㎡で，平面形長方形である。建物の長方形度は1.61である。各柱間距離は，桁行方向（西辺）のＰ１－Ｐ２間が0.81m，Ｐ２－Ｐ３間が1.05m，Ｐ３－Ｐ４間が0.84m，Ｐ４－Ｐ５間が1.44mで，0.81～1.44m（平均1.04m）である。桁行方向（東辺）は中央部分が互い違いになって，30cm程度開いている。入口的な機能を考えることができるが，この北半のＰ７－Ｐ８間が1.41m，Ｐ８－Ｐ９間が0.99m，南半のＰ10－Ｐ11間が1.08m，Ｐ11－Ｐ12間が0.96mで，0.96～1.41m（平均1.11m）である。桁行方向全体（西辺＋東辺）では0.81～1.44m（平均1.07m）である。この桁行方向の柱間距離は西辺・東辺ともに北端の柱間（西辺＝Ｐ４－Ｐ５間；1.44m，東辺＝Ｐ７－Ｐ８間；1.41m）がほかの桁行方向の柱間（0.81～1.08m，平均0.96m）に較べて1.4～1.5倍広い。梁行方向は北辺のＰ５－Ｐ６間が1.56m，Ｐ６－Ｐ７間が1.20mで平均1.38m，同南辺はＰ12－Ｐ13間が1.14m，Ｐ13－Ｐ１間が1.23mで平均1.19m，梁行方向全体では1.14～1.56m（平均1.28m）である。梁行方向の柱間距離の平均値は，桁行方向のそれの約1.2倍である。また，梁行が２間である点は類例が少ない。各柱穴の規模は，Ｐ１＝径16cm，深さ15cm，Ｐ２＝長径15cm×短径14cm，深さ26cm，Ｐ３＝長径19cm×短径18cm，深さ24cm，Ｐ４＝長径23cm×短径18cm，深さ20cm，Ｐ５＝長径20cm×短径18cm，深さ８cm，Ｐ６＝径12cm，深さ９cm，Ｐ７＝長径19cm×短径16cm，深さ７cm，Ｐ８＝長径25cm×短径19cm，深さ21cm，Ｐ９＝径20cm，深さ25cm，Ｐ10＝長径18cm×短径16cm，深さ18cm，Ｐ11＝径16cm，深さ11cm，Ｐ12＝長径15cm×短径14cm，深さ14cm，Ｐ13＝長径22cm×短径16cm，深さ24cmである。長径12～25cm（平均18cm），短径12～20cm（平均16cm），深さ７～26cm（平均17cm）で，ほぼ径・深さ10～30cmの規模である。柱穴底面の標高は337.13～337.50m（平均337.27m）である。柱穴の平面規模が全体的にやや小振りである。

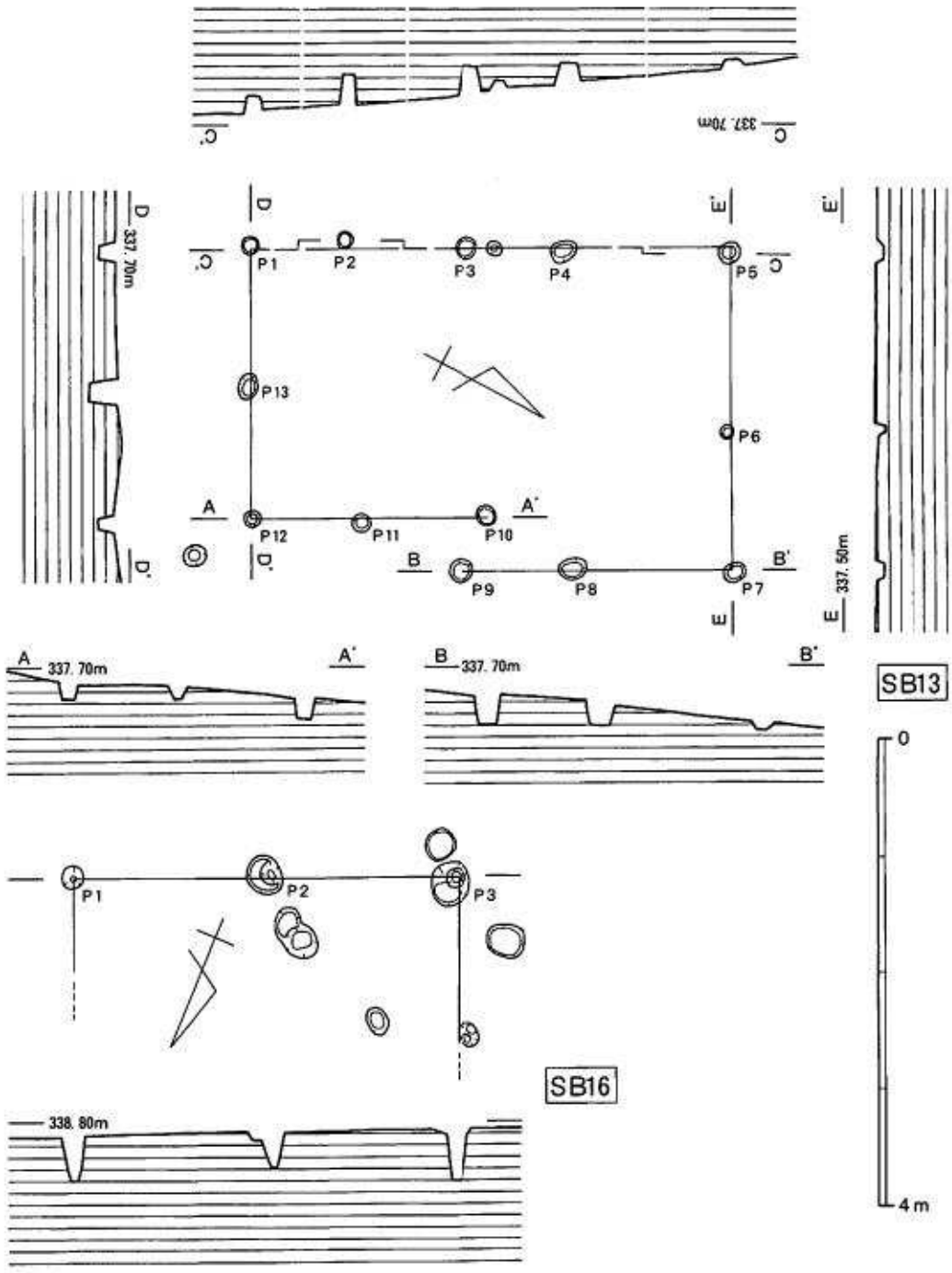
出土遺物（第26図142，図版18）　桁行方向東辺北半のＰ８から弥生土器・甕口縁部片１点が出土した。Ｐ２～Ｐ５・Ｐ９・Ｐ11・Ｐ12からも弥生土器片が出土したが，図示できなかった。

142は復元口径24cmの甕口縁部片である。直立する口縁の端部を外方に拡張し，口縁直下に断

面三角形の凸帯を貼り付けている。調整は，内面から口縁端面にかけて横方向のヘラミガキ，口縁～外面体部は横方向のナデを施す。

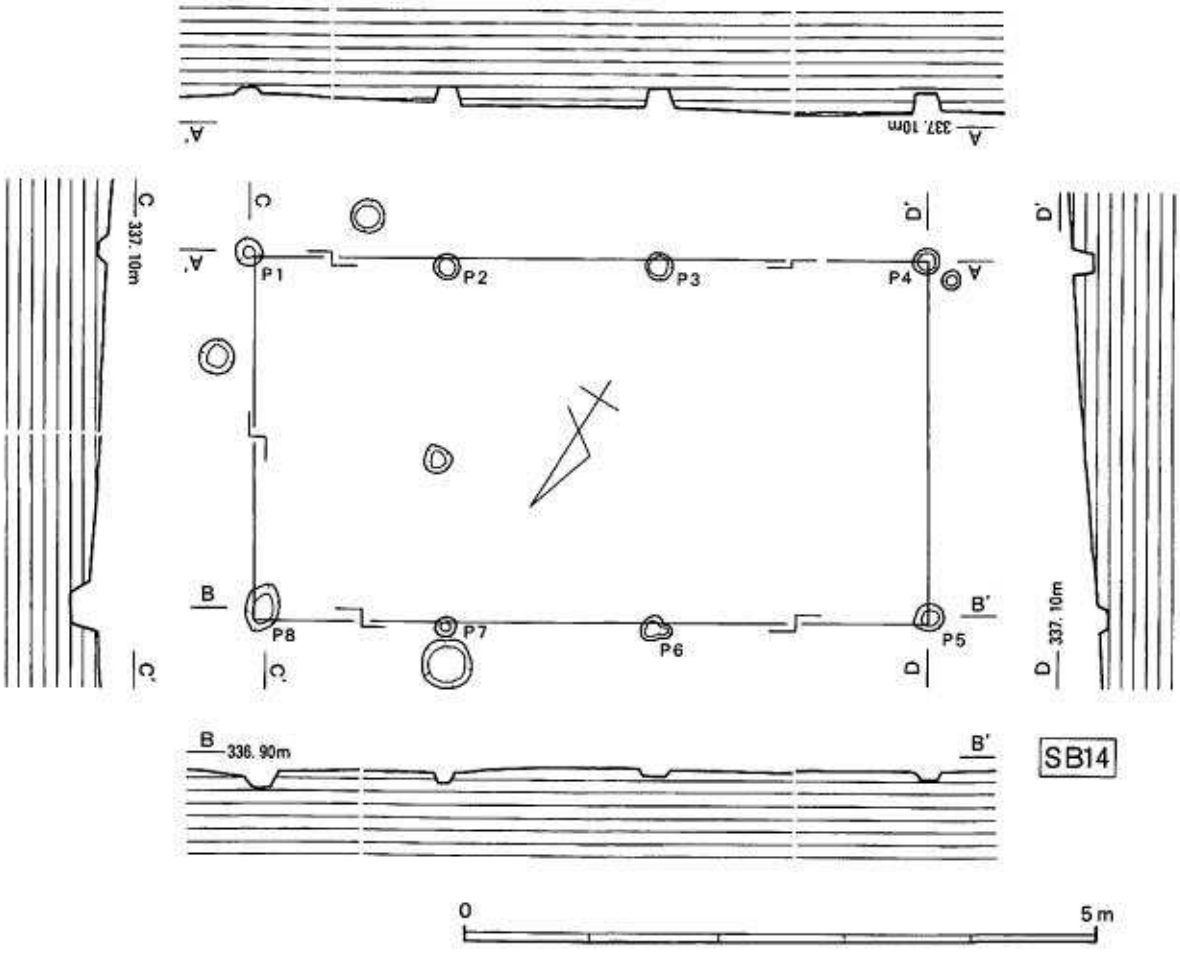
⑦ＳＢ14（第24図，図版７ｃ）

ＳＢ14は調査区中央，ＳＢ13の北東４ｍに位置する桁行３間×梁行１間の掘立柱建物跡である（標高336.7～337.0m）。中央谷筋に西接し，調査区の最も低所側のほぼ南から北にごく緩やか



第23図　掘立柱建物跡実測図（４）（1:60）ＳＢ13・16

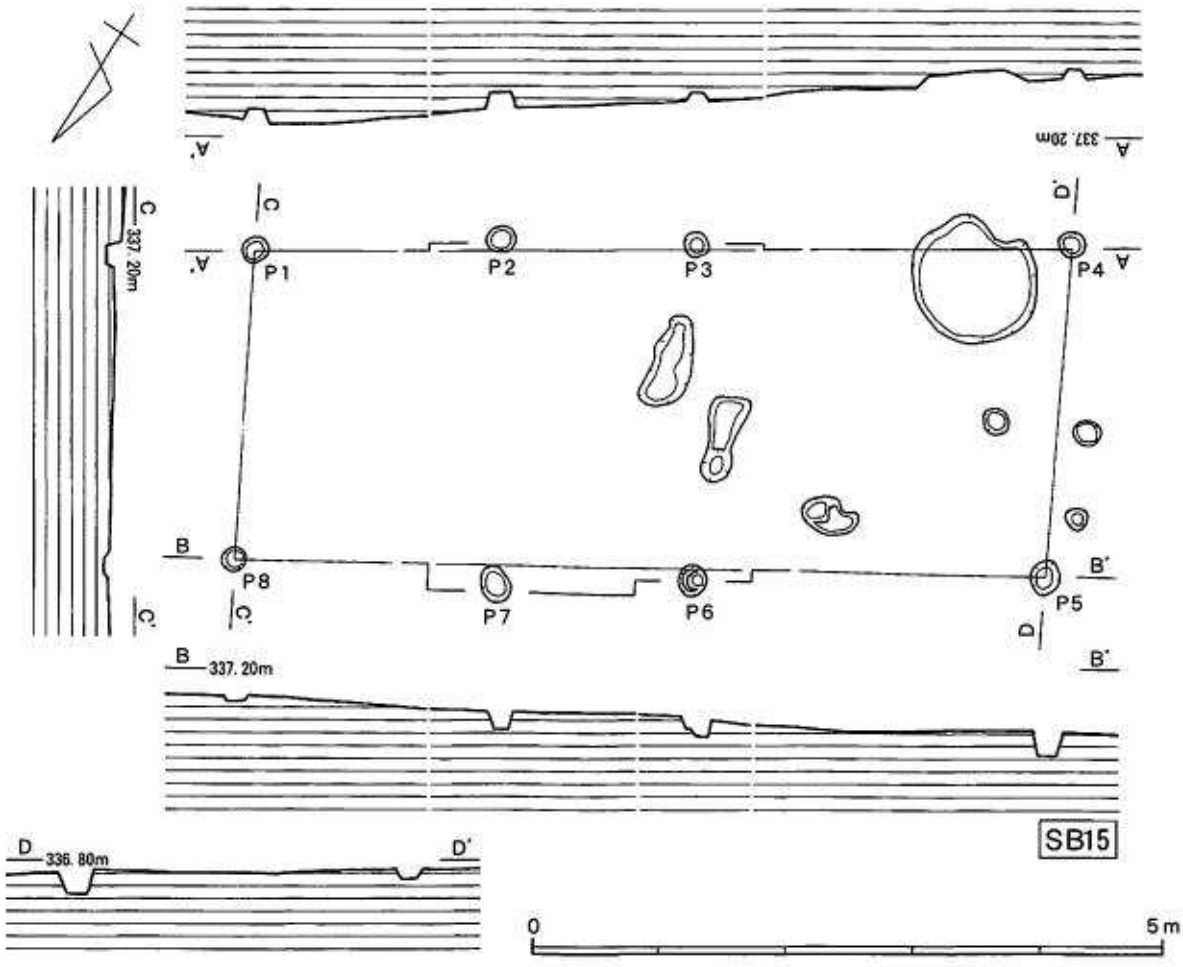
に下る平坦地（傾斜角度5°）に立地する。建物の主軸は東北東－西南西方向を指し（N58° E），等高線に並行する。建物の規模は，桁行方向（南辺）5.37m，同（北辺）5.28m，梁行方向（東辺）・同（西辺）2.79m，建物面積14.9㎡で，平面形長方形である。建物の長方形度は1.91である。各柱間距離は，桁行方向（南辺）のＰ１－Ｐ２間が1.59m，Ｐ２－Ｐ３間が1.65m，Ｐ３－Ｐ４間が2.13mである。桁行方向（北辺）のＰ５－Ｐ６間が2.19m，Ｐ６－Ｐ７間が1.64m，Ｐ７－Ｐ８間が1.46mで，1.46～2.19m（平均1.78m）である。桁行方向南辺・北辺ともに西端のＰ３－Ｐ４間（2.13m）・Ｐ５－Ｐ６間（2.19m）が他の柱穴間（1.46～1.68m，平均1.59m）に較べて1.4倍広い。梁行方向の柱間距離は西辺・東辺ともに2.79mと等しく，桁行方向の柱間距離の平均値の1.6倍である。各柱穴の規模は，Ｐ１＝長径22cm×短径20cm，深さ７cm，Ｐ２＝径20cm，深さ15cm，Ｐ３＝長径22cm×短径20cm，深さ16cm，Ｐ４＝長径21cm×短径20cm，深さ17cm，Ｐ５＝長径23cm×短径20cm，深さ８cm，Ｐ６＝長径24cm×短径20cm，深さ６cm，Ｐ７＝径16cm，深さ９cm，Ｐ８＝長径40cm×短径26cm，深さ21cmである。長径16～40cm（平均24cm），短径16～26cm（平均20cm），深さ６～21cm（平均12cm）で，ほぼ径20cm前後，深さ数～20cm程度，柱穴底面の標高は336.61～336.84m（平均336.75m）である。Ｐ１・Ｐ３・Ｐ４からは弥生土器片が出土しているが，いずれも図示できなかった。



第24図　掘立柱建物跡実測図（５）（1:60）ＳＢ14

⑧ＳＢ15（第25図）

ＳＢ15は調査区中央，ＳＢ14の北東４ｍに位置する桁行３間×梁行１間の掘立柱建物跡である（標高336.7～337.1m）。中央谷筋に東接し，調査区の最も低所側の，ほぼ東から西にごく緩やかに下る平坦地（傾斜角度３°）に位置する。建物の主軸は東北東－西南西方向を指し（N58° E），等高線に斜交する。建物の規模は，桁行方向（南辺）6.51m，同（北辺）6.40m，梁行方向（東辺）2.44m，同（西辺）2.60m，建物面積16.2㎡で，平面形不整長方形である。建物の長方形度は2.55と細長い。各柱間距離は，桁行方向（南辺）のＰ１－Ｐ２間が1.95m，Ｐ２－Ｐ３間が1.59m，Ｐ３－Ｐ４間が2.97m，桁行方向(北辺)のＰ５－Ｐ６間が2.74m，Ｐ６－Ｐ７間が1.60m，Ｐ７－Ｐ８間が2.06mで，全体では1.54～2.96m（平均2.14m）とかなり幅がある。南辺・北辺ともに中央のＰ２－Ｐ３間・Ｐ６－Ｐ７間が最も狭く（1.54m・1.60m），次いで東端のＰ１－Ｐ２間・Ｐ７－Ｐ８間（1.94m・2.06m），そして西端のＰ３－Ｐ４間・Ｐ５－Ｐ６間（2.96m・2.74m）が最も広い（他の柱穴間の1.4～1.8倍程度）。梁行方向の柱間距離は2.44～2.60mで，桁行方向の柱間距離の平均値の1.2倍である。各柱穴の規模は，Ｐ１＝長径21cm×短径20cm，深さ11cm，Ｐ２＝長径22cm×短径21cm，深さ14cm，Ｐ３＝長径20cm×短径18cm，深さ８cm，Ｐ４＝長径22cm

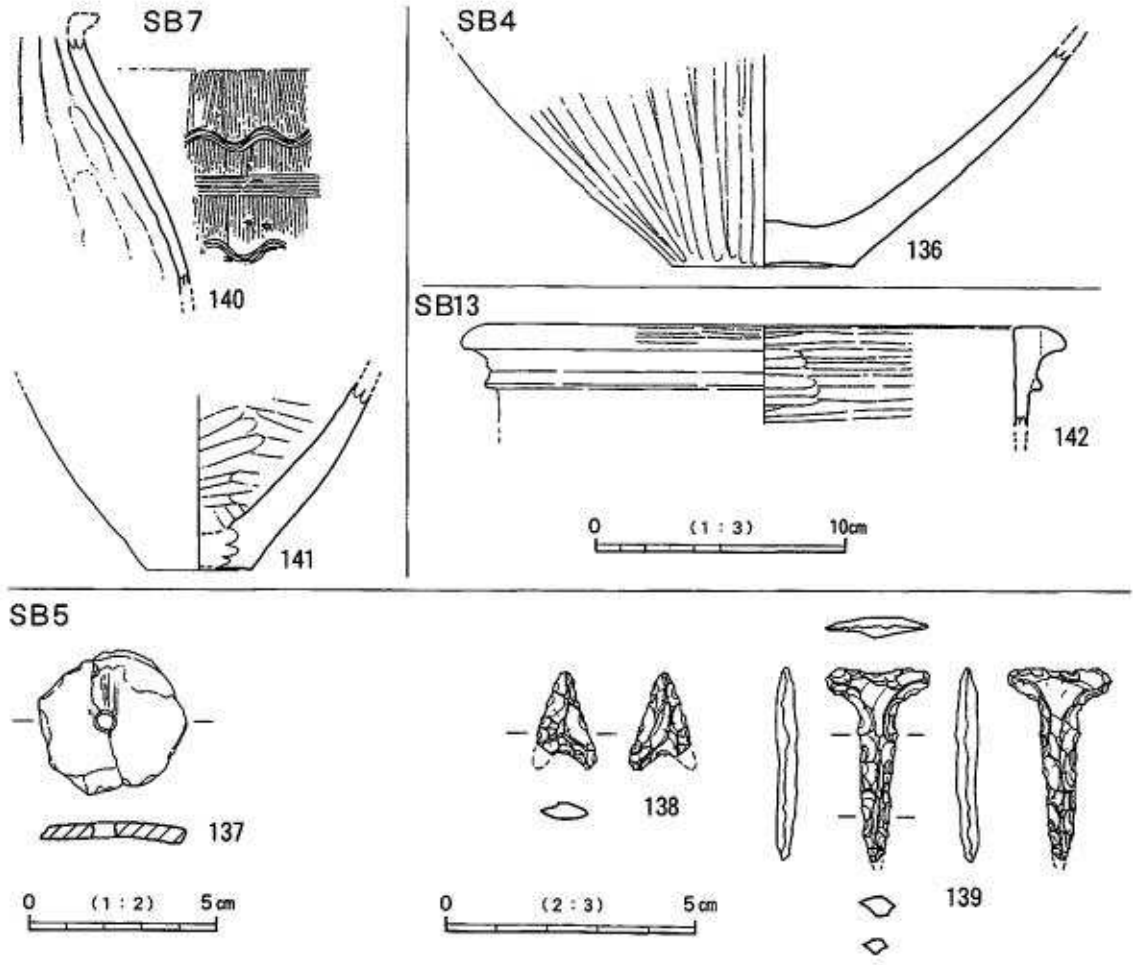


第25図　掘立柱建物跡実測図（６）（1:60）ＳＢ15

×短径20cm，深さ７cm，Ｐ５＝長径27cm×短径24cm，深さ19cm，Ｐ６＝長径24cm×短径22cm，深さ16cm，Ｐ７＝長径28cm×短径22cm，深さ16cm，Ｐ８＝長径20cm×短径18cm，深さ５cmである。長径20～28cm（平均23cm），短径18～24cm（平均21cm），深さ５～19cm（平均12cm）で，径20～30cm，深さ数～20cm程度の規模である。柱穴底面の標高は336.54～336.99m（平均336.786m）である。出土遺物はない。

⑨ＳＢ16（第23図）

ＳＢ16は調査区北東側の墓域近くにある桁行２間の建物で，梁行については明確でない（標高338.7m）。ほぼ南から北に下傾するごく緩やかな斜面（傾斜角度５°）に立地する。建物の主軸は東北東－西南西を指し（N68° E），等高線に並行する。建物の規模は，桁行方向（南辺）3.30mである。各柱間距離は，Ｐ１－Ｐ２間が1.71m，Ｐ２－Ｐ３間が1.59mで，平均値は1.65mである。各柱穴の規模は，Ｐ１＝長径20cm×短径18cm，深さ38cm，Ｐ２＝長径35cm×短径29cm，深さ32cm，Ｐ３＝長径40cm×短径33cm，深さ46cmである。長径20～40cm（平均32cm），短径18～33cm（平均27cm），深さ32～46cm（平均39cm）で，ほぼ径20～40cm，深さ30～50cmの規模である。柱穴



第26図　ＳＢ４・５・７・13出土遺物実測図（1:3，1:2，2:3）

底面の標高は338.3～338.41m（平均338.34m）である。柱穴の平面規模が他の掘立柱建物跡に較べてやや大きく，深い。出土遺物はない。

（4）墓坑

計10基の墓坑は調査区の北東端の，東西24m，南北５mの範囲に集中しており，北側調査区外に広がる可能性もある。標高338～339.5mの間の，ほぼ南東から北西方向にごく緩かに下傾する斜面（傾斜角度５°）に等高線に沿うように東西方向に列状に並ぶ。最も西にＳＫ１・ＳＫ２，最も東にＳＫ８・ＳＫ10がある。土坑墓の可能性のあるＳＫ３以外は，墓坑底面の小口や側壁沿いに細い棺材を嵌め込む溝や底面の凹みなどが認められることから，いずれも木棺墓と考えられる。墓坑は長さ72～169cm，幅43～73cmの長方形あるいは隅丸長方形をなし，納められた木棺は長さ45～130cm，幅20～50cm程度の箱形の組合式木棺と考えられる。墓坑の主軸方位は，北東－南西方向の３基（ＳＫ３・５・６）と東北東－西南西方向・東西方向の７基（ＳＫ１・２・４・７～10）に集まり，後者が優勢である。頭位については必ずしも明確ではないが，西・南西が６基，東・北東が４基と拮抗する。木棺は，墓坑の底面に小口板を，小口壁に側板を差し込むための溝状の穴をもつもの（Ａ類），墓坑底面に木棺小口板を差し込む溝状穴をもつもの（Ｂ類），墓坑底面中央に屍床坑をもつもの（Ｃ類）があり，各３基存在する。各墓坑内からは石鏃をはじめ，管玉や弥生土器片などが出土した。石鏃はＳＫ４～８の５基の墓坑から１～12点出土している。特に，２基の木棺墓が並列してつくられているＳＫ５・６では１基あたり10～12点の石鏃が出土しており，注目される。管玉はＳＫ１の底面から出土した。

①ＳＫ１（第27図，図版８ａ）

調査区北東側，墓坑群の南西端に存在する木棺墓（Ａ類）である（標高338m）。主軸はほぼ東西方向を指し（N80°E），等高線に斜交する。平面隅丸長方形の墓坑の規模は長さ75cm，幅43cmと小型で，墓坑底面の壁際に幅10～20cm，深さ２～８cmの比較的幅広で深い溝状穴が掘り込まれており，木棺棺材（小口板・側板）を差し込むためのものと考えられる。東小口の溝のみは壁から最大７cm離れて掘り込まれている。この小口溝の外側の平坦面は溝に囲まれた棺床面に較べると若干高いがそれほど目立った段差とはなっていない。木棺の推定復元規模は長さ54cm，幅30cm程度で，小口板を側板が挟み込む形態の箱形の組合式木棺とみられる。頭位は棺床の幅が幾らか広い東側と推定される。

出土遺物（第32図145，図版18）　墓坑底面中央から管玉１点が出土した。

145は高さ１cm，径0.4cmの淡灰緑色の硬質の珪質凝灰岩製のものである。上端の外縁に一部欠損がみられ，上下端面の孔の内縁に使用に伴う擦れた痕がみられる。

②ＳＫ２（第27図，図版８ｂ）

ＳＫ１の１m北にほぼ並行して存在する木棺墓（Ａ類）である（標高338m）。墓坑の主軸は東

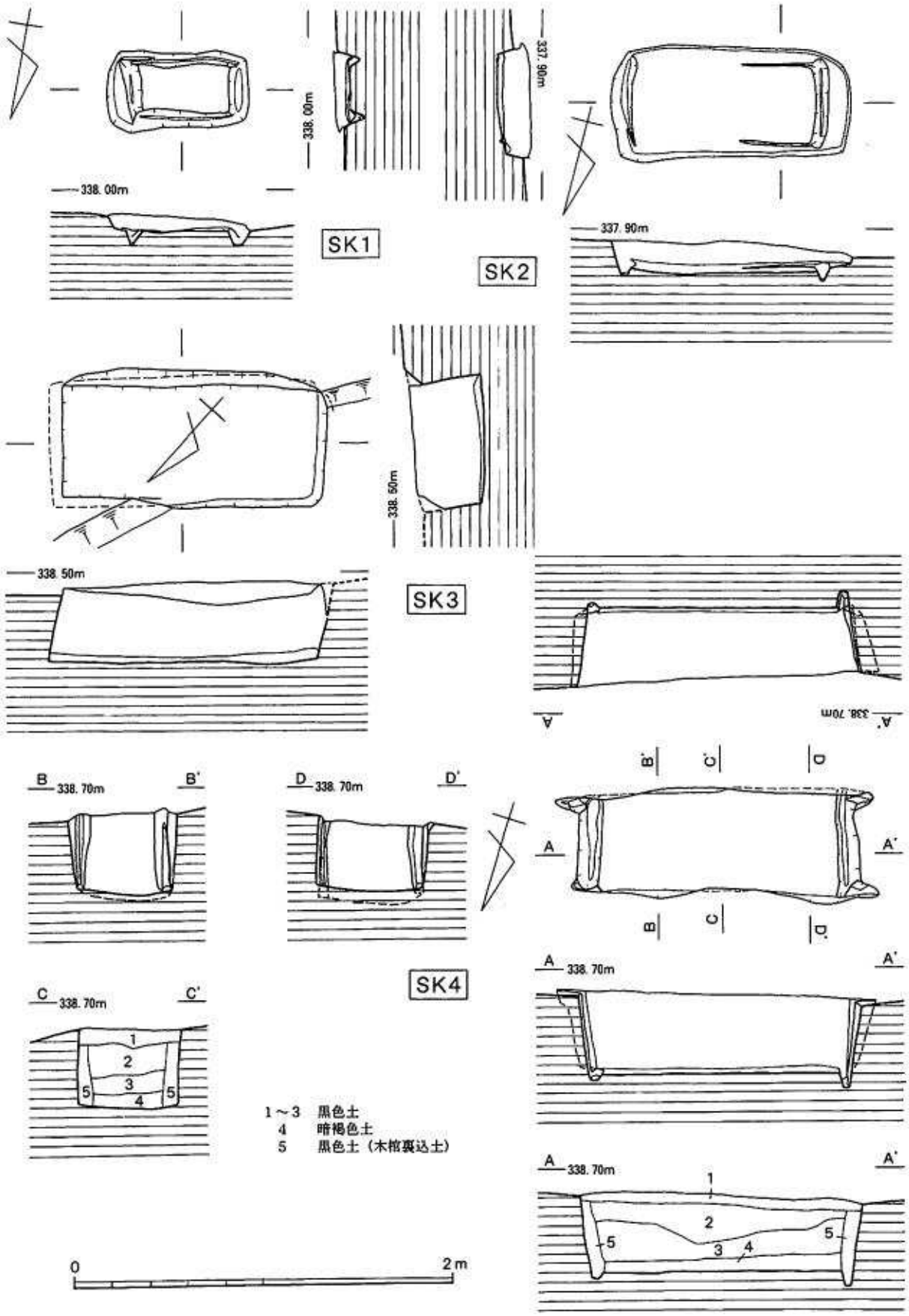
北東－西南西を指し（N75° E），等高線に斜交する。墓坑の平面形は隅丸長方形で，長さ127cm，幅61cm，深さ18cmである。坑底の両小口側と西半の両側壁際に細い溝が掘り込まれており，木棺の棺材（小口板・側板）を差し込んだ痕とみられる。小口の溝は幅13～15cm，深さは西小口の溝がやや深く６～７cm，東小口の溝の深さは１～４cmである。東小口の溝は小口壁に接しているが，西小口の溝は小口壁から最大11cm離れている。しかし，この部分と溝の内側の坑底とは高低差は殆どない。側壁際の溝は西小口の溝から連なっており，幅・深さ１～２cmとごく部分的である。これら木棺棺材固定用の溝に囲まれた棺床面は中央が緩く凹むが高低差は４cmに過ぎない。木棺の推定復元規模は長さ100cm，幅40cm程度で，側板を小口板が挟み込む形態の箱形の組合式木棺と考えられる。頭位は棺床面が若干高い東側と推定される。埋土から弥生土器片が出土したが図示できなかった。

③ＳＫ３（第27図，図版８ｃ）

ＳＫ２の５ｍ東に存在する土坑墓である（標高338.4m）。墓坑の主軸は北東－南西方向を指し（N48° E），等高線に並行する。墓坑の平面形は長方形で，長さ140cm，幅73cm，深さ42cmである。坑底面は検出面に較べて若干広がっており，断面形はやや台形気味である。土層断面や坑底への掘り込みなどによって木棺の存在を確認できなかったが，木棺の存在の可能性はある。坑底はほぼ水平であるが，やや北東小口側が南西小口側に較べて広いことから，頭位の可能性がある。埋土から弥生土器片が出土したが図示できなかった。

④ＳＫ４（第27図，図版９ａ・14ｈ）

ＳＫ３の２ｍ東に存在する木棺墓（Ａ類）である（標高338.6m）。墓坑の主軸は東北東－西南西を指し（N73° E），等高線に斜交する。墓坑の平面形は長方形で，長さ169cm，幅57cm，深さ44cmである。坑底の両小口壁際に木棺小口板を差し込むための溝が掘り込まれている。この溝の幅は13cm，深さは東小口の溝が３cmであるのに対して，西小口の溝は５～８cmと深い。また，両小口壁の側壁際の四隅には縦方向の溝が掘り込まれている。幅16～20cm，奥行きは検出面側が10～26cm（東小口壁北側壁際のみ奥行きが短く，ほかの３か所は長い），坑底面側が10～16cmと細くなる。この縦方向の溝は，木棺側板の小口を嵌め込むための溝と考えられる。木棺側板については，土層断面図の黒色土（第５層・木棺裏込土）の存在から明らかであるが，坑底面においてもごく浅い溝状の痕跡を確認したもののあまり明確でなく，図示できていない。いずれにしろ，本木棺は坑底面の溝状の穴に小口板を差し込んで固定し，側板は主にその小口を両小口壁の溝に嵌め込むことで固定したものとみられる。これらのことから，この木棺は小口板を両側板が挟み込む形態のものとみられる。ただ，小口板を差し込む溝状の穴が側板痕跡と交差していることから，木棺の小口板の下端は側板を突き抜けていたことになる。このことは，側板の小口を差し込む縦方向の溝の上方が深く坑底側がやや浅くなっていることから，側板の小口は垂直ではなくやや下方に向かって窄まる形態であったと考えられることと符合する。木棺の推定復元規模は長さ130



第27図　墓坑実測図（1）(1:30) ＳＫ１～４

cm，幅50cmである。西小口側の幅がやや広いことから，頭位は西側と考えられる。

出土遺物（第32図146，図版18） 埋土から石鏃１点が出土した。また，弥生土器片が出土したが図示できなかった。

146は先端と右脚端を折損する，やや細身の小型石鏃で，現状の長さ1.9cm（推定復元値2.5cm程度），幅1.4cmである。基部は，Ａ面２枚，Ｂ面３枚のやや深い剥離を加えて抉りの深い凹基を形成する。なお，Ａ面両側縁中央付近に部分的に鋸歯状の小剥離がみられる。

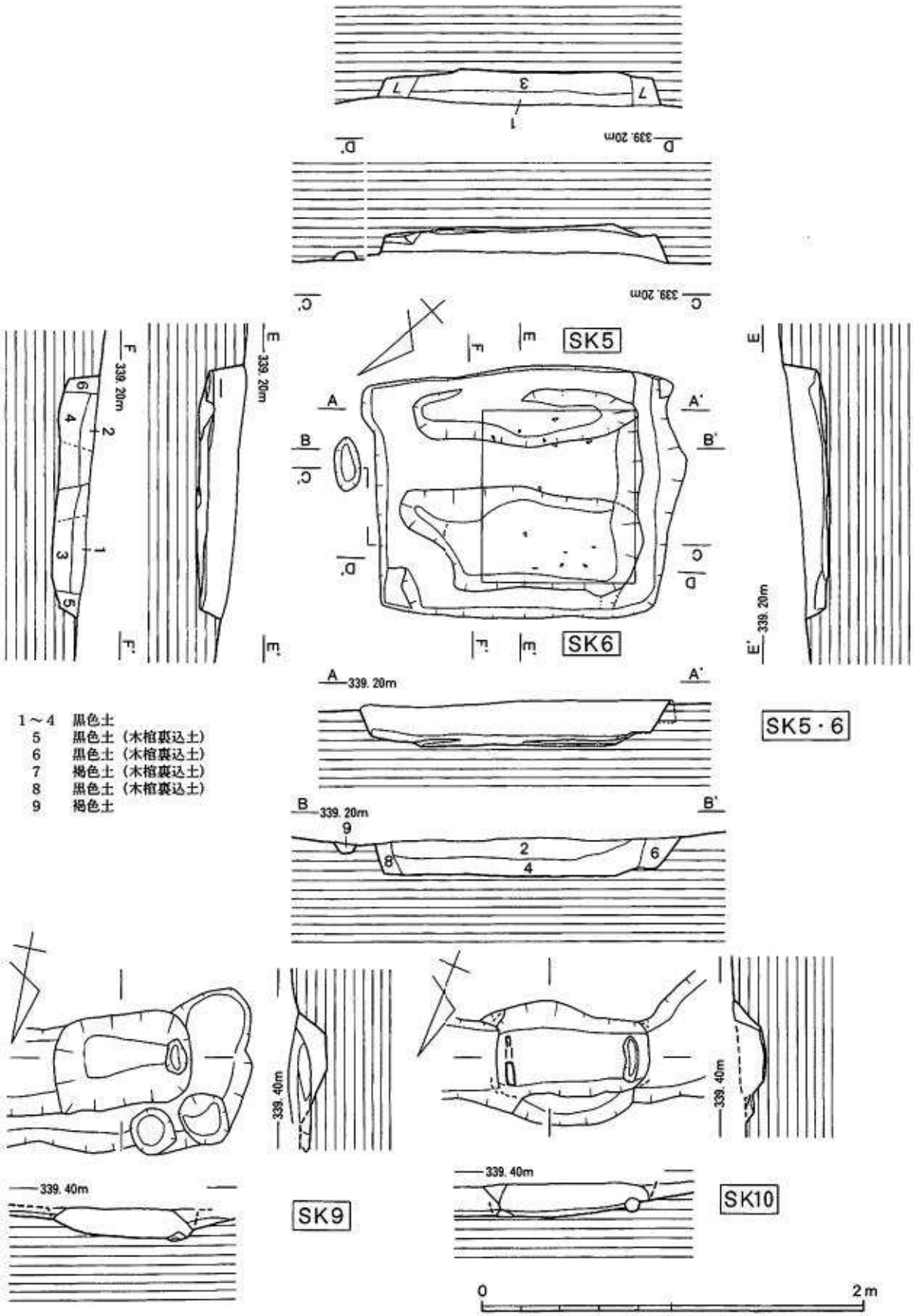
⑤ＳＫ５・ＳＫ６（第28・29図，図版９ｂ・９ｃ・10ａ）

この２基はひとつの墓坑のなかに並列して営まれているようにみえるが，土層断面の観察によれば，先後関係があり，南東側のＳＫ５が古く，北西側のＳＫ６が新しい。しかし，検出時に平面プランでの切り合いは明確には把握できなかった。ＳＫ５が先行して造られ，その後あまり時を置かずにその北西側に並列させてＳＫ６の墓坑を掘り込んだものと考えられる。このＳＫ５・ＳＫ６は，ＳＫ４の５ｍ東に存在する木棺墓２基（いずれもＣ類）である（標高339.0～339.1ｍ）。墓坑の主軸はいずれも北東－南西を指し（ＳＫ５＝Ｎ42°Ｅ，ＳＫ６＝Ｎ45°Ｅ），等高線に並行する。墓坑の平面形は長方形で，長さ155～163cm，幅131cm，深さ21～23cmである（幅は２基の墓坑をあわせたもの）。南西小口側の墓坑底面は１～５cm高い段になっている。北隅にも同様の段の残欠状のものがみられる。また，ＳＫ５の墓坑の南東側壁側の南西小口壁には幅10cm，奥行き９cm，高さ12cmほどの縦方向の掘り込みがみられる。北東小口壁の南東側壁側も幅25cm，奥行７cmほど緩やかに突出している。これらはいずれもＳＫ５の木棺の南東側板の両小口を差し込んだ痕とみられる。墓坑の底面は若干北東小口側が高いがほぼ水平で，この坑底に北東－南西軸の不整長方形～長楕円形の浅い掘り込み２基が北西－南東に並列した状態でみられる。いずれも遺体を置くためのいわゆる屍床坑とみられ，南東側のＳＫ５の屍床坑は長さ117cm，幅30cm，深さ２～３cmで，平面形は不整長楕円形である。北西側のＳＫ６の屍床坑は長さ124cm，幅53cm，深さ４cmで，平面形は不整隅丸長方形である。屍床坑の底面はいずれもほぼ水平である。土層断面及び屍床坑から復元される木棺の推定規模はＳＫ５が長さ120cm，幅50cm，ＳＫ６が長さ110cm，幅50cm程度とみられる。頭位はあまり明確ではないが，検出面の標高がいくらか高く，坑底面からやや高い段を伴う南西側の可能性が高い。

出土遺物

ａ．ＳＫ５（第32図147～158，図版18） 石鏃12点が出土した。147・150・152・154～157の７点は出土位置が判明しており，152のみはＳＫ６の屍床坑の南東側辺直上10cmで出土し，ＳＫ６に伴う可能性がある。他の６点はＳＫ５の屍床坑の南西小口側に寄った52cm×15cmの範囲の坑底面上で出土した。石鏃の先端は，頭位である南西小口側を向くもの３点（147・155・156），ＳＫ６側の北西側辺を向くもの３点（152・154・157），南東側辺に向くもの１点（150）である。なお，148・149・151・153・158の５点は埋土中からの出土である。

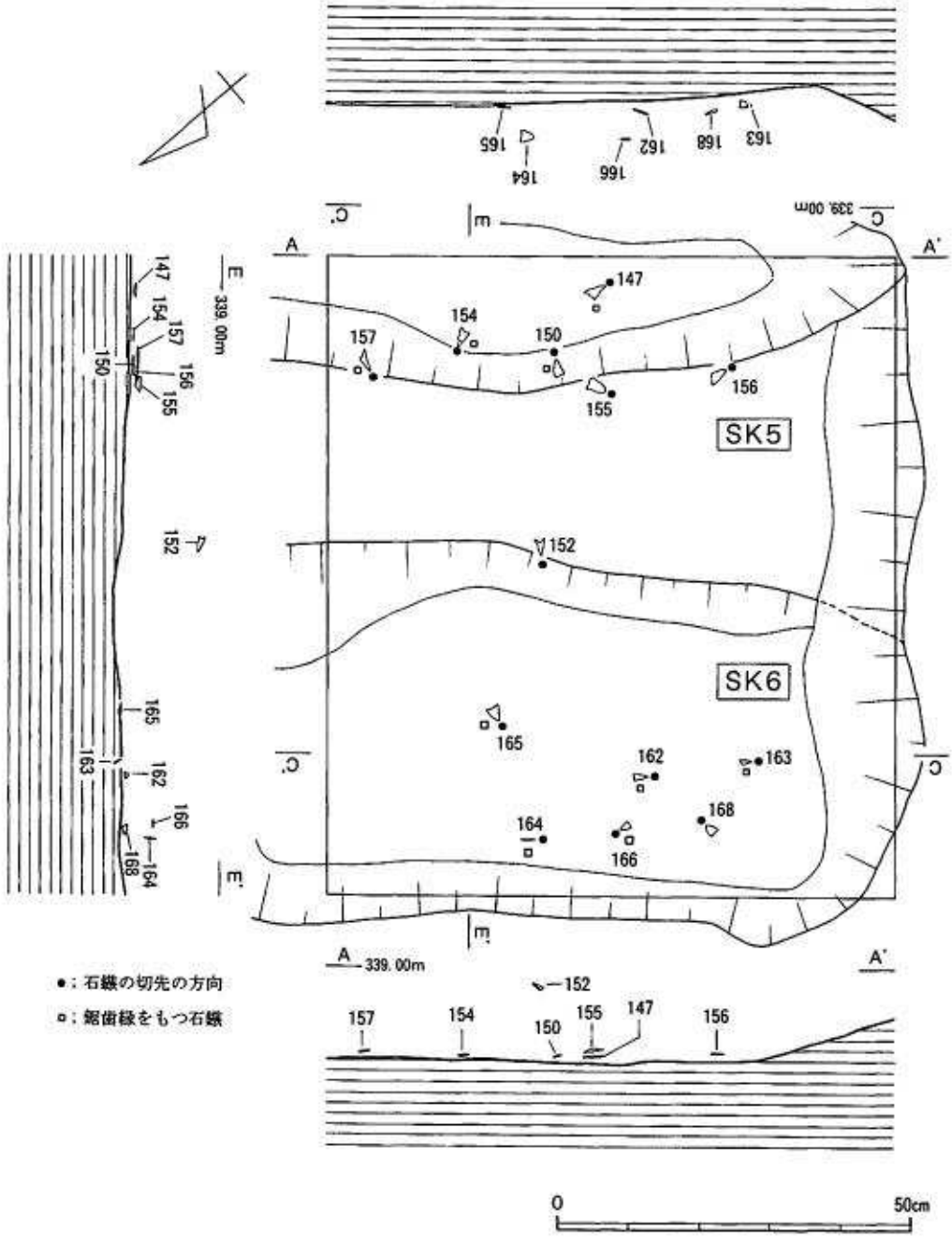
完形品は150のみで，ほかは先端・脚・右半など何れかの部位を失っている。特に先端を失って



1～4　黒色土
5　黒色土（木棺裏込土）
6　黒色土（木棺裏込土）
7　褐色土（木棺裏込土）
8　黒色土（木棺裏込土）
9　褐色土

第28図　墓坑実測図（2）（1:30）ＳＫ５・６・９・10

いるものが７点と多い。148・151～153・156の５点はＡ・Ｂ両面に先端側からの加撃による同時剥離の剥離痕がみられる。いずれも，刺突時の衝撃に伴う剥離痕である可能性が高い。155はＢ面のみに折損に伴う剥離痕がみられるが，その形状などが類似することから，同様の剥離痕と考えられる。また，149・157はいずれも縦方向の加撃によって右半分を失っており，折損面は樋状剥離痕状をなす。149は先端側から，157は基部側からの加撃により，基部にも同じ加撃によるとみられる折れが存在することから，これらも刺突時の衝撃に伴う剥離痕の可能性が高い。以上のように，ＳＫ５出土の石鏃の７割弱の計８点が刺突によるとみられる剥離痕を有していることに



第29図　ＳＫ５・６石鏃出土状況実測図（1:10）

なる。側縁の形状は大半が直線的だが，150・156の２点は外湾気味で丸みをもつ。157は逆に内湾気味で反っている。脚部は大半が尖り気味だが，149は丸みをもち，150は角張る。基部は凹基７点と優勢だが，平基も３点（150・151・153）存在する。凹基の抉り指数は0.1～0.2と浅い。Ａ・Ｂ両面に素材面を大きく残す例が多い（153～157など）。法量は完形品が少なく明確ではないが，現存値は長さ1.1～2.6cm（完存値３資料1.9～2.5cmの平均値2.13cm，推定復元値1.5～2.6cmの平均値2.12cm），幅0.75～1.5cm（完存値７資料1.1～1.45cmの平均値1.26cm），重さ0.14～1.06ｇ（完存値１資料0.61ｇ）で，長さ2.1cm，幅1.3cm程度と考えられる。側縁に鋸歯状の小剥離が顕著にみられるものが多く，147・150・153・154・155は両側縁に顕著に認められる。148はＡ面左側縁（Ｂ面右側縁）にのみ顕著にみられる。157はＡ面左側縁（Ｂ面右側縁）には顕著に認められるが，右半は不明である。各側縁の剥離順では，竪穴住居跡出土の石鏃では少数派であったｂ（基部側から先端側に剥離作業が進むもの）が最も多く，多数派だったａ（先端から基部側に剥離作業が進むもの）・ｃ（側縁中央から先端・基部側へと剥離が進むもの）・ｄ（先端・基部から側縁中央に剥離作業が進むもの）のうち，ａ・ｃはそれほどでもないが，ｄが４例と激減している。もう少し細かくみてみると，多数派のｂはＡ面左側縁では少ない。逆に，Ａ面左側縁では多いａはＡ面右側縁やＢ面右側縁では少なく，Ｂ面左側縁では皆無である。同じ傾向はｃでも言えて，Ａ面左側縁では多数派だが，ほかの部位では比較的少ない。即ち，Ａ面左側縁ではａ・ｃが多数派で，ｂは少ないのに対して，Ｂ面の両側縁とＡ面右側縁はｂが多数派で，ａ・ｃ・ｄは比較的少ない。これらのことから，ＳＫ５出土の石鏃はＡ面左側縁の剥離順と他の側縁の剥離順のパターンが異なるといえる。

147は右脚部を欠失しているが，現状の長さ1.9cmの細身の石鏃である。基部は，Ａ・Ｂ面とも各２枚程度の剥離を加えて比較的浅い抉りの凹基を形成している。両側縁には１㎜ほどの深さの鋸歯状の剥離を加えている（Ａ面左側縁で６枚，Ａ面右側縁で４枚以上）。148は小型の石鏃で上半を折損しており，Ａ・Ｂ両面に先端側からの加撃に伴う同時剥離の剥離痕がみられる。基部は，Ａ・Ｂ両面ともに大きく深い剥離各１枚によって浅い抉りの凹基を形成している。Ａ面左側縁に５枚以上の鋸歯状の剥離がみられる。149は先端側からの加撃により右半分が欠失している。基部については不明である。Ａ面左側縁に５枚の鋸歯状の剥離がみられる。150は両側縁中央がやや丸みを帯びた長擬宝珠形の平面形で，無調整の基部は平基である。Ａ面左側縁に４～５枚，Ａ面右側縁に６枚の鋸歯状の剥離がみられる。151は先端を破損しており，Ａ・Ｂ両面に剥離痕各１枚を残す。Ａ面側のものはごく小さな剥離だが，Ｂ面側の剥離痕は比較的大きく，これらは先端側からの加撃に伴う同時剥離によるものとみられる。基部・両側縁への調整剥離はあまり明確でなく，剥離そのものも小さく疎らであることから，未成品の可能性もある。152はごく僅かに内湾気味の側縁をもつ細身の石鏃で，先端を僅かに欠損している。Ａ・Ｂ両面に各１枚のごく小さな剥離がみられ，先端側からの加撃による同時剥離に伴うと考えられる。基部は，Ａ面１枚，Ｂ面２枚の大きくやや深い剥離を加えて浅い抉りの凹基を形成する。153は先端と右脚端を欠損しているが，やや幅広で側縁中央が膨らみをもつ長三角形状である。先端部の折損に伴う剥離痕が

A・B両面に各1枚存在する。A面側の剥離痕は大きく，B面側の剥離痕は小さいが，これらは先端側からの加撃に伴う同時剥離によるものとみられる。A面左側縁で6枚以上，A面右側縁で7枚以上の鋸歯状の剥離がみられる。A面上半では両側縁から比較的深い剥離で素材面を除去しているが，A面下半とB面では側縁・基部とも浅く小さな剥離を連続的に行う。また，A面の剥離痕は全体に厚いが，B面のそれは全体に極めて薄い。基部はA・B面とも比較的浅い剥離3枚程度を下方から加えて平基を形成している。A面下半中央とB面に大きく素材面を残す。154はB面側からの加撃により先端を折損したやや幅広の石鏃である。すべての側縁・基部において，調整剥離は小さく浅い。基部は，A面右脚部はやや突出させて脚状にしているが，A面左脚部の突出は明確でない。基部は，B面ではやや不明確だが，A面では下方から数枚の浅い剥離を加えている。抉りはあまり明確でなく，ごく浅い凹基か平基であろう。A面左側縁で4枚以上，A面右側縁で4～5枚以上の鋸歯状の剥離がみられるが，A面右側縁の剥離はやや浅い。155は扁平でやや幅広の石鏃で，先端側を折損している。B面側に比較的大きな剥離痕がみられ，先端側からの加撃に伴うとみられる。側縁・基部の調整剥離は小さく浅い。特に，A・B面基部とB面左側縁の調整剥離はごく小さく浅く，疎らである。基部は，A面3枚，B面1枚のごく浅い剥離を加えて抉りの浅い凹基を形成する。A面左側縁には5枚以上の鋸歯状の剥離があるが，A面右側縁では下半に2枚程度みられるだけである。156は先端側と右脚部を欠失している。先端にはA・B両面に各1枚の先端側からの加撃に伴う同時剥離の剥離痕がある。A面側の剥離は小さいが，B面側の剥離痕は比較的大きい。側縁が丸みをもつ幅広の石鏃で，基部・側縁ともに比較的小さく浅い調整剥離を加える。基部は，一方の脚部を失っており明確ではないが，A・B両面ともに1～3枚程度のやや浅い剥離を加え，抉りの比較的深い凹基を形成していると考えられる。157は右半分を基部側からの加撃によって欠失したもので，基部にもこれに伴うとみられる小さな折損がみられる。特に前者の折損面は基部側からの加撃による樋状剥離痕状の剥離痕で，刺突時の衝撃に伴う可能性が強い。側縁中央で緩やかに湾曲する形状のやや長い石鏃である。基部の形状は不明である。側縁は，比較的粗い剥離を加えている。あまり深くないが，鋸歯状の剥離の可能性が高い。158は未成品の可能性のあるものである。A・B面中央に素材面を残し，A面右側縁・B面左側縁に2～4枚の連続的な剥離がみられる。

b．ＳＫ６（第32図143・159～168，図版18）　弥生土器片1点と石鏃10点が出土した。

弥生土器片143は壺の体部片と思われるもので，埋土から出土した。調査区内出土の202と同一個体の可能性がある。調整は内面が指頭によるナデ，外面は縦方向の細かいハケ目ののち櫛描文（直線文ののち鋸歯文）を密に施す。

石鏃10点は頭位である南西小口側に寄った屍床坑底面の北西側辺側の20cm×38cmの範囲で出土した。164・166が坑底から数cm浮いているがほかは坑底に貼りついた状態である。石鏃の先端は168が北東側（足位側）に，165が北西側辺側を向いている以外はいずれも頭位である南西小口側を向く。なお，159～161・167の4点は埋土中からの出土である。

10点のうち完形品は4点と比較的多い（159・164・165・167）。ほかの6点は先端・脚などに欠

損がある。先端側を失っているのは４点で，161・166は先端側からの刺突時の衝撃による折損とみられるが，163・168はＡ面側に加わった力による単純な折れである可能性が高い。また，160・162は中央で折れたものが接合したもので，前者はＢ面側，後者はＡ面側に加わった力による折れと考えられる。側縁はいずれもほぼ直線状である。脚部は大半が尖り気味だが，165の片方の脚と167は角張る。基部は凹基が７基と主体を占めるが，平基が２基ある（161・164）。凹基の抉り指数は0.1～0.3で，やや深いものがある（162・165）。多くがＡ・Ｂ両面に素材面を残す。広く素材面を残すものもあるが，ＳＫ５の石鏃に較べると素材面の残存範囲は狭く部分的である。法量は，完形品が４点と比較的多くやや実態に近い数値が窺える。法量は現存値で長さ1.3～3.05cm（完存値５資料1.5～3.05cmの平均値1.89cm，推定復元値1.5～3.05cmの平均値1.98cm），幅1.0～1.55cm（完存値７資料1.1～1.55cmの平均値1.26cm），重さ0.35～0.74ｇ（完存値４資料0.38～0.62ｇの平均値0.52ｇ）で，ほぼ長さ２cm，幅1.3cm，重さ0.5ｇ程度と考えられ，ＳＫ５の石鏃に較べてやや小振りである。鋸歯状の剥離は162・163・166の３点では両側縁に顕著にみられるが，165・167は一方の側縁では顕著にみられるものの，もう一方ではあまり明確ではない。161・164は片方の側縁に疎らにみられるだけである。ＳＫ５に較べると，鋸歯状剥離の頻度はやや低い。両側縁の調整剥離では交互剥離の頻度が比較的高い。各側縁の剥離順については，ｂ（基部側から先端側へ剥離作業が進むもの）が特に多く，次いでａ（先端から基部へと剥離作業が進むもの）が多い。ｃ（側縁の中央から先端・基部へ剥離作業が進むもの）やｄ（側縁の先端や基部側から中央へ剥離作業が進むもの）は少数派である。Ｂ面左側縁・Ｂ面右側縁はａ・ｂともに多数派であるが，Ａ面右側縁ではａはなく，ｂが圧倒的多数を占め，ｃ・ｄはごく少ない。Ａ面左側縁ではａ～ｅがすべて同じ割合でみられる。つまり，Ｂ面とＡ面左側縁，Ａ面右側縁の三者三様のあり方を示していることになる。

159は長さ1.6cm，重さ0.38ｇの小型の石鏃で，比較的整美な形状である。基部は，Ａ面に浅く広い剥離２枚，Ｂ面に小剥離２～３枚を加えてごく浅い抉りの凹基が形成されている。160は未成品で，上下に折れたものが接合した例で，基部は折損している。側縁の調整剥離が比較的大きな剥離２，３枚のみであることや，Ｂ面右側縁などにおいて階段状剥離が顕著であることなどから，石鏃以外のものである可能性もある。161は左側縁がやや内湾気味の細身の石鏃で，先端と右脚端部を欠損している。Ａ・Ｂ両面に先端側からの加撃による同時剥離の小剥離痕各１枚がみられることから，これらは刺突時の衝撃に伴うものと考えられる。基部は，Ａ・Ｂ面とも３枚ずつの比較的深い剥離を加え，平基を形成する。Ａ面右側縁中央に鋸歯状の剥離２枚がみられる。162は細身で鋭い先端をもつ石鏃で，右脚端部を欠失しているがほぼ完形品である（長さ3.05cm）。中央で折れている。左側縁に９枚，右側縁に７枚程度の鋸歯状の剥離がみられるが，後者はやや不明確である。基部調整は明確でない。163は上半をＡ面側からの加撃によって失っている。Ａ面左側縁で４枚以上，Ａ面右側縁で５枚以上の鋸歯状の剥離を残すが，いずれもあまり深くなく，やや不明確である。基部は，Ａ・Ｂ面各２枚ずつ深く大きな剥離を加えて，浅い抉りの凹基を形成する。164は，長さ1.5cm，幅1.2cm，重さ0.51ｇの完形の小型石鏃である。Ｂ面右側縁中央に鋸

歯状の剥離２枚程度が残る。基部は，Ａ面４枚，Ｂ面１枚の剥離を加え，平基を形成する。全体にＡ・Ｂ面ともに左側縁の剥離は大きく深く，比較的整っているが，右側縁の剥離は小さく浅く不安定である。165は長さ1.7cm，幅1.2cm，重さ0.55ｇと小型の完形品で，側縁はやや丸みをもつ長三角形である。両側縁からの深い剥離によって素材面はほぼ除去されている。Ａ面左側縁に５枚程度の鋸歯状の剥離がみられるが，やや不明確である。基部は，Ａ面３枚，Ｂ面２枚の剥離を加え，ごく浅い抉りの凹基を形成するが，平基の可能性もある。166は上半を欠失している。Ａ・Ｂ両面に先端側からの加撃による剥離痕各１枚がみられる。Ａ面には大きな剥離痕が，Ｂ面には小剥離痕があり，刺突時の衝撃に伴って同時剥離した剥離痕とみられる。Ａ面左側縁で８枚以上，Ａ面右側縁で７枚以上の鋸歯状の剥離を残す。基部は，Ａ面１枚，Ｂ面４枚の比較的深い剥離を加えて，深く鋭い抉りの凹基を形成する。167は長さ1.6cm，幅1.55cm，重さ0.62ｇの完形品である。Ａ面左側縁の中央から下端にかけて連続的に８枚程度の鋸歯状の剥離を加え，Ａ面右側縁中央付近にもやや不明確だが４枚程度の鋸歯状の剥離がみられる。基部は，Ａ面２枚，Ｂ面１枚の剥離を加えて小さく浅い抉りが入るごく浅い凹基を形成している。側縁の形成は，Ｂ面では素材面の縁辺に比較的小さな剥離を連続的に行い，Ａ面では左側縁や右側縁上半で最初に深く広い剥離を加えたあと，縁辺に剥離を連続的に加えている。168は先端と左脚端部を折損する。先端の折れはＡ面側からの加撃によるものである。基部は，Ａ面４枚，Ｂ面５枚程度の深い剥離を加えて，ごく浅い抉りの凹基を形成する。脚端部は鋭く尖る。深く広い剥離を両側縁から加えており，素材面の残存も少ない。

⑥ＳＫ７（第30図，図版10ｂ・15ａ）

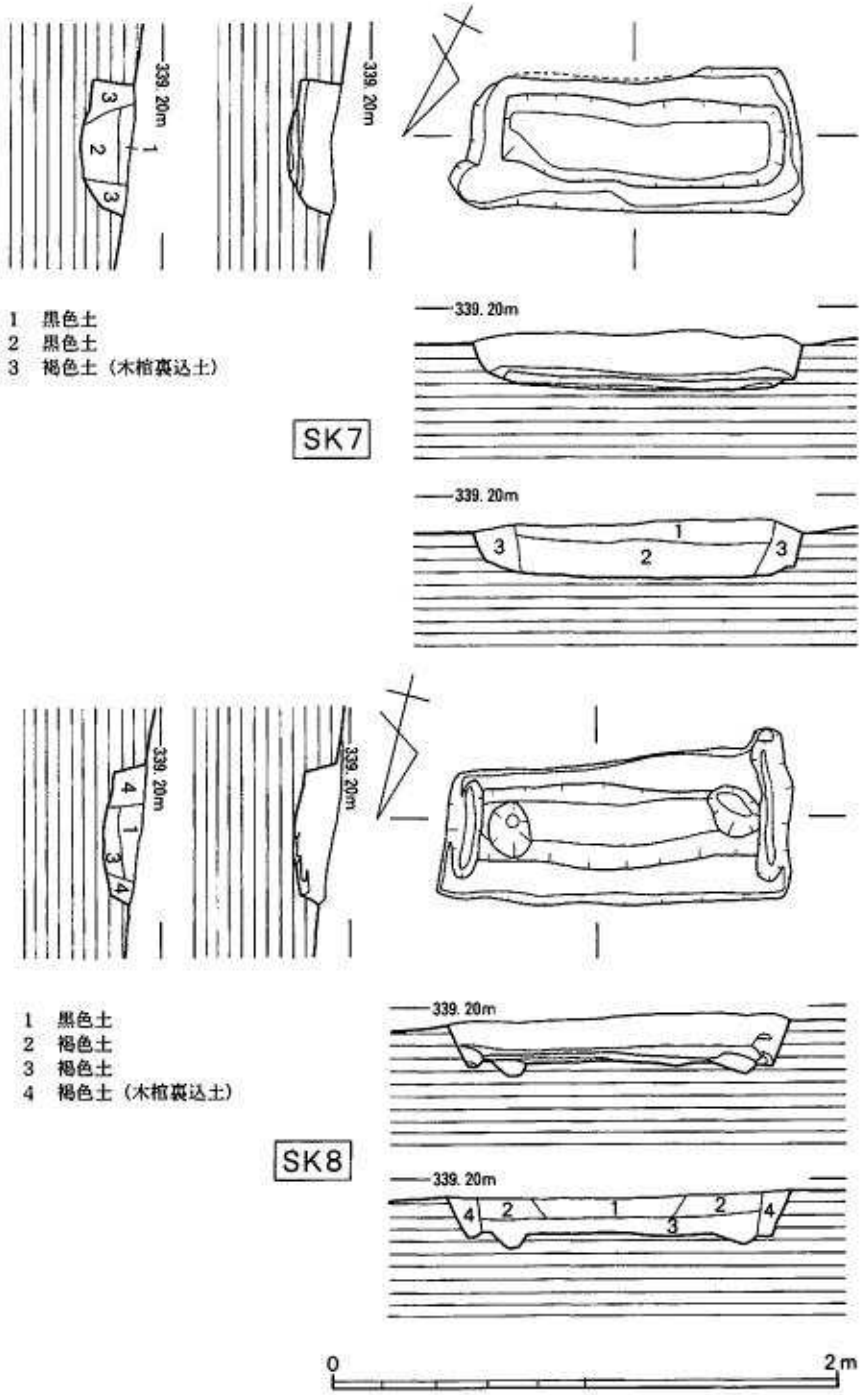
ＳＫ７はＳＫ５・ＳＫ６の東３ｍに存在する木棺墓（Ｃ類）である（標高339.1m）。墓坑の主軸は東北東－西南西を指し（N61° E），等高線に並行する。墓坑の平面形は長方形で，長さ140cm，幅57cm，深さ24cmである。墓坑底面の中央は長さ111cm，幅34cm，深さ１～４cmの長方形状に浅く凹んでおり，屍床坑となっている。屍床坑の底面は水平である。この屍床坑の周囲の坑底には，南北側壁側で幅４～12cm，東西小口側で幅３～９cmほどの平坦面がある。墓坑の東小口の北側が10cm程度突出しているが，これは木棺の北側板の東小口が差し込まれた痕とみられる。木棺の推定復元規模は長さ110cm，幅30cm程度と考えられる。遺体の頭位は屍床坑の幅が若干広い西側と考えられる。

出土遺物（第32図169～171，図版18）　埋土から石鏃３点が出土した。弥生土器片少量が出土したが，図示できなかった。

いずれも脚部を主体とする欠損がみられる。側縁はいずれも直線的で，脚部は尖り気味である。基部は169は不明だが，170はごく浅い凹基（平基に近い），171は抉り指数0.4（５㎜）とかなり深い凹基で，長い脚部が特徴的である。いずれも大きくＡ・Ｂ両面に素材面を残している。石鏃の大きさは，170・171が完形品に近いので，これらを中心に考えると，長さ1.8～2.2cm，幅1.3cm，重さ0.7ｇ程度とみられる。169・171には鋸歯状の剥離がみられる。169は両側縁に疎らに，171は

両側縁に顕著にみられる。

169は先端と基部を折損しており，A・B両面中央に大きく素材面を残して，側縁に連続的に小剥離を行う。A面左側縁では中央・上で3～4枚，下端で1枚，A面右側縁では下半で1～2枚の比較的浅い鋸歯状の剥離がみられる。170は長さ1.85cmのほぼ完形品で，整美な長三角形である。基部は，A面3枚，B面2枚の比較的浅い剥離を加えて，ごく浅い抉りの凹基を形成する。171は鋭利な先端をもつ石鏃で左脚部を欠失する。左側縁に5枚以上，右側縁に9枚ほどの鋸歯



第30図　墓坑実測図（3）（1:30）ＳＫ７・８

状の剥離がみられる。基部は，A・B面ともに深く大きな剥離1枚により抉りの深い凹基を形成する。脚部は尖り気味で長い。

⑦SK8（第30図，図版10c）

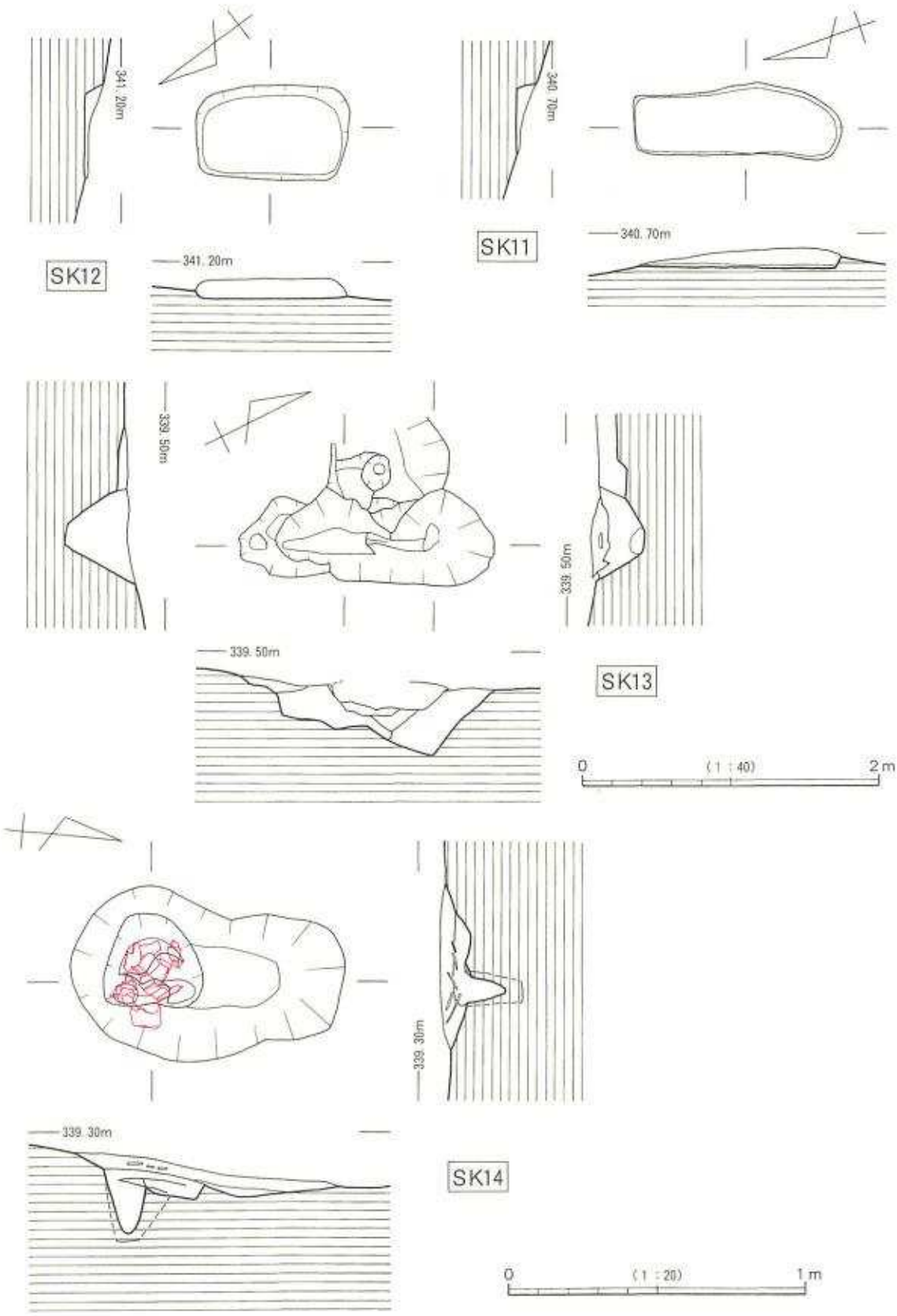
SK8は墓域の東端にあり，SK7の1m東に近接して存在する木棺墓（B類）である（標高339.2m）。墓坑の主軸は東北東－西南西を指し（N76° E），等高線に並行する。墓坑の平面形は隅丸長方形で，長さ138cm，幅47cm（東小口）·67cm（西小口），深さ20cmである。東西両小口の壁際の坑底面には直線的な溝状の穴が掘り込まれており，木棺小口板の差込穴と考えられる。それぞれの規模は，東小口のものが長さ38cm，幅10cm，深さ3～5cmで，西小口の穴は長さ60cm，幅10cm，深さ1～4cmである。東小口のものは側壁から2～6cm離れているが，西小口の穴は北側壁からは5cmほど離れているものの，南側壁を奥行き8cmほど掘り込んでいる。これは西小口板の南小口を差し込んで固定するためのものと考えられる。坑底面中央は，両小口板の差込穴に接して長さ110cm，東端幅53cm，中央最大幅69cm，西端幅50cm，深さ1～5cmの長方形状に凹む屍床坑となっている。屍床坑の底面はほぼ水平であるが，横断面は緩やかに凹む。屍床坑の東西両端には不整楕円形の浅い凹みがあり，東端の凹みは長径42cm×短径32cm，深さ5～6cm，西端の凹みは長径47cm×短径36cm，深さ4～8cmの大きさである。頭位と思われる西端の穴は頭部安置坑の可能性があるが，東端の穴についてはその機能は不明である。屍床坑の両側壁側は若干高い平坦面（幅10～30cm程度）となっており，この部分に木棺の側板が置かれたとみられる。SK8に納められた木棺は足位である東小口側は小口板を両側板が挟み，頭位である西小口側は両側板の小口に小口板を宛がう構造のものとみられ，その復元推定規模は長さ110cm，幅35cm程度と考えられる。

出土遺物（第32図172·173，図版18） 屍床坑底面中央の同じ箇所で石鏃2点が出土した。いずれも先端を失っており，刺突時の衝撃に伴う可能性が高い。鋸歯状の剥離をもつものはなく，各側縁の剥離順ではc（側縁中央から先端・基部側に剥離作業が進むもの）が主体である。

172は先端と基部を折損しており，側縁の剥離も不安定であることから，未成品の可能性がある。先端の折損に伴う剥離はA面側2枚，B面側1枚である。A面右側縁（B面左側縁）は比較的剥離の大きさが揃い，剥離作業も比較的安定して行われているが，A面左側縁（B面右側縁）は剥離の大きさが一定でない。173は先端を欠失しており，先端のB面側に刺突時の衝撃に伴うとみられる先端側からの加撃による比較的大きな剥離痕が存在する。現存長2.3cm，幅1.7cmの比較的大型品である。鏃身は細長く直線的で，外湾気味に短く延びた脚部は尖り気味で整美である。側縁の調整剥離は大きく深く，素材面を完全に除去している。基部は，ほぼA・B面1枚ずつの深い剥離により鋭くやや深い凹基を形成する。

⑧SK9（第28図，図版15b）

SK9は墓域の東半にある小型の木棺墓（B類）で，SK7の南2mにある（標高339.3m）。



第31図　土坑実測図（1:20，1:40）ＳＫ11～14

新旧は不明であるが，長さ4.5m，幅0.6m，深さ数～10cmほどの溝状の掘り込みと重複している。墓坑の主軸は東北東－西南西を指し（N78° E），等高線に並行する。墓坑の平面形は隅丸長方形で，規模は長さ72cm，幅48cm，深さ15cmである。坑底はほぼ水平だが，東小口側が若干高く，その高低差は４cmである。西小口側に長さ18cm，幅11cm，深さ５cmの溝状の穴がある。木棺の小口板差込用の穴と考えられるが，東小口側にはみられない。木棺は長さ45cm，幅20cm程度のごく小さなものとみられる。頭位は坑底がやや高く，幅が広い東小口と考えられる。出土遺物はない。

⑨ＳＫ10（第28図，図版15ｃ）

ＳＫ10はＳＫ９の東１m，ＳＫ８の南西１mに位置する小型の木棺墓（Ｂ類）で，ＳＫ９と同じく溝状の掘り込みのなかに築かれている（標高339.3m）。墓坑の主軸は東北東－西南西を指し（N69° E），等高線に並行する。墓坑の平面形は隅丸長方形で，規模は長さ80cm，幅48cm，深さ18cmである。坑底は西小口側が若干高く，その高低差は５cmで，横断面は緩やかに中央が凹む。東西両小口側に木棺小口板差込用とみられる溝状の穴がある。東小口のものは中央が途切れているが長さ26cm，幅２～４cm，深さ１cm，西小口のものは長さ23cm，幅７cm，深さ２～７cmである。木棺は長さ60cm，幅20cm程度のごく小さなものと考えられる。頭位は坑底面がやや高い西小口側と考えられる。出土遺物はない。

（５）土坑

ここでは比較的形態は整っているがその機能を明確にできない，一定の平面規模と深さ，形状をもった掘り込みを土坑として扱う。計４基（ＳＫ11～14）あり，調査区中央南東辺寄りに墓坑状のＳＫ11・ＳＫ12，調査区北東端にＳＫ13と縄文時代晩期の深鉢が出土したＳＫ14が位置する。

①ＳＫ11（第31図）

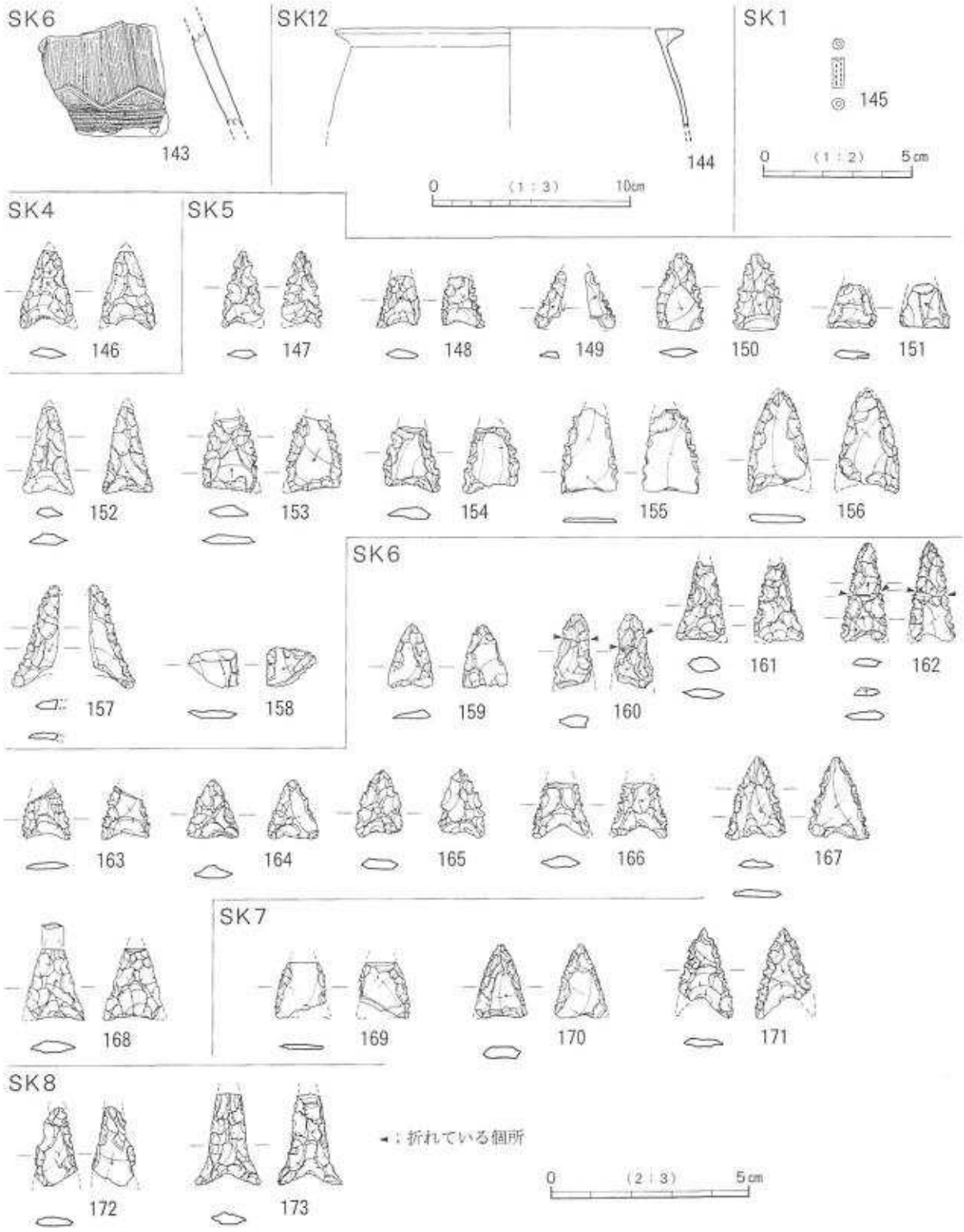
ＳＫ11は調査区中央南東側の高所部のやや急な斜面（傾斜角度14° ）に立地する墓坑状の土坑で（標高340.60m），南東２mに竪穴住居跡ＳＢ３，北西側には接するように柵跡ＳＡ２が存在する。長軸はほぼ北北東－南南西方向（N20° E）を指し，等高線に並行する。平面形は不整長方形で，長さ140cm，北小口幅37cm，中央最大幅47cm，南小口幅26cm，深さ10cmである。坑底面はほぼ水平で，関連性は不明だが東30cmの高所側に36cm×20cmの焼土の広がりがみられる。出土遺物はない。

②ＳＫ12（第31図）

ＳＫ12はＳＫ11の北東６mの南東から北西方向に下傾する斜面（傾斜角度14° ）に立地する墓坑状の土坑で（標高341.0m），北３mに住居跡状遺構ＳＢ７が，南東側に接して柵跡ＳＡ３が存在する。長軸はほぼ北東－南西方向（N37° E）を指し，等高線に並行する。平面形は隅丸長方形で，長さ102cm，幅64cm，深さ１～13cmである。坑底面はほぼ水平である。

出土遺物（第32図144，図版18） 埋土から弥生土器・甕口縁部片１点が出土した。

144は復元口径15.0cmの甕で，緩やかに窄まる体部に逆Ｌ字状の断面三角形の口縁がつく。



第32図 墓坑・土坑出土遺物実測図（1:3，1:2，2:3）

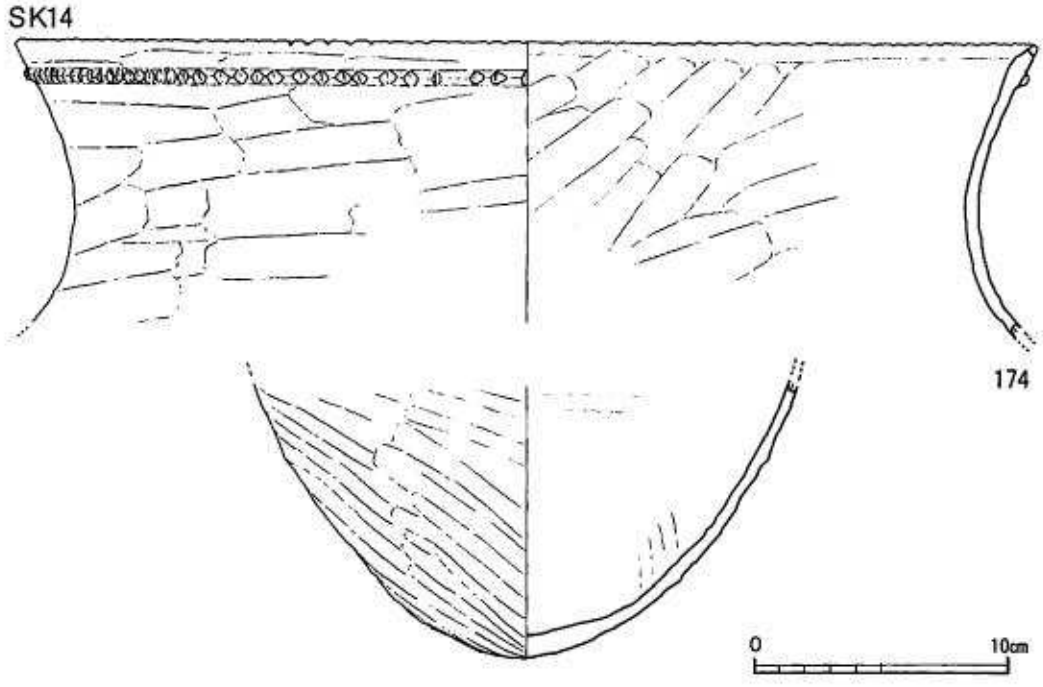
③ＳＫ13（第31図，図版15ｄ）

ＳＫ13は調査区北東側の墓域東端付近に位置する（標高339.3～339.4m）。北西１ｍに墓坑のＳＫ８，西１ｍに墓坑ＳＫ10が存在する。東西方向に延びる溝状の掘り込みの東端と重複している。長軸はほぼ北北東－南南西方向（N26°Ｅ）を指し，等高線に斜交する。平面形は不整長楕円形で，長さ171cm，幅（最大）64cm，深さ（最大）52cmである。横断面形はＶ字形に近く，坑底は大きく３段になり，北側が最も深い。この遺構の機能については明確ではない。若干の弥生土器片が出土したが，図示できなかった。

④ＳＫ14（第31図，図版15ｅ）

ＳＫ14は調査区北東端にある縄文時代晩期の土坑で，ほぼ南から北に緩やかに下る斜面（傾斜角度５°）に立地する（標高339.2m）。土坑は南北方向（Ｎ４°Ｗ）に長軸をもつ長楕円形の平面形で，長径92cm，短径55cm，深さは北側の浅い部分は３～８cm，南側のピット状の深い部分が29cmである。この南側のピット状部分（平面44cm×55cm）の上面を覆うように，深鉢174の破片10数片が重なった状態で出土した。土器片の広がりの大きさは，東西30cm×南北25cmである。

出土遺物（第33図174，図版18）　174は復元口径40.4cmの縄文土器・深鉢で，同一個体と思われる破片がまとまって出土しているが，口縁と底部以外は接点がなく，十分な図化ができなかった。頸部から外反する口縁の端部を丸く納め，数mm間隔で刻目を入れている。口縁からやや下がった位置に断面三角形の低い凸帯１条を貼付け，断面Ｖ字状の刻目を連続的に施している。底部はやや尖り気味の丸底である。調整は，外面が横あるいは斜め方向の条痕文，内面は口頸部が斜め方向の浅いケズリで，底部は横あるいは縦方向のナデと考えられる。外面の条痕文は口頸部のもの



第33図　土坑出土遺物実測図（1:3）縄文土器

は幅広で比較的浅いものだが，底部周辺の条痕文は幅が狭く，凹凸が顕著なものである。色調は褐色から暗褐色である。口縁部からやや下がった位置の貼付凸帯，刻目を入れた口縁部の形状，丸底などの特徴から，縄文時代晩期後葉の滋賀里Ⅳ式（前池式）の深鉢と考えられる[註]。

（註）縄文土器の年代の検討には，以下の文献を主に参考にした。

秋山浩三「吉備ー縄紋系ムラと共存した弥生系ムラ」金関恕＋大阪府立弥生文化博物館編『弥生文化の成立ー大変革の主体は「縄紋人」だったー』 角川書店 1995年

関西縄文文化研究会『関西の突帯文土器』発表要旨・資料集 2007年

濱田竜彦「中国地方東部の凸帯文土器と地域性」『古代文化』Vol.60№3 財團法人古代學協會 2008年

（6）溝状遺構

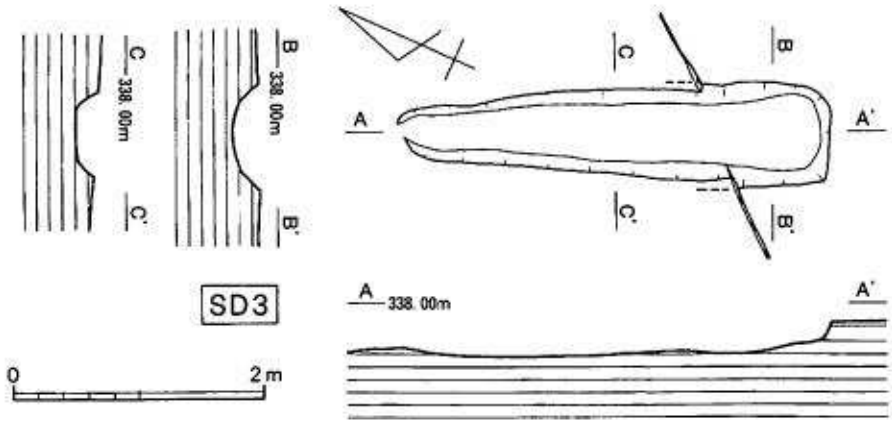
溝状遺構は計３条あるが，ＳＤ１・ＳＤ２はそれぞれ付設する掘立柱建物跡ＳＢ11・ＳＢ12のところで述べているので，ここではＳＤ３についてのみ記述する。

ＳＤ３（第34図）は，中央谷筋の北東側にある短い溝状遺構である。東３ｍに柵跡ＳＡ４が存在する。ほぼ南北方向に延びており，南東から北西方向に緩やかに下傾する斜面（傾斜角度５°）に立地する。長軸は等高線に斜交し，規模は長さ3.45m，幅（最大）0.8m，深さ（最大）16cmである。底面は南から北に向けて緩やかに下傾しており，その高低差は13cmである。

出土遺物（第37図183・184，第38図194，図版19） 覆土から弥生土器・壺口縁部片，同・底部片，土器片紡錘車各１点が出土した。

①弥生土器 183は復元口径18cmの壺口縁部片で，大きく広がる端部を平坦に納める。調整は，内面が横方向のヘラミガキ，端面が横方向のナデで，外面は不明である。184は復元底径5.4cmの底部片で，やや上げ底気味の平底である。調整は，内面は不明だが，外面は縦方向のヘラミガキ，外底面はナデである。

②土器片紡錘車 194は復元径8.2～９ cmの大型の破片で，1/2が残る。未成品の可能性もある。軸孔の内径0.5cm，外径0.6～0.7cmで，内外両面から穿孔されている。土器の体部片を素材として用いており，内面ナデ，外面ヘラミガキの調整痕が残る。



第34図 溝状遺構実測図（1:60） ＳＤ３

（7）柵跡（ＳＡ1～7）

計７条の柵跡を検出した。調査区全体に分布するが，中央谷筋北東側に集まる。大半は等高線に並行するが，ＳＡ５は直交する。主軸方位は，①ほぼ北東－南西方向（N31～35° E）のもの３条（ＳＡ２～４），②東西方向（N81°・89° E）のもの２条（ＳＡ１・７）が中心で，ＳＡ５はN45° Wと北西－南東方向を指す。長さ2.1～7.2mである。柱間２～６間で，柱間距離は住居や建物に較べると狭く，0.5～1.5m程度（平均値）である。柱穴は径20cm，深さ20～30cmとほぼ均一で，平面規模が小さいわりに深い。柱穴からの出土遺物は弥生土器細片のほかに，スクレイパー（ＳＡ１）や石鏃（ＳＡ４）が出土している。

①ＳＡ１（第35図）

調査区南西端のほぼ平坦な場所に立地する３間の柵跡である（標高338.1m）。北東12mに掘立柱建物跡ＳＢ11が位置する。主軸はほぼ東西方向（N81° E）を指し，等高線に並行する。長さは4.74mで，柱間距離は1.14～2.1m（平均1.59m）である（Ｐ１－Ｐ２間＝2.1m，Ｐ２－Ｐ３間＝1.53m，Ｐ３－Ｐ４間＝1.14m）。各柱穴規模は，Ｐ１が長径20cm×短径19cm，深さ15cm，Ｐ２が長径22cm×短径18cm，深さ８cm，Ｐ３が長径21cm×短径20cm，深さ16cm，Ｐ４が長径23cm×短径22cm，深さ15cmで，長径20～23cm（平均22cm），短径18～22cm（平均20cm），深さ８～16cm（平均14cm）で，径20cm，深さ15cm程度である。柱穴底面の標高は337.96～338.06m（平均338.008m）とほぼ一定である。

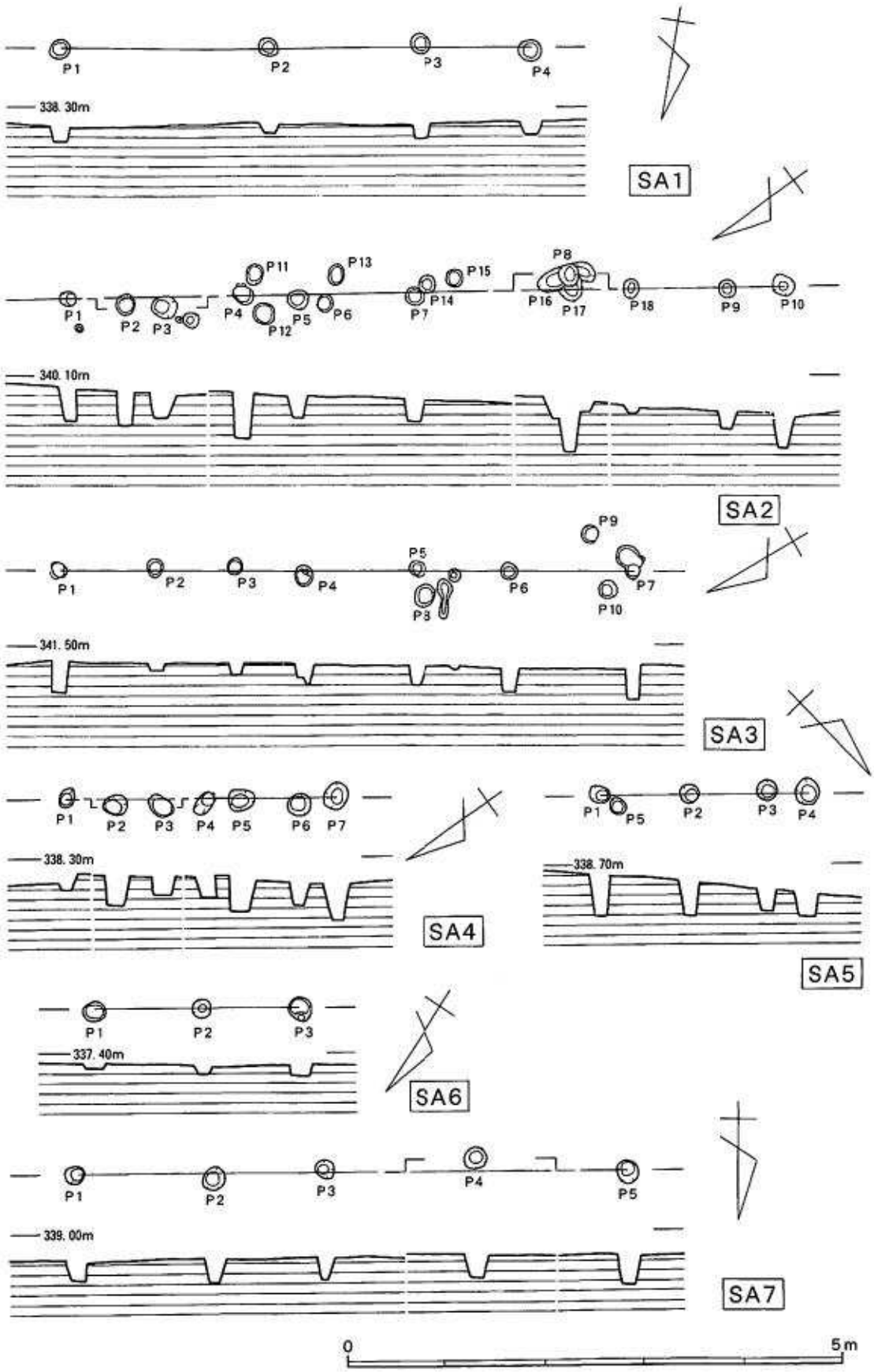
出土遺物（第38図195，図版19）　Ｐ１内から石器１点が出土した。

195は横長剥片素材のスクレイパーで，素材剥片の末端全体に背腹両面から加撃して連続的に剥離を行い，刃部を形成している。素材剥片は打面に自然面を残し，背面に広い剥離面をもつことから，自然面をもつ石核から比較的初期段階で剥離された剥片を用いている。部分的な欠損はみられるが，長さ7.9cm，幅4.7cmの大きさである。石材は暗灰色の珪質凝灰岩を使用する。

②ＳＡ２（第35図，図版11ａ）

調査区中央部南東辺の最高所近くに位置し，南東から北西方向にややつよく下傾する斜面（傾斜角度14°）に立地する柵跡である（標高340m）。南東の高所側に接して土坑ＳＫ11が，３mのところには竪穴住居跡ＳＢ３などがある。主軸はほぼ北東－南西方向（N35° E）を指し，等高線に並行する。長さは7.2mで，その間に計18基の柱穴がほぼ直線的に並ぶが，２～６基ずつ大きく４か所に集まっていることから，本来は柱間距離1.6m程度の柱間４間の柵跡で，何回かの建て替えを行ったものであろう。各柱穴規模は，長径16～27cm（平均21cm），短径14～22cm（平均18cm），深さ10～55cm（平均30cm）で，柱穴底面の標高は339.34～339.728m（平均339.608m）である。柱穴内から若干の弥生土器片が出土したが，図示できなかった。

③ＳＡ３（第35図，図版11ｂ）



第35図　柵跡実測図（1:60）ＳＡ１～7

ＳＡ２の東６ｍの高所側に位置し，南東から北西側にややつよく下傾する斜面（傾斜角度14°）に立地する柵跡である（標高341.3m）。北西の低所側に土坑ＳＫ12が接し，南の高所側には住居跡状遺構ＳＢ６が存在する。主軸は北北東－南南西方向（N31°Ｅ）を指し，等高線に並行する。長さは5.79m（６間）で，柱間距離は0.72～1.23m（平均0.97m）である（Ｐ１－Ｐ２間＝0.99m，Ｐ２－Ｐ３間＝0.81m，Ｐ３－Ｐ４間＝0.72m，Ｐ４－Ｐ５間＝1.14m，Ｐ５－Ｐ６間＝0.93m，Ｐ６－Ｐ７間＝1.23m）。各柱穴規模は，Ｐ１が長径17cm×短径14cm，深さ34cm，Ｐ２が長径18cm×短径16cm，深さ11cm，Ｐ３が径16cm，深さ15cm，Ｐ４が長径21cm×短径18cm，深さ23cm，Ｐ５が長径16cm×短径15cm，深さ21cm，Ｐ６が径16cm，深さ25cm，Ｐ７が径14cm，深さ34cmである。このほか，西半にＰ８～Ｐ10の３基の柱穴があり，部分的な建て替えを窺わせる。Ｐ８は長径23cm×短径21cm，Ｐ９は長径18cm×短径17cm，深さ28cm，Ｐ10は径18cm，深さ15cmで，Ｐ１～Ｐ10全体では長径14～23cm（平均18cm），短径14～21cm（平均17cm），深さ11～34cm（平均23cm）で，径15～20cm，深さ20～30cm程度である。柱穴底面の標高は340.962～341.246m（平均341.087m）とほぼ一定である。出土遺物はない。

④ＳＡ４（第35図，図版11ｃ）

ＳＡ４は中央谷筋の北東側低所部に位置する柵跡で，ほぼ東から西に緩やかに下傾する斜面（傾斜角度７°）に立地する（標高338.1m）。西側に近接して溝状遺構ＳＤ３が存在する以外は周囲には遺構はない。主軸は北東－南西方向（N35°Ｅ）を指し，等高線に並行する。長さは多少の削平を受けている北東側に延びる可能性があるが，現状では2.73m（６間）である。柱間距離は0.39～0.6m（平均0.48m）とごく狭い（Ｐ１－Ｐ２間＝0.48m，Ｐ２－Ｐ３間・Ｐ３－Ｐ４間＝0.45m，Ｐ４－Ｐ５間＝0.48m，Ｐ５－Ｐ６間＝0.6m，Ｐ６－Ｐ７間＝0.39m）。各柱穴規模は，Ｐ１が長径20cm×短径15cm，深さ13cm，Ｐ２が長径24cm×短径20cm，深さ31cm，Ｐ３が長径27cm×短径18cm，深さ18cm，Ｐ４が長径24cm×短径16cm，深さ25cm，Ｐ５が長径27cm×短径22cm，深さ36cm，Ｐ６が長径24cm×短径22cm，深さ25cm，Ｐ７が長径26cm×短径23cm，深さ39cmである。長径20～27cm（平均25cm），短径15～23cm（平均19cm），深さ13～39cm（平均27cm）で，径15～30cm，深さ20～40cm程度である。柱穴底面の標高は337.67～338.0m（平均337.853m）と比較的幅があるが，337.8～338.0cmあたりが中心である。Ｐ５・Ｐ７の覆土には炭化物が混入している。

出土遺物（第38図196，図版19）　Ｐ５から石鏃１点が出土した。Ｐ１～３・Ｐ５・Ｐ７からは弥生土器片が出土しているが，いずれも細片のため図示できなかった。

196はほぼ完形品の石鏃で，長さ2.5cm，幅1.6cmである。Ｂ面の先端に上方からの加撃に伴う小剥離がみられる。刺突時の衝撃剥離の可能性が高い。側縁は先端側が若干丸みをもつ直線状で，整美な長三角形である。基部は，Ａ面５枚，Ｂ面２枚の深く大きめの剥離により凹基を形成している。脚は短く，端部は丸い。右脚部と較べて左脚部は少し短い。Ａ・Ｂ両面に大きく素材面を残し，各側縁の剥離順はＡ面左側縁がｃ（側縁の中央→上・下に剥離が進むもの），Ｂ面左側縁がａ（側縁の上→下へ剥離が進むもの）で，右側縁はＡ・Ｂ面ともいずれもｂ（側縁の下→上へ剥

離が進むもの）である。

⑤ＳＡ５（第35図，図版12ａ）

ＳＡ５は調査区北東側，竪穴住居跡ＳＢ５の北西側の低所部に位置する柵跡で，唯一等高線に直交する。ほぼ南東から北西方向に緩やかに下傾する斜面（傾斜角度６°）に立地する（標高338.6m）。北８ｍに墓坑群西端のＳＫ１が存在する。主軸は北西－南東方向を指す（N45°W）。長さは北西側が若干の削平を受けていて延びる可能性があり，現状で2.1m（３間）である。柱間距離は0.42～0.9m（平均0.7m）と幅がある（Ｐ１－Ｐ２間＝0.9m，Ｐ２－Ｐ３間＝0.78m，Ｐ３－Ｐ４間＝0.42m）。各柱穴規模は，Ｐ１が長径21cm×短径18cm，深さ45cm，Ｐ２が径19cm，深さ39cm，Ｐ３が径20cm，深さ26cm，Ｐ４が長径27cm×短径24cm，深さ28cmである。長径19～27cm（平均22cm），短径18～24cm（平均20cm），深さ26～45cm（平均35cm）で，径20～30cm，深さ25～40cm程度である。柱穴底面の標高は338.18～338.23m（平均338.2m）と一定である。出土遺物はない。

⑥ＳＡ６（第35図）

ＳＡ６は中央谷筋の北東側の調査区際に位置する柵跡で，ほぼ東から西に緩やかに下傾する斜面（傾斜角度４°）に立地する（標高337.3m）。周囲には遺構はなく，南９～12mの高所側に柵跡ＳＡ４や溝状遺構ＳＤ３が存在する。主軸は東北東－西南西方向（N57°E）を指し，等高線に斜交する。長さは2.1m（２間）と最も短い。柱間距離は0.99～1.08m（平均1.04m）である（Ｐ１－Ｐ２間＝1.08m，Ｐ２－Ｐ３間＝0.99m）。各柱穴規模は，Ｐ１が長径22cm×短径19cm，深さ６cm，Ｐ２が長径19cm×短径18cm，深さ８cm，Ｐ３が長径25cm×短径22cm，深さ20cmである。長径19～25cm（平均22cm），短径18～22cm（平均20cm），深さ６～20cm（平均11cm）で，径20～25cm，深さ５～20cm程度である。柱穴底面の標高は337.07～337.26m（平均337.183m）と一定である。遺物は出土していない。

⑦ＳＡ７（第35図）

ＳＡ７は調査区北東端の墓域の北東側に近接する柵跡で，ほぼ南から北に緩やかに下傾する斜面（傾斜角度６°）に立地する（標高338.8m）。南西４ｍに木棺墓ＳＫ８，南３ｍに縄文時代の土坑ＳＫ14が存在する。主軸はほぼ東西方向（N89°E）を指し，等高線に並行する。長さは5.58m（４間）である。柱間距離は1.14～1.55m（平均1.4m）と広い（Ｐ１－Ｐ２間＝1.38m，Ｐ２－Ｐ３間＝1.14m，Ｐ３－Ｐ４間＝1.55m，Ｐ４－Ｐ５間＝1.53m）。各柱穴規模は，Ｐ１が長径20cm×短径18cm，深さ21cm，Ｐ２が長径24cm×短径20cm，深さ25cm，Ｐ３が長径20cm×短径18cm，深さ22cm，Ｐ４が長径23cm×短径20cm，深さ24cm，Ｐ５が長径24cm×短径21cm，深さ31cmである。長径20～24cm（平均22cm），短径18～21cm（平均19cm），深さ21～31cm（平均25cm）で，径・深さ20～25cm程度である。柱穴底面の標高は338.46～338.54m（平均338.518m）と一定である。出土

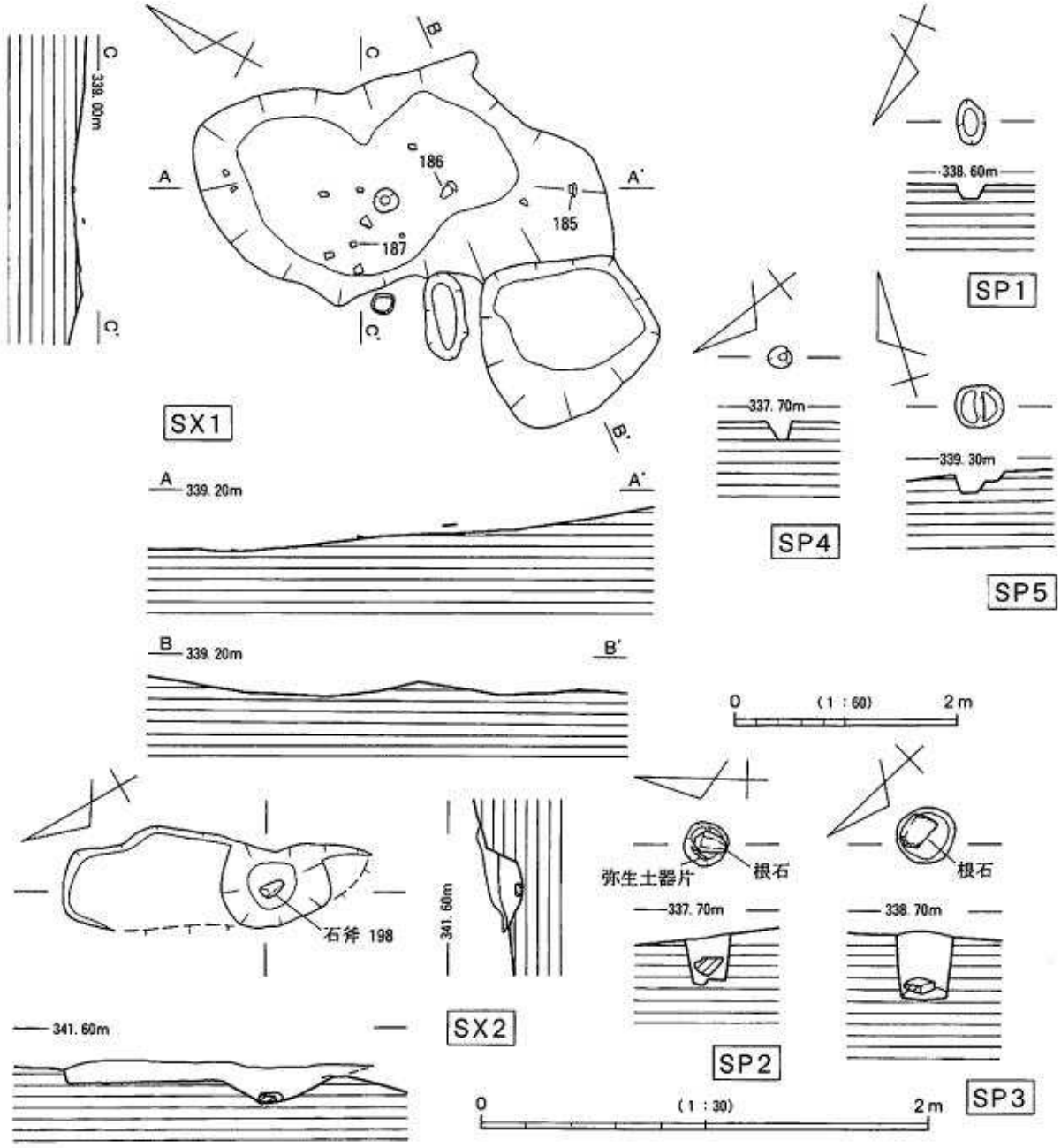
遺物はない。

（8）性格不明の遺構（ＳＸ１・ＳＸ２）

①ＳＸ１（第36図，図版12ｃ）

調査区南西側中央に位置するごく浅い不整楕円形の大型土坑状の遺構で，北東に接して掘立柱建物跡ＳＢ９が，南東側４ｍに掘立柱建物跡ＳＢ８，東４ｍには竪穴住居跡ＳＢ１が存在する（標高339m）。規模は南北4.5m，東西2.4m，深さ（最大）15cmである。

出土遺物（第37図185～187，図版19）　覆土から比較的大型の弥生土器片３点（壺口縁部片２・甕



第36図　性格不明の遺構・単独柱穴実測図（1:30，1:60）ＳＸ１・2，ＳＰ１～５

口縁部片１）が出土した。

185は復元口径15.3cmの広口壺の拡張した口縁の端部が垂下するもので，端面には櫛描斜格子文を描く。頸部外面には低い凸帯を貼り付けている。調整は，口縁部に横方向のナデが部分的にみられる以外は，器壁の損耗により調整不明である。186は口径10cm程度の無頸壺の口縁～体部片で，直線的に窄まる口縁の端部を外方に拡張する。調整は，内面が指頭による縦方向のナデつけ，外面は幅広の浅いハケ目のあと上半は櫛描文，下半は縦方向のヘラミガキを施す。櫛描文は直線文３単位，波状文２単位を交互に施し，下端には三角形の刺突文がみられる。187は内傾気味に直立する体部に外方に短く拡張する口縁が付く逆Ｌ字状の甕口縁部片で，調整は，内面上半に横方向のヘラミガキ，下半には縦方向のヘラミガキ，外面上半は横方向のナデ，下半は縦方向の浅いハケ目を施す。

②ＳＸ２（第36図，図版15ｆ）

ＳＸ２は調査区北東側の南東際近くの高所部に位置する（標高341.2m）。南東から北西側に下傾する斜面（傾斜角度13°）に立地する平面隅丸長方形の土坑状の遺構で，長軸は等高線に並行する。現状の長さ2.76m，幅0.93m，深さ0.17mである。比較的平坦な底面の南西側に32cm×49cm，深さ９cmの浅い落ち込みがある。

出土遺物（第38図197，図版19）　浅い落ち込みの底面から石斧片が出土した。

197は刃部側を欠失した太型蛤刃石斧の破片で，現状の長さ11.8cm，幅4.7cm，厚さ4.1cmである。基端は敲打痕状のものが顕著に残り，破損後に敲石に転用された可能性がある。

（９）単独柱穴

住居や建物を構成しないピットで，図示した遺物を出土したものや根石を検出したものを「単独柱穴」として扱う。ＳＰ１～５の５基あり，中央谷筋周辺に４基（ＳＰ１～４）と墓域のなかに１基（ＳＰ５）ある。ＳＰ１・ＳＰ４・ＳＰ５からは弥生土器片が出土し，ＳＰ３は根石を検出した。ＳＰ２では根石を検出し，弥生土器片が出土した。

①ＳＰ１（第36図）

調査区南西側中央にある柱穴で，掘立柱建物跡のＳＢ10とＳＢ12の中間に位置する（標高338.5m）。規模は長径39cm×短径21cm，深さ14cmである。

出土遺物（第37図188，図版19）　埋土から弥生土器・壺口縁部片が出土した。

188は復元口径17.8cmの広口壺の口縁部片で，拡張する口縁端部が短く垂下し，端面には横方向のナデののちに櫛描山形文を施す。内面には横方向のハケ目ののちに櫛描山形文を，外面には粗いナデを施す。

②ＳＰ２（第36図，図版15ｇ）

調査区南西側やや北西辺寄りの低所部に位置する柱穴で，掘立柱建物跡ＳＢ12とＳＢ13の間に立地する（標高337.5m）。底面は２段になっており，径20cm，深さ23cmである。底面で10cm大の角礫の根石を検出した。

出土遺物（第37図189） 覆土から弥生土器・甕口縁１点が出土した。

189は復元口径26.2cmと大型甕の口縁部片で，逆Ｌ字状に外方に拡張する口縁の端部を尖り気味に納める。調整は，内面～上端面は横方向のヘラミガキ，外面は横方向のナデを施す。

③ＳＰ３（第36図，図版15ｈ）

調査区ほぼ中央に位置する柱穴で，竪穴住居跡ＳＢ４の東３mに位置する（標高338.6m）。径26cm，深さ30cmで，底面に12cm×15cm，厚さ３cmの長方形の板状の根石が置かれていた。出土遺物はない。

④ＳＰ４（第36図）

調査区低所側の中央谷筋に臨む緩斜面に立地する（標高337.6m）。規模は径20cm，深さ18cmである。

出土遺物（第37図190） 埋土から弥生土器・底部片が出土した。

190は復元底径7.2cmの平底の底部片で，外面にヘラミガキを施す。

⑤ＳＰ５（第36図）

調査区北東側の墓域の中にあり，ＳＫ７とＳＫ９の間に位置する（標高339.2m）。長径45cm×短径39cm，深さ16cmで，底は２段になっている。

出土遺物（第37図191） 埋土から弥生土器・底部片が出土した。

191は復元底径4.8cmの平底の底部片で，外面にヘラミガキ，外底面には丁寧なナデを施す。

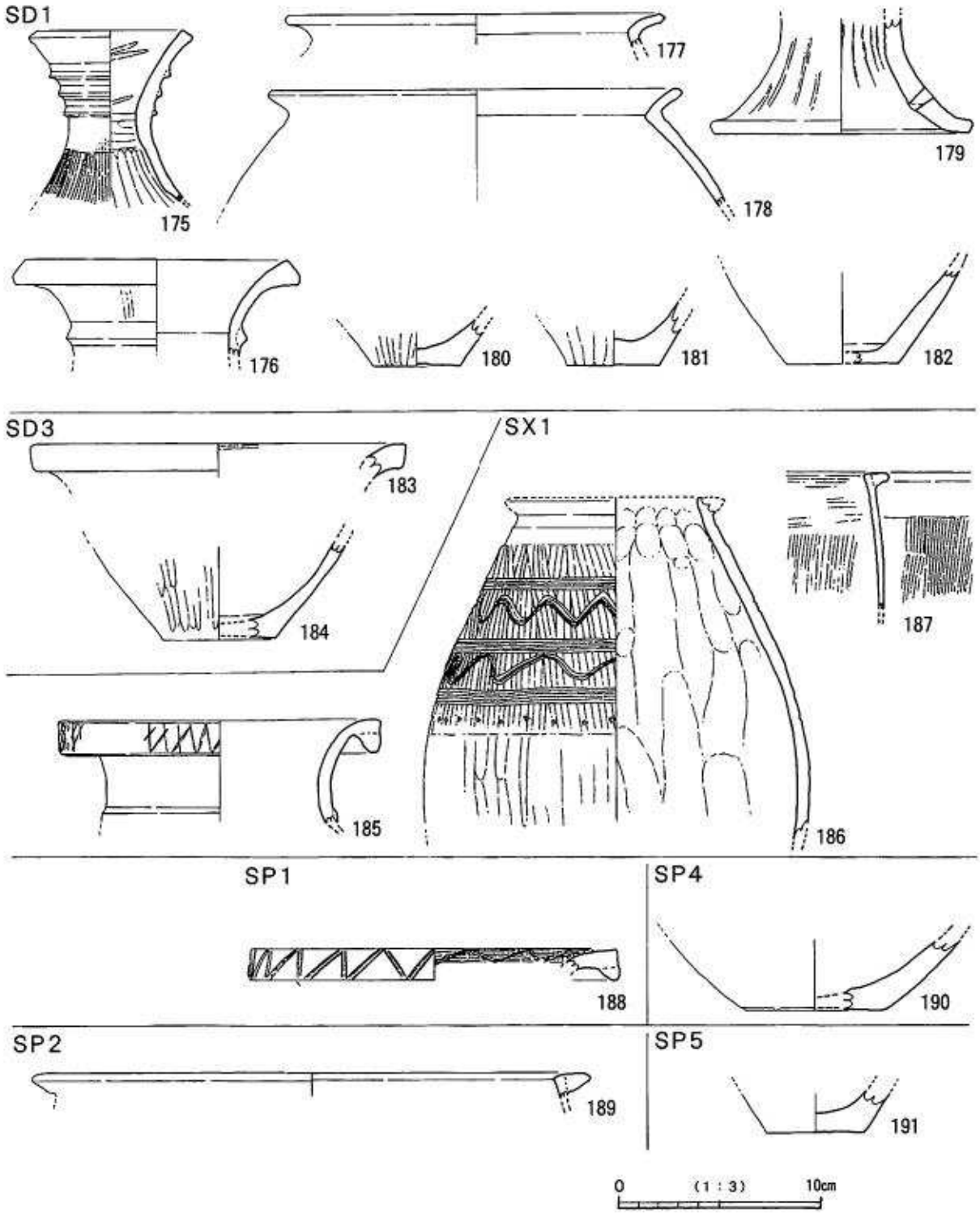
（10）調査区内出土遺物（第39～41図，図版19）

特定の遺構に伴わない遺物で，弥生土器46点，土器片紡錘車７点，石器２点がある。

①弥生土器（198～243） 壺・甕・高杯・蓋・底部片がある。

198～212は壺である。198～201は外上方に広がる細頸壺の口縁で，外面に１～３条の凸帯を貼り付ける。200では凸帯頂部に刻み目を施している。調整は，内面は横方向主体のヘラミガキあるいは指頭によるナデ，外面は横方向のナデであるが，201は凸帯の下位に縦方向のハケ目ののち櫛描文（横方向直線文＋鋸歯文）を施す。202は細頸壺の強く膨らむ体部で，上半に細く浅い縦方向のハケ目の上から各２単位の櫛描文（直線文＋鋸歯文）と下端には列点文状の刺突文を連続的に施す。203～205は内上方に窄まる口縁部の端部を外方に拡張するもので，203は口縁直下に凸帯を貼り付ける。調整は，203の凸帯直下に縦方向のハケ目，204は内面が縦方向の指頭ナデ，外面は口縁直下に横方向の櫛描直線文とその下位に縦方向のハケ目を施し，両者の中間には三角形

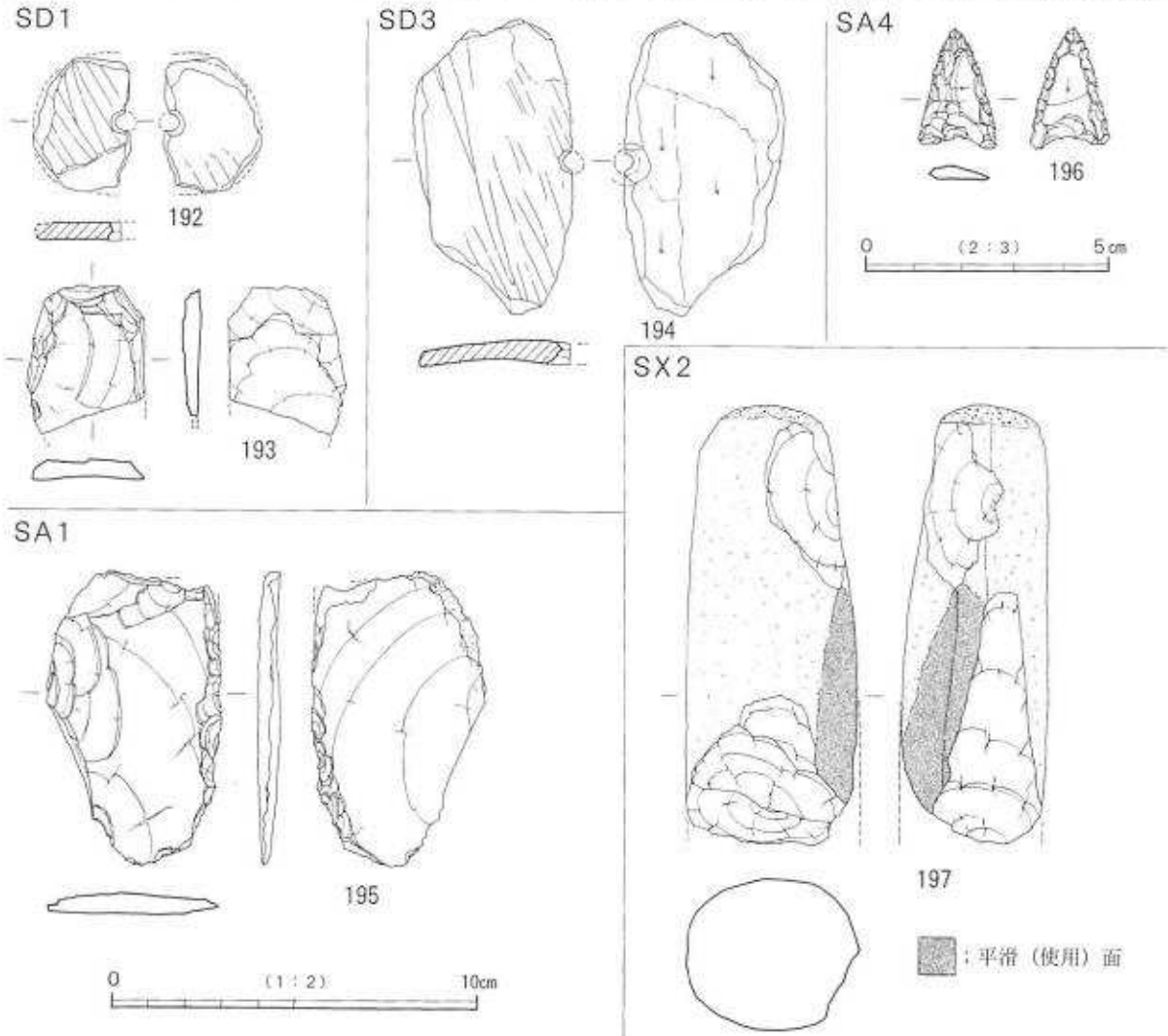
の刺突を連続的に行っている。206～211は頸部でくの字状に外湾する口縁の端部を外方に若干拡張させるもので，208・211は水平に強く広がる。調整は，内面が横方向のヘラミガキ，外面は横方向のナデが主体で，206・209・210では体部外面に縦方向のハケ目を施す。口縁端面には207・209が縦方向の直線状の刻目，211は櫛描波状文を施す。208・209の外面頸部には断面三角形の凸



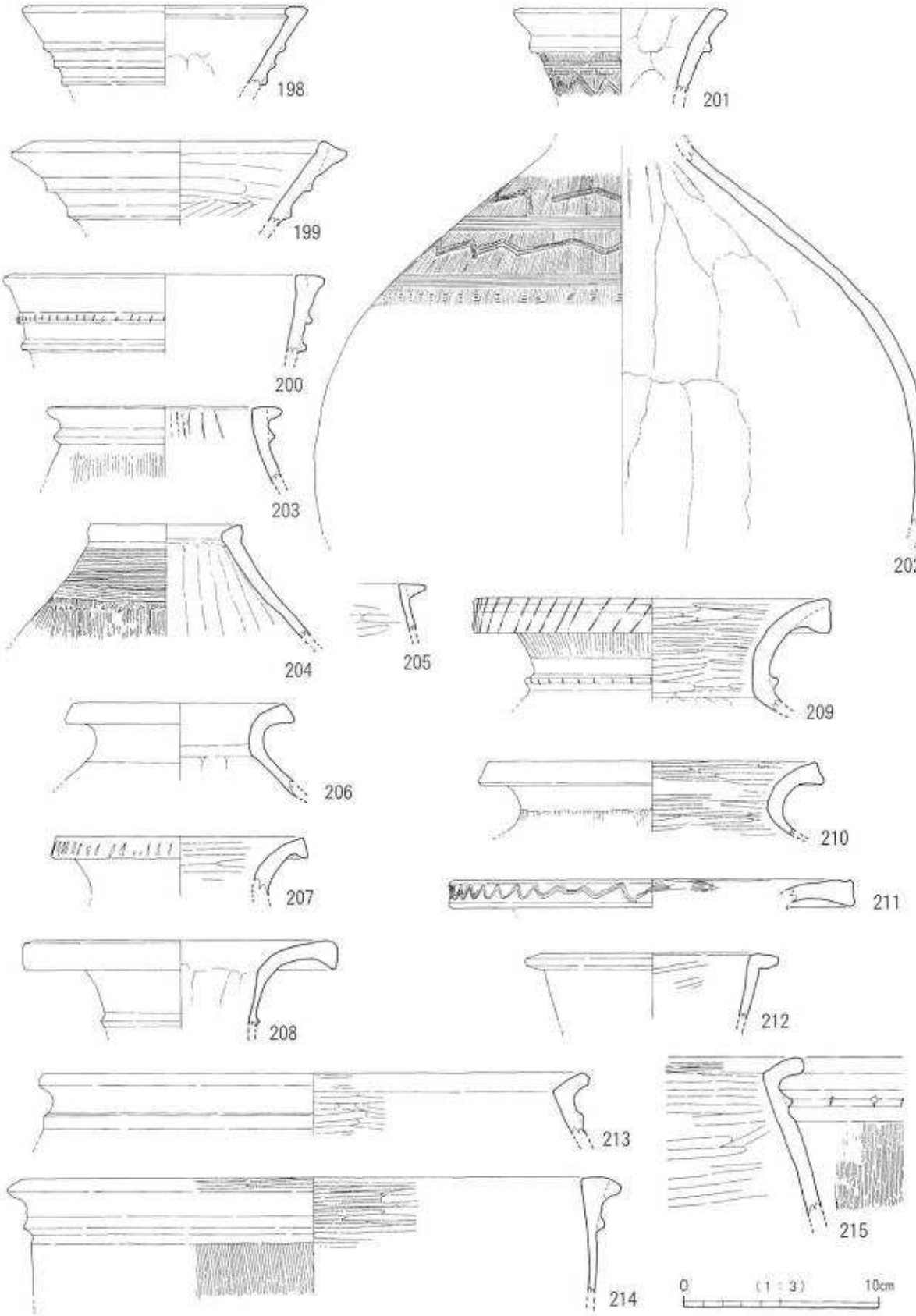
第37図　溝状遺構・性格不明の遺構・単独柱穴出土遺物実測図（1:3）弥生土器

帯が貼り付けられ，209ではその頂部に連続的に刻目を施す。209の復元口径が17.8cm，211は20cmである。212は開き気味に延びた口縁の端部を外方に拡張する逆Ｌ字状のものである。

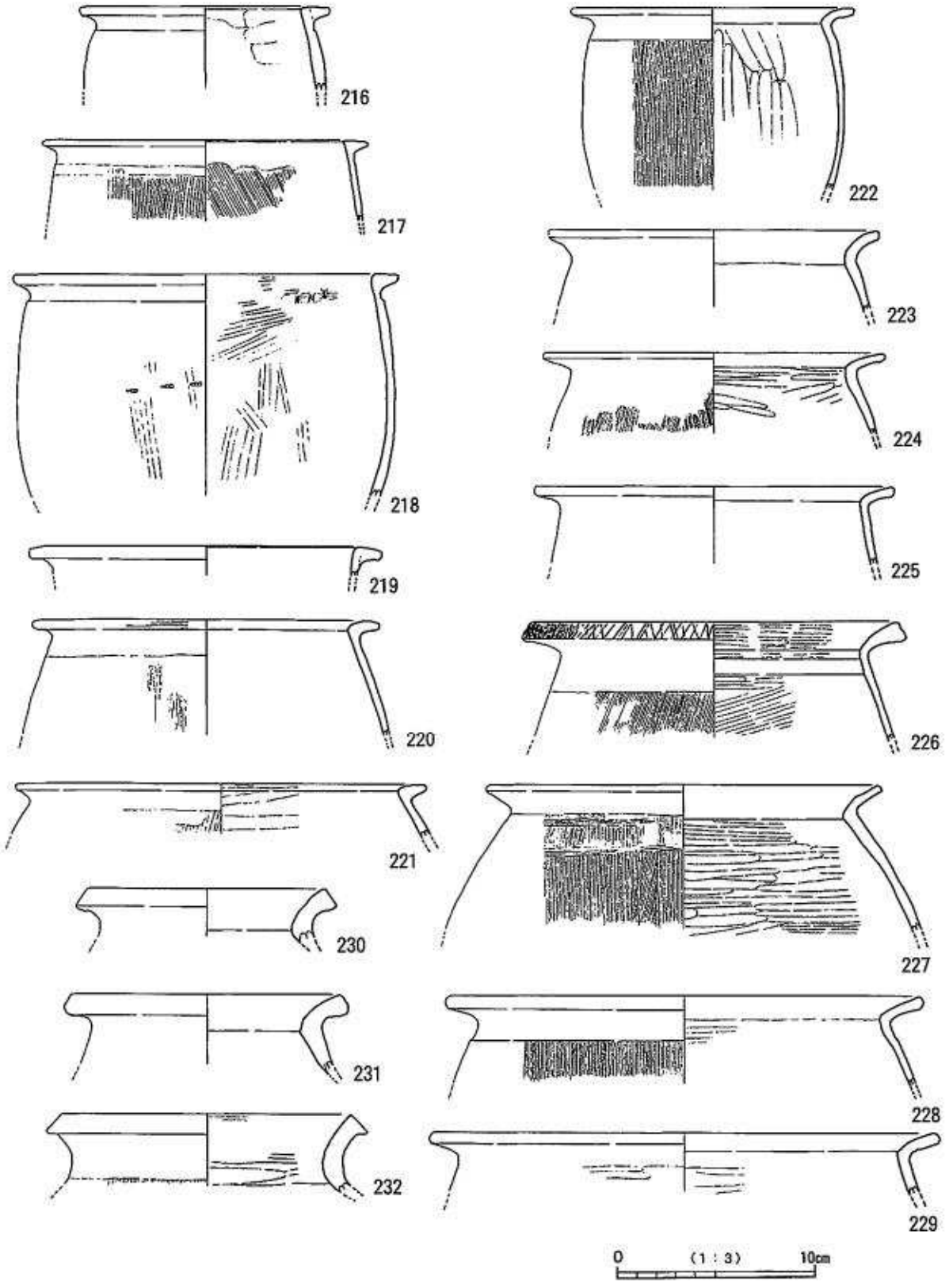
213～232は甕である。213・215・222～229はくの字に外反する薄手の口縁をもつもので，213・215はやや分厚い口縁の直下に凸帯を貼り付ける。215では凸帯の頂部に刻目が入れられている。226の拡張した口縁端面には斜格子の刻目が施される。調整は，体部内面が横方向主体のヘラミガキ，口縁部内外面が横方向のナデ，体部外面は縦方向のハケ目である。復元口径は10.2～29.4cmと幅があるが，主体は口径15～20cm程度である。214・216～221は逆Ｌ字状に外方に口縁が延びるもので，220・221は体部が内傾するが，他はほぼ直立する。214は器壁が比較的分厚く，口縁直下に凸帯を貼り付ける。218は外面体部最大径部付近に横長の刻みを連続的に施す。調整は，内面は横方向のヘラミガキ，外面は口縁が横方向のナデ，体部は縦方向のハケ目が主体である。復元口径は15～20cm程度である。230～232は分厚い器壁と頸部で屈曲して外上方に短く延びる口縁をもつもので，復元口径11.8～14.5cmとやや小型である。口縁端部は角張り，外（下）方に少し拡張気味である。230などは壺206と類似する。調整は残りが悪く不明確であるが，内面横方向の



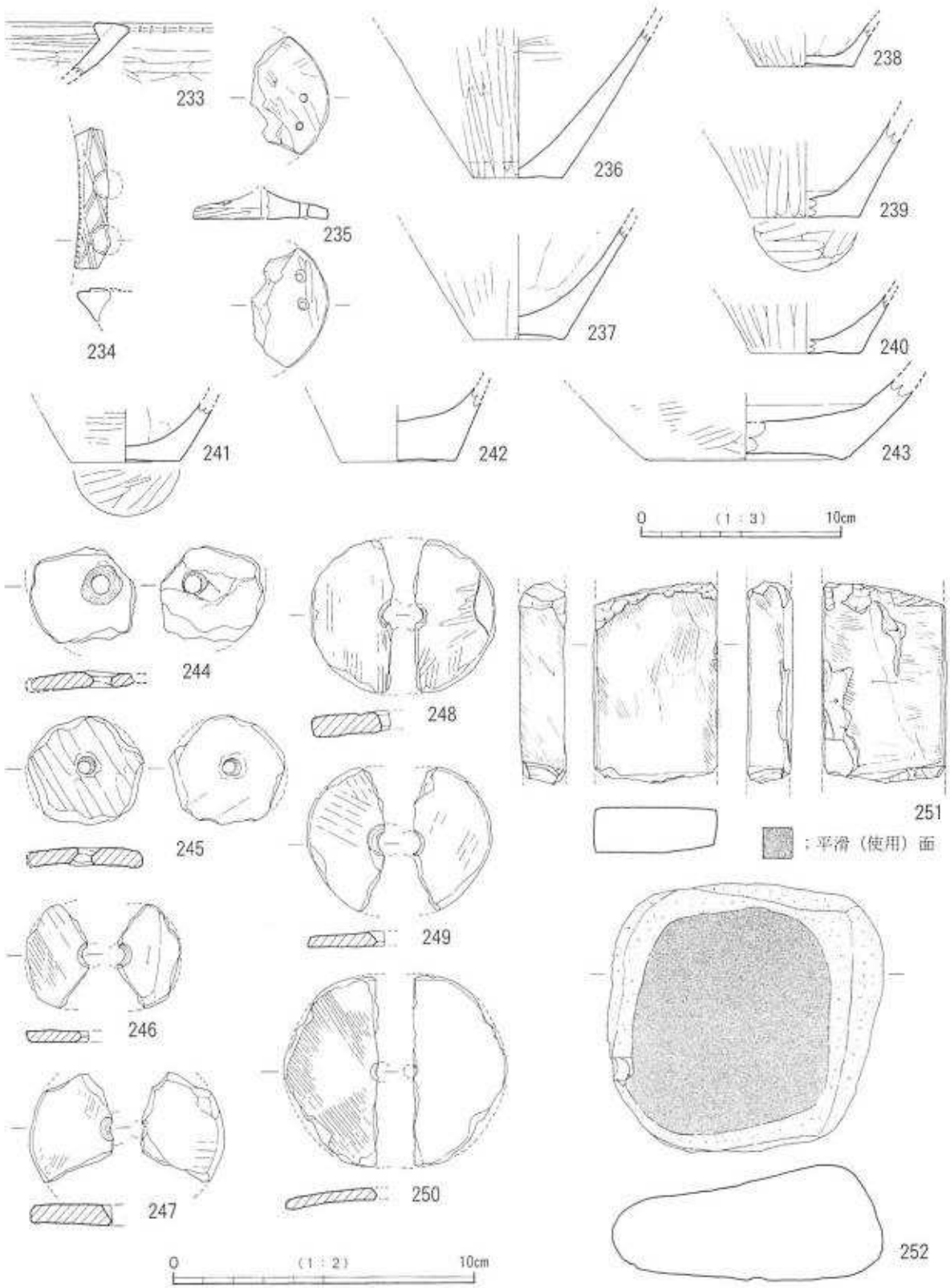
第38図　柵跡・溝状遺構・性格不明の遺構出土遺物実測図（1:2，2:3）土器片紡錘車・石器



第39図　調査区内出土遺物実測図（1）（1:3）弥生土器①



第40図　調査区内出土遺物実測図（2）(1:3) 弥生土器②



第41図　調査区内出土遺物実測図（3）（1:3，1:2）弥生土器③・土器片紡錘車・石器

ヘラミガキ，外面は口縁部が横方向のナデ，体部は縦方向のハケ目を施す。

233・234は高杯杯部の口縁部とみられるもので，いずれも内方に拡張する。233は口縁端部外面に刻目を施す。調整は，口縁上端面・体部外面は横方向ヘラミガキ，口縁内外面・体部内面は横方向のナデである。234は口縁上端面に横方向のナデののちにヘラ描きによる扁菱形の斜格子文を施し，その後に径1.5cmほどの円形浮文を貼り付ける。上端面の内縁には3 mm間隔で刻目を入れている。内面は横方向のナデを施している。

235は復元口径6.6cmの蓋と考えられるもので，上面側から穿たれた径4mmほどの円孔2がみられる。調整は，横方向のヘラミガキを施す。

236～243は平底か上げ底気味の平底の底部片で，復元底径4～6cm程度（243は10cm）である。調整は，内面がナデ，外面は縦方向主体（241・243は横方向）のヘラミガキ，外底面は一定方向のヘラミガキを施している。

②土器片紡錘車（244～250） 計7点ある。245がほぼ完形品である以外は1/4～1/2の残存である。復元径3.1～6.2cmで，軸孔の大きさは内径0.4～0.6cm，外径0.5～1.4cm（主体は0.6～0.8cm）である。多くは内外両面から穿孔されるが，247・249は内面側からのみ穿孔されたと考えられる。245の軸孔の縁辺には使用に伴うと思われる摩滅がみられる。いずれも弥生土器の体部片を素材として用いており，外面にはハケ目，内面にはヘラミガキやナデなどの調整痕が残る。246・250の外面には黒褐色のススの付着が認められる。

③石器（251・252） 砥石・磨石各1点がある。

251は現状の長さ6.6cm，幅4.1cm，厚さ1.5cmの細粒凝灰岩製の砥石である。板状で，暗灰黄色～暗灰色を呈する。表裏面・左右側面は平滑で，細かい擦痕が顕著に認められる。上下はいずれも折損している。252は8.8cm×9.1cm，厚さ（最大）3.8cmの暗白色の細粒半花崗岩製の磨石である。表裏面が広く平滑である。

第1表　遺構別報告遺物一覧表

遺構		点数	土器類		土製品	玉類	石器						
			縄文土器	弥生土器	土器片紡錘車	管玉	石斧	石包丁	石鏃	石錐	スクレイパー	磨石・敲石	その他
竪穴住居跡	SB1	27		7点（報1～7）	4点（報8～11）				16点（報12～27）				
	SB2	108		40点（報28～67）	48点（報68～115）	1点（報116）	5点（報127～131）	1点（報132）	7点（報117～123）	2点（報124・125）		3点（報133～135）	楔形石器削片1点（報126）
	SB3	0											
	SB4	1		1点（報136）									
	SB5	3			1点（報137）				1点（報138）	1点（報139）			
住居跡状遺構	SB6	0											
	SB7	2		2点（報140・141）									
掘立柱建物跡	SB8	0											
	SB9	0											
	SB10	0											
	SB11	0											
	SB12	0											
	SB13	1		1点（報142）									
	SB14	0											
	SB15	0											
	SB16	0											
墓坑	SK1	1				1点（報145）							
	SK2	0											
	SK3	0											
	SK4	1							1点（報146）				
	SK5	12							12点（報147～158）				
	SK6	11		1点（報143）					10点（報159～168）				
	SK7	3							3点（報169～171）				
	SK8	2							2点（報172・173）				
	SK9	0											
	SK10	0											
土坑	SK11	0											
	SK12	1		1点（報144）									
	SK13	0											
	SK14	1	1点（報174）										
溝状遺構	SD1	10		8点（報175～182）	1点（報192）						1点（報193）		
	SD2	0											
	SD3	3		2点（報183・184）	1点（報194）								
柵跡	SA1	1									1点（報195）		
	SA2	0											
	SA3	0											
	SA4	1							1点（報196）				
	SA5	0											
	SA6	0											
	SA7	0											
性格不明の遺構	SX1	3		3点（報185～187）									
	SX2	1					1点（報197）						
単独柱穴	SP1	1		1点（報188）									
	SP2	1		1点（報189）									
	SP3	0											
	SP4	1		1点（報190）									
	SP5	1		1点（報191）									
調査区		55		46点（報198～243）	7点（報244～250）							1点（報252）	砥石1点（報251）
計		252	1点	116点	62点	2点	6点	1点	53点	3点	2点	4点	2点
			117点				71点						

＊「報」：報告書での遺物番号

第2表　主要遺構一覧表

（1）竪穴住居跡（単位；住居規模・柱間距離・床面標高＝m，床面積＝㎡，長径・短径・深さ＝cm。）

遺構No.	平面形	住居規模	床面積	柱穴数	柱間距離	柱穴規模				
						長　径	短　径	深　さ	深さ／長径	底面標高
SB1a	円	＊8.34	49.49	8	1.98	37	29	37	1	339.02
SB1b	円	＊7.74	43.45	6	2.85	27	26	27	1	339.04
SB1c	円	＊7.2	38.91	6	1.72	28	25	22	0.79	339.19
SB2a	円	＊11.68	96.37	6＋	1.7	31	27	43	1.39	339.246
SB2b$_1$	円	＊10.36	74.78	9	2.23	34	29	44	1.29	339.299
SB2b$_2$	円	＊9.08	56.45	9	2.15	30	27	42	1.4	339.29
SB2c$_1$	円	＊7.88	41.6							
SB2c$_2$	円	＊7.5	37.37	7	2.19	33	29	45	1.36	339.323
SB2c$_3$	円	＊7.88	41.6							
SB3	円	約4	約10	9	1.1	16	15	22	1.38	340.997
SB4	円	約4～5	約10～17	7	1.52	39	31	22	0.56	337.672
SB5	円	＊5.4	18.09	2	1.65	25	20	29	1.16	339.5

＊①柱間距離・柱穴規模の数値は平均値。

②「住居規模」；＊は残存壁・壁溝からの復元値。

（2）掘立柱建物跡（単位；建物面積＝㎡，建物規模・柱間距離・底面標高＝m，長径・短径・深さ＝cm。）

遺構No.	主軸方位	間　数	建物規模	建物面積	長方形度	柱間距離		柱穴規模					備考
		桁行×梁行	桁行×梁行			桁行	梁行	長径	短径	深さ	＊1	底面標高	
SB8	N18° W	2間×1間	3.83×1.41	5.4	2.71	1.91	1.41	30	26	25	0.83	339.328	
SB9	N57° E	2間×1間	3 ×1.71	5.13	1.75	1.5	1.71	24	22	31	1.29	338.378	
SB10	N64° E	2間×？	3.06×？	？	？	1.53	？	24	21	26	1.08	338.505	
SB11a	N69° E	3間×1間	5.67×2.65	15	2.14	1.9	2.76	22	19	17	0.77	337.56	
SB11b	N60° E	3間×1間	5.22×2.87	15	1.82	1.75	2.88	22	18	17	0.77	337.56	SD1付設
SB11c	N70° E	1間×1間	1.70×1.65	2.8	1.01	1.67		22	20	21	0.95	337.51	
SB12	N61° E	4間＋×1間	6.06×1.77	10.7	3.42	1.01	1.77	24	22	24	1	337.803	SD2付設
SB13	N29° W	4間×2間	4.14×2.57	10.6	1.61	1.07	1.28	18	16	17	0.94	337.27	西辺入口
SB14	N58° E	3間×1間	5.33×2.79	14.9	1.91	1.78	2.79	24	20	12	0.5	336.75	
SB15	N58° E	3間×1間	6.43×2.52	16.2	2.55	2.14	2.52	23	21	12	0.52	336.786	
SB16	N68° E	2間×？	3.29×？	？	？	1.65	？	32	27	39	1.22	338.34	

＊建物規模・柱間距離・柱穴規模の数値は平均値　　＊1　深さ／長径

（3）墓坑（単位；cm）：

遺構No.	内容	木棺類型	主軸方位		等高線と	頭位	墓坑平面形	墓坑規模			木棺規模		出土遺物
								長さ	幅	深さ	長さ	幅	
SK1	木棺墓	A類	N80° E	東西	斜交	東	隅丸長方形	75	43	8	54	30	管玉1
SK2	木棺墓	A類	N75° E	東北東－西南西	斜交	東	隅丸長方形	127	61	18	100	40	
SK3	土坑墓	－	N48° E	北東－南西	並行	北東	長方形	140	73	42	－	－	
SK4	木棺墓	A類	N73° E	東北東－西南西	斜交	西	長方形	169	57	44	130	50	石鏃1
SK5	木棺墓	C類	N42° E	北東－南西	並行	南西	長方形	163	131	23	100	20	石鏃12
SK6	木棺墓	C類	N45° E	北東－南西	並行	南西	長方形	155		21	100	35	石鏃10，弥生土器片1
SK7	木棺墓	C類	N61° E	東北東－西南西	並行	西	長方形	140	57	24	110	30	石鏃3
SK8	木棺墓	B類	N76° E	東北東－西南西	並行	西	隅丸長方形	138	67	20	120	25	石鏃2
SK9	木棺墓	B類	N78° E	東北東－西南西	並行	東か	隅丸長方形	72	48	15	45	20	
SK10	木棺墓	B類	N69° E	東北東－西南西	並行	西か	隅丸長方形	80	48	18	60	20	

（4）柵跡（単位；標高・柱間距離・底面標高＝m，長径・短径・深さ＝cm）

遺構No.	標高	主軸方位		等高線に	間数	長さ	柱間距離	柱穴規模				
								長径	短径	深さ	＊1	底面標高
ＳＡ1	338.1	N81° E	東西	並行	3間	4.74	1.59	22	20	14	0.63	338.008
ＳＡ2	340	N35° E	北東－南西	並行	4間か	7.2	約1.6	21	18	30	1.43	339.608
ＳＡ3	341.3	N31° E	北北東－南南西	並行	6間	5.79	0.97	18	17	23	1.28	341.087
ＳＡ4	338.1	N35° E	北東－南西	並行	6間＋	2.73＋	0.48	25	19	27	1.08	337.853
ＳＡ5	338.6	N45° W	北西－南東	直交	3間＋	2.1＋	0.7	22	20	35	1.59	338.2
ＳＡ6	337.3	N57° E	東北東－西南西	斜交	2間	2.1	1.04	22	20	11	0.5	337.183
ＳＡ7	338.8	N89° E	東西	並行	4間	5.58	1.4	22	19	25	1.14	338.518

＊柱間距離・柱穴規模の数値は平均値。　＊1　深さ／長径

第3表　出土遺物計測表

（1）土器（＊；復元値，括弧；現存値）

遺物No.	器種		出土遺構	法量（cm）			備考
				口径	底径	最大径	
1	弥生土器	甕	ＳＢ1	－	－	－	
2	弥生土器	甕		＊17.6	－	－	
3	弥生土器	甕		＊25.2	－	－	
4	弥生土器	甕		＊16.2	－	－	
5	弥生土器	甕		＊21.4	－	－	
6	弥生土器	甕		－	－	－	
7	弥生土器	底部			＊5.4	－	
28	弥生土器	甕	ＳＢ2	－	－	－	
29	弥生土器	甕		＊19.4	－	－	
30	弥生土器	甕		＊30.8	－	－	
31	弥生土器	甕		＊26.0	－	－	
32	弥生土器	甕		＊13.0	－	－	
33	弥生土器	甕		－	－	－	
34	弥生土器	甕		＊14.8	－	－	
35	弥生土器	甕		＊14.8	－	－	
36	弥生土器	甕		＊15.6	－	－	
37	弥生土器	甕		＊16.8	－	＊18.7	
38	弥生土器	甕		＊16.8	－	－	
39	弥生土器	甕		＊17.3	－	－	
40	弥生土器	甕		＊19.0	－	＊19.4	
41	弥生土器	甕		＊18.0	－	－	
42	弥生土器	甕		＊24.8	－	－	
43	弥生土器	壺		＊19.0	－	－	
44	弥生土器	壺		＊19.4	－	－	
45	弥生土器	壺		－	5.0	＊16.3	
46	弥生土器	底部		－	＊3.8	－	
47	弥生土器	底部		－	＊3.8	－	
48	弥生土器	底部		－	＊3.9	－	
49	弥生土器	底部		－	＊4.4	－	
50	弥生土器	底部		－	＊4.6	－	
51	弥生土器	底部		－	＊4.6	－	
52	弥生土器	底部		－	＊4.6	－	
53	弥生土器	底部		－	＊4.7	－	
54	弥生土器	底部		－	＊5.0	－	

遺物No.	器種		出土遺構	法量（cm）			備考
				口径	底径	最大径	
55	弥生土器	底部	ＳＢ２	－	＊5.0	－	
56	弥生土器	底部		－	＊5.0	－	
57	弥生土器	底部		－	＊5.1	－	
58	弥生土器	底部		－	＊5.2	－	
59	弥生土器	底部		－	＊4.9	－	
60	弥生土器	底部		－	＊5.0	－	
61	弥生土器	底部		－	＊5.2	－	
62	弥生土器	底部		－	＊5.6	－	
63	弥生土器	底部		－	＊5.6	－	
64	弥生土器	底部		－	＊5.8	－	
65	弥生土器	底部		－	＊6.0	－	
66	弥生土器	底部		－	＊7.0	－	
67	弥生土器	底部		－	＊8.2	－	
136	弥生土器	底部	ＳＢ４	－	＊7.2	－	
140	弥生土器	壺	ＳＢ７	－	－	－	
141	弥生土器	底部		－	＊4.0	－	
142	弥生土器	甕	ＳＢ13	＊24.0	－	－	
143	弥生土器	壺	ＳＫ６	－	－	－	
144	弥生土器	甕	ＳＫ12	＊15.0	－	－	
174	縄文土器	深鉢	ＳＫ14			－	晩期後半（滋賀里Ⅳ式）
175	弥生土器	壺	ＳＤ１	＊7.2	－	－	
176	弥生土器	壺		－	＊12.4	－	
177	弥生土器	甕		＊12.8	－	－	
178	弥生土器	甕		＊18.2	－	－	
179	弥生土器	高杯		＊19.9	－	－	
180	弥生土器	底部		－	＊4.0	－	
181	弥生土器	底部		－	＊4.6	－	
182	弥生土器	底部		－	＊5.4	－	
183	弥生土器	壺	ＳＤ３	＊18.0	－	－	
184	弥生土器	底部		－	＊5.4	－	
185	弥生土器	壺	ＳＸ１	＊15.3	－	－	
186	弥生土器	壺		－	－	＊18.8	
187	弥生土器	甕		－	－	－	
188	弥生土器	壺	ＳＰ１	＊17.8	－	－	
189	弥生土器	甕	ＳＰ２	＊26.2	－	－	
190	弥生土器	底部	ＳＰ４	－	＊7.2	－	
191	弥生土器	底部	ＳＰ５	－	＊4.8	－	
198	弥生土器	壺	調査区	＊12.6	－	－	
199	弥生土器	壺		＊14.6	－	－	
200	弥生土器	壺		＊15.2	－	－	
201	弥生土器	壺		＊9.6	－	－	
202	弥生土器	壺			－	＊31.0	
203	弥生土器	壺		＊10.4	－	－	
204	弥生土器	壺		＊7.6	－	－	
205	弥生土器	壺		－	－	－	
206	弥生土器	壺		＊10.4	－	－	
207	弥生土器	壺		＊12.6	－	－	
208	弥生土器	壺		＊15.0	－	－	
209	弥生土器	壺		＊17.8	－	－	
210	弥生土器	壺		＊16.3	－	－	

遺物No.	器種		出土遺構	法量（cm）			備考
				口径	底径	最大径	
211	弥生土器	壺		＊20.0	－	－	
212	弥生土器	壺		＊10.6	－	－	
213	弥生土器	甕		＊27.2	－	－	
214	弥生土器	甕		＊29.4	－	－	
215	弥生土器	甕		－	－	－	
216	弥生土器	甕		＊10.2	－	－	
217	弥生土器	甕		＊15.6	－	－	
218	弥生土器	甕		＊18.9	－	－	
219	弥生土器	甕		＊14.8	－	－	
220	弥生土器	甕		＊16.2	－	－	
221	弥生土器	甕		＊20.3	－	－	
222	弥生土器	甕		＊13.2	－	＊13.0	
223	弥生土器	甕		＊16.3	－	－	
224	弥生土器	甕		＊16.8	－	－	
225	弥生土器	甕		＊17.8	－	－	
226	弥生土器	甕		＊18.2	－	－	
227	弥生土器	甕	調査区	＊19.2	－	－	
228	弥生土器	甕		＊23.0	－	－	
229	弥生土器	甕		＊25.0	－	－	
230	弥生土器	甕		＊11.8	－	－	
231	弥生土器	甕		＊13.2	－	－	
232	弥生土器	甕		＊14.5	－	－	
233	弥生土器	高杯か		－	－	－	
234	弥生土器	高杯か		－	－	－	円形浮文
235	弥生土器	蓋か		＊6.6	－	－	
236	弥生土器	底部		－	＊4.4	－	
237	弥生土器	底部		－	＊4.5	－	
238	弥生土器	底部		－	＊4.8	－	
239	弥生土器	底部		－	＊5.3	－	
240	弥生土器	底部		－	＊5.4	－	
241	弥生土器	底部		－	＊5.4	－	
242	弥生土器	底部		－	＊5.8	－	
243	弥生土器	底部		－	＊10.0	－	

（2）土器片紡錘車（＊；復元値，括弧；現存値，？；数値不明，－；存在なし）

遺物No.	出土遺構	法量（cm，g）					軸孔			部位	調整		残存	備考
		直径	厚さ	孔径（内径・外径）		重さ	貫通	穿孔	使用		外面	内面		
8	SB1	＊8.4	0.4	＊0.6	＊0.8/＊0.8	(8.97)	○	両		体部	ヘラミガキ	ナデ	1/3	
9		＊3.6～4.2	0.5	0.5	0.6×0.7/0.8	(6.24)	○	両		体部	ミガキorハケ目	ナデか	2/3	
10		＊4.8	0.4	＊0.6	＊0.8/＊0.7	(3.27)	○	両		体部	ハケ目orミガキ	ナデorミガキ	1/3～1/4	
11		＊6.4	0.4	－	0.7/－	(16.50)	△	(外)		体部	ミガキorハケ目	ナデ	周縁欠	未成品
68	SB2	2.3～2.6	0.35	0.1	0.1/0.5	(2.42)	○	内		体部	不明	ナデか	完存か	未成品
69		＊3.2～3.4	0.55	0.6	0.9/0.9	(3.45)	○	両		体部	ハケ目	ヘラミガキ	1/2	
70		＊3.2～3.7	0.8	0.3	0.5/1.0	(7.16)	○	両	外	体部	ハケ目	不明	周縁欠	
71		＊3.5	0.45	0.4	0.6/0.7	(7.18)	○	両		体部	ハケ目	ナデか	周縁欠	
72		＊3.6	0.4	0.5	0.7/0.7	(3.47)	○	両		体部	ハケ目	ナデ・ハケ目	1/3	未通孔1
73		＊3.6	0.5	＊0.4	＊0.85/＊0.85	(2.92)	○	両		体部	板ナデか	ナデ	1/2	
74		＊3.6	0.6	？	＊0.6/＊0.6	(4.9)	○	両		体部	ハケ目orミガキ	ナデorミガキ	1/2	
75		＊3.6	0.5	＊0.6	＊0.9/＊0.9	(4.94)	○	両		体部	ハケ目	ナデか	1/2	
76		＊3.8	0.6	＊0.4	＊0.9/＊0.9	(4.26)	○	両		体部	ヘラミガキ	ナデ	1/2	
77		＊3.5～4.2	0.7	＊0.5	＊0.8/＊0.7	(5.3)	○	両		体部	ナデ・ハケ目	ヘラミガキ	1/2	
78		＊3.7～4.0	0.5	？	＊0.9/＊0.7	(4.70)	○	両		体部	ハケ目	ヘラミガキ	1/2	
79		＊3.7～4.1	0.55	？	＊0.8/＊0.8	(4.93)	○	両		体部	不明	ミガキか	1/2	
80		＊3.8～4.0	0.55	＊0.6	＊0.8/＊0.9	(3.85)	○	両		体部	不明	ナデか	1/2	
81		＊4.0	0.35	＊0.6	＊0.8/＊0.8	(3.09)	○	両		体部	不明	不明	1/2	
82		＊3.8～4.0	0.45	＊0.5	＊0.5/＊0.8	(3.60)	○	外		体部	ハケ目	ヘラミガキ	1/2	
83		＊3.8～4.6	0.5	＊0.4	＊0.6/＊0.8	(4.02)	○	両		体部	ハケ目	ヘラミガキ	1/2	
84		4	0.5	0.5	0.8/0.7	(9.32)	○	両	内	体部	ハケ目	ナデか	周縁欠	
85		4.0～4.1	0.5	0.3×0.4	0.8×1.0/0.6	(10.11)	○	両		体部	ナデ・ハケ目	ヘラミガキ	周縁欠	
86		＊4.1～4.5	0.5	0.4	0.8×0.9/0.6×0.75	(8.04)	○	両		体部	ナデ・ハケ目	ナデ	周縁欠	
87		＊4.4	0.5	？	＊0.5/＊0.5	(1.88)	○	両		体部	ナデ・ハケ目	ナデ	一部	
88		＊4.4	0.35	＊0.4	＊0.7/＊0.6	(4.27)	○	両		体部	板ナデ	ハケ目orナデ	1/2	
89		4.3～4.5	0.65	0.4	0.8/0.85	(16.07)	○	両		体部	ハケ目	板ナデ	完存か	
90		＊4.6+	0.4	？	＊0.5/＊0.5	(2.9)	○	両		体部	ミガキか	ナデか	一部	
91		＊4.6	0.6	？	＊0.6/＊0.6	(6.55)	○	外		肩部	ナデ・ハケ目	ナデ・ヘラミガキ	1/2	
92		＊4.8	0.6	？	＊0.7/＊0.6	(5.27)	○	両		体部	ハケ目	ナデ	1/3	未通孔1
93		4.4～5.0	0.5	0.35	0.6/1.1	(15.00)	○	両		体部	ハケ目・ヘラミガキ	ヘラミガキ	周縁欠	
94		＊4.7～5.2	0.55	0.4	0.7/1.0	(15.08)	○	両		肩部	ナデ・ハケ目	ハケ目	周縁欠	
95		＊4.5～5.6	0.4	？	＊0.5/＊0.5	(6.59)	○	両		体部	ハケ目	ナデ	1/2	
96		＊5.0	0.5	？	＊0.6/＊0.6	(4.88)	○	両		体部	ハケ目	ヘラミガキ	1/3	
97		＊5.0	0.55	？	＊0.9/？	(6.57)	○	両	外	体部	ハケ目	ミガキか	1/2	
98		5.0～5.2	0.5	＊0.5	＊0.7×0.8/＊0.7×0.9	(16.42)	○	両		体部	ハケ目	不明	一部欠	
99		＊5.0～5.2	0.45	＊0.6	＊0.7/＊0.8	(7.02)	○	両		体部	ハケ目	ヘラミガキ	1/2	
100		＊5.2～5.6	0.5	？	＊0.5/＊0.5	(6.22)	○	両		体部	不明	不明	1/3	
101		＊5.4～5.6	0.4	？	＊0.7/＊0.7	(6.75)	○	両		体部	ハケ目・刺突文	ヘラミガキ	1/2	
102		＊5.5～5.8	0.5	？	＊0.9/＊0.8	(11.19)	○	両		体部	ヘラミガキ	ヘラミガキ	1/2	
103		＊5.6	0.4	？	？/？	(5.68)	不明	－		体部	ヘラミガキ	ヘラミガキ	1/2	

遺物No.	出土遺構	法量 (cm, g) 直径	厚さ	孔径 (内径・外径)		重さ	軸孔 貫通	穿孔	使用	部位	調整 外面	内面	残存	備考
104		*5.7	0.55	0.4	0.7/0.6	(23.33)	○	外	内	体部	ハケ目or板ナデ	ナデ	周縁欠	
105		(2.0)	0.4	−	−/*0.4	(1.9)	△	(内)		体部	ハケ目	ナデorミガキ	一部	未成品
106		(2.1)	0.45	−	−/0.3×0.35	(1.75)	△	(内)		体部	ハケ目・刺突文	ナデ	一部	未成品
107		2.6~3.0	0.6	−	−/*0.4	(5.29)	△	(内)		体部	不明	不明	完存	未成品
108		*2.6~3.2	0.8	−	−/*0.8	(8.82)	△	(内)		体部	ヘラミガキorハケ目	ヘラミガキ	完存	未成品
109		2.9~3.4	0.6	−	−/−	6.07	×	×		体部	ハケ目	ナデ	完存	未成品
110	SB2	*3.1	0.4	−	0.2×0.3/−	(5.02)	△	(外)		体部	ハケ目	ハケ目orナデ	周縁欠	未成品
111		3.1~3.5	0.5	−	−/0.4	(7.27)	△	(内)		体部	ヘラミガキ	ナデ	完存	未成品
112		3.2~3.4	0.8	−	−/0.7	(8.79)	△	(内)		底部	ヘラミガキ	ヘラミガキ	完存	未成品
113		*3.7~4.2	0.6	?	?/*0.9	(5.13)	○	両		肩部	ナデ・ハケ目	ヘラミガキ	1/2	
114		4.0~4.4	0.5	−	−/0.4×0.5	(8.96)	△	(内)		体部	ヘラミガキ	ナデ	周縁欠	未成品
115		*4.9~5.4	0.4	−	−/0.3×0.4	(9.94)	△	(内)		体部	ハケ目	ナデ	2/3	未成品・未通孔1
137	SB5	3.8~3.9	0.5	0.4	4~4.5	6.74	○	内		体部	ハケ目	不明	完存	
192	SD1	*4.4~4.8	0.5	0.4	*0.6/0.7	(5.28)	○	両		体部	ヘラミガキ	ヘラミガキ	1/2	
194	SD3	*8.2~9.0	0.7	0.5	*0.6/0.7	(24.24)	○	両		体部	ヘラミガキ	ナデ	1/2	未成品か
244		3.1~3.4	0.55	0.6	1.4×1.2/0.8	(6.37)	○	両		体部	不明	ナデか	1/4	
245		3.6~3.8	0.6	0.4	0.6/0.6	(9.96)	○	両	両	体部	ヘラミガキ	ナデ	一部欠	
246		*4.0~4.2	0.4	*0.5	*0.8/0.7	(3.36)	○	両		体部	ハケ目or板ナデ	ナデ	1/3	スス (外)
247	調査区	*5.8	0.7	?	*1.0/?	(8.13)	○	内か		体部	ハケ目	ヘラミガキ	1/3	
248		*5.0	0.75	*0.6	*0.5/*0.5	(11.67)	○	両		体部	ハケ目	ヘラミガキ	1/2	
249		*5.2	0.45	*0.6	*1.0/*0.8	(5.72)	○	内か		体部	ハケ目	ヘラミガキか	1/2	
250		*6.2	0.4	?	*0.6/*0.4	(8.66)	○	両		体部	ハケ目	ナデ	1/2	スス (外)

*①「孔径 (外径)」＝外面の孔径 (外径) ／内面の孔径 (外径)。 ②「貫通」＝○：貫通，△：未通，×：未穿孔。 ③「穿孔」＝穿孔方向。素材の土器片の内面 (「内」)，外面 (「外」)，内外両面 (「両」) からの穿孔を示す。() は未通のものの穿孔方向を示す。 ④「使用」＝軸孔縁辺の使用痕が存在する面。 ⑤「部位」＝素材の土器片の部位。 ⑤「調整」＝素材土器片の調整の内容。 ⑥「残存」＝残存の割合。 ⑦「備考」欄の「未通孔」＝本来の軸孔以外に存在する未通孔の存在。

（3）石器（括弧；現存値）

遺物No.	器種	出土遺構	法量（cm, g）				石材
			長さ	幅	厚さ	重さ	
12	石鏃	SB1	(1.25)	(1.2)	(0.3)	(0.38)	
13	石鏃		(1.45)	(1.25)	(0.2)	(0.41)	
14	石鏃		(1.9)	(1.2)	(0.35)	(0.58)	
15	石鏃		(2.0)	(1.1)	(0.4)	(0.66)	
16	石鏃		(1.9)	(1.2)	(0.35)	(0.73)	
17	石鏃		(1.8)	(1.3)	(0.2)	(0.33)	
18	石鏃		(1.55)	(1.5)	(0.4)	(0.67)	
19	石鏃		(2.2)	(1.5)	(0.3)	(0.73)	
20	石鏃		(1.7)	(1.4)	(0.25)	(0.49)	
21	石鏃		1.85	1.55	0.15	(0.43)	
22	石鏃		(2.35)	(1.3)	(0.25)	(0.79)	
23	石鏃		(2.1)	(1.4)	(0.4)	(1.05)	
24	石鏃		(2.7)	(1.65)	(0.4)	(1.32)	
25	石鏃		(1.95)	(1.65)	(0.3)	(1.01)	
26	石鏃		2.65	(1.6)	(0.35)	(1.11)	
27	石鏃		(3.05)	(1.95)	(0.6)	(3.70)	
117	石鏃	SB2	(1.5)	(1.55)	(0.2)	(0.36)	珪質凝灰岩
118	石鏃		2.45	1.1	0.4	1.08	珪質凝灰岩
119	石鏃		2.4	1.4	0.2	0.84	珪質凝灰岩
120	石鏃		2.5	1.1	0.3	0.95	珪質凝灰岩
121	石鏃		3.5	1.8	0.4	2.1	珪質凝灰岩，五角形
122	石鏃		(2.45)	(1.7)	(0.35)	(1.46)	珪質凝灰岩
123	石鏃		3.3	1.3	0.4	1.31	珪質凝灰岩
124	石錐		2.0	1.0	0.2	0.48	
125	石錐		(2.3)	(0.9)	(0.3)	(0.62)	珪質凝灰岩
126	楔形石器削片		3.1	1.4	1.0	3.69	
127	石斧		10.5	4.5	2.05	140.02	輝緑凝灰岩
128	石斧		10.4	5.35	2.7	159.21	凝灰岩
129	石斧		(10.2)	(6.1)	(4.15)	(444.22)	凝灰岩
130	石斧		(2.4)	(5.05)	(1.1)	(19.49)	細粒閃緑岩
131	石斧		15.65	2.6	4.2	353.17	珪質凝灰岩
132	石包丁		14.4	5.15	1.0	89.96	泥質砂岩
133	磨石・敲石か		9.2	8.2	4.4	445.69	熱変質流紋岩
134	敲石か		8.15	7.0	3.75	209.22	石英
135	磨石・敲石か		14.0	9.4	2.9	559.60	細粒黒雲母花崗岩
138	石鏃	SB5	(1.9)	(1.2)	(0.35)	(0.52)	
139	石錐		(3.8)	2.0	0.4	(1.55)	
146	石鏃	SK4	(1.9)	(1.4)	0.2	(0.62)	
147	石鏃	SK5	1.9	(1.05)	0.2	(0.36)	
148	石鏃		(1.9)	1.1	0.25	(0.32)	
149	石鏃		(1.4)	(0.75)	(0.2)	(0.14)	
150	石鏃		2.0	1.1	0.25	0.61	
151	石鏃		(1.1)	(1.2)	0.2	(0.34)	
152	石鏃		(2.2)	1.2	0.25	(0.62)	
153	石鏃		(1.9)	(1.4)	(0.3)	(0.91)	
154	石鏃		(1.65)	1.35	0.3	(0.71)	
155	石鏃		(2.1)	1.45	0.15	(0.64)	
156	石鏃		(2.5)	(1.5)	(0.25)	(1.06)	
157	石鏃		(2.6)	(1.1)	(0.2)	(0.50)	
158	石鏃		(1.3)	(1.0)	(0.2)	(0.28)	

遺物No.	器種	出土遺構	法量 (cm, g)				石材
			長さ	幅	厚さ	重さ	
159	石鏃	SK6	1.6	1.1	0.2	0.38	
160	石鏃		(1.85)	(1.0)	(0.3)	(0.59)	
161	石鏃		(2.0)	(1.2)	0.4	(0.74)	
162	石鏃		3.05	(1.2)	0.2	(0.63)	
163	石鏃		(1.3)	1.2	0.2	(0.35)	
164	石鏃		1.5	1.2	0.35	0.51	
165	石鏃		1.7	1.2	0.2	0.55	
166	石鏃		(1.4)	1.4	0.3	(0.52)	
167	石鏃		1.6	1.55	0.2	0.62	
168	石鏃		(1.8)	1.45	0.3	(0.72)	
169	石鏃	SK7	(1.4)	(1.3)	0.15	(0.33)	
170	石鏃		1.85	(1.3)	0.3	(0.69)	
171	石鏃		(2.25)	(1.35)	0.25	(0.60)	
172	石鏃	SK8	(2.0)	(1.05)	(0.2)	(0.47)	
173	石鏃		(2.3)	(1.7)	(0.35)	(0.84)	
193	スクレイパー	SD1	(4.0)	(3.2)	(0.6)	(8.47)	粘板岩（熱変質泥質岩）
195	スクレイパー	SA1	(7.9)	4.7	0.6	(27.13)	珪質凝灰岩
196	石鏃	SA4	2.5	1.6	0.3	1.11	
197	石斧	SX2	(11.8)	(4.7)	(4.1)	(385.52)	輝緑凝灰岩
251	砥石	調査区	6.6	4.1	1.5	88.52	細粒凝灰岩
252	磨石		9.1	8.8	3.8	403.08	細粒半花崗岩

（4）玉類

遺物No.	器種	出土遺構	法量 (cm, g)				石材
			高さ	径	孔径	重さ	
116	管玉	SB2	2.45	0.6～0.65	0.15～0.2	1.47	
145	管玉	SK1	1.0	0.4	0.15	0.20	

第4表　石鏃一覧表

遺構名	遺物No.	折損 有無	折損 個所	側縁の形状	脚部の形状	基部 形状	基部 抉り	素材面 A面	素材面 B面	側縁・基部間の剥離順 類型	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	各側縁の剥離順 A・左	A・右	B・左	B・右	鋸歯 左	鋸歯 右	備考
SB1	12	○	先端	内湾	角	凹基	0.3	○	○	B	→	←	→		→	←	→	→	←	d	d	a	b	×	×	
	13	○	先端・脚	内湾・外湾	尖	凹基	*0.1	○	○	B		←	→	←	→	←	←		←	c	b	a		×	×	
	14	○	先端・脚	外湾	尖	凹基	*0.3	○	○	B	←	←	→		→	←	→	←	→	a	d	d	c	×	×	
	15	○	先端・脚	直線	角	凹基	*0.3	○	○	B	→	←	←	→?	→	←	→	←	→	a	a	b	a?	×	×	未成品?
	16	○	先端・脚	直線	尖?	凹基	*0.2	○	○	A	←	←	←?	→?		←		←?	←	c	d		d	×	×	未成品?
	17	○	下半	直線				○	○		⇔?	→	→	→						a	b	a?	c	×	×	
	18	○	先端・脚	内湾	尖	平基	—	○	×	B	→	←		→	←	→	←	→	←	b	b	a	c	×	×	
	19	○	脚	直線	角・尖	凹基	*0.2	○	○	B	←	→		←	←	→	←		←	c	c	c	c	×	×	
	20	○	上半・脚	直線	丸	凹基	*0.2	○	○		←				←		→		→	c			d	×		未成品
	21	○	脚	直線	尖	凹基	*0.3	○	○		→				→				←					×	×	未成品
	22	○	先端・脚	直線	角	凹基	*0.4	×	○		→		→		→	→			→	c	a		a	×	×	未成品
	23	○	先端・脚	直線		凹基?		○	×		⇔?	⇔?	→	←	→					d	c	a	d	×	×	
	24	○	先端・脚	直線	尖	凹基	*0.1	○	○		→	→	←	←						c	d	c	a	×	×	
	25	○	先端	直線	尖	凹基	0.3	○	○	B	⇔?	←	→	→	→		←		←	d	b	c	d	×	×	
	26	×		直線	尖	凹基	0.1	○	○	C	←	←	←	←	←		←		→	c	d	d	b	×	×	自然面
	27	×		直線	尖	平基	—	○	○		⇔	→	←		←	→	→	→	←	a	b	c	e	×	×	未成品?
SB2	117	○	先端・脚	直線	尖	平基	—	○	○										→		c			×	×	未成品
	118	×		外湾	角	凸基?		○	○		⇔	⇔	→	→	→	→	←	←	→	c	d	a	d	×	×	未成品?
	119	×		外湾	角	平基	—	○	○												b	d		×	×	微細剥離
	120	×		外湾	角	平基	—	○	○	B	→	←				←	→			c	e	b	d	×	×	基部端面
	121	×		有稜	尖	凹基	0.4	○	○	B	⇔	⇔	→	←	←	→	←	→	←	a	c	b	c	×	×	五角形鏃
	122	○	先端	直線	尖	凹基	0.1	○	○	B	←	←	←		←	→	→	←	→	e	d	a	a	×	×	未成品
	123	×		外湾・内湾	角	平基	—	○	○	A		⇔		←		←	←		←	a	c	c	a	×	×	未成品
SB5	138	○	脚	直線	丸	凹基	*0.3	○	○	A	←	←	→	←	←	→	←	→	←	c	b	d	e	×	×	
SK4	146	○	先端・脚	直線	尖	凹基	*0.3	○	×	A	→	←		→	←	→	→	→	←	b	e	c	b	△	△	
SK5	147	○	脚	直線	尖	凹基	*0.2	○	○		←	→	←	←					←	b	a	d	a	○	○	
	148	○	先端	直線	尖	凹基	0.2	○	○	A	→	→			→	←		←	→	a	b	b	b	○	×	
	149	○	右半	直線	丸			○	○		←									a				○		
	150	×		外湾	角	平基	—	○	○		←→	→	→	→						c	c	b	c・b	○	○	
	151	○	先端	直線	尖	平基	—	○	○															×	×	未成品?
	152	○	先端	直線	尖	凹基	0.2	×	○	B	→←	←?→	←	→	←	←	→		←	c	d	c	d	×	×	
	153	○	先端・脚	直線	尖	平基	—	○	○	C	←	←	→		←		←		→	c	b	b	b	○	○	
	154	○	先端	直線	尖	凹基	0.1	○	○	C	→	←			←	→	→		←	a	b	d	c	○	○	
	155	○	先端	直線	尖	凹基	0.1	○	○		→	←							←	b	a		b	○	△	
	156	○	先端・脚	外湾	尖	凹基	0.2	○	○		→←	⇔			←			←	←	c	c	c	e	×	×	
	157	○	右半	内湾	尖	凹基		○	○											a			b	○?		未成品?
	158	○	大半	直線?				○	○																	
SK6	159	×		直線	尖	凹基	0.1	○	○		←?	→	→			→	→		←	d	d	a?		×	×	
	160	○	基部	直線				○	○															×	×	未成品?
	161	○	先端・脚	直線	尖	平基		○	○	B	⇔	⇔	→	←	←	←	←	→	←	b	b	b	c	×	△	
	162	○	脚	直線	尖	凹基	*0.3	○	○		←	⇔	←	←	→					e	b	b	a	○	○	
	163	○	上半	直線	尖	凹基	0.2	○	○	A	→	→			←	→	←	→	→	b	b	a	b	○	○	
	164	×		直線	尖	平基		○	○	A	←	←	→	→	→	←	←		→	d	b	c	b	△	×	
	165	×		直線	尖・角	凹基	0.3	○?	×	A	←	⇔	→	→	→	→	→	←	←	c	b	a	b	○	×	
	166	○	上半・脚	直線	尖	凹基	*0.2	×	○	B	⇔←	→⇔	←		←	←	→	←	→	e	b	a	a	○	○	

遺構名	遺物No.	折損		側縁の形状	脚部の形状	基部		素材面		側縁・基部間の剥離順										各側縁の剥離順				鋸歯		備考
		有無	個所			形状	抉り	A面	B面	類型	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	A・左	A・右	B・左	B・右	左	右	
	167	×		直線	角	凹基	0.2	○	○	B	→←	→	→		→	→	←		←	c	c	b	a	○	△	
	168	○	先端・脚	直線	尖	凹基	*0.1	○	○	B	→	←	←	→	→	←	←	←	→	a	d	b	b	×	×	
SK7	169	○	上半・脚	直線	尖			○	○		←→	→								c・c	d	b?	b	△	△	
	170	○	脚	直線	尖	凹基	*0.1	○	○	B	←	←	→	→	→			→	←	c	c	b	b	×	×	
	171	○	脚	直線	尖	凹基	*0.4	○	○	B	⇔?	←→	←	←	→	→	→		→	b	a	b	b	○	○	
SK8	172	○	先端・基部	直線				○	○		⇔	→								b	a	c	c	×	×	未成品?
	173	○	上半	内湾	尖	凹基	0.2	×	×	C	⇔	←	→	→	→	→	→	→	→	c	d	c	c	×	×	
SA4	196	○	先端	直線	丸	凹基	0.2	○	○	B	→	→	→	←	←		→		←	c	b	a	b	×	×	

＊（1）「抉り」＝基部の抉り指数。基部抉りの深さ（b）÷基部幅（a）。数値の前に＊が付いているのは，推定あるいはやや不明確な数値であることを示す。例言の石鏃模式図参照。

（2）「素材面」＝A・B面における素材剥片の剥離面・剥離痕の有無。

（3）「側縁・基部間の剥離順」＝隣接するA・B両面の3部位（左側縁・右側縁・基部），計6部位間の剥離行為の先後関係。矢印の先端側が後出（新しい），基部側が先行する（古い）ことを示す。

①A面左側縁・B面右側縁間　②A面右側縁・B面左側縁間　③A面左側縁・A面右側縁間　④B面左側縁・B面右側縁間　⑤A面左側縁・A面基部間

⑥A面基部・A面右側縁間　⑦B面左側縁・B面基部間　⑧B面基部・B面右側縁間　⑨A面基部・B面基部間

「⇔」：交互剥離，「→←」：側縁の上半は「→」，下半は「←」であることを示す。？が付いているのはやや不明確。

例．①の欄（A面左側縁・B面右側縁間）で「→」であれば，A面左側縁の剥離行為がB面右側縁のそれに先行することを示す。

［類型］＝本文の「Vまとめ」p96参照。

（4）「側縁の剥離順」＝A・B面各側縁における剥離の進行状況。「A・左」：A面左側縁，「A・右」：A面右側縁，「B・左」：B面左側縁，「B・右」：B面右側縁。

a：側縁の上→下へと剥離が行われる。b：側縁の下→上へと剥離が行われる。c：側縁の中央→上・下へと剥離が行われる。

d：側縁の上・下→中央へと剥離が行われる。e：剥離の進行状況が規則的でない・不明なもの，など。

（5）「鋸歯」＝側縁における鋸歯状剥離の有無。

「○」：多くみられる，「△」：部分的にみられる，「×」：認められない

なお，「左」：A面左側縁＝B面右側縁，「右」：A面右側縁＝B面左側縁を示す。

第5表　石鏃の調整剥離の順序

（1）住居・柵跡

類型	遺構番号	遺物番号	調整剥離の順序
A類	SB1	16	（B左＝素→）B（右→基）→A（右→左・基）
	SB2	123	B（基→右）→［B左→A右］→A基　＊A左は素。
	SB5	138	B（基→右→左）→A（基→左→右）
B類	SB1	12	［B左→A右］→B基→［A左→B右］→A基
		13	B基→＜A右⇆B左＞→A（左→基）＊B右は素
		14	［B右→A左］→［B左→A右］→A基→B基
		15	［B左→A右］→［A左→B右］→A基→B基
		18	B基→A基→［B左→A右］→［A左→B右］
		19	A基→［B右→A左］→B基→［A右→B左］
		25	＜A左⇔B右＞→B基→［B左→A右］→A基
	SB2	120	［B左→A右］→［A左→B右］→B基→A基
		121	B基→A基→＜A左⇔B右＞→＜A右⇔B左＞
	SA4	196	B基→A基→［A左→B右］→［A右→B左］
C類	SB1	26	A基→B（基→右→左）→A（右→左）
	SB2	122	A基→B（左・右→基）→A（右→左）

（2）墓坑

類型	遺構番号	遺物番号	調整剥離の順序
A類	SK4	146	B（左→基→右）→A（基→左→右）
	SK5	148	A（左・右→基）→B（基→左・右）
	SK6	163	A（基→左・右）→B（基→左・右）
		164	B（基→左）→［B右→A左］→A（右→基）
		165	B（左→右→基）→A（左→基→右）
B類	SK5	152	［A右→B左］→B基→A基→＜A左⇆B右＞
	SK6	161	B基→［B右→A左］→A基→［A右→B左］
		166	＜A右⇆B左＞→A基→＜A左⇆B右＞→B基
		167	＜A左⇆B右＞→B基→A基→［A右→B左］
		168	［B左→A右］→［A左→B右］→A基→B基
	SK7	170	B基→［B右→A左］→A基→［B左→A右］
		171	＜A左⇔B右＞→A基→＜A右⇆B左＞→B基
C類	SK5	153	B（右→左）→A（基→左→右）→B基
		154	B（左→基）→A（基→右・左）→B右
	SK8	173	B左→［B右→A左］→A（基→右）→B基

「調整剥離の順序」の凡例；「A」＝A面，「B」＝B面，「基」＝基部，「左」＝左側縁，「右」＝右側縁。

［→］＝同一辺の表裏に位置する側縁間の連続的な剥離作業の移動。

＜⇔＞＝同一辺の表裏に位置する側縁間の交互剥離。

＜⇆＞＝同一辺の表裏に位置する側縁間の剥離で，上半と下半で剥離の順序・方向が異なるもの。

V まとめ

金井原遺跡は，世羅郡世羅町の中央部，大字川尻の芦田川南岸の低丘陵緩斜面に立地する弥生時代中期の集落跡である。竪穴住居跡・掘立柱建物跡・柵跡・墓坑などの遺構を検出し，弥生土器・土器片紡錘車・石器（石鏃・石錐・石斧・石包丁など）・管玉や縄文土器が出土した。ここでは，個別に遺物（弥生土器・土器片紡錘車・石鏃）と遺構（竪穴住居跡・掘立柱建物跡・柵跡・墓坑）の検討・分析を行ったのちに，集落構造や集落と墓域の関わりなどについて若干の考察を試みたい。

（1）出土遺物について

A．弥生土器の検討（第１・３表）

弥生土器の報告点数は計116点で，その内訳は壺26点（22.4%），甕47点（40.5%），高杯３点，蓋１点，底部片39点（33.6%）である。壺・甕が大半を占め，そのほかの器種は少ない。遺構別では，竪穴住居跡のＳＢ１（７点），ＳＢ２（40点）及び掘立柱建物跡ＳＢ11に付設する溝状遺構ＳＤ１（８点）が主体で，そのほかの遺構からは１～３点の出土にすぎない。

①壺　遺構出土の壺はＳＢ２の３点など11点で，ほかは遺構に伴わない。体部から内上方に直線的に窄まった口縁の端部を外方に短く拡張する無頸壺（ＳＢ７－140，ＳＸ１－186，調査区－204・205）と，体部から頸部にかけて強く窄まり，頸部からラッパ状に開いた口縁の外面に凸帯を貼り付けた細頸壺（ＳＫ６－143，ＳＤ１－175，調査区－198・199・201・202・203）は，体部外面に櫛描文（直線・波状・鋸歯文）や刺突文を施す。広口壺は頸部から強く外反する厚手の口縁の端部を下方に拡張する（ＳＢ２－44・45，ＳＤ１－176，ＳＤ３－183，ＳＸ１－185，ＳＰ１－188，調査区－206～211）。口縁部の拡張はあまり顕著なものではないが，185・209は比較的大きい。平坦な口縁端面に櫛描文（波状・鋸歯・斜格子など）や連続的な刻みを施すもの（185・188・207・209・211），頸部に凸帯を貼り付けるもの（176・185・208・209）などがみられる。45は209の形態の広口壺の体部である可能性が高い。無頸壺及び広口壺のうち口縁の拡張が比較的大きな185・209などは，他のものに較べてやや古相を示し第Ⅱ様式[(1)]の可能性が高いが，他はいずれも第Ⅲ－１様式のものと考えられる。

②甕　個体数としては最も多い。遺構に伴うものはＳＢ２の15点やＳＢ１の６点など27点で，遺構に伴わないものが20点ある。逆Ｌ字状の貼付口縁のもの（Ａ類），くの字状に外反する薄手の口縁をもつもの（Ｂ類），強く外反する短く分厚い口縁をもつもの（Ｃ類）がある。Ａ類は，口縁部直下に１条の凸帯を貼り付けるＡ２類と凸帯をもたないＡ１類に分かれる。Ａ１類には，ＳＢ１－１～３，ＳＢ２－31・33，ＳＫ12－144，ＳＰ３－189，調査区－216・217がある。体部はやや内傾気味に直立し，断面が長三角形状を呈する口縁部の端部を尖り気味に納める。体部外面には

施文はみられない。33は外傾気味に立ち上がり，口縁上端面から外面の口縁直下に向けて斜め方向に小さな円孔が穿たれており，貼付口縁も小さい。ほかのＡ１類と様相を異にしており，甕以外の器種である可能性もある。Ａ２類は，ＳＢ２－29・30，ＳＢ13－142，調査区－214がある。口縁は分厚く端部を丸くおさめる。凸帯上に刻みをいれるものもみられる（29・30）。これら貼付口縁のＡ類は第Ⅱ様式の可能性が高い。くの字状口縁のＢ類は大半が口縁部直下に凸帯を持たないＢ１類だが，一部にＡ２類と類似する凸帯をもつＢ２類がみられる。Ｂ１類は，ＳＢ１－４・５，ＳＢ２－35～41，ＳＤ１－177・178，ＳＸ１－187，調査区－218～229がある。Ｂ１類は細かくみると，Ａ１類に近い形態の逆Ｌ字状の口縁のもの（187・218～221），頸部で緩やかに屈曲してくの字状を呈する薄手の口縁の端部を丸く納めるもの（５・35・37・39・40・41・222・223），これに似るが口縁がやや長く，頸部の屈曲がやや鋭いもの（36・177・224・229），頸部でくの字に鋭く屈曲し，端部を丸く納めるもの（４・178・227・228），くの字に鋭く曲がる口縁の端部を角ばらせるもの（38・225・226）などに細分できる。Ｂ２類は短くやや分厚いくの字状の口縁をもち，頸部直下に凸帯１条を貼り付けるもの（213・215）とやや長いくの字状の薄手の口縁のもの（42）とがある。Ｃ類は口縁の形状が広口壺のものに類似する（ＳＢ２－32・34，調査区－230～232）。口縁端部の外方への拡張は小さく，端面は平坦である。32は口縁の拡張はみられず，平坦な端面に浅い凹線２条が施される。

③その他　高杯３点，蓋１点と底部片39点がある。高杯は杯部の口縁（調査区－233・234）と脚部（ＳＤ１－179）で，いずれも口縁端部を内側に小さく拡張して平坦な上端面を作り出すものである。234は口縁部上端面にヘラ描き斜格子文を描いた上に円形浮文を貼付けており，内面側には小さな刻目が入る。類例が岡山県・二野遺跡[2]４Ｃ区谷包含層出土遺物にある。

底部片は，底径がやや大きく，開き気味に立ち上がる壺の底部（ＳＢ２－52・62・64～67，ＳＢ４－136，ＳＤ３－184，調査区－243）と比較的小さな底径で，直立気味に立ちあがる分厚い甕の底部とがある（ＳＢ１－７，ＳＢ２－46～51・53～61・63，ＳＢ７－141，ＳＤ１－180～182，ＳＰ６－191，調査区－236～242）。いずれも平底だが，一部にやや上げ底気味に外底面が凹むものがある。

金井原遺跡ではＳＢ１・２を中心に弥生土器が出土したが，いずれも破片は小さく，点数的にも多くはない。上述の壺・甕を主とする分析から，無頸壺の一群及び広口壺の一部と逆Ｌ字状の貼付口縁をもつ甕の一群が第Ⅱ様式とみられるが，大半のものは櫛描文が消失し，凹線文が出現する直前の第Ⅲ－１様式の様相を示すと考えられる。第Ⅱ様式の様相をもつ壺・甕を出土した遺構としては，ＳＢ１，ＳＢ２，ＳＢ７，ＳＢ13，ＳＫ12，ＳＸ１，ＳＰ３があり，住居の建て替えが頻繁に行われたＳＢ１・ＳＢ２は第Ⅱ様式～第Ⅲ－１様式，ほかの遺構は出土点数が少なく明確ではないが，ＳＸ１についてはもう１点（187）もＡ１類に近い形態のＢ１類の甕であることから第Ⅱ様式の時期の遺構である可能性が高い。このように，集落の中心的な住居であるＳＢ１・２から第Ⅱ様式～第Ⅲ－１様式の時期の土器が出土し，このほかの遺構のなかにも第Ⅱ様式の土器を出土するものがあることなどから，本集落は第Ⅱ様式の時期に集落形成を開始し，第Ⅲ

－１様式の時期にかけて存続，やがて他所に移動あるいは消滅したものと考えられ，金井原遺跡の時期を弥生時代中期前葉～中葉頃に求めることができよう。

B．土器片紡錘車の分析（第１・３表） 出土点数は計62点である。遺構別では，ＳＢ２で48点（77.4%）出土したのが最も多く，このほかにＳＢ１（４点），ＳＢ５・ＳＤ１・ＳＤ３（各１点），調査区内（７点）から出土している。

①直径（復元値・最大径） 未成品計13点（ＳＢ１：１点，ＳＢ２：11点，ＳＤ３：１点）を除いた計49点を対象とする。径3.4～９cm（平均4.6cm）である。ＳＢ１（平均5.8cm）は8.4cmの大型品を除くと4.2cm，4.8cmと平均的である。ＳＢ２は3.4～5.8cm（平均4.5cm）と大きさが比較的揃う。

②重さ 完形品は殆どないので，ごく大雑把な復元値によれば，点数が多い直径3.1～４cmのものが５～10ｇ，直径4.1～５cmのもので10～15ｇ程度とみられる。

③軸孔

ａ．内径（分析対象34点） 0.1～0.6cmに納まり，平均値は0.47cmである。

ｂ．外径（分析対象＝外面51点，内面56点） 外面の平均値0.71cm，内面は0.69cmである。

ｃ．穿孔 大半が内・外両面から穿孔しているが，ＳＢ２出土品に４点（外面からの穿孔３・内面からの穿孔１点），調査区内出土品に１点（内面からの穿孔か）片面穿孔のものがみられる。

ｄ．未通孔 ＳＢ１（１点：外面），ＳＢ２（９点：外面１点，内面８点）の出土品に軸孔が未貫通のものがある。このほか，貫通した本来の軸孔以外に未通孔が存在する例がＳＢ２で３例（外面２点，内面１点）存在する。未通孔は内面側に存在する例が多いことから，軸孔の穿孔は内面側から行われた可能性がある。

ｅ．軸孔縁辺の摩滅 例数は少ないが，ＳＢ２（４点：外面・内面各２）と調査区内（１点：内外面）出土品にみられる。これらの摩滅はいずれも使用に伴うものと考えられる。

④素材土器片の部位と厚さ 大半が体部片を使用しているが，ＳＢ２出土品のなかに肩部片３点，底部片１点を用いているものがある。紡錘車の厚さはこの素材となった土器片の厚さを反映しており，全平均値（62点，＝ＳＢ２出土品の平均値）0.52cmで，これと較べるとＳＢ１出土品の平均値0.43cmはやや薄い。

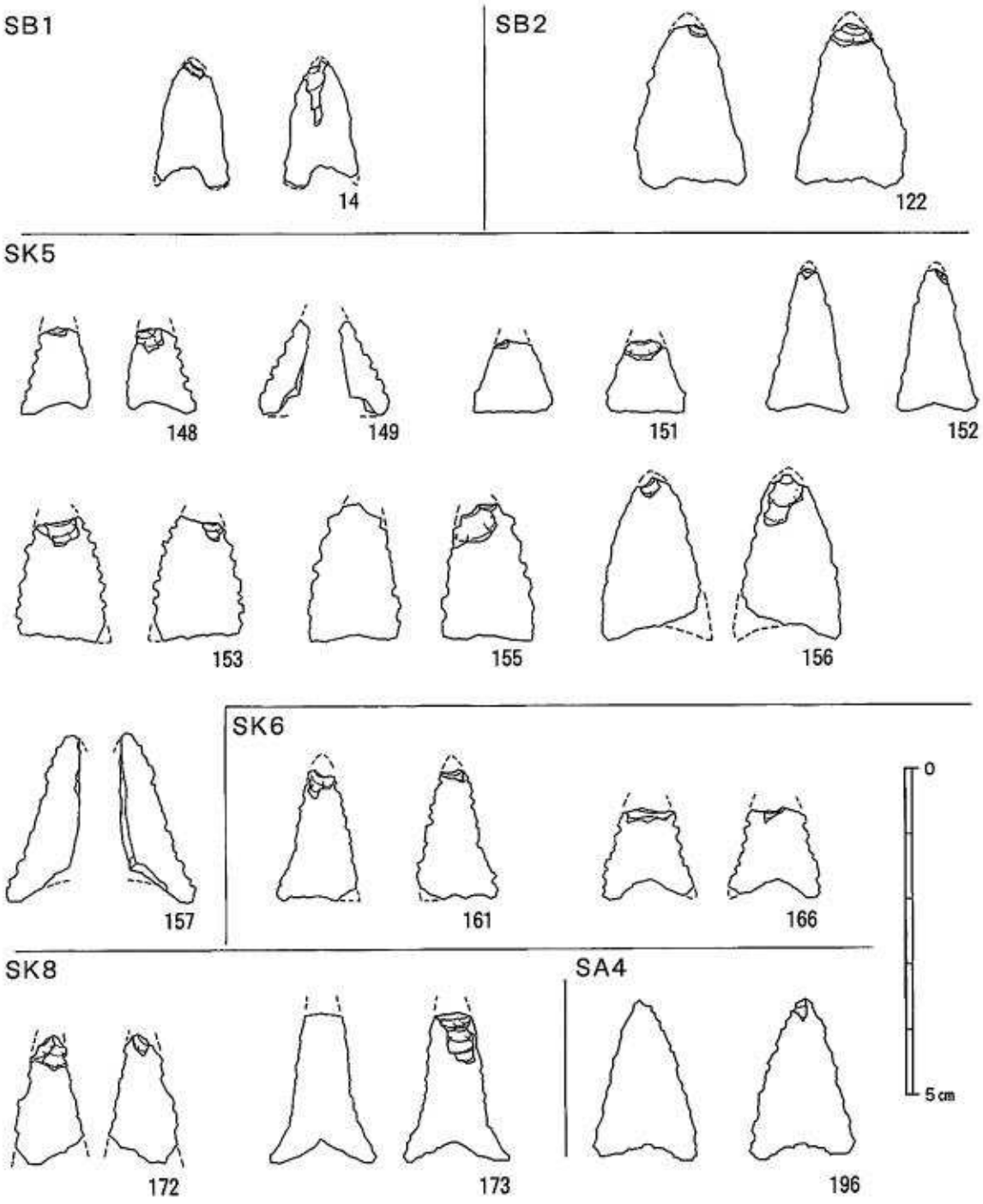
⑤素材土器片の調整痕 外面ハケ目＋内面ヘラミガキ，外面ハケ目＋内面ナデの組み合わせが多くみられる。このほか内外面ヘラミガキや外面ヘラミガキ＋内面ナデ，外面ハケ目＋ナデ＋内面ヘラミガキや内面ナデの組み合わせも比較的多い。

C．石鏃の分析（第１・３～５表） 出土点数は計53点で，遺構別では，ＳＢ１が16点（30.2%），ＳＫ５が12点（22.6%），ＳＫ６が10点（18.9%），ＳＢ２が７点（13.2%）と，並列する２基の墓坑と大型の竪穴住居に集中し，このほか，墓坑のＳＫ４・７・８，竪穴住居跡ＳＢ５，柵跡ＳＡ４から１～３点ずつ出土している。

①折損[3]　本遺跡出土の石鏃は折損が多い（完存12点。折損品41点＝77.4%）。部位別では，先端・上半が多く，脚（脚端）部・基部・下半や左半・右半などもある。折損の形状としては，①折れと②剥離がある。①は面的な加圧によるもので，多くの場合，打点やフィッシャー（放射状裂痕），リング（貝殻状裂痕）などの剥離の痕跡が不鮮明で，実際に力が加わった箇所と折損面が離れている。このような折れは，不用意な，あるいは予期せぬ加圧によるもので，具体的には石器製作時の剥離の失敗や使用時の過失（落下・衝突など）によるものと思われる。②は折損に伴う剥離痕に打点や裂痕が比較的明瞭に残るもので，意志的な打撃に伴うものと考えられる。この②の剥離痕は，ａ．先端側から加撃による剥離痕で，主に石鏃の先端や上半の折損に伴うものと，ｂ．先端あるいは基部側からの縦方向の加撃によって縦方向に半裁され，折損面が樋状をなすもので，石鏃の右半・左半の折損に伴うものの二通りがある。②ａは多くの場合，Ａ・Ｂ両面に同時剥離の剥離痕各１～２枚として残され，硬質の対象物への衝撃によるものと考えられる。②ｂも刺突時の衝撃に伴う剥離の可能性が高いが，折損の部位や形状等の②ａとの違いは矢の投射状況や刺突状況・部位の違いに基づくものとみられる。

折損のある石鏃の保有率は，ＳＢ１（14点／16点＝87.5%），ＳＫ５（11点／12点＝91.7%），ＳＫ６（６点／10点＝60%）が高く，ＳＢ２（２点／７点＝28.6%）は低い。住居・柵は18点／25点（72%）であるのに対して墓坑は23点／28点（82%）と墓坑の保有率が高い。①の単純な折れによるものが大半で（26点／41点＝63.4%），②ａ・②ｂの刺突時の衝撃によるものはやや少ない。住居や柵跡から出土した石鏃の折損の多くが①の単純な折れによるもので，不用意な加圧・打撃に伴うものである可能性が高い（15点／18点＝83.3%。墓坑出土の石鏃の折損品で単純な折れによると思われるものは，11点／23点＝47.8%）。このことは，住居跡出土の石鏃には調整剥離を途中で止め，放棄されたとみられる未成品が多い点からもいえる（竪穴住居跡のＳＢ１が６点＝37.5%，ＳＢ２が４点＝57.1%。墓坑のＳＫ５が２点，ＳＫ６・８が各１点）。一方，②ａ・②ｂの刺突時の衝撃剥離による折損がある石鏃は計15点（住居・柵跡；３点／18点＝16.7%，墓坑；12点／23点＝52.2%））出土している。大半は②ａ，投射された矢が動物や人間の骨などの硬い箇所（皮・肉などを含む）に刺突した際の衝撃によって，石鏃の先端・上半（まれに刺突の衝撃の反動などにより，脚部・基部・下半など先端・上半以外の部位にも剥離が及ぶことが考えられる）が折損するものである。この②ａの石鏃は，墓坑から10点，住居・柵跡から３点の計13点出土している。墓坑出土のものはＳＫ５＝６点（148・151・152・153・155・156），ＳＫ６＝２点（161・166），ＳＫ８＝２点（172・173），住居・柵跡出土ものはＳＢ１（14）・ＳＢ２（122）・ＳＡ４（196）各１点である。また，②ｂの刺突の衝撃によって，石鏃が縦方向に半裁される例は少ない（ＳＫ５－149・157）。157は基部側から加撃されており，恐らく刺突時の衝撃の反動により折損したものと考えられる。

以上のように，住居・柵跡出土の石鏃の折損の多くは製作途中の誤った剥離作業など不用意あるいは予期せぬ加撃・加圧によるもので，墓坑出土の石鏃には刺突時の衝撃，具体的には人体に射込まれた際の衝撃によるものが多いと言えよう。なお，住居・柵跡から出土した石鏃の中に②



第42図　石鏃の折損状況（1:1）

aの折損のある石鏃３点が出土しているが，これについては，御堂島正の言うように，（１）矢が射込まれた獲物を集落に持ち帰る，（２）鏃以上に貴重な矢柄を再利用するために，衝撃剥離の折損のある石鏃を装着した矢を集落に持ち帰る，ことなどによって集落（居住域）内に持ち込まれた結果と考えられる。

②基部の形状　凹基が大半を占め，一部に平基が認められる。住居・柵跡出土の石鏃では，凹基17点（68%），平基６点（26%）と凹基が多い。特に，ＳＢ１では凹基13点，平基２点と大半が凹基で占められるが，ＳＢ２では凹基２点，平基４点と平基が多い。墓坑出土の石鏃では，凹基18点（64%），平基５点（18%）で，平基はＳＫ５で３点，ＳＫ６で２点みられる。凹基の抉り係数は0.1～0.4で，平均値は住居・柵跡出土の石鏃が0.24，墓坑出土の石鏃は0.20と前者がやや深い。

③鋸歯状剥離　両側縁に鋸歯状の調整剥離が顕著にみられるもののほかに，片側縁は顕著，もう片方は疎ら，両側縁ともに疎ら，一方の側縁にのみ部分的に鋸歯状剥離がみられるものがある。鋸歯状剥離がみられる石鏃は墓坑（ＳＫ４～７）からのみ出土し，住居・柵や墓坑のＳＫ８からは出土していない。ＳＫ５（８点／12点），ＳＫ６（７点／10点）は鋸歯状剥離を有する石鏃の保有率が高く，また一側縁に施された鋸歯状剥離痕の数も多い。

④素材面　ＳＢ１・ＳＫ６出土の石鏃は，Ａ・Ｂ面中央に小さく素材面を残すが，ＳＢ２・ＳＫ５・ＳＫ７から出土した石鏃は，Ａ・Ｂ面中央に広く素材面を残している。ＳＢ２は面の左寄りや中央部に大きく縦長に素材面を残し，ＳＫ５は中央部のやや下半寄りに素材面を残すものが多い。ＳＫ７は２点ともに中央に広く素材面を残している。

住居・柵跡出土の石鏃は横方向や縦方向の剥離方向を示す剥離面を素材面とすることが多く（50～58%），斜め方向の剥離は比較的少ない（33%）。一方，墓坑出土の石鏃は，斜め方向の剥離（61.5%）や横方向の剥離（50%）のものがやや多く，縦方向の剥離面は比較的少ない（30.8%）。

⑤法量（平均値・推定復元値）　住居・柵跡出土の石鏃は長さ2.7cm，幅1.4cm，重さ1.00ｇ，墓坑出土の石鏃は長さ2.1cm，幅1.3cm，重さ0.5ｇ程度で，住居・柵跡出土の石鏃は墓坑出土のそれと較べてやや大型で重いといえる。

⑥側縁・基部間の剥離順　Ａ・Ｂ両面の左側縁・右側縁・基部の計６か所の部位間における調整剥離の順序を検討することによって，石鏃の調整剥離の方向性・傾向を見出そうとするもので，大きくＡ・Ｂ・Ｃ類の３つの類型に分けられる。

・Ａ類＝ひとつの面（左側縁・右側縁・基部）のなかで調整剥離を完了させたのち，反対側の面（左側縁・右側縁・基部）の調整剥離を行い，完了させるもの。

・Ｂ類＝Ａ面左側縁とＢ面右側縁あるいはＡ面右側縁とＢ面左側縁といった同じ側辺に位置する表裏の側縁間で交互あるいは連続的に調整剥離を行っていくもの。

・Ｃ類＝Ａ面とＢ面の各部位の調整剥離を互い違いあるいは順不同に行うもので，Ａ類とＢ類の折衷形ともいえる。

住居・柵跡出土の石鏃はＡ類３点，Ｂ類10点，Ｃ類２点とＢ類が大半を占め，墓坑出土の石鏃はＡ類５点，Ｂ類７点，Ｃ類３点とＢ類が優勢だが３つの類型が比較的拮抗している。

⑦各側縁の剥離順　A・B両面の側縁４か所における調整剥離の進み方を検討するもので，a（側縁の上から下方向に剥離作業が進むもの），b（側縁の下から上方向に剥離作業が進むもの），c（側縁の中央から上・下方向に剥離が進むもの），d（側縁の上・下から中央へと剥離作業が進むもの），e（剥離の進行が不規則・不明確なもの）の５つのパターンがある。⑥の側縁・基部間の剥離順との関連でいえば，面単位で調整剥離を行うA・C類は各面の側縁間の剥離順の組み合わせと，またA・B両面に亘って交互剥離を行うB類では同じ側辺の表裏をなす側縁間の剥離順の組み合わせとそれぞれ有意な関連があると考えられるが，今回はそれほど顕著な関連性はみられなかった。

全体的には，住居・柵跡ではc・aが多く，b・dがやや少ない。同一面にしろ，表裏にしろ隣り合う側縁間での剥離パターンの組み合わせでは，a－b，b－c，c－dが多い。剥離順が同じもの同士の組み合わせではa－a，c－c，d－dがB類でみられるが大勢ではない。墓ではbを主にc・aがやや多く，dは少ない。隣り合う側縁間での剥離パターンの組み合わせではa－b，b－cが多い。剥離順が同じもの同士の組み合わせはb－bが多い。c－cはA・C類では多いが，B類では少ない。a－a，d－dは殆どみられない。いずれにしろ，墓でみられるb－bを別として，基本的には面的にしろ表裏にしろ隣り合う側縁間では同じパターンの剥離作業を行うことは少なく，a－bのように上下逆になる場合をはじめ，b－c，c－dのように異なったパターンになる傾向があり，これは剥離作業の流れというか剥離のし易さと関連があると考えられる。

（2）検出遺構について

A．竪穴住居跡

①立地　調査区南西側で２軒（ＳＢ１・２），中央部の谷筋付近で２軒（ＳＢ３・４），そして北東側で１軒（ＳＢ５）の計５軒の竪穴住居跡を検出した。標高340m付近（ＳＢ１・２・５）を中心に，やや低い338m付近にＳＢ４，最高所の341m付近にＳＢ３が位置する。概して調査区南東の高所側の，南東～南から北西～北方向に下傾する緩斜面（傾斜角度６～13°）に立地する。

②平面形・規模　住居の平面形はいずれも円形で，規模は径４～12m程度である。最大規模のＳＢ２（６軒重複）が径7.5～11.68m（推定床面積37.37～96.37㎡），次に規模の大きいＳＢ１（３軒重複）が径7.2～8.34m（推定床面積38.91～49.49㎡）で，ＳＢ３～５の３軒はこれらに較べると小型で径４～５m程度（推定床面積10～18.09㎡）である。

③主柱穴　ＳＢ１～４が６～10本柱の多柱穴構造，ＳＫ５のみは２本柱である。多柱穴の住居は，ほぼ正多角形（正円形）に柱を配するもの（ＳＢ１a・１b・２a）や南北方向にやや長い多角形に配するもの（ＳＢ１c・３）もあるが，最も多いのはほぼ東西方向に長い扁平気味の多角形に柱を配する住居で６軒を数える（ＳＢ２b_1・２b_2・２$c_{1\sim3}$・４）。柱間距離（平均値）に関しては，1.1～2.85mとかなり幅がある。大まかな傾向としては，住居の大小は柱間距離の長短に比例するが，すべてではない。最も柱間距離が長いのは７番目の規模のＳＢ１ｂである。また，Ｓ

Ｂ１は重複する３軒の住居の規模（直径）の差は1.14mと比較的小さいが，柱間距離は1.72m・1.98m・2.85mと差が大きい。一方，ＳＢ２は６軒の住居の規模（直径）の差は4.18mと大きいが，柱間距離は2.15m・2.19m・2.23m（ＳＢ２ａは除く）と差が小さい。主柱穴の規模は，径20～30cm台，深さ20～40cm台と住居跡状遺構・掘立柱建物跡や柵跡の柱穴と較べて大きい。ただ，ＳＢ３は径10数cmと主柱穴が小さく，上屋が簡易的なものである可能性がある。

④炉跡（中央土坑）　ＳＢ３・４は削平・流出が顕著で，炉跡の有無は明確にできていない。ＳＢ５は２本の主柱穴の間に炉跡が存在した。ＳＢ１・２は床面中央の本来炉跡が存在する位置で焼土・炭を覆土に含まず，熱を受けた痕跡も認められない中央土坑（ＳＢ１；平面不整円形・径88cm×70cm・深さ30cm，ＳＢ２；平面円形・径84cm×87cm，深さ50cm）を検出した。これらの土坑からは未成品を含む石鏃や剥片・チップがまとまって出土していることから，石鏃を主とした石器製作に関連する土坑と考えられる。なお，ＳＢ２ではこの中央土坑の１m南西側の貼床下から先行する住居（ＳＢ２ａ・２b_2・２$c_{1\sim3}$）のいずれかに伴うと考えられる平面円形（径60cm）の炉跡を検出している。

⑤出土遺物　ＳＢ１からは弥生土器のほかに土器片紡錘車・石鏃など，ＳＢ２からは弥生土器のほかに土器片紡錘車・石器（石鏃・石斧・石包丁・石錐ほか）など，ＳＢ４からは弥生土器のみ，ＳＫ５からは土器片紡錘車・石器（石鏃・石錐）が出土した。ＳＢ３からの出土遺物はない。弥生土器は壺・甕を主体とする組成で点数的には多くない。土器片紡錘車・石鏃が主要な遺物で，ＳＢ２では石斧・石包丁といった石器（農工具）が比較的豊富に出土した。大型住居のＳＢ１・２では住居内で土器片紡錘車の製作や紡織，石鏃など石器の製作を行っていたことが，その未成品や剥片・チップの存在などから推定される。

Ｂ．掘立柱建物跡　調査区中央から南西側の低所側を中心に計９棟の建物跡を検出した。ＳＢ11は２回の建て替えを行っており，３棟の建物跡が重複する（ＳＢ11ａ～ｃ）。

①主軸方位　北北西－南南東方向（N18°～29° W）を指す２棟（ＳＢ８・13）と，これに直交する東北東－西南西方向（N57°～70° E）を指す７棟（ＳＢ９～12・14～16）に分かれる。前者の２棟と後者のうちのＳＢ15は等高線と斜交ないし直交し（３棟），後者の大多数は等高線と並行する（６棟）。

②建物の規模　桁行１～４間×梁行１～２間で，平面形長方形である。桁行３間×梁行１間の建物（４棟）が多く，桁行２間×梁行１間（２棟）がこれに次ぐ。梁行が１間の建物が大半で，２間のものはＳＢ13のみである。桁行の長さは1.67～6.43m，梁行の長さは1.41～2.87mである。１間あたりの柱間距離は桁行が1.07～2.14m，梁行が1.28～2.88mで，総じて梁行の方が長いが，ＳＢ８のみは桁行の方が長い。相対する二辺の柱間距離は必ずしも均一ではなく，桁行方向の二辺の，例えばＳＢ８（２間）は東・西辺とも北半が長く，南半が短い。ＳＢ11ａ（３間）は東端の１間がほかの２間に較べて長く，ＳＢ13（４間）は北端の１間がほかの３間に較べて1.4～1.5倍長くなっている。また，ＳＢ14（３間）は西端の１間が他の２間に較べて1.4倍長い。ＳＢ15

（３間）は中央の１間が最も短く（1.54～1.6m），次いで東端の１間（1.94～2.06m）が，そして西端の１間（2.74～2.96m）が最も長くなっており，その差は40～102cmと大きい。このように，桁行３・４間の建物の場合，いずれかの端の１間分の柱間距離がほかの柱間に較べて1.4～1.8倍長くなる傾向がみられる。また，桁行方向の相対する二辺の長さはほぼ等しいのに対して，梁行はＳＢ11ａ・ＳＢ14のように同じ長さの建物がある一方で，片側がいくらか広くなる建物が比較的多い（ＳＢ８・11ｂ・13・15）。ＳＢ８・ＳＢ11ｂでは桁行の最も柱間が狭い側の梁行が広くなっているが，ＳＢ13・ＳＢ14では桁行の最も柱間が広い方の梁行が広くなっている。これらは建物の構造上の違いによるものとみられる。柱に囲まれた空間を建物面積とすると2.8～16.2㎡となる。１間×１間のＳＢ11ｃが最も狭く，３間×１間のＳＢ15が最も広い。２間×１間のＳＢ８・９が5.13～5.4㎡，ＳＢ12（４＋間×１間）・13（４間×２間）が10.6～10.8㎡，そして３間×１間のＳＢ11ａ・11ｂ・14がほぼ15㎡となっている。

③柱穴　掘立柱建物跡の柱穴の規模は，径20～30cm，深さ10数～30cm程度で，竪穴住居跡の主柱穴に較べてやや小さく，住居跡状遺構や柵跡の柱穴の規模に近い。

④溝状遺構　ＳＢ11ａ～ｃのＳＤ１やＳＢ12のＳＤ２は，掘立柱建物の背後（高所側）に位置するＬ字・逆Ｌ字状の溝状遺構で，建物に付設する何らかの施設とみられる。その機能については明確でないが，ＳＤ１からは弥生土器片がややまとまって出土している。このような掘立柱建物の一辺（多くの場合桁行方向）に沿って直線的な，あるいは二辺に跨ってＬ字（逆Ｌ字）状の溝状遺構が付設する例は弥生時代中期の集落跡では比較的よくみられる（東広島市・下上戸(しもうわど)遺跡[4]，同・西本６号遺跡[5]など）。

Ｃ．柵跡　長さ2.1～7.2m（２～６間以上）の柵跡７条を検出した。調査区中央の最高所付近に２条（ＳＡ２・３），低所側に５条存在し，ＳＡ５は等高線に直交するが，他はいずれも等高線に並行している。柱間距離は0.48～1.59mと１m前後で，竪穴住居跡（1.5～2.3m程度）や掘立柱建物跡（桁行方向1.5～２m程度，梁行方向1.8～2.8m程度）と較べてかなり短い。柱穴の規模は径・深さともに20cm台前半で，深さ／径の比率（平均値）が1.09と住居跡状遺構1.21，竪穴住居跡1.13に次ぎ，掘立柱建物跡0.92よりも高い。つまり，柵跡の柱穴は規模の点では住居跡状遺構や掘立柱建物跡の柱穴に近く，竪穴住居跡の主柱穴に較べて小さく浅い。しかし，掘立柱建物跡に較べると直径の割に深く，住居跡状遺構や竪穴住居跡の柱穴に近い。このことは，柵跡・住居跡状遺構・掘立柱建物跡の柱の大きさは同程度であるが，柵跡や住居跡状遺構の柱は掘立柱建物跡の柱に較べてより深く打ち込まれていた可能性が高いことを示す。

Ｄ．墓坑　調査区北東側でほぼ等高線に並行して列状に並ぶ墓坑10基を検出した。ＳＫ３を除いて坑底で棺材を嵌め込む溝状の穴や屍床坑の浅い凹みを検出し，組合式木棺を納めた木棺墓とみられる。木棺の推定の長さ45～60cmと明らかに小児墓とみられる３基と長さ100～130cmのもの６基とがある。弥生時代中期は埋葬姿勢が屈肢葬から伸展葬に移行する時期と捉えられている。後

者の木棺の大きさは成人墓としては小さいものの，仰臥屈肢葬の埋葬空間としては十分なものとみられる[6]ことから，いずれも成人墓と考えられる。

出土遺物としては，小規模なＳＫ１から管玉が出土し，規模の大きな木棺墓５基からは打製石鏃が出土している。並列するＳＫ５・６からは頭位寄りの一定の範囲から10～12点の石鏃が出土している。その多くは先端が折損しており，なかには刺突時の衝撃によると思われるものがあることや，両側縁に鋸歯状剥離が顕著にみられることなど，形状・規模・調整剥離の仕方・素材面の状況など様々な点で住居・柵跡出土の石鏃との間に差異がみられる。このことから，墓坑出土の石鏃は本集落で製作されたものではなく，副葬品である可能性は少ない。むしろその折損の状況などから他の集落との抗争に際して被葬者に打ち込まれたものである可能性が高い。

（３）集落構造について

本集落は北東－南西方向に長い調査区の北東側に木棺墓を主体にする列状の墓域があり，中央から南西側には竪穴住居跡・掘立柱建物跡・柵跡などからなる弥生時代中期前半の居住域が展開する。墓域と居住域の距離は15m程度と近接している。ただ，両者が同一の時期のものかどうかについては，いまひとつ明確でない。墓域の近くに縄文時代晩期の深鉢を出土した土坑が存在することや，墓坑出土の石鏃の多くが小型で鋸歯縁をもつものであること，木棺の推定規模が小さく屈肢葬が予想されるなど時期的に遡る可能性を孕んでいる。しかし，ＳＫ６から出土した弥生土器片（143）は，調査区内中央谷筋の包含層（高所側からの流出・堆積物）から出土した細頸壺202と同一個体の可能性がある。この202は居住域の遺構群に伴う可能性が高いことから，墓坑群と居住域の遺構群は同一時期のものとして論を進めたい。

居住域の遺構群は竪穴住居跡５軒，住居跡状遺構２軒，掘立柱建物跡９棟，柵跡７条で構成される。これらは主に調査区の南西側2/3の範囲に存在するが，集落は調査区外に広がる蓋然性が極めて高い。大型住居のＳＢ１・２は頻繁に建て替えを行っているが，小型住居のＳＢ３～５は建て替えを行わず，単一時期的である。ＳＢ１とＳＢ２は僅か３～４ｍの距離に近接しており，同時存在は困難である[7]ことから，同時存在可能な住居数は最大４軒＋α（大型住居１軒＋小型住居１～３軒＋α）と考えられる。

大型住居（床面積37.37～96.37㎡・平均53.34㎡）は小型住居（床面積9.6～18㎡・平均13.86㎡）の平均3.85倍の居住空間をもっている。小型住居の居住人数[8]を仮に３～５人とした場合，大型住居にはその約４～６倍の12～32人（平均17人）が居住できる広さがあることになる。このようなひとつの集落に１軒程度存在する大型住居については，集落の中心的家族の居住する住居と考える説もあるが，小型の通常の住居に較べて建て替えが頻繁に行われる，炉の存在が明確でないことが多い，石器をはじめとする手工業的生産の痕跡が多く認められるなどの理由から，集落の成員が共同で利用する公共的な建物とする説[9]が根強い。

居住空間として集落の中心的役割を担う竪穴住居は緩斜面の高所側に作られているが，芦田川

寄りの低所側には貯蔵施設（倉庫）としての掘立柱建物が建てられている。これらの掘立柱建物は３～５ｍの間隔で比較的整然と並ぶ。掘立柱建物の柱穴は小さく浅いので，小規模で簡易的な倉庫であると考えられる。住居が斜面の高所側に，倉庫が低所側にあるのは東広島市・下上戸遺跡にも類例がある。調査区中央部の高所側に位置する２軒の住居跡状遺構（ＳＢ６・７）については，ＳＢ７が前面に柱間の狭い柱穴列を伴うことから，片流れの屋根をもつ作業小屋的性格の建物である可能性が考えられる。ただ，柱穴は柵跡のものに近く，小さくて深いことから比較的しっかりした構造の建物である可能性が強い。柵跡はいずれも長さ2.1～5.79mと短いものである。柱間距離も0.48～1.6m程度と狭く，柱穴も径・深さともに20cm強と竪穴住居跡や掘立柱建物跡の柱穴と較べて小さい。ただ，径の割に深い特徴がみられる。この柵跡については，県内例では東広島市・宮領(みやりょう)１号遺跡[10]や福山市・城山(じょうやま)Ｄ遺跡[11]に類例がある。本遺跡の柵は集落を囲繞するような規模の大きなものではなく，ＳＡ２・３のように竪穴住居や住居跡状遺構の斜面下方側に横方向に設けられており，住居の遮蔽・敷地の区画などを目的として個々の住居を対象にして設けられたものが主体と考えられる。一方，等高線に直交して設けられているＳＡ５については，集落の北端部に位置するＳＢ５の斜面下方側に設置されていることから，集落と墓域の境界あるいは集落の入口としての性格を想定することができる。また，ＳＡ１・４・６については集落の入口的性格が，墓域の北東側に位置するＳＡ７は墓域の境界あるいは墓域の入口的な性格を考えることができる。

以上のように，本集落では大型の共同家屋と竪穴住居・掘立柱建物（倉庫）・住居跡状遺構（作業場）及び集落と外部を区画する柵などで構成される居住域と墓域からなるひとつの単位集団[12]の集落と考えられる。

広島県内では弥生時代後期の集落跡は多くみられるが，弥生時代前・中期の集落跡の調査例は少ない。中期（Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ様式）の竪穴住居跡・掘立柱建物跡を１軒（棟）以上検出した遺跡は筆者が調べた範囲では計45遺跡ある。これらの多くは弥生時代中期後半から後期あるいは古墳時代，古代にまで及ぶ規模の大きな集落跡で，多くの場合中期の集落跡はその一部をなすにすぎず，中期前葉～中葉の竪穴住居跡や掘立柱建物跡を含む例は少ない。ましてや，弥生時代中期の集落跡が主体的である遺跡，さらには中期前半～中葉が主体の集落跡の調査例は皆無に近い。ここでは，中期前半～中葉の竪穴住居跡を１軒以上検出した集落跡12遺跡のうち，比較的集落構造が判明する東広島市・西本６号遺跡（中期中葉～後葉），尾道市・天満原(てんまはら)遺跡[13]（中期中葉），福山市・茜ヶ峠(あかねがたお)遺跡[14]（中期中葉～末），同・池ノ内遺跡群[15]（中期中葉～後半），庄原市・和田原(わだばら)Ｄ地点遺跡[16]（中期中葉～後半）の５遺跡を主な分析対象として抽出し，そのほか中期後半を主体とする集落跡である東広島市・下上戸遺跡，同・宮領１号遺跡，福山市・城山Ｄ遺跡，同・手坊谷(てぼうだに)遺跡群[17]，庄原市・和田原Ｅ地点遺跡[18]の調査成果も参考にして検討を加えたい（各集落跡や住居跡の時期は基本的に報告書の記述に従った）。これらの遺跡の内容について，以下に略述する。

①西本６号遺跡＝比高15～20mの南北に長い丘陵の頂部を中心に展開する弥生時代後期を中心とする大規模な集落跡及び墳墓群で，その北半の一角に弥生時代中期の遺構が存在する。中期前葉

の遺構は丘陵頂部に小さくまとまっており，竪穴住居跡４軒，掘立柱建物跡１棟からなる。住居はいずれも６本以上の柱が円形に配される多柱穴のもので，石鏃をはじめとする多くの石器が出土している。特にＳＢ11では石鏃19点やスクレイパー２・楔形石器12・石錐１，石核・剥片・チップ類が出土しており，石器製作との関連が指摘されている。ＳＢ８は小規模な長方形の２本柱のもので，壁溝もなく，住居というより作業場的性格が考えられる。掘立柱建物はＬ字状の溝をもつ２×３間程度のものである。中期後葉の遺構は散在的であるが，竪穴住居跡２軒と土坑墓群（木棺墓を含む）が存在する。住居はいずれも２本柱で，小型のＳＢ23は磨石・敲石が出土し，作業場的性格が考えられる。

②天満原遺跡＝北西から南東方向にごく緩やかに下る斜面に立地する弥生時代中期中葉の集落跡で，竪穴住居跡５軒と貯蔵穴１基を検出した。住居からは石鏃・スクレイパー・石斧などが出土している。ただ，いずれの住居も平面形が径４～５ｍの不整楕円形で，柱穴も明瞭でなく，住居としての性格がやや弱い。石器製作などを行う作業場的性格が考えられる。

③茜ヶ峠遺跡＝低丘陵西斜面に立地する弥生時代中期中葉～後期前半の集落跡で，中期後半が中心である。竪穴住居跡13軒，掘立柱建物跡３棟及び丘陵斜面を削平して得られた平坦面に排水溝と居住空間を設ける「住居跡支群」Ⅰ～Ⅳ群（建物跡56棟）などから成る。中期の集落はこの住居跡支群と竪穴住居跡２～３軒・掘立柱建物跡１棟（直線溝を伴う）が主な構成要素である。住居跡支群は住居としての掘立柱建物の集合体と言ってよいが，重複が顕著で，集落構成の判別が難しい。竪穴住居跡のＳＢ28は２本柱の円形のもので，未成品を含む石鏃や石錐・楔形石器・ハンマー及び剥片・チップ多数を出土しており，住居内で継続的な石器製作が行われたと考えられる。住居跡支群からも石鏃16，スクレイパー３，ハンマー６，楔形石器４，石斧３など多くの石器や石器製作に関連した製品が出土しており，集落内で石器製作が盛んに行われた様子が窺われる。

④池ノ内遺跡群＝東西に延びる丘陵の頂部南縁から南斜面にかけて展開する弥生時代中期中葉～後半の集落跡で，主体は中期後半である。中期中葉の住居はＨ１のみで，12本柱かとみられる円形の焼失住居から石鏃２・スクレイパー７・石斧１が出土している。中期後半の住居は７軒で，円・隅丸方形の２本柱のものが多い。石鏃・石包丁・スクレイパー・石斧などが出土している。

⑤和田原Ｄ地点遺跡＝比高30ｍの東西に長い丘陵の頂部から斜面にかけて展開する弥生時代中期～古墳時代初頭の集落跡で，主体は弥生時代後期である。中期中葉（第Ⅲ様式）は丘陵東半の頂部の比較的狭い範囲に円形住居４軒がまとまって存在する。大型の３軒は６～10本の多柱穴で，ＳＢ41からは分銅形土製品・土器片紡錘車，石鏃・楔形石器・敲石・太型蛤刃石斧・剥片などが出土した。土器片紡錘車はＳＢ44からも出土している。中期後半（第Ⅳ様式）の遺構は，丘陵中央～東半の頂部からやや斜面側に寄った比較的広い範囲に６軒の隅丸方形・円形住居が散在する。いずれも２本柱の住居で，ＳＢ17・19からは分銅形土製品・石鏃・敲石などが出土した。同じ丘陵の西端には和田原Ｂ地点遺跡[19]があり，隅丸方形で２本柱の竪穴住居跡２軒と小規模な長方形竪穴（作業場）１軒を検出している。住居からは石鏃・スクレイパー・磨石・石錘などが出土し，

中期後半の集落の一部とみられる。

次に，弥生時代中期後半が主体的な集落跡としては，

⑥下上戸遺跡＝南北に長い調査区の北半東斜面から谷にかけてと南端部分の低所部の大きく２か所に弥生時代中期の集落が広がる。前者は東斜面に竪穴住居跡10軒，その東側の谷部分にＬ字状の溝をもつ掘立柱建物跡３棟が存在する。住居の多くは２本柱で，石鏃・石斧や土器片紡錘車が出土した。建物は１×３～４間の規模である。南側の集落は部分的な検出に留まっているが，竪穴住居跡２軒，掘立柱建物跡４棟を検出した。住居はいずれも２本柱で，１軒の住居は石鏃や多くの剥片・チップが出土している。掘立柱建物跡はいずれも直線的な溝を伴い，１×３間が２棟，２×４間が１棟などである。いくつかの溝からは土器片多数が出土している。

⑦宮領１号遺跡＝南から北に下る丘陵斜面に弥生時代中期後半の竪穴住居跡３軒，小型の作業場的性格の長方形竪穴１軒，掘立柱建物跡１棟，柵列４条を検出した。住居は楕円・円形の２本柱主体のもので，ＳＢ２からは石鏃・スクレイパー・敲石が出土している。掘立柱建物は１×２間の規模で，短辺側に直線状の溝が伴う。柵列は，調査区低所側に等高線に沿って設けられている。

⑧城山Ｄ遺跡＝比高30mの南北に細長い丘陵尾根の頂部を中心に，竪穴住居跡２軒，段状の住居跡状遺構３軒，掘立柱建物跡１棟，柵列１条を検出した。遺構は散在的で，住居・住居跡状遺構からは石斧・砥石・石包丁が出土した。掘立柱建物は1×２間の小規模なもので，柵列は４間の規模で，尾根線に沿う。

⑨手坊谷遺跡群＝北から南に延びる丘陵尾根の頂部から斜面にかけて弥生時代中期後半の竪穴住居跡８軒，段状の住居跡状遺構２軒を検出した。住居は円形で２本柱のものが主体だが，円形で４本柱のものや方形のものもみられる。円形住居のＳＢ12・13からは石鏃３点と石包丁や砥石・鉄器，そのほかの円形住居からも石包丁・石斧・石鑿・砥石が出土した。

⑨和田原Ｅ地点遺跡＝和田原Ｄ地点遺跡に近接する丘陵斜面に立地する弥生時代中期後半の集落跡で，竪穴住居跡６軒，掘立柱建物跡１棟を検出した。住居は２本柱のものと多柱穴のものがある。掘立柱建物は２×３間の規模で，土器が多く出土する直線溝が付設する。

などがある。

以上の事例の検討から次のようなことが言えよう。先ず，弥生時代中期前葉～中葉の住居は平面形が円形・楕円形で，主柱穴は５本以上の多柱穴であることが多い。これに対して，中期後半の住居は隅丸方形・隅丸長方形で２本柱のものが多い傾向がある。掘立柱建物は前葉のもの１棟（＋Ｌ字溝・２×３間）＝西本６号遺跡，中葉～後半のもの１棟（＋直線溝・１×２間）＝宮脇遺跡の２棟だけである。中期後半に類例が多く，７遺跡で計13棟が検出されている。下上戸遺跡に７棟あるが，ほかはいずれも１棟である。建物の規模は，１×２間，１×３間，1×４間，２×３間，２×４間などで，梁行が１間のものが多く，２間のものは２例である。Ｌ字溝・直線溝を長辺に沿って付設するものが多く，溝内からは多量の土器片が出土する例がよくみられる。なお，一部に建物の小口側に直線溝をもつ例がみられる（下上戸遺跡・宮領１号遺跡）。

石器・土製品の出土傾向はいずれも石鏃を中心に種類・数量とも比較的豊富であり，前葉～中

葉と後半とでは組成上の違いはそれほどない。石鏃（未成品を含む）を主に，スクレイパー・砥石・石包丁・石斧などの出土が多い（他に，楔形石器・同削片・石錐・磨石など。土製品＝土器片紡錘車・分銅形土製品・土製勾玉など）。また，集落のなかにはこれら多くの石器類とともに剥片・チップ類（石核を含む）が集中的に出土する住居をもつものがある。これらは住居内で石鏃などの石器の製作をしていた可能性が高く，このような石器製作場的な住居は中期前葉で１軒，中期後半で４軒検出されている（西本６号遺跡ＳＢ11，下上戸遺跡（県調査分）ＳＢ３・４，茜ヶ峠遺跡ＳＢ28，東広島市・小越[20]遺跡№23住居・№26住居）。

弥生時代中期前葉～中葉の集落では住居・建物が一定範囲に小規模にまとまるのに対して，中期後半には住居・建物が散在的になる傾向がみられる。つまり，中期前葉～中葉の集落は住居数４～５軒（同時存在の住居数３～５軒）で１～２時期存続し，住居間の距離（建替・拡張分は除く）が３～28m（平均15m）と比較的近接する。これに対して，中期後半の集落では，検出住居数２～８軒（２軒が大半），同時存在住居数２～４軒（２軒が多い）で，1～４時期（１～２時期が多い）存続し，住居間距離は1.6～80m（平均33m）と遠くなる。

このように，広島県内の弥生時代中期の集落跡の分析による限り，中期前葉～中葉では規模の大きな多柱穴の円形住居３～５軒が比較的近接して存在する集落が１～２時期営まれるのに対して，中期後半ではやや小規模で２本柱の隅丸方形住居２軒程度がやや距離をおいて建てられる集落が１～２時期営まれるようになる。弥生時代中期中葉から後半にかけてみられるこのような住居規模・集落構成における現象面での衰退化は，弥生社会の何らかの変容に伴う一時的なもので，むしろ弥生時代後期～古墳時代初頭における弥生集落の大規模化の初期的状況あるいは兆候と捉えるべきであろう。

最後に，本集落における居住域と墓域の関係について，少し触れておきたい。上述のように，本集落では墓域は居住域の外に設けられているものの，極めて近接している。縄文時代の集落では墓は居住域に包摂されており，墓域が居住域から分離・分出するのは弥生時代早期の環濠（溝）集落の成立以降と考えられている[21]。そして，弥生時代中期にかけては墓域は居住域から分離されるものの，居住域の周辺に小規模な墓域を形成することが多く[22]，本遺跡はその状況を如実に示している。

以上のように，金井原遺跡は丘陵裾の緩斜面に展開した弥生時代中期前葉～中葉の墓域を伴う集落跡の調査例である。集落（居住域）は竪穴住居１～４軒以上と倉庫（掘立柱建物）・作業小屋（住居跡状遺構）・柵で構成され，２時期程度存続したとみられる。北東側の居住域外に近接して10基程度の小規模な墓地（木棺墓群）が営まれた。集落は調査区域外に広がる可能性が高いが，尾根を東側に越えたところの小さな谷や集落の前面に広がる芦田川沿いの低湿地などが水田（可耕地）であった可能性が高い。このように金井原遺跡は広島県内では類例が殆どない，弥生時代中期の居住域＋墓域（＋水田）といった集落の要素がほぼまとまった形で明らかにされた貴重な調査成果となった。

註

（1）伊藤実「備後地域」正岡睦夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年』 木耳社 1992年

（2）岡山県教育委員会「二野遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』15 1977年。

（3）石鏃の刺突時の衝撃に伴う剥離痕の検討には，以下の文献を参考にした。
御堂島正「石鏃と有舌尖頭器の衝撃剥離」『古代』第92号 早稲田大学考古学会 1991年
中川和哉「弥生時代の石製武器出土埋葬主体部－京都市東土川遺跡例から－」 森浩一・松藤和人編『考古学を学ぶ』 同志社大学考古学シリーズ刊行会 1999年
平井典子「石製武器からみた弥生時代の吉備南部と畿内」『瑞瀬戸内海の考古学－平井勝氏追悼論文集－』上巻 古代吉備研究会 2002年

（4）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『下上戸遺跡』 1996年
財団法人東広島市教育文化振興事業団『下上戸遺跡発掘調査報告書』 1996年
財団法人東広島市教育文化振興事業団『下上戸遺跡発掘調査報告書』 2000年

（5）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『西本６号遺跡』 1997年

（6）橋口達也「墓制の変化（一）北部九州」金関恕＋大阪府弥生文化博物館編『弥生文化の成立』 角川書店 1995年
福永伸哉「木棺墓と人の交流」山岸良二編『原始・古代日本の墓制』 同成社 1991年

（7）藤田憲司「単位集団の居住領域－集落研究の基礎作業として－」『考古学研究』第31巻第２号 考古学研究会 1984年

（8）関野克「埼玉県福岡村縄文前期住居址の系統に就いて」『人類学雑誌』第53巻第８号 1937年
和島誠一「原始聚落の構成」『日本歴史学講座』 学生書房 1948年
住居の床面積から炉（中央土坑）周辺３㎡を差し引いた面積を，一人あたりの占有面積３㎡で除して出した人数。

（9）甲元真之「農耕集落」『岩波講座 日本考古学』４ 集落と祭祀 岩波書店 1986年
柳瀬昭彦『吉備の弥生集落』 吉備人出版 2007年

（10）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「宮領１号遺跡」『山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』（Ⅸ） 1993年

（11）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「城山Ｄ遺跡」『城山』 1996年

（12）近藤義郎「共同体と単位集団」『考古学研究』第６巻第１号 考古学研究会 1959年

（13）天満原遺跡発掘調査団『天満原遺跡』 1985年
尾道文化財協会『天満原遺跡』Ⅱ 1996年

（14）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「茜ヶ峠遺跡」『石鎚権現遺跡群・茜ヶ峠遺跡発掘調査報告』1985年

（15）広島県教育委員会「池ノ内遺跡群」『県営駅家住宅団地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告』 1976年

（16）簡易保険福祉事業団 庄原市教育委員会 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『和田原Ｄ地点遺跡発掘調査報告書』 1999年

（17）広島県教育委員会「手坊谷遺跡群」『県営駅家住宅団地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告』 1976年

（18）広島県庄原市教育委員会『庄原市農業支援施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 2004年

（19）財団法人広島県埋蔵文化財調査センター『和田原遺跡』 1988年

（20）財団法人東広島市教育文化振興事業団『小越遺跡発掘調査報告書』 1997年

（21）甲元真之「農耕集落」『岩波講座日本考古学』４ 集落と祭祀 岩波書店 1986年
武末純一『弥生の村』 山川出版社 2002年

（22）中山俊紀『沼遺跡と美作の弥生集落』 吉備人出版 2005年

a　遺跡遠景（空中写真，南西から）

b　遺跡近景（空中写真，北西から）

図版2

a　遺跡近景（空中写真，北東から）

b　遺跡全景（空中写真，北西から）

a　調査区東半
（空中写真，北東から）

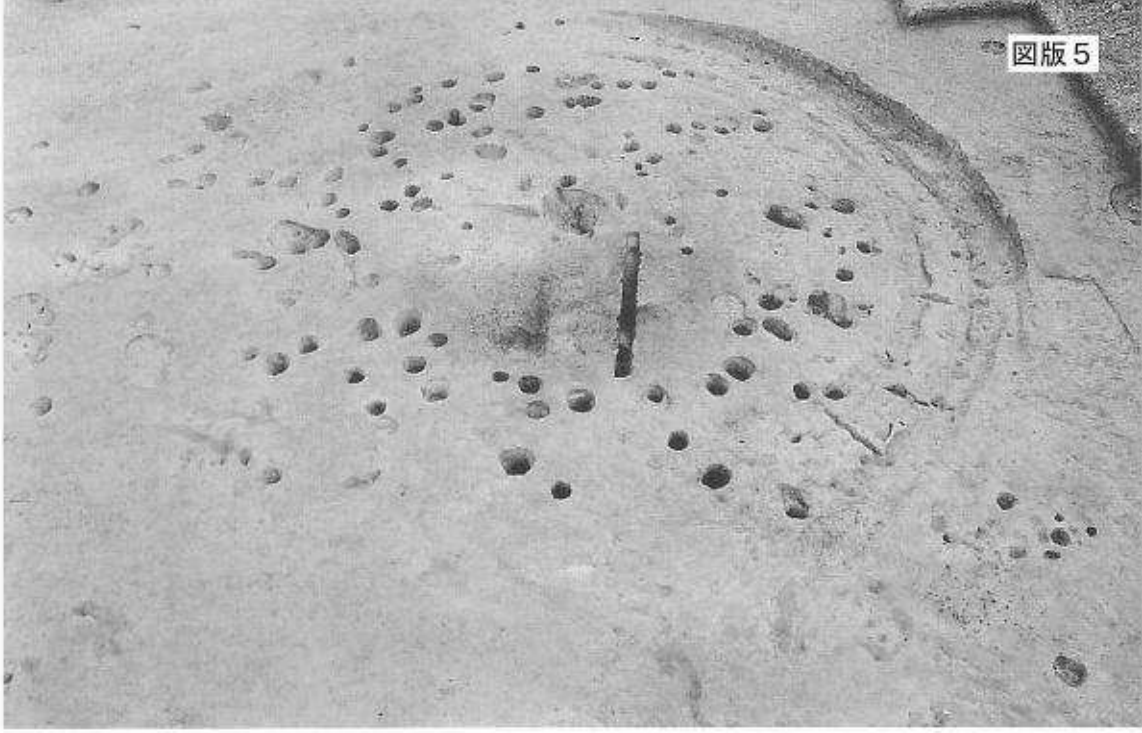
b　調査区中央
（空中写真，北西から）

図版４

a　遺跡遠景（北東から）

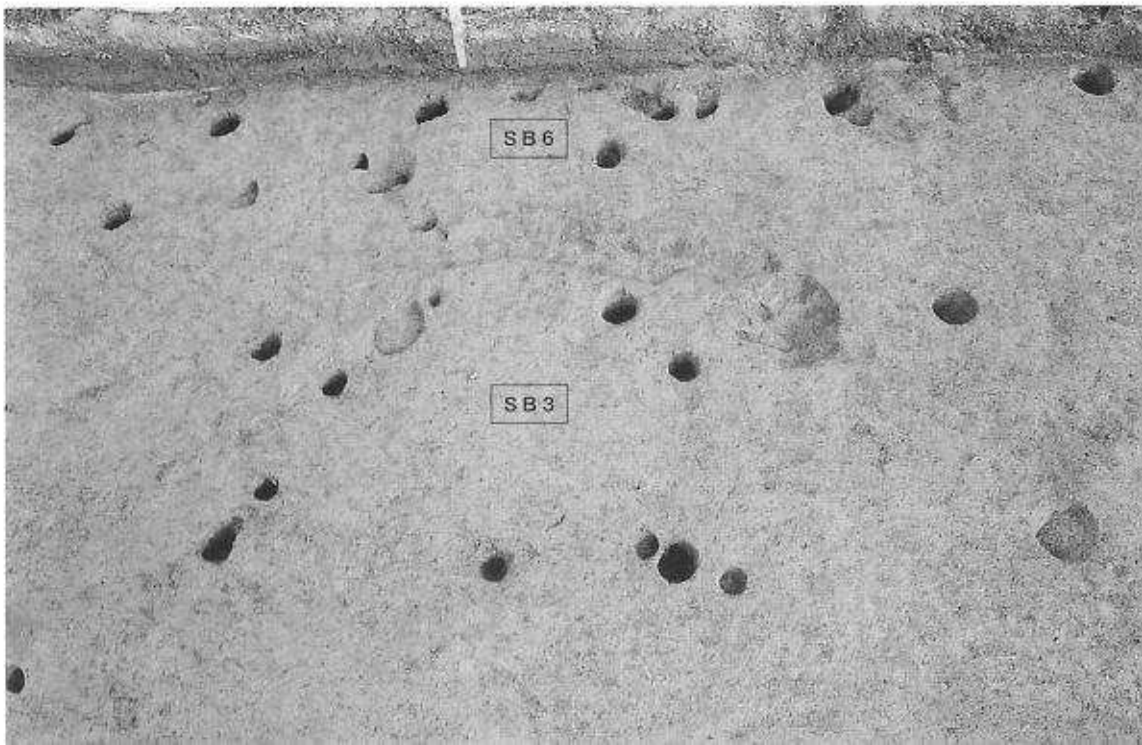
b　遺跡全景（調査前，南西から）

c　ＳＢ１（北西から）



a　ＳＢ２（南西から）

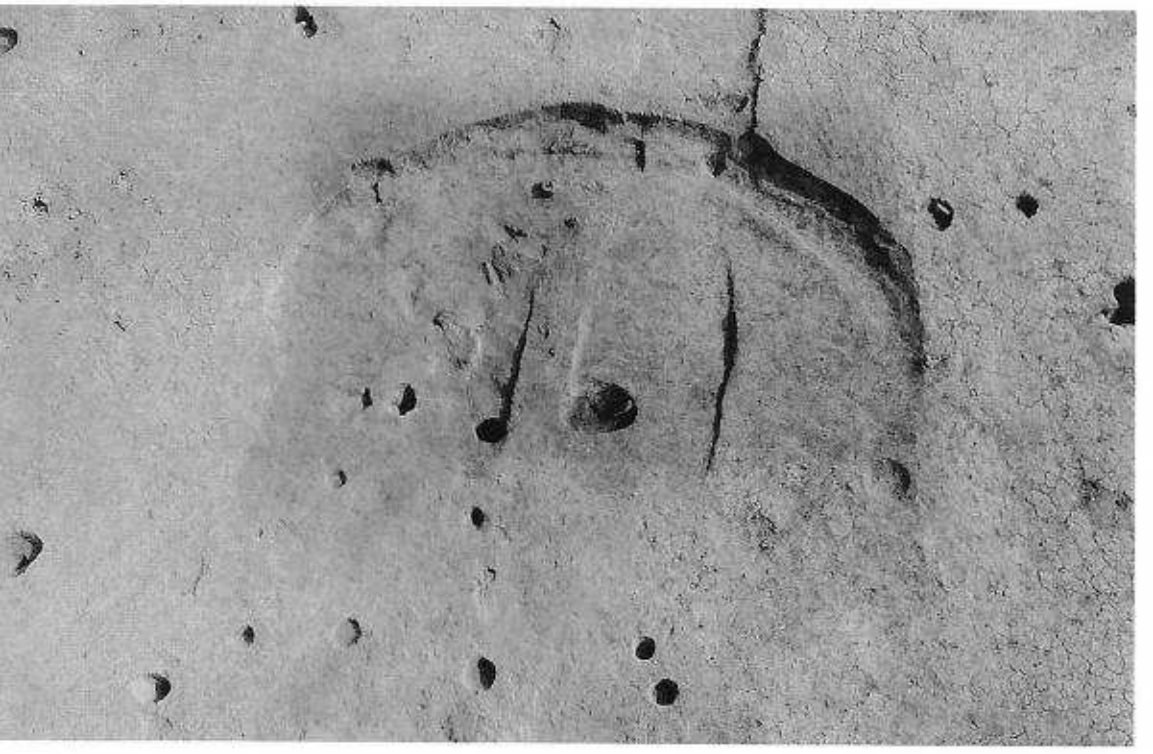
b　ＳＢ２遺物出土状況
（南西から）



c　ＳＢ３・ＳＢ６
（北西から）

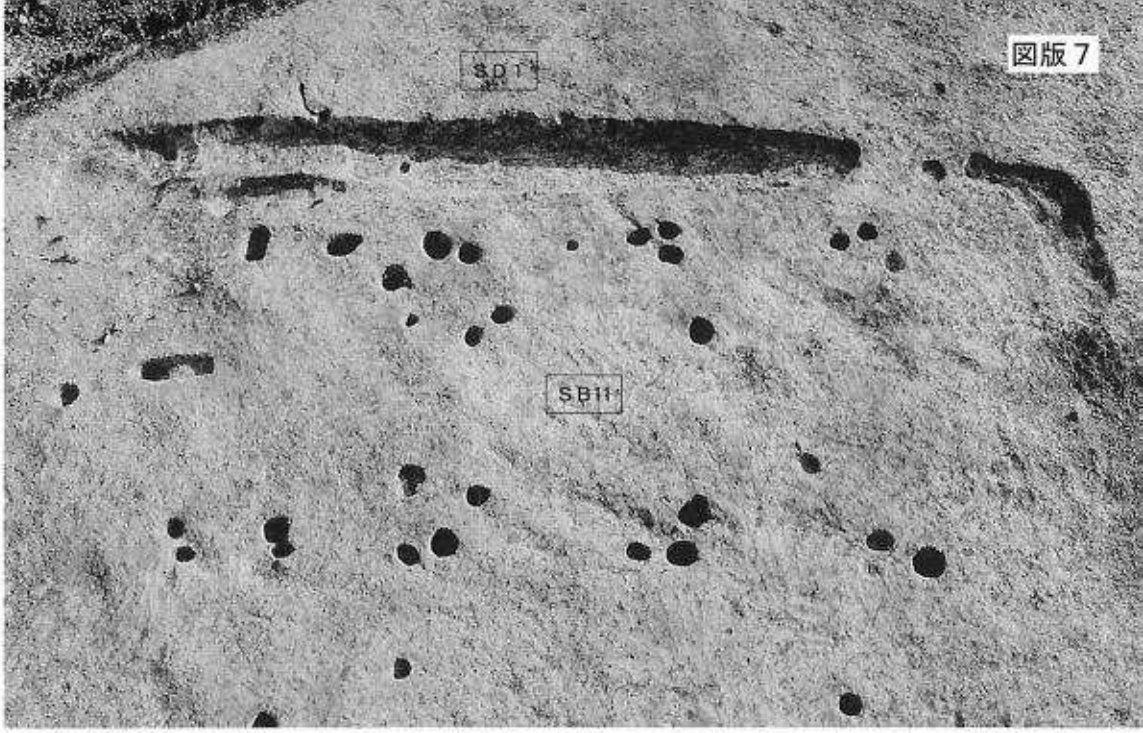
図版６

a　ＳＢ４（北西から）

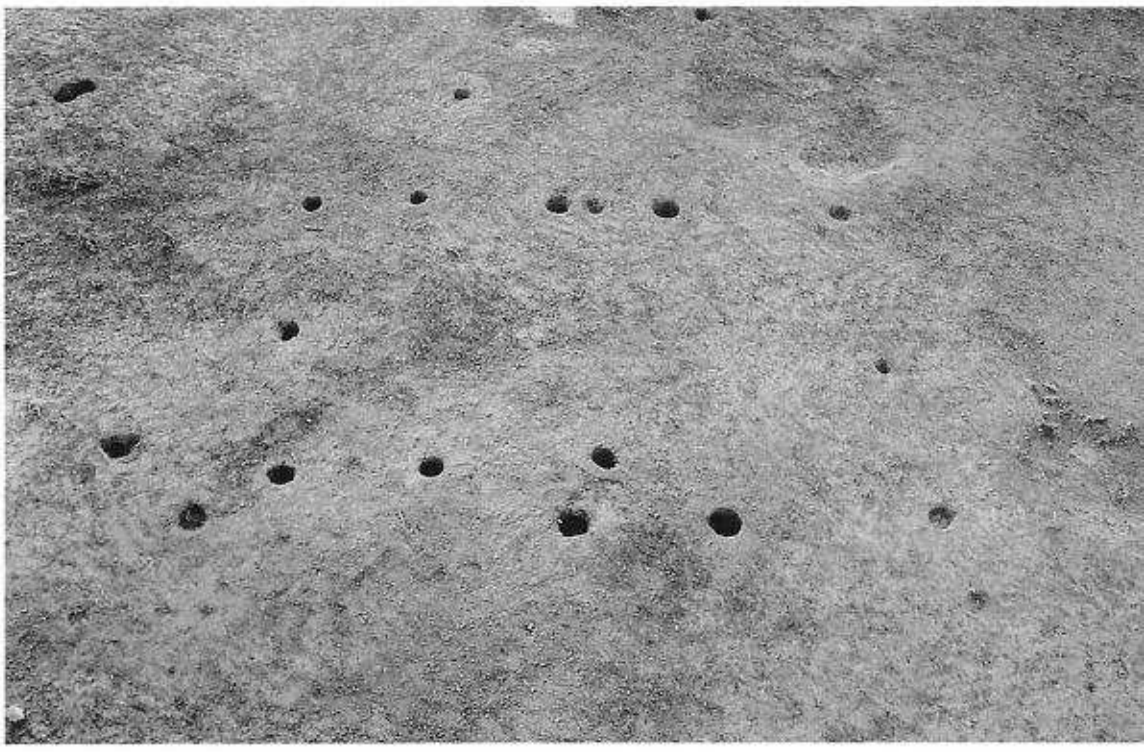


b　ＳＢ５（西から）

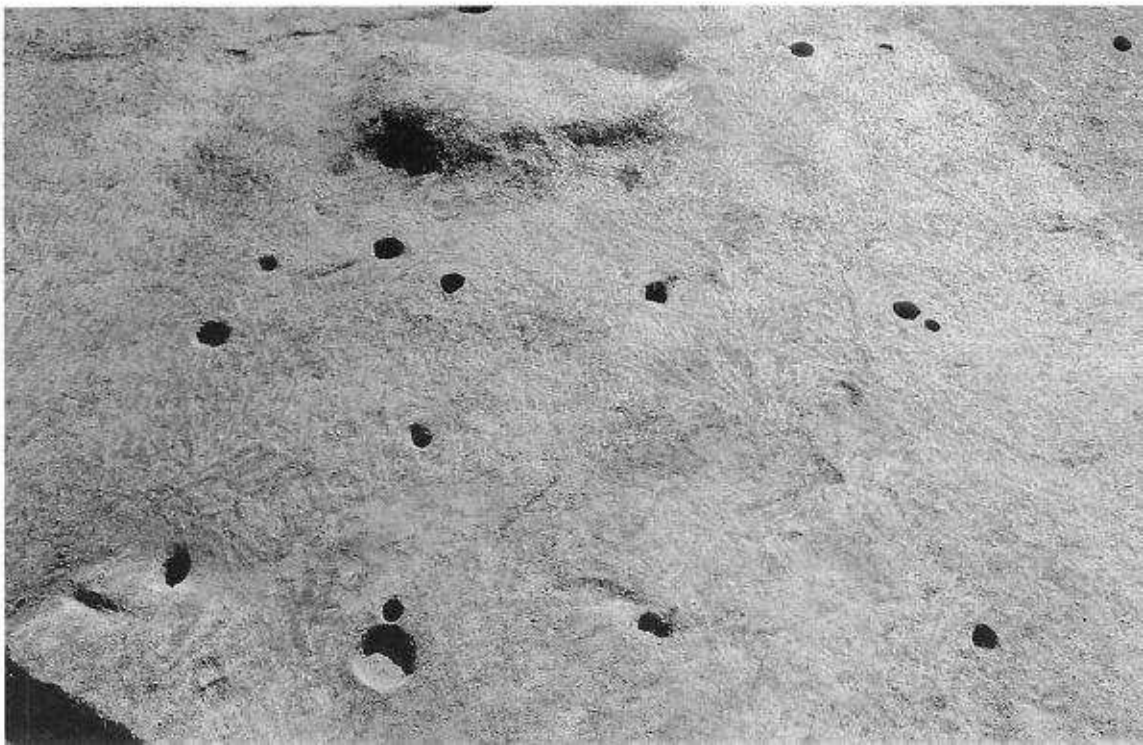
c　ＳＢ７（北から）



a　SB11・SD1
（北から）



b　SB13（東から）

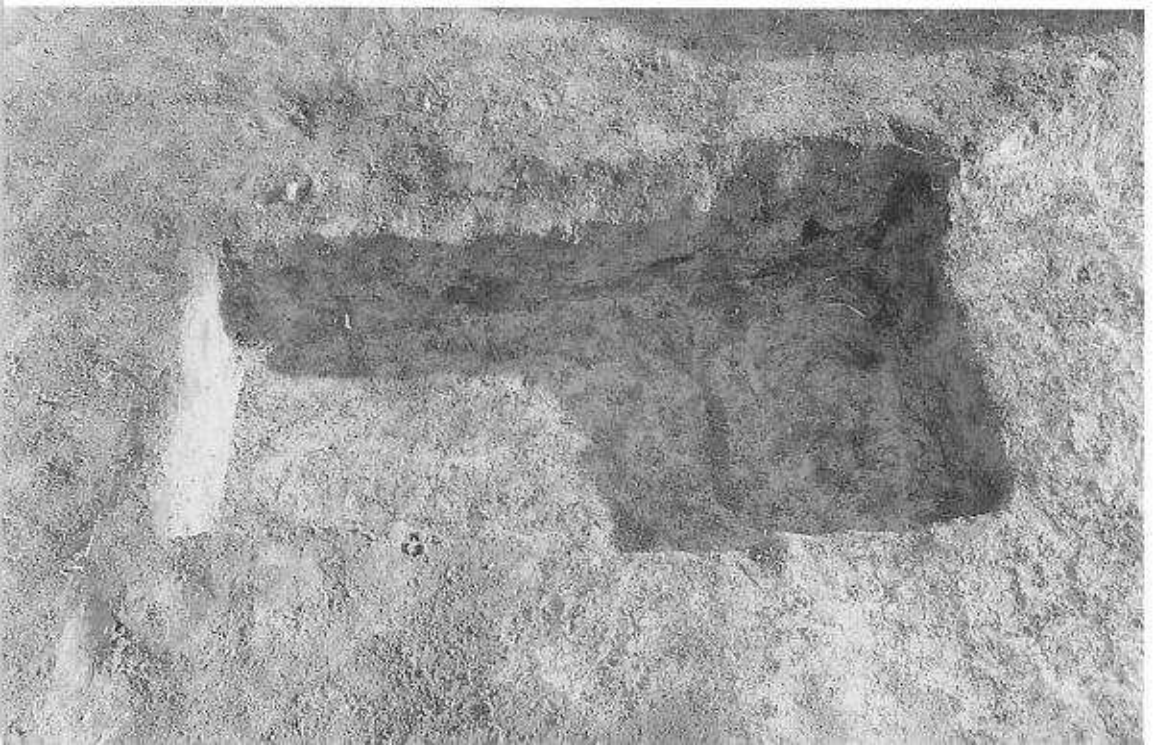


c　SB14（北から）

図版８

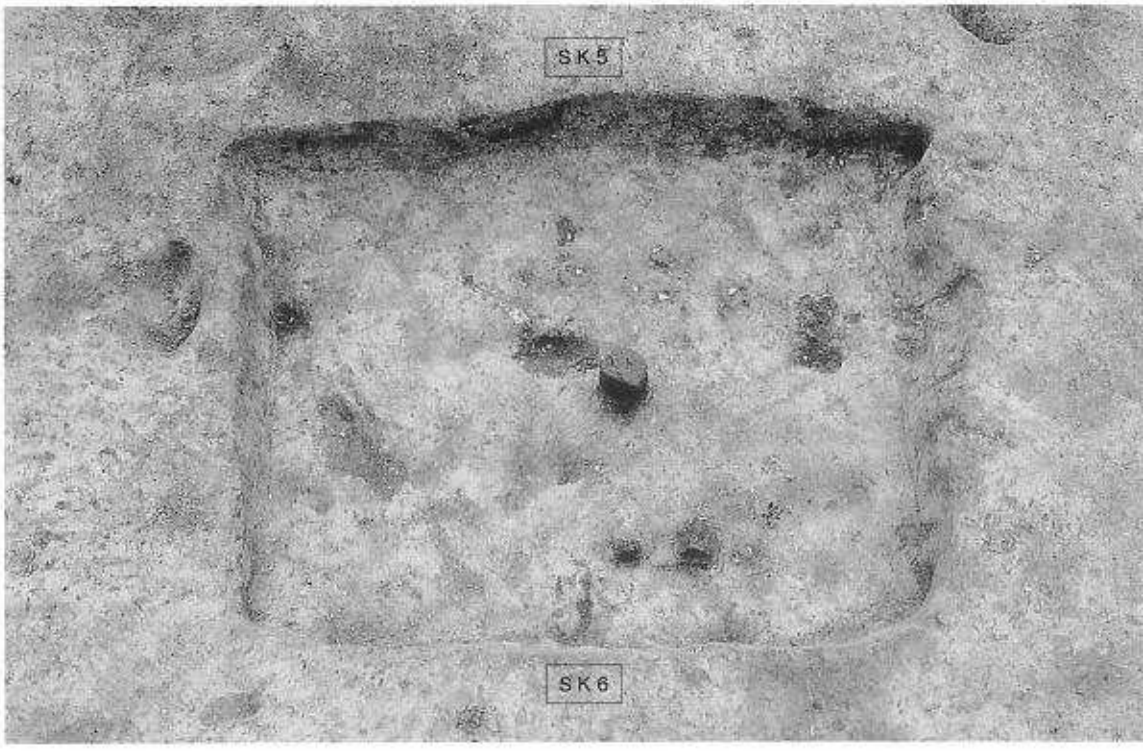
a　ＳＫ１（北から）

b　ＳＫ２（北から）

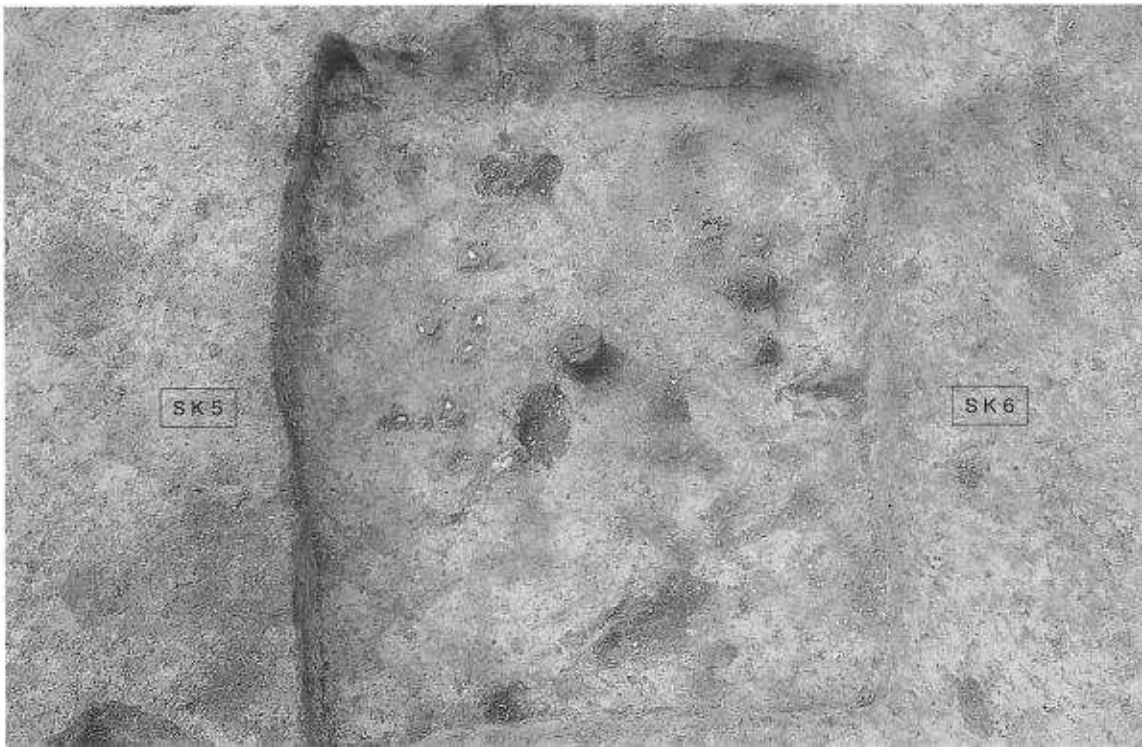


c　ＳＫ３（北から）

a　ＳＫ４（北から）



b　ＳＫ５・ＳＫ６
（北西から）

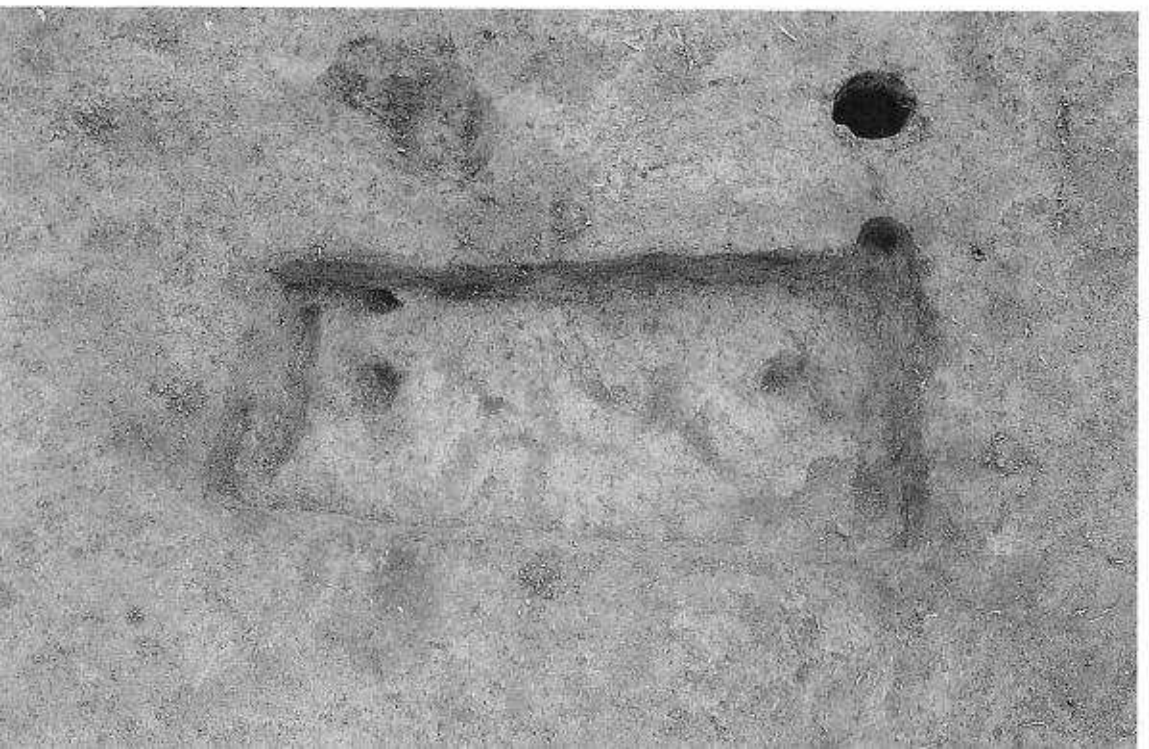


c　ＳＫ５・ＳＫ６
（北東から）

図版10

a　ＳＫ５・ＳＫ６土層
（北西から）

b　ＳＫ７（北から）



c　ＳＫ８（北から）

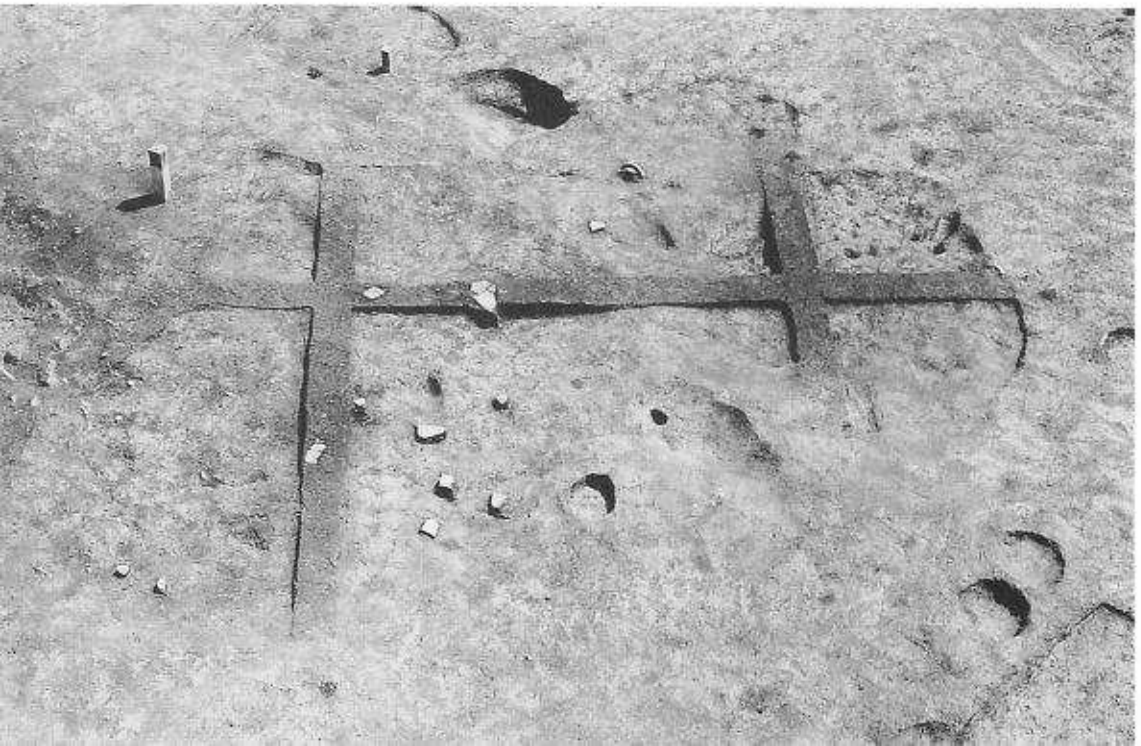
a　ＳＡ２（北西から）

b　ＳＡ３（南西から）

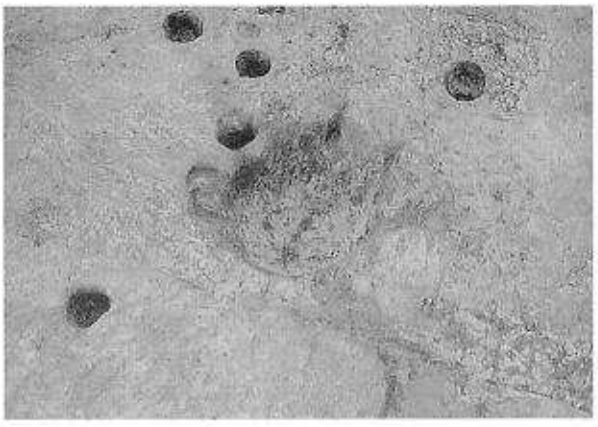
c　ＳＡ４（北西から）

a　ＳＡ５（北東から）

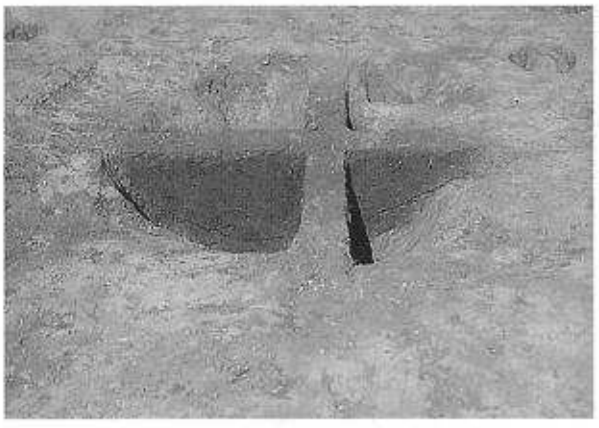
b　ＳＡ６（西から）



c　ＳＸ１（北西から）

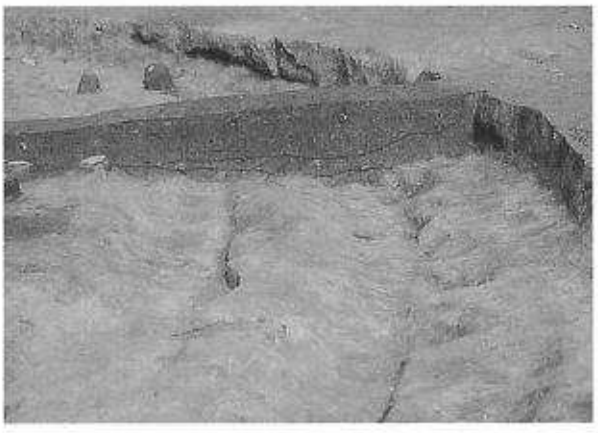


a　ＳＢ１中央土坑（西から）

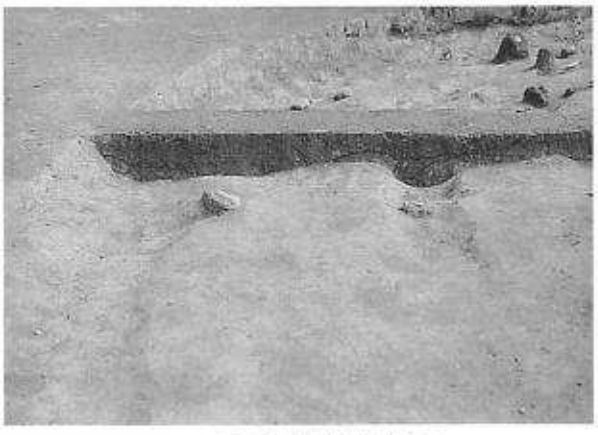


b　ＳＢ１中央土坑土層（南から）

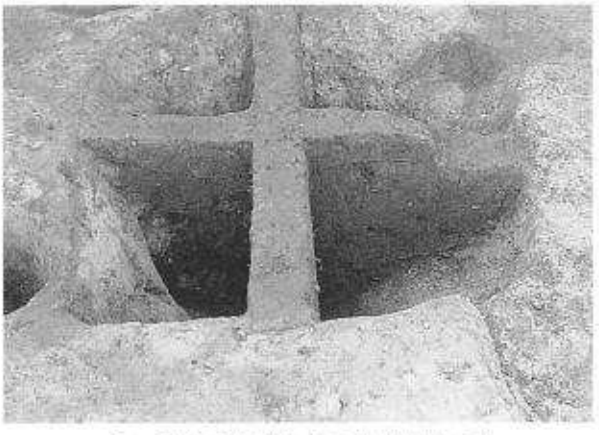
c　ＳＢ１Ｐ８柱痕跡（北西から）



d　ＳＢ２土層（西から）



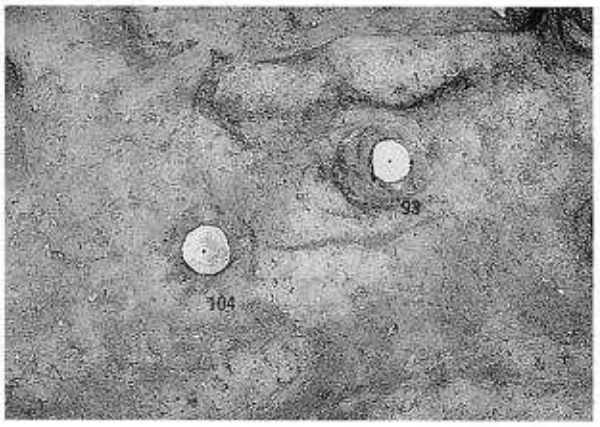
e　ＳＢ２土層（北から）



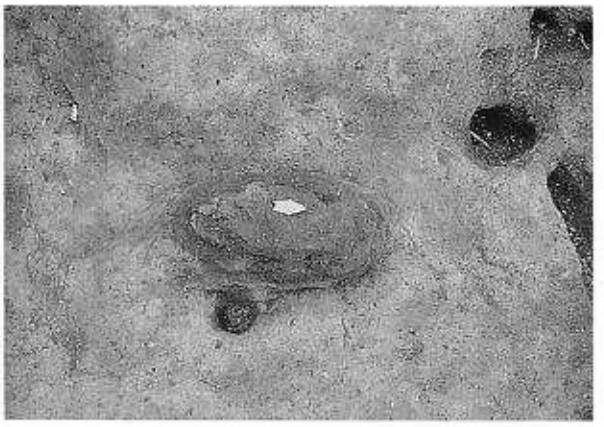
f　ＳＢ２中央土坑土層（北から）

g　ＳＢ２炉跡土層（北から）

h　ＳＢ２壁溝土層ｅ－ｅ′（西から）

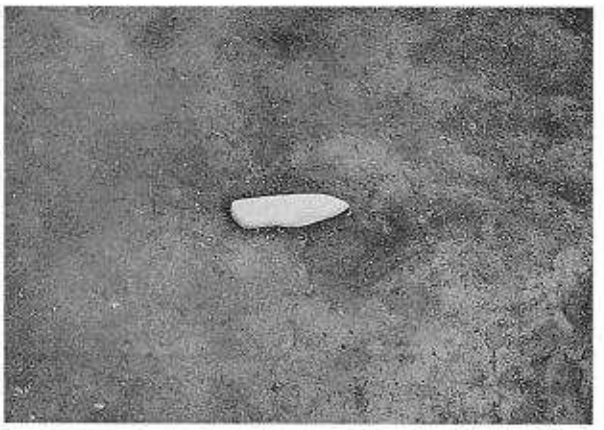


a　ＳＢ２土器片紡錘車93・104（北から）

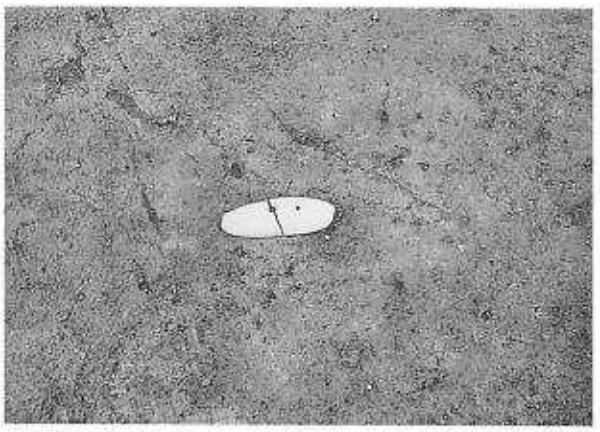


b　ＳＢ２石鏃121（北から）

c　ＳＢ２Ｐ12石斧128（北西から）



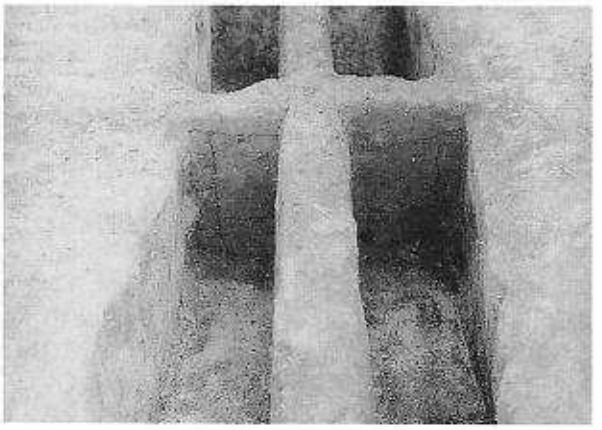
d　ＳＢ２石斧131（西から）



e　ＳＢ２石包丁132（北から）

f　ＳＢ２作業風景（北西から）

g　ＳＢ５土層（南西から）



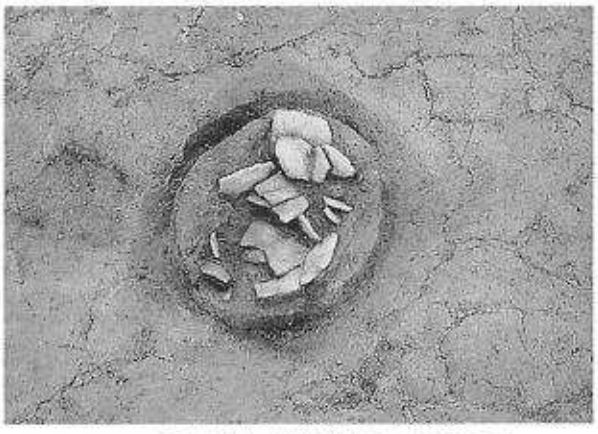
h　ＳＫ４土層（西から）

a　ＳＫ７土層（西から）

b　ＳＫ９（北から）

c　ＳＫ10（北から）

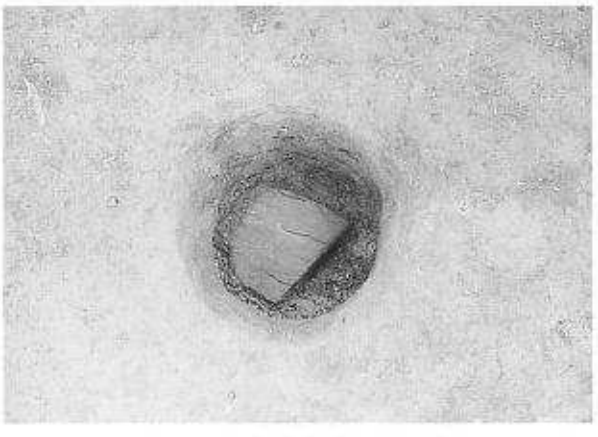
d　ＳＫ13（北東から）



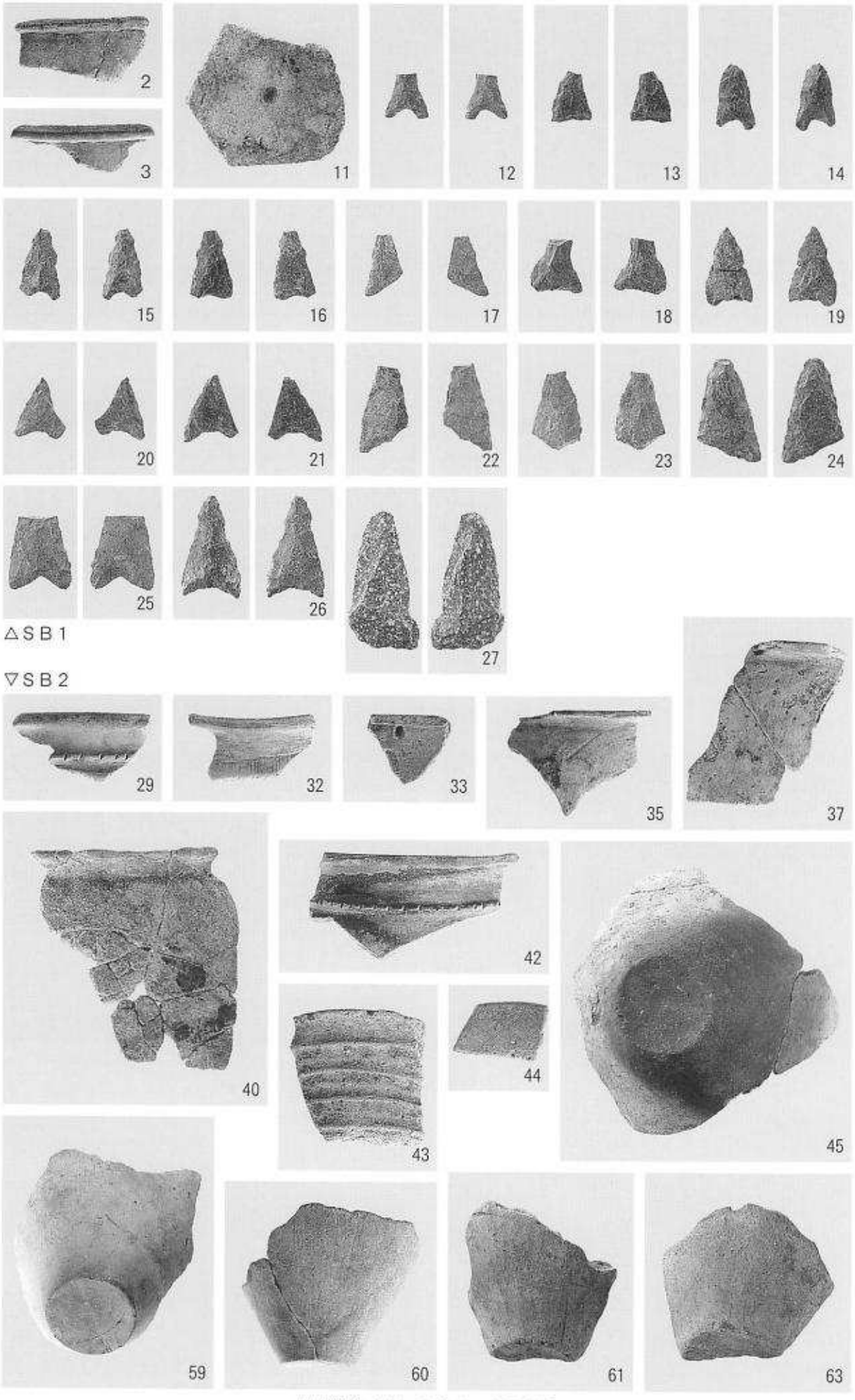
e　ＳＫ14縄文土器深鉢174（西から）

f　ＳＸ２石斧198（北から）

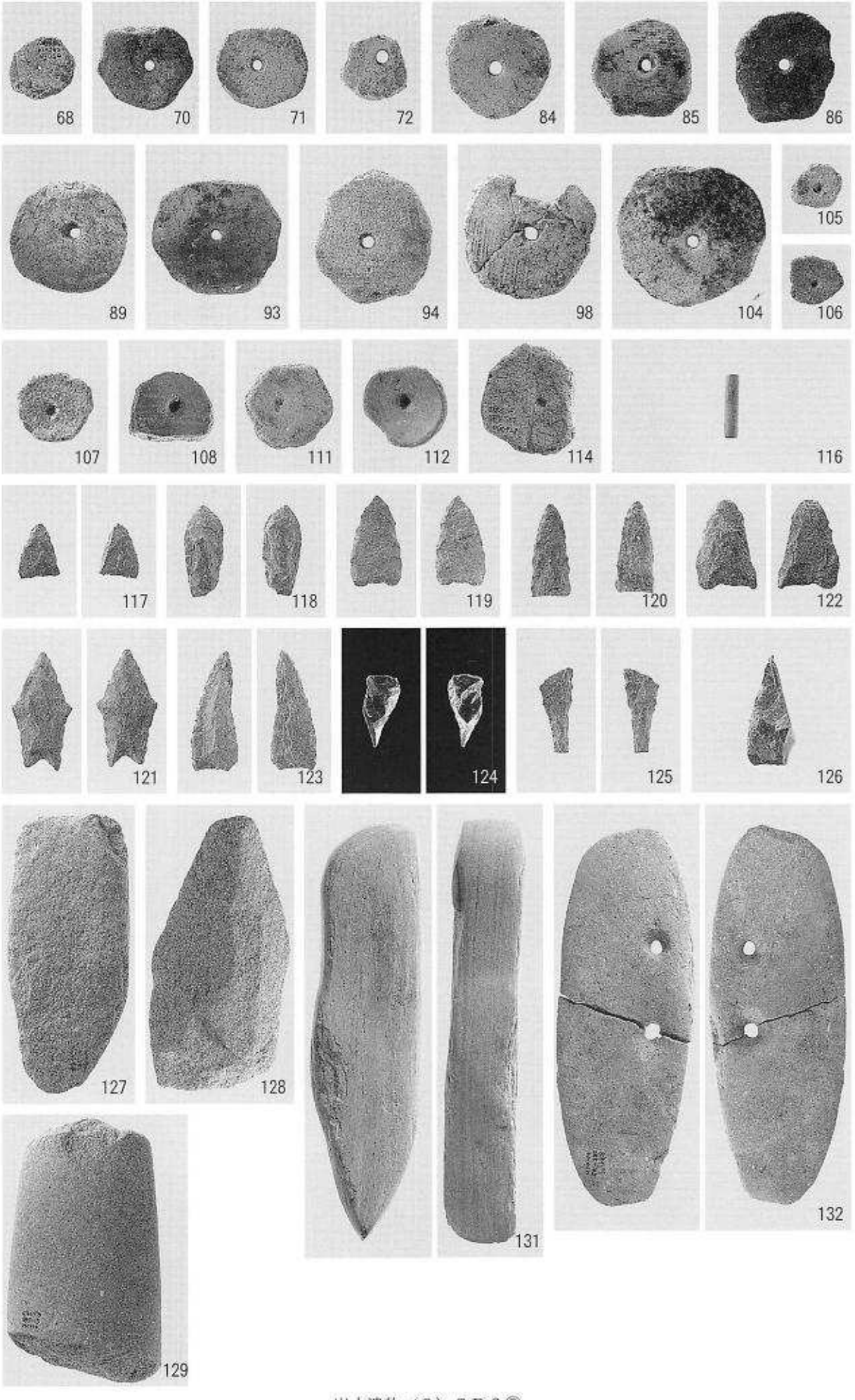
g　ＳＰ２根石（西から）



h　ＳＰ３根石（北西から）

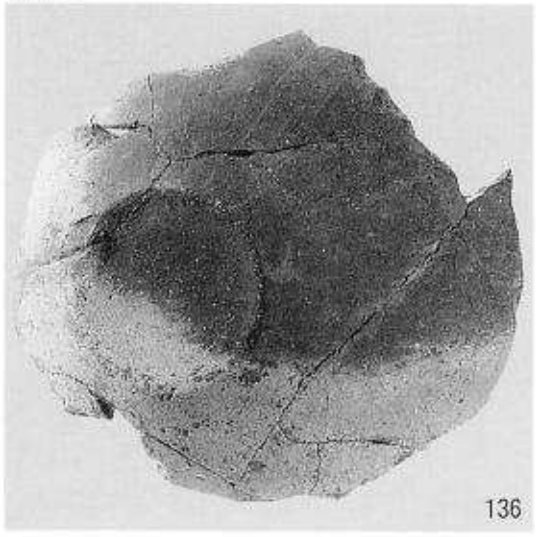


出土遺物（1）SB1・SB2①


68
70
71
72
84
85
86
89
93
94
98
104
105
106
107
108
111
112
114
116
117
118
119
120
122
121
123
124
125
126
127
128
131
132
129

出土遺物（2）ＳＢ２②

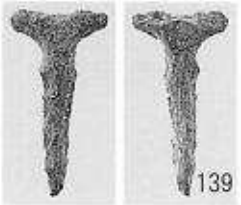
SB4


136

SB5

137

138


139

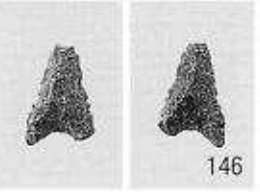
SB13

142

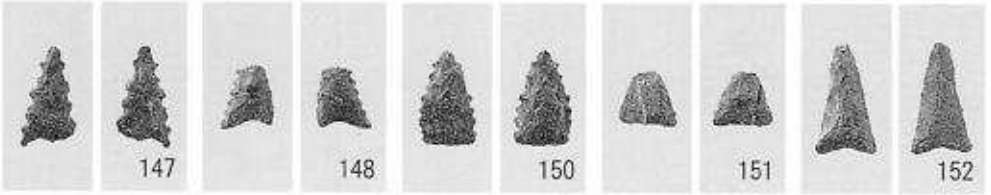
SK1

145

SK4

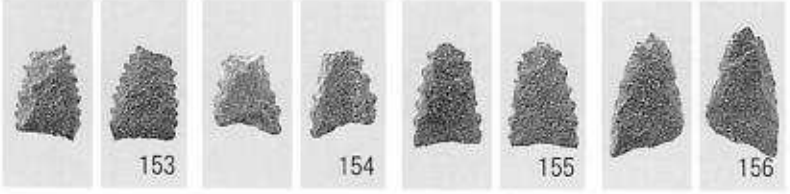

146

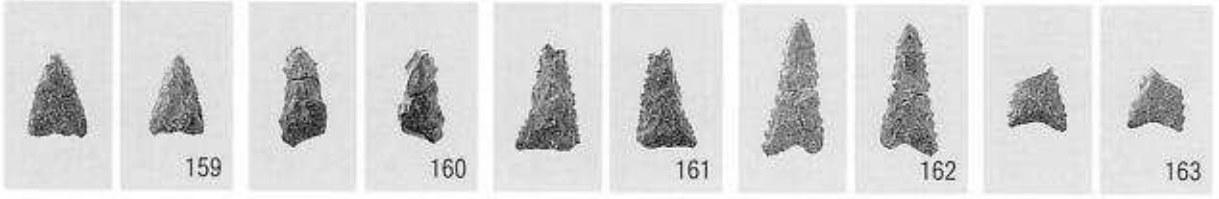
SK5

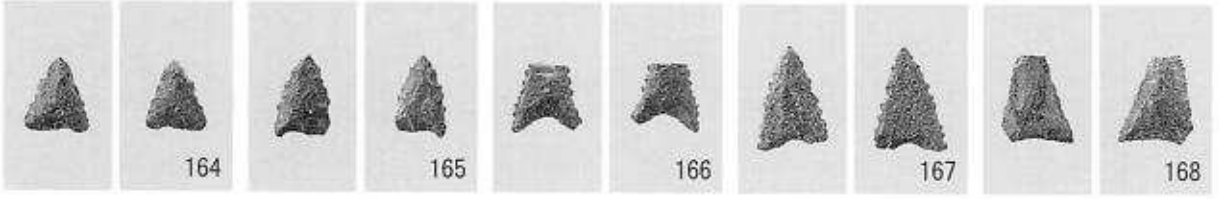

147 148 150 151 152

SK6

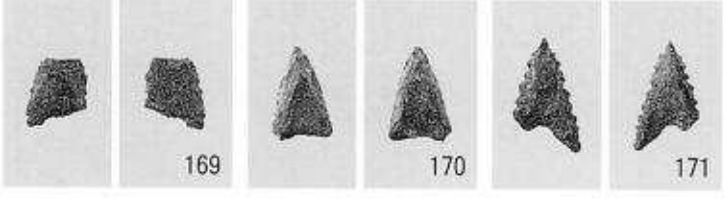
143


153 154 155 156

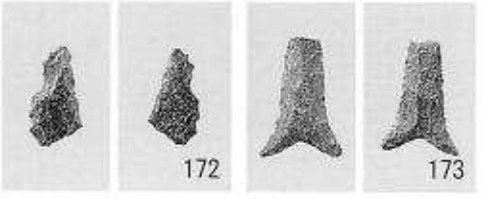

159 160 161 162 163


164 165 166 167 168

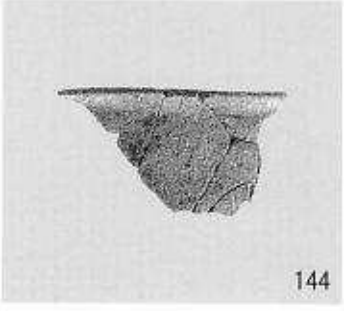
SK7


169 170 171

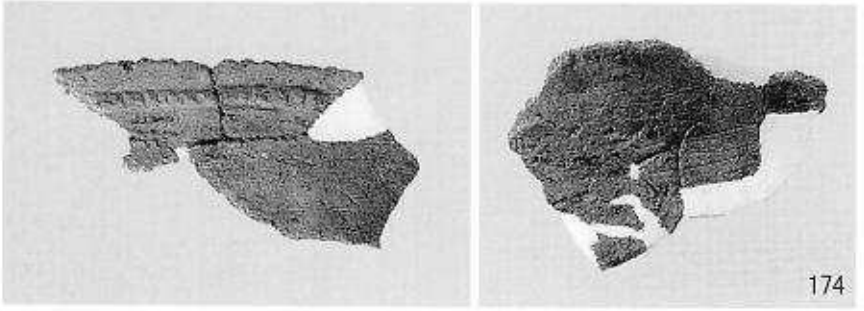
SK8


172 173

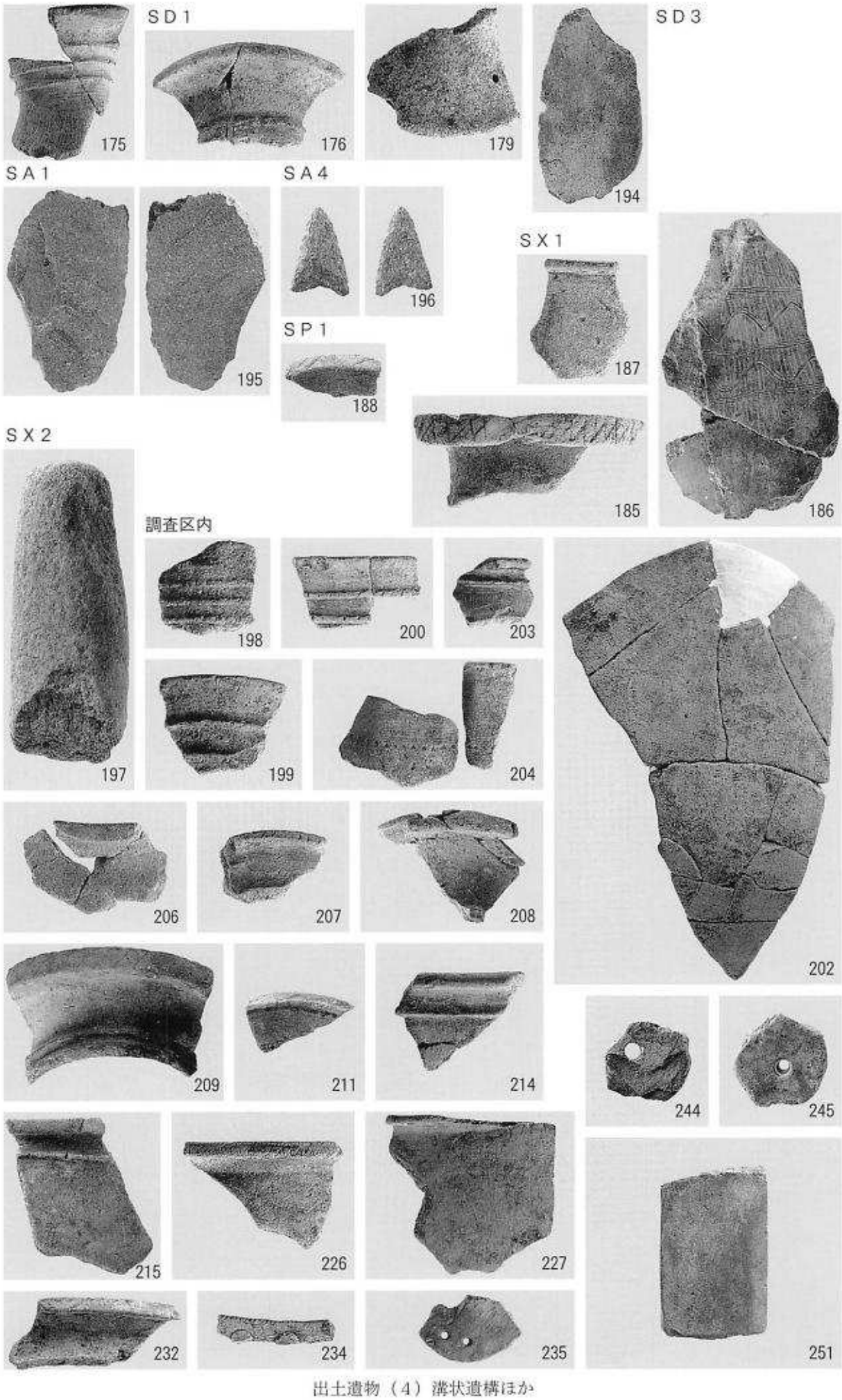
SK12


144

SK14


174

出土遺物（3）墓坑ほか



出土遺物（4）溝状遺構ほか

報 告 書 抄 録

ふりがな	かねいばらいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	金井原遺跡発掘調査報告書
巻次	
副書名	
シリーズ名	財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書
シリーズ番号	第28集
編著者名	梅本健治
編集機関	財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
所在地	〒733-0036　広島県広島市西区観音新町四丁目８-49　ＴＥＬ082-295-5751
発行年月日	西暦2009年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
かねいばらいせき 金井原遺跡	ひろしまけんせらぐん 広島県世羅郡 せらちょうおおあざかわしり 世羅町大字川尻 あざだいせんやま 字大仙山54-4ほか	34462	34461- 150	34° 33′ 42″	133° 7′ 17″	①20051121 ～20060120 ②20060828 ～20061110	①1,300 ②2,560	一般国道４３２号道路改良工事に係る発掘調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金井原遺跡	集落跡	弥生時代	竪穴住居跡，掘立柱建物跡，柵跡，墓坑，土坑	弥生土器，石器（太型蛤刃石斧，抉入柱状片刃石斧，石包丁，石鏃，石錐），土器片紡錘車，管玉 縄文土器（晩期・深鉢）	集落と墓地の近接，石鏃製作土坑の存在，住居からの土器片紡錘車の集中的出土，墓坑・住居からの石鏃の集中的出土

要約

金井原遺跡は，広島県中央部の世羅郡世羅町にある。世羅台地を東流する芦田川南岸の南から北に延びる丘陵緩斜面に立地する弥生時代中期前葉～中葉の集落跡で，近接する居住域と墓坑群を検出した。北東一南西方向に長い調査区の北東側に木棺墓９基などからなる墓坑群，南西側に竪穴住居跡５軒，住居跡状遺構２軒，掘立柱建物跡９棟，柵跡７条などで構成される居住域が位置する。竪穴住居は建て替えが顕著な大型住居２軒（ＳＢ１・２）と単一時期的な小型住居３軒で，同時存在住居は大型住居１軒＋小型住居１～３軒と考えられる。小型住居ＳＢ５は２本柱で，ほかの住居は多柱穴で，いずれも円形住居である。大型住居はいずれも炉跡の位置に石鏃未成品や剥片・チップが出土する石器製作に関連する土坑をもち，住居内からは弥生土器のほかに，石鏃・土器片紡錘車が多数出土した。ＳＢ２からは太型蛤刃石斧・抉入柱状片刃石斧・磨製石包丁なども出土した。倉庫とみられる掘立柱建物跡は桁行１～４間，梁行１～２間のもので，Ｌ字状の溝を伴うものや入口をもつ建物も存在する。木棺墓は等高線に沿って列状に並び，木棺の推定規模は長さ45～60cmの小児墓と長さ100～130cmの屈肢葬の成人墓があり，後者からは石鏃10～12点が集中的に出土したＳＫ５・６がある。本集落は生産基盤である水田跡は見つかっていないが，墓域と居住域がセットでみつかった弥生時代中期の集落跡として貴重な調査成果を得ることができた。

財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第28集

金井原遺跡発掘調査報告書

発行日　平成21（2009）年３月31日

編　集　財団法人　広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室

〒733-0036　広島市西区観音新町四丁目８番49号

ＴＥＬ(082)295-5751　ＦＡＸ(082)291-3951

発　行　財団法人　広島県教育事業団

印刷所　鯉城印刷　株式会社